浦ノ原窯跡群

福岡県春日市大字下白水所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書　第11集

1981

春日市教育委員会

浦ノ原窯跡群

福岡県春日市大字下白水所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書　第11集

序

浦の原窯跡群は、九州で最大規模の牛頸窯跡群に属する一群であります。昭和52年、窯跡群を含む一帯に福岡市南部清掃工場が建設されることになり、福岡市の委託を受け緊急に発掘調査を実施しました。

本報告書は、清掃工場建設に先だち行なった緊急調査の報告書であります。市内では初めての窯跡の調査であり、また出土した多量の土器や瓦などに貴重な資料も含まれております。

事業に当り、福岡市清掃局をはじめ、福岡県教育委員会ならびに調査に協力下さった地元の方々に深甚の謝意を表し、この報告書が古代史研究の一資料として活用していただければ幸いに存じます。

昭和56年3月31日

春日市教育委員会

教育長　井　上　萬　治

例　　言

1．本書は、昭和52年12月12日から昭和53年３月30日までに、春日市教育委員会が福岡市から委託されて、福岡市南部清掃工場建設のため破壊される埋蔵文化財を発掘調査した報告書である。

2．本書の執筆分担は次のとおりである。

Ⅰ	丸山康晴
Ⅱ	平田定幸
Ⅲ	丸山康晴
Ⅳ	丸山康晴
Ⅴ	丸山康晴・平田定幸 佐藤昭則・速水信也
Ⅵ…1	平田定幸・佐藤昭則
Ⅵ…2	平田定幸・佐藤昭則
Ⅵ…3	丸山康晴

3．遺物の整理・図面作成においては、担当者の外に河鍋洋子・片岡久美子・岸野和子・池尻祐子が従事し、茂和敏・川村博・沢田康夫氏の協力があった。掲載の写真のうち遺物写真は岡紀久夫氏の撮影によるものである。

4．本文中の遺物番号は窯跡ごとに通し番号とし、挿図の遺物番号と図版の遺物番号は統一した。

5．本書の編集は、平田定幸・丸山康晴があたった。

本　文　目　次

I　はじめに…… 1

II　位置と環境…… 3

III　調査の経過…… 4

IV　調査の概要…… 6

V　遺構と遺物……11

1．1号窯跡 …… 11
2．2号窯跡 …… 14
3．3号窯跡 …… 17
4．4号窯跡 …… 28
5．5号窯跡 …… 44
6．6号窯跡 …… 45
7．7号窯跡 …… 46
8．8号窯跡 …… 50
9．A地区竪穴状遺構…… 55

VI　結　　語……66

1．窯跡群の推移……66
2．窯構造について…… 69
3．瓦について…… 70

遺物観察表……73

図　版　目　次

図　版　1　(1)　清掃工場建設前の浦ノ原窯跡群周辺（1975年・東から）
(2)　福岡市南部清掃工場全景（1981年・南東から）
図　版　2　(1)　A地区調査前全景（南から）
(2)　A地区予備調査全景（南から）
(3)　B地区調査前全景（西から）
(4)　B地区調査風景（東から）
図　版　3　(1)　浦ノ原窯跡群全景（南から）
(2)　浦ノ原窯跡群全景（西から）
(3)　1・2・5・6・7号窯跡全景
(4)　1・2・3・5・6・7・8号窯跡全景
図　版　4　(1)　1・2・6号窯跡全景
(2)　2号窯跡全景
(3)　3号窯跡全景
(4)　5号窯跡全景
図　版　5　(1)　4号窯跡全景
(2)　4号窯跡本体
(3)　7号窯跡全景
(4)　8号窯跡全景
図　版　6　(1)　3号窯跡本体内土器出土状態
(2)　4号窯跡本体内土器出土状態
(3)　4号窯跡西側付設遺構土器出土状態
(4)　7号窯跡本体内土器出土状態
図　版　7　(1)　1号窯跡焚き口付近土層
(2)　2号窯跡焚き口付近土層
(3)　1号窯跡灰原土層
(4)　7号窯跡灰原土層
図　版　8　(1)　2号窯跡灰原土器出土状態
(2)　3号窯跡灰原土器出土状態
(3)　4号窯跡灰原土器出土状態
(4)　5号窯跡灰原土器出土状態
図　版　9　(1)　A地区竪穴状遺構全景

(2)　竪穴状遺構土器出土状態
(3)　竪穴状遺構瓦出土状態
(4)　竪穴状遺構瓦出土状態
図　版　10　(1)　1号窯出土須恵器
(2)　2号窯出土須恵器
図　版　11　3号窯出土須恵器(1)
図　版　12　3号窯出土須恵器(2)
図　版　13　3号窯出土須恵器(3)
図　版　14　3号窯出土須恵器(4)
図　版　15　3号窯出土須恵器(5)
図　版　16　4号窯出土須恵器(1)
図　版　17　4号窯出土須恵器(2)
図　版　18　4号窯出土須恵器(3)
図　版　19　4号窯出土須恵器(4)
図　版　20　4号窯出土須恵器(5)・5号窯出土須恵器
図　版　21　7号窯出土須恵器(1)
図　版　22　7号窯出土須恵器(2)
図　版　23　8号窯出土須恵器(1)
図　版　24　8号窯出土須恵器(2)
図　版　25　(1)　A地区竪穴状遺構出土土器
(2)　3号窯出土須恵器ヘラ記号
図　版　26　4号窯出土須恵器ヘラ記号
図　版　27　浦ノ原窯跡群出土瓦(1)
図　版　28　浦ノ原窯跡群出土瓦(2)
図　版　29　浦ノ原窯跡群出土瓦(3)
図　版　30　浦ノ原窯跡群出土瓦(4)

挿　図　目　次

第 1 図　浦ノ原窯跡群・周辺遺跡分布図……2
第 2 図　浦ノ原窯跡群周辺地形図……折込み
第 3 図　浦ノ原窯跡群B地区地形図……7
第 4 図　浦ノ原窯跡群B地区遺構配置図……8
第 5 図　1・2・5・6・7・8号窯跡灰原（No.1・No.2・No.3・No.7）土層図……9
第 6 図　1・2・5号窯跡灰原（No.4・No.5・No.6）土層図……10
第 7 図　1号窯跡実測図……11
第 8 図　1号窯出土須恵器実測図……13
第 9 図　2号窯跡実測図……15
第 10 図　2号窯出土須恵器実測図……16
第 11 図　3号窯跡実測図……17
第 12 図　3号窯出土須恵器実測図(1)……19
第 13 図　3号窯出土須恵器実測図(2)……21
第 14 図　3号窯出土須恵器実測図(3)……22
第 15 図　3号窯出土須恵器実測図(4)……23
第 16 図　3号窯出土須恵器実測図(5)……24
第 17 図　3号窯出土須恵器実測図(6)……25
第 18 図　3号窯出土須恵器ヘラ記号拓影……27
第 19 図　4号窯跡実測図(1)……29
第 20 図　4号窯跡実測図(2)……30
第 21 図　4号窯跡灰原土層図……31
第 22 図　4号窯出土須恵器実測図(1)……33
第 23 図　4号窯出土須恵器実測図(2)……35
第 24 図　4号窯出土須恵器実測図(3)……37
第 25 図　4号窯出土須恵器実測図(4)……38
第 26 図　4号窯出土須恵器実測図(5)……39
第 27 図　4号窯出土須恵器実測図(6)……41
第 28 図　4号窯出土須恵器実測図(7)……42
第 29 図　4号窯出土須恵器ヘラ記号拓影……43
第 30 図　5号窯跡実測図……44
第 31 図　5号窯出土須恵器実測図……45

第 32 図　6 号窯跡実測図……45
第 33 図　7 号窯跡実測図……47
第 34 図　7 号窯跡灰原出土方形土壙実測図……48
第 35 図　7 号窯出土須恵器実測図……49
第 36 図　8 号窯跡実測図……50
第 37 図　8 号窯出土須恵器実測図(1)……52
第 38 図　8 号窯出土須恵器実測図(2)……53
第 39 図　A 地区竪穴状遺構実測図……56
第 40 図　A 地区竪穴状遺構出土土器実測図……57
第 41 図　A 地区竪穴状遺構出土瓦実測図・拓影(1)……59
第 42 図　A 地区竪穴状遺構出土瓦実測図・拓影(2)……60
第 43 図　A 地区竪穴状遺構出土瓦実測図・拓影(3)……61
第 44 図　A 地区竪穴状遺構出土瓦実測図・拓影(4)……62
第 45 図　A 地区竪穴状遺構出土瓦実測図・拓影(5)・4 号窯出土瓦実測図・拓影……63

Ⅰ はじめに

浦の原窯跡群は、大野城市牛頸地区を中心とする大規模な牛頸窯跡群に含まれる。牛頸窯跡群に包括される北西部に位置するものの、窯跡の存在は広範には知られておらず、わずかに一部関係者の踏査によって認識されつつあった。本調査は、この地に福岡市が南部清掃工場建設を計画したことに伴う緊急発掘調査である。(註)

調査は春日市が事業主体となり、福岡市が経費を負担し、春日市教育委員会が行なった。

調査期間及び調査関係者は下記のとおりである。

予備調査　昭和52年12月12日～昭和53年1月14日

本調査　昭和53年1月23日～昭和53年3月30日

整理　昭和55年7月1日～昭和56年3月31日

昭和52年度の調査構成

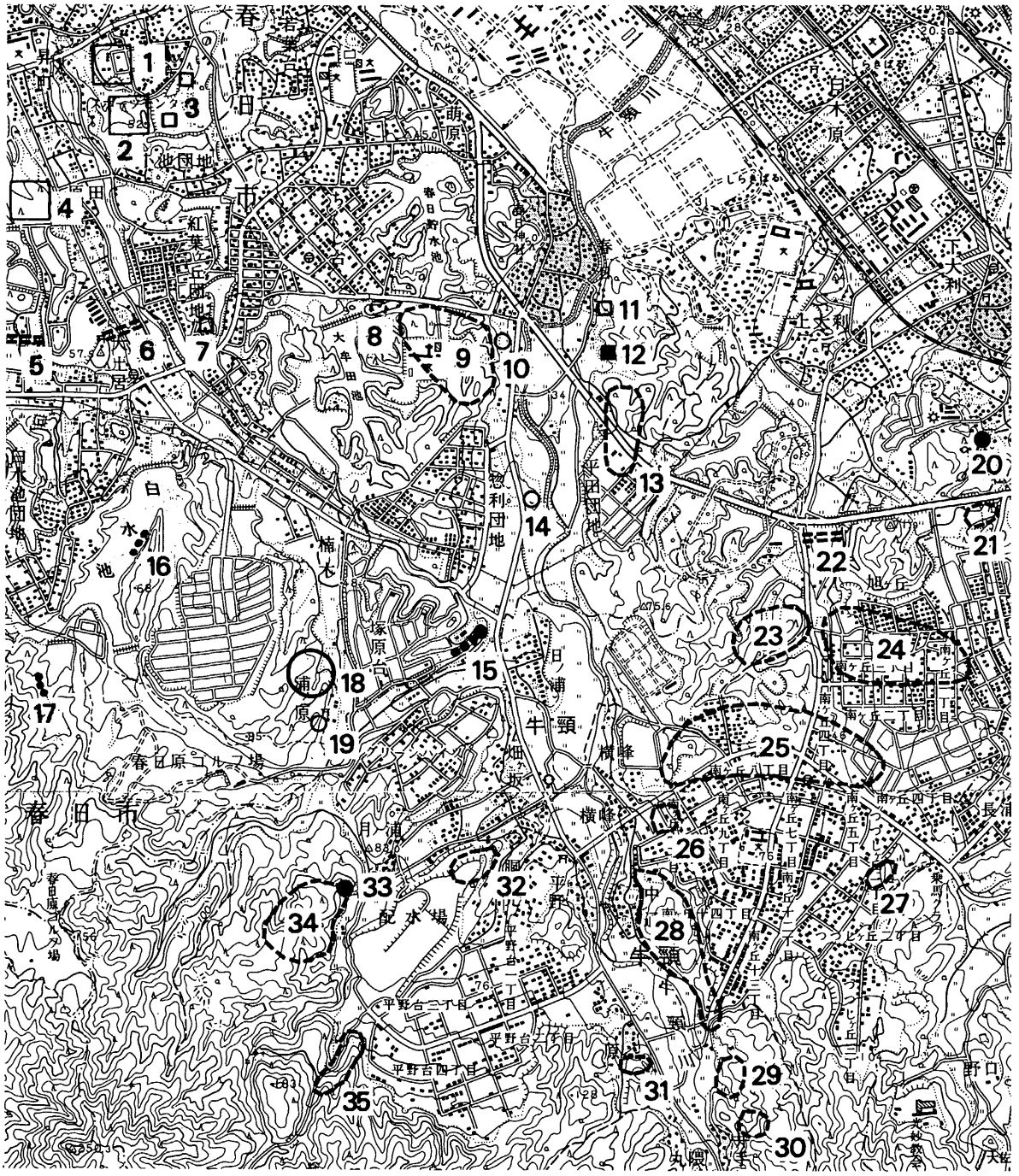
総括	春日市教育委員会	教育長	井上萬治
		教育次長	松尾六郎
		社会教育課長	西田譲
庶務		社会教育課文化財係長	椎葉憲
		同　主事	伊藤徳文
調査員		同　嘱託	丸山康晴
調査補助員		大賀健・岡部大治・岡部正己	

昭和55年度の調査構成

総括	春日市教育委員会	教育長	井上萬治
		教育次長	白水清陽
		社会教育課長	西田譲
庶務		社会教育課文化財係長	椎葉憲
		同　主事	伊藤徳文
調査員		同　技師	丸山康晴
		同　技師	平田定幸
整理補助員		佐藤昭則・速水信也・茂和敏	
調査協力者		上野精志・前田軍治・高橋章	
		沢田康夫・川村博	

この他、福岡県文化課・九州歴史資料館・福岡市文化課の諸氏、福岡市清掃局、春日市民生部衛生課及び地元の方々の御協力御援助によって調査が順調に進んだことを感謝いたします。

(註)　上野精志・前田軍治氏が付近で窯出土と思われる須恵器を表採されていた。



1．大　南　遺　跡
2．大　谷　遺　跡
3．高　辻　遺　跡
4．一ノ谷遺跡
5．天神山小水城跡
6．大土居小水城跡
7．紅葉ヶ丘遺跡
8．大牟田池窯跡
9．惣　利　窯跡群
10．春日地区遺跡(第4地点)
11．春日地区遺跡(第5地点)
12．向　谷　古　墳
13．春日平田窯跡群
14．円　入　遺　跡
15．塚　原　古墳群
16．大　堤　古墳群
17．西　浦　古墳群
18．浦ノ原窯跡群
19．浦　ノ　原　遺　跡
20．吉　松　古　墳
21．神ノ前窯跡
22．上大利小水城跡
23．大　浦　窯跡群
24．野　添　窯跡群
25．平　田　窯跡群
26．東　浦　窯跡群
27．上平田窯跡群
28．中通窯跡・古墳群
29．ハゼムシ窯跡群
30．井　手　窯　跡　群
31．原　　窯　　跡
32．胴ノ元窯跡群
33．小　田　浦　古墳群
34．小　田　浦　窯跡群
35．大　谷　窯　跡　群

第1図　浦ノ原窯跡群・周辺遺跡分布図

II　位置と環境

浦ノ原窯跡群は福岡県春日市大字下白水浦ノ原に所在する。当地は春日市の南端に位置しており、これより東側一帯は6世紀中頃より8世紀にかけて大規模な須恵器生産活動が営まれた牛頸窯跡群として著名である。浦ノ原窯跡群もこの牛頸窯跡群の中に総括され、その西端部に位置し、一構成単位として存在する。当地方一帯は牛頸川によって開析された狭長な谷を中心に無数の小谷が存在し、丘陵は樹枝状に発達して複雑な地形をつくり出しており、須恵器窯構築・窯業の場として絶好の地形を提供している。浦ノ原窯跡群は、牛頸川より西方1kmの地点に所在し、北方へ開口した谷部の南側斜面に占地しており、標高約60m、水田面との比高15mを測る。

牛頸窯跡群は、御笠川に向って北流する牛頸川を挟み東西約4km、南北約5kmの広範囲に及んでおり、大野城市を中心として春日市・太宰府町の一部にまたがり数百基が群在する。これまで調査・報告された主な窯跡群には、神ノ前(21)[1]、大浦(23)・野添(24)[2]、平田(25)[3]、上平田(27)[4]、中通(28)[5]、小田浦(33)[6]、大谷(35)[7]、向佐野・長浦[8]、宮ノ本[9]等がある。

またこの周辺地域における遺跡をみると北方には、須玖・岡本遺跡をはじめとして、多量の青銅器を埋葬・埋蔵した弥生時代の著名な遺跡群の立地する春日丘陵が福岡平野へ突出している。また西方の那珂川流域には老司古墳、安徳大塚等に代表される前方後円墳や、油田・炭焼・白石・観音山等の古墳群が密集している。特に観音山古墳群の中には浦ノ原窯跡群と同時期に築造されたものが存在し注目される。

牛頸窯跡群成立に関しては、その須恵器窯業地に適した立地もさることながら、春日・那珂川地方における弥生時代以来の繁盛及び当時の政治的背景を看過することはできまい。

註(1)　酒井仁夫ほか『神ノ前窯跡』「太宰府町文化財調査報告書」第2集　太宰府町教育委員会　1979
(2)　小田富士雄ほか『野添・大浦窯跡群』「福岡県文化財調査報告書」第2集　福岡県教育委員会
(3)　坂詰秀一編『筑前平田窯跡』雄山閣　1974　舟山良一ほか『牛頸平田窯跡』－D地点－「大野城市文化財調査報告書」第5集　大野城教育委員会　1980
(4)　副島邦弘・舟山良一ほか『牛頸中通遺跡群』大野城市文化財調査報告書」第4集所収　1980
(5)　註(4)に同じ
(6)　大野城市教育委員会『大野城の文化財』第9集　1977
(7)　大野町教育委員会『大野町の文化財』第2集　1971
(8)　亀井明徳他「向佐野・長浦窯跡の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』第2集　福岡県教育委員会　1975
(9)　山本信夫ほか『宮ノ本遺跡』「太宰府町の文化財」第3集　太宰府町教育委員会　1980

III　調査の経過

昭和52年度に埋蔵文化財包蔵の有無について福岡市より問い合せがあり、分布調査を実施した。分布調査の対象は福岡市が清掃工場用地として買収した範囲のうち削平及び盛土を受ける北半部について行なった。現地は雑木林で、夏に実施したため草木が繁茂し表面観察は困難であった。分布調査の方法は地形を考慮し1×1mの試掘坑を22ヶ所に設け遺跡有無の判断資料とした。その結果、設定した6地区のうち遺跡遺存の可能性のある2地区について予備調査を実施することになった。

予備調査は、本調査に先だち、遺構の種類及び員数を確認することを目的とし、本調査に要する日数及び費用を算出するために、昭和52年12月12日から昭和53年1月14日の間に実施した。

調査の方法は、機械により幅2mの試掘溝を等高線に沿って、また等高線に直交するように入れる予定であったが、実際の調査では、技術的に困難なことと、遺構の確認に困難が予想されたため、A地区については全面を剝ぐことにし、B地区については、平坦面以外は部分的に剝いだ。

以下調査日誌よりその経過を概述する。

昭和52年

12月12日　予備調査開始。春日市中央公民館より器材を運ぶ。コンボを投入し表土の除去。

12月14日　頂部より遺構検出作業を始める。

12月16日　谷中央で赤褐色の瓦を検出。

12月18日　谷部の遺構検出作業。等高線にそって試掘溝設定。

12月20日　谷の平坦面で竪穴状遺構検出。コンボはB地区平坦面を剝ぐ。

12月21日　B地区で窯跡を検出。小さな試掘溝を入れる。灰原の範囲を確認。

12月23日　西側で4号窯を確認。

12月24日　A・B地区の平板実測を行う。調査終了。

昭和53年

1月9日　出土遺物の整理作業を始める。

1月14日　整理作業を終了。

予備調査の結果確認できた遺構は、A地区では、竪穴状遺構1軒、及び不明遺構3、B地区では、1・2・3・4号窯跡とこれに伴う灰原である。

本調査は、予備調査の結果をもとに、昭和53年1月23日から3月30日までの間に実施した。

本調査はB地区を中心に実施したが、想定された通り窯跡がさらに4基検出され、計8基となった。2月から工場建設の造成工事が本格的になり、調査区が北側から徐々に削られ、工事に追われる日が続いた。



第２図　浦ノ原窯跡群周辺地形図

以下に調査日誌よりその経過を概述する。

昭和53年

1月23日　調査開始。器材を春日市中央公民館より運ぶ。A地区竪穴状遺構より作業を始める。

1月26日　竪穴状遺構検出作業。1・2号窯本体検出作業。

1月28日　竪穴状遺構の発掘。

1月31日　竪穴状遺構土器検出。床面検出。

2月1日　積雪10cmのため現場作業中止。

2月3日　1・2号窯跡灰原にグリットを設定。

2月4日　竪穴状遺構土層実測。

2月6日　1・2・5号窯跡灰原検出作業。

2月8日　1号窯跡焚口付近検出作業。4号窯跡周辺遺構検出作業。

2月11日　4号窯東側平坦面より硯の亀首部分が出土。4号窯跡灰原検出作業にかかる。

2月14日　竪穴状遺構清掃作業。4号窯跡灰原にグリットを設定。

2月17日　竪穴状遺構写真撮影。

2月20日　竪穴状遺構割付け、実測。1号窯・2号窯跡土器出土状態の写真撮影。

2月22日　4号窯跡と5号窯跡間の谷部に試掘溝を入れる。

2月25日　4号窯跡灰原上層土器取り上げ作業、平板測量。

2月28日　4号窯跡本体及び付設遺構発掘作業。

3月1日　1・2・5号窯跡本体発掘終了。清掃作業。

3月3日　1・2・5号窯跡写真撮影。6・7号窯検出作業。1・2号窯跡実測。

3月4日　3号窯跡清掃。

3月6日　ヘリコプターによる遺跡全景撮影。

3月9日　1・2・5・7号窯跡灰原下層土器検出作業。

3月11日　4号窯跡灰原下層土器検出作業。

3月13日　1・2・7号窯跡灰原土層実測。

3月15日　1・2・7号窯跡灰原下層土器取り上げ終了。4号窯跡土層実測。

3月18日　5号窯跡灰原下層土器取り上げ終了。1・2・5・7窯跡土層実測終了。

3月20日　1・2・5・7号窯跡灰原ベルト内土器取り上げ作業。8号窯跡発掘。

3月22日　4号窯跡灰原土層実測終了。ベルト内土器注記して取り上げる。

3月23日　4号窯跡灰原土層ベルト内土器取り上げ。

3月25日　平板実測終了。

3月28日　3号窯跡灰原下層土器取り上げ終了。調査終了。

3月30日　整理作業終了。浦ノ原窯跡群発掘調査終了。

Ⅳ　調査の概要

観音山から派生し山麓を形成する樹枝状丘陵の、諸岡川へ続く狭隘な谷に東接する約4,000㎡が浦ノ原窯跡群の調査範囲である。この地は、分布地図等には明記されていなかったが、周辺の須恵器散布や、踏査により認識されつつあった。牛頸窯跡群の一角を占める一群として把えられるものである。

この調査で検出した遺構は、須恵器及び瓦生産の窯跡8基とこれに付随する遺構、竪穴状遺構1軒である。

遺跡全体はA・Bの2地区に別けられ、A地区は東へゆるやかに開く谷斜面からなり、中位に狭い平坦面が等高線にそって存在する。(註) B地区は、A地区の南接地にあたり、A地区から続く東側に平坦面を有し南東へ突出した箇所と、小谷をはさみ西方へのびる南斜面からなる。

A地区　東へ傾斜する谷斜面の中位に位置する狭い平坦面に、斜面を削り出し竪穴状遺構が1軒検出された。竪穴状遺構は6個の柱穴を有し掘立柱建物と呼ぶべき様相を呈する。遺構の性格は十分捉えられなかったが、柱穴の状態や遺物の出土状況から断定はできないものの、他遺構の分布状況からみて作業場的なものと考えられる。遺構の遺存状況は良好であり、完形に近い平瓦を9点出土している。

B地区　標高63m前後でゆるやかな傾斜をもつ東側に5基、その南西斜面に2基、小谷を挟んで西側のわずかに突出した所に1基、計8基の窯跡が検出された。

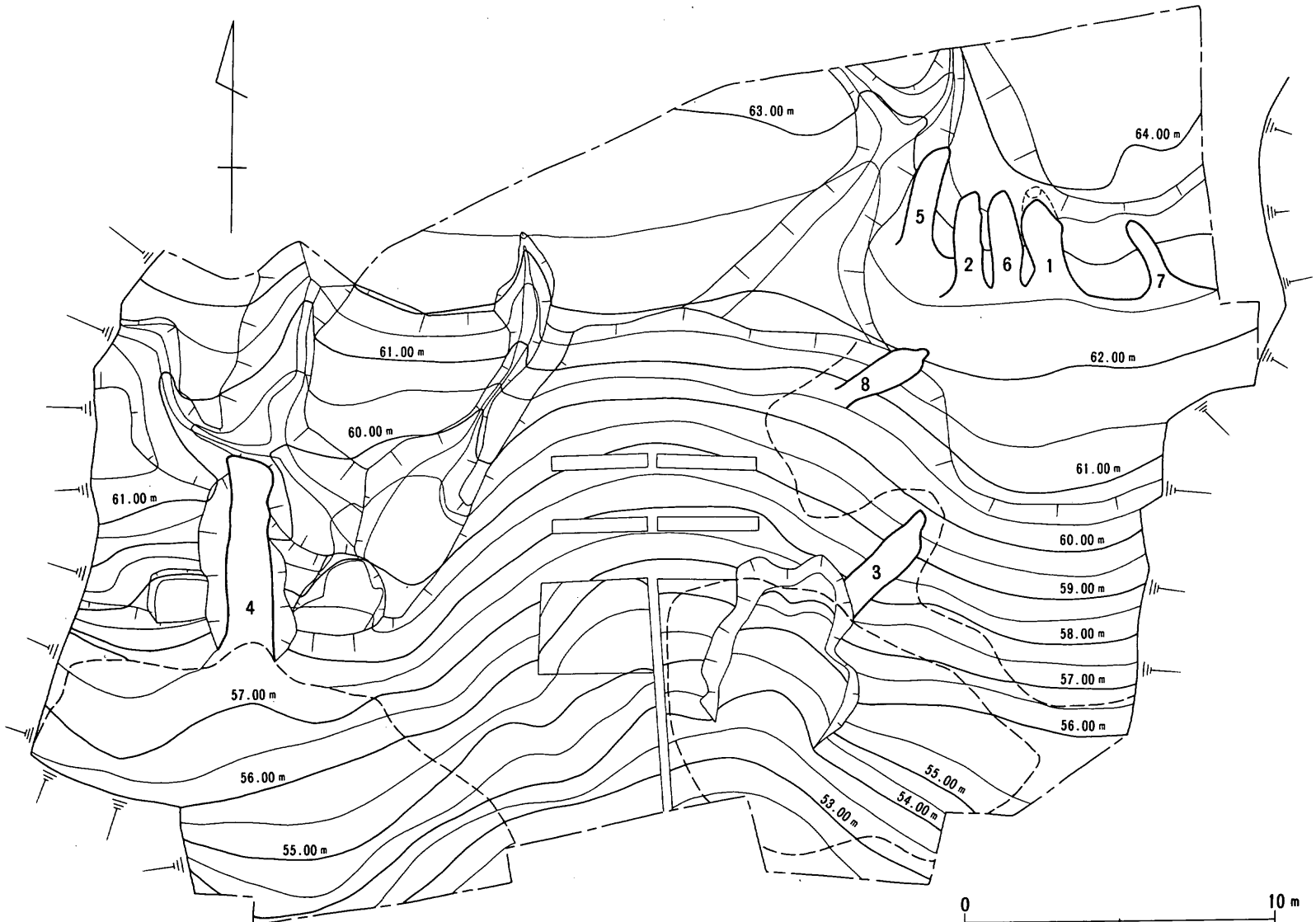
まず、1・2・5・6・7号窯跡の一群は、窯跡群の内で最も高所に南に向って位置し、前面に削り出された平坦面と14×15m以上の灰原を有する。窯は最も大きい1号窯でも全長3.2m、最大幅1.05mと小形である。この一群は地形及び窯の構造から、ほぼ同時期の所産と考えられ、3群の内で最も新しい時期に属するものである。6号窯跡は未使用窯跡で、一群の灰原は重複する部分が多い。

3号窯跡跡は、先の一群の南下方斜面にやや南西に向いて位置し、8号窯跡は5号窯跡の灰原の下より南西に向いて検出された。3号窯跡は12×17m規模の灰原を形成していたが、8号窯跡の灰原は3×4.5mと小規模である。

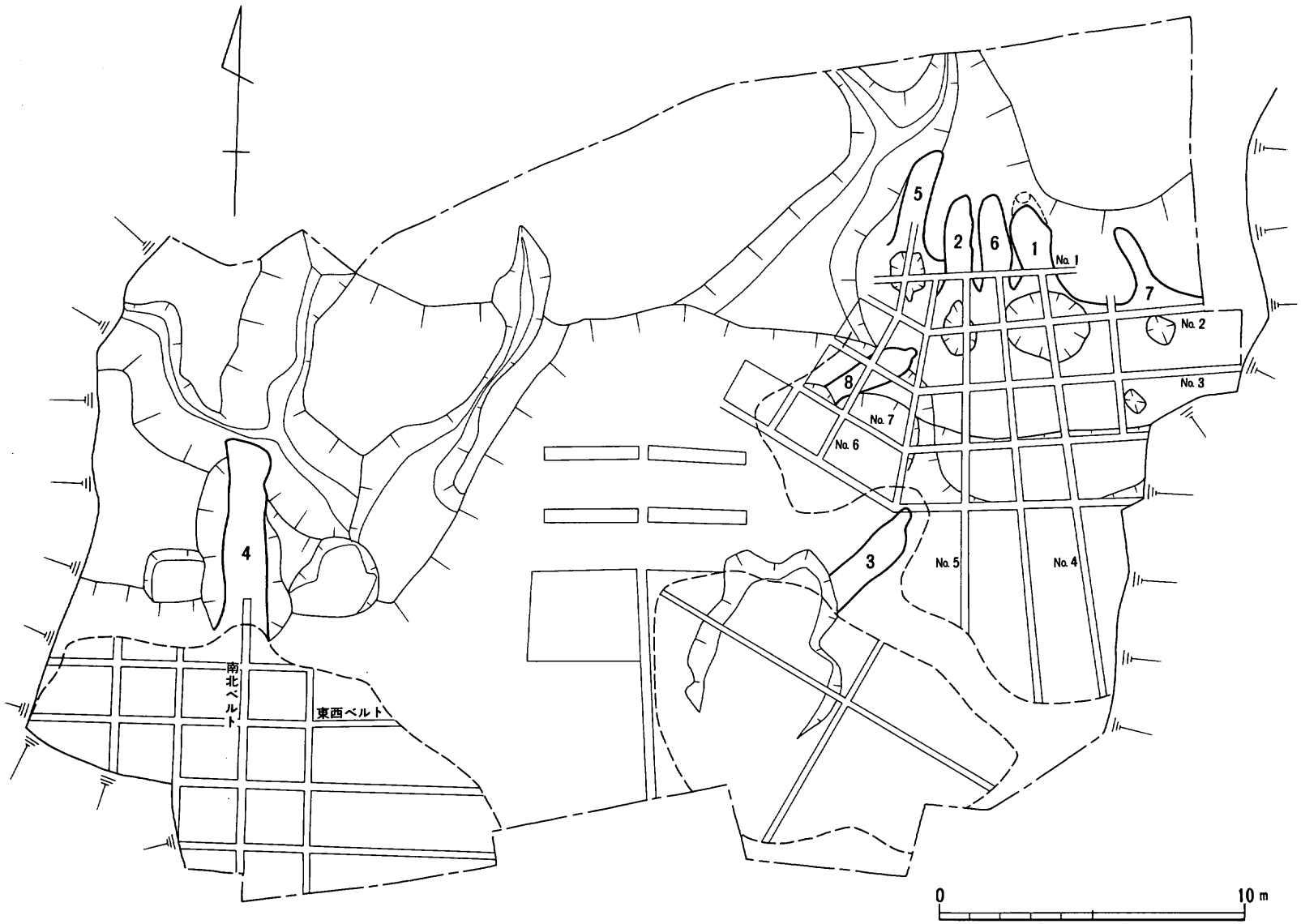
4号窯跡は、窯跡群の内で最も大きく、一群の西側に単独で位置する。窯体は上部を流失し、全容は捉めなかったが、現存する部分で6m以上を測り、10mクラスの窯であろう。南斜面に形成された灰原は9×16mと大規模である。窯体の両側に削り出された平坦面の作業場をもち、大形の須恵器もみられ、瓦も出土している点に特徴をもつ。窯跡群の内で最も古く位置づけられる瓦陶兼業窯である。

瓦はA地区の竪穴状遺構の他に、4号窯跡とその灰原、3号窯跡灰原、B地区谷部、1・2号窯跡を中心とする灰原、5号窯跡西側でも小量ながら出土がみられた。

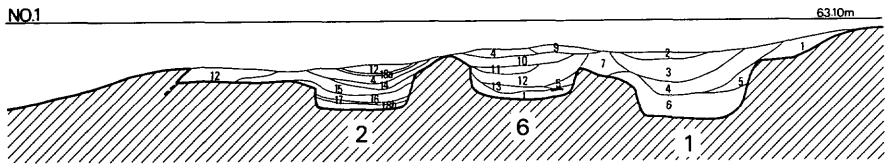
註　以下の本文中では、特に断りのない限りB地区検出の遺構をさす。



第3図　浦ノ原窯跡群B地区地形図(1/200)

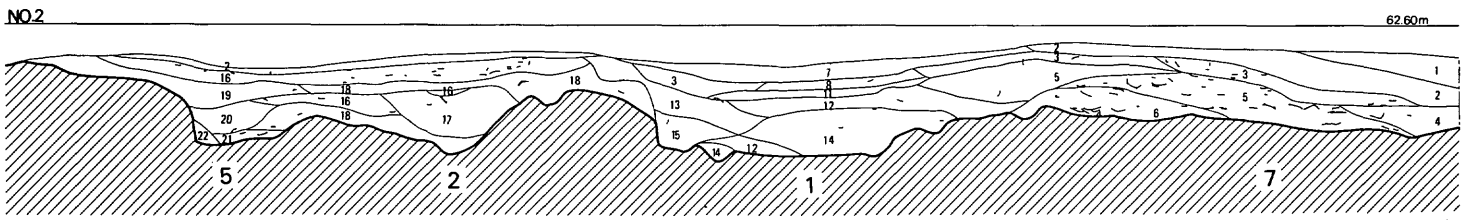


第4図　浦ノ原窯跡群B地区遺構配置図(1/200)



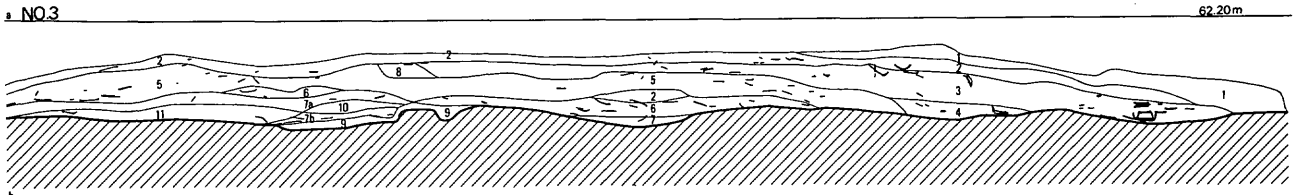
No. 1 土層図

1．赤褐色土
2．赤色土(若干焼けている)
3．黒色土
4．黄色土
5．暗褐色土
6．暗赤色土(３～10cmのブロックを含む)
7．暗黄色土
8．焼土
9．暗黄色土
10．黒色土(炭・灰・土器を含む)
11．褐色土
12．黄褐色土
13．灰黄色土(炭・灰・黄色粘土・土器を含む)
14．暗黄色土(炭を含む)
15．明黄色土
16．灰黄色土
17．茶褐色土
18．淡黄色土(炭を若干含む)
19．黒色土(Ｋ－５の灰原)



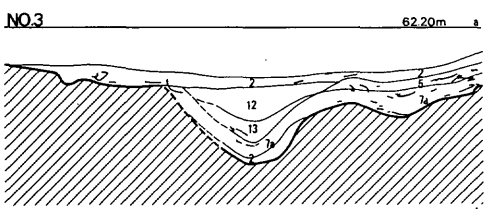
No. 2 土層図

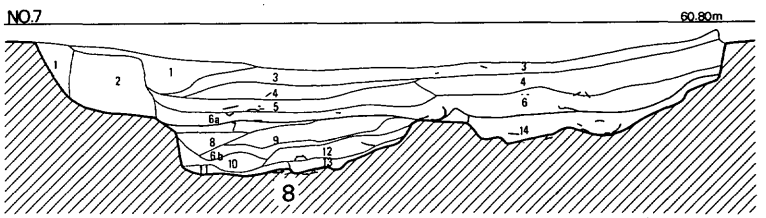
1．赤褐色土
2．暗黄色土
3．黒褐色土
4．黄黒色土
5．黄黒色土(黄色ブロック多く含む)
6．黒色土(灰黄色ブロックを含む)
7．黒色土(土器を含む)
8．黒色土(灰色ブロックを含む)
9．黄色土(7～9cmブロック含む)
10．黄褐色土
11．黒褐色土(褐色ブロック・粒子含)
12．黒色土(黄色粒子を含む)
13．黒色土(炭を多く含む)
14．黒色土(炭を多少含んでいる)
15．黒色土(若干黄色粒子を含む)
16．黒色土
17．黒褐色土(赤色、黄色のブロック・粒子及び炭化物混入)
18．黒褐色土(黄色土及び赤色・黄色粒子、炭化物混入)
19．明黄色土
20．黄褐色土(炭化物、赤色粒子混入)
21．黄褐色土(炭混入)
22．黄色土



No. 3 土層図

1．暗黄色土
2．黄黒色土(炭を微量含む)
3．黒色土(多くの土器を含む)
4．黒色土(3層に比してやや灰色を呈す)
5．黒色土(炭を多く含む)
6．黒色土(5層よりやや白色を帯びる)
7．灰色土(6層よりやや白色を帯びる)
8．黒色土(焼けた小粒子含む)
9．暗黄黒色土
10．黄灰色土(7層よりやや黄色を帯びる、微量の炭を含む)
11．灰黄色土(10層よりやや黄色を帯びる、小ブロックを含む)
12．黒色土(炭を少量含む)
13．黄色土(炭は含まない)



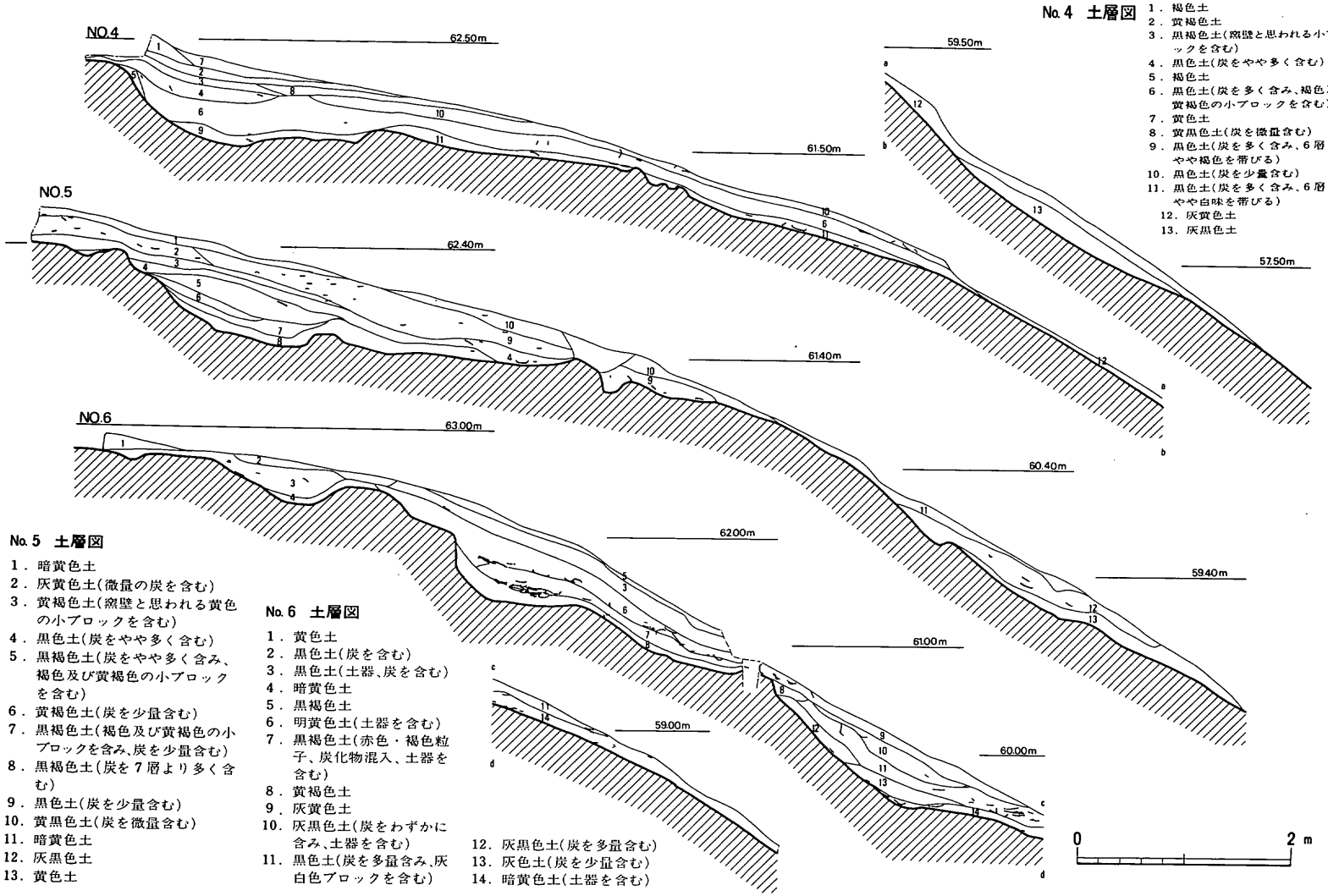


No. 7 土層図

1．暗褐色土
2．褐色土
3．灰黄色土
4．灰黒色土
5．黒色土(炭含む)
6．黒褐色土
7．褐色土(褐色の石粒を若干含む)
8．黄褐色土(黄色小石粒多く含む)
9．灰色土(炭を少量含む)
10．暗黄褐色土(5～7cmのブロック含む)
11．褐色土(焼土と思われる)
12．暗黄褐色土(2～5cmブロック含む)
13．暗褐色土(１～３cmの石粒含む)
14．灰黒色土(１～２cm・10cmの石粒含む)

0　2 m

第５図　１・２・５・６・７・８号窯跡灰原(No.１・No.２・No.３・No.７)土層図(1/60)



No. 4 土層図

1．褐色土
2．黄褐色土
3．黒褐色土(竈壁と思われる小ブロックを含む)
4．黒色土(炭をやや多く含む)
5．褐色土
6．黒色土(炭を多く含み、褐色及び黄褐色の小ブロックを含む)
7．黄色土
8．黄黒色土(炭を微量含む)
9．黒色土(炭を多く含み、6層よりやや褐色を帯びる)
10．黒色土(炭を少量含む)
11．黒色土(炭を多く含み、6層よりやや白味を帯びる)
12．灰黄色土
13．灰黒色土

No. 5 土層図

1．暗黄色土
2．灰黄色土(微量の炭を含む)
3．黄褐色土(竈壁と思われる黄色の小ブロックを含む)
4．黒色土(炭をやや多く含む)
5．黒褐色土(炭をやや多く含み、褐色及び黄褐色の小ブロックを含む)
6．黄褐色土(炭を少量含む)
7．黒褐色土(褐色及び黄褐色の小ブロックを含み、炭を少量含む)
8．黒褐色土(炭を7層より多く含む)
9．黒色土(炭を少量含む)
10．黄黒色土(炭を微量含む)
11．暗黄色土
12．灰黒色土
13．黄色土

No. 6 土層図

1．黄色土
2．黒色土(炭を含む)
3．黒色土(土器、炭を含む)
4．暗黄色土
5．黒褐色土
6．明黄色土(土器を含む)
7．黒褐色土(赤色・褐色粒子、炭化物混入、土器を含む)
8．黄褐色土
9．灰黄色土
10．灰黒色土(炭をわずかに含み、土器を含む)
11．黒色土(炭を多量含み、灰白色ブロックを含む)
12．灰黒色土(炭を多量含む)
13．灰色土(炭を少量含む)
14．暗黄色土(土器を含む)

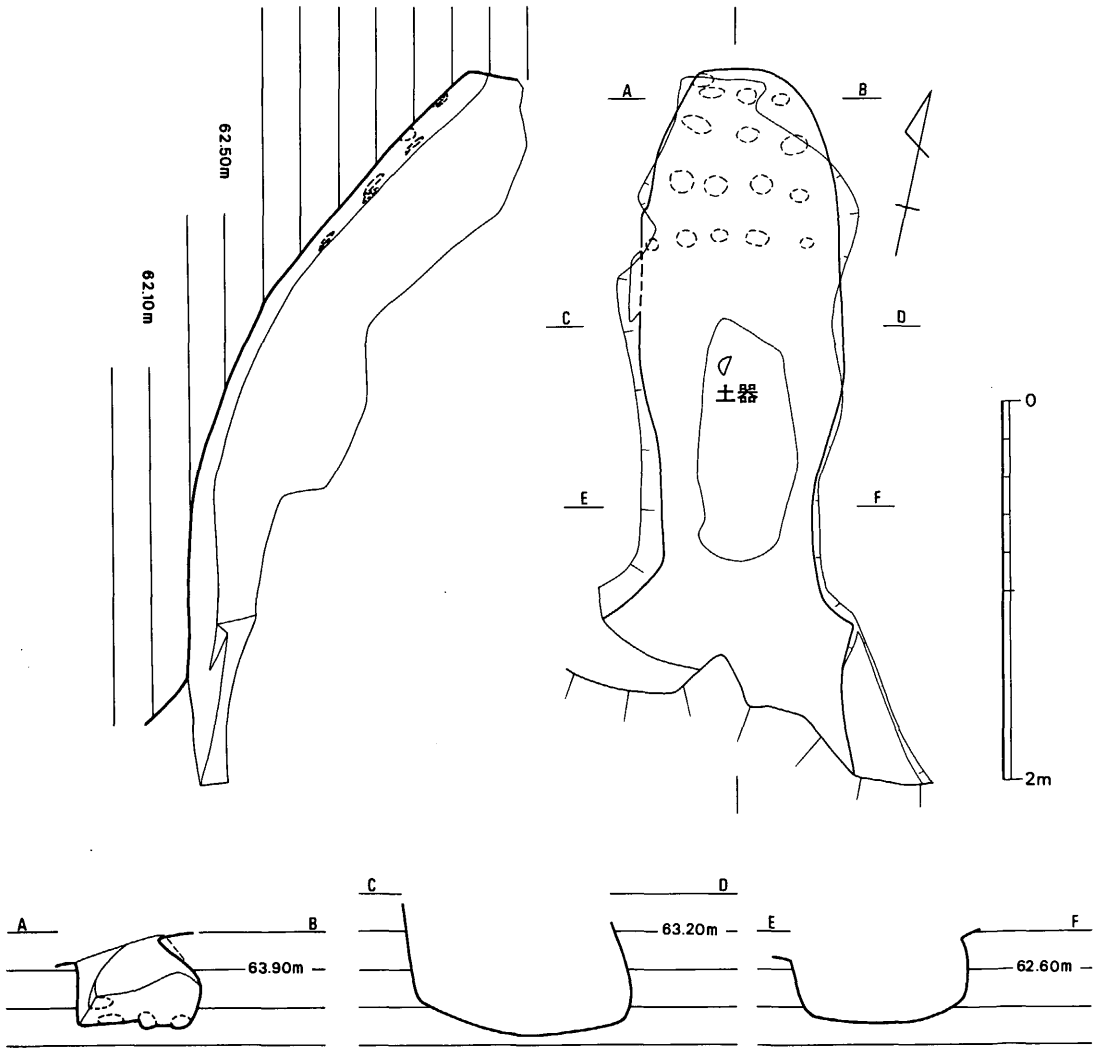
第6図　1・2・5号窯跡灰原(No. 4・No. 5・No. 6)土層図(1/60)

V　遺構と遺物

1．1号窯跡

(1) 遺　構（図版4、第5・6・7図）

窯体の全長は3.2mで、焼成部における床面の深さは現地表から約1.2m、焚き口付近で約1



第7図　1号窯跡実測図(1/40)

mを測り、花崗岩バイラン土の地山を刳り抜いて構築した地下式無階無段登窯である。窯体主軸の方向はN12°Wで、丘陵の等高線にほぼ直交する。床幅は焼成部の中央で1.05mと最も広くなり燃焼部から焚き口にかけて最も狭くなる。天井部は焼成部上部から煙出し部にかけて残存したが、調査中に崩壊してしまった。

焚き口　天井が残っていないため明確ではないが、灰原方向へ急に広がる付近と推定される。この部分はよく焼けしまってほぼ直立し、床幅は0.8mを測る。前庭部は0.5mから0.6mの幅をもち、さらに傾斜して径約2.5m、深さ約0.4mの不整円形の窪みを有する。

燃焼部　焚き口との境から傾斜変換部までの0.6mが燃焼部にあたり、比較的平坦である。床幅は焚き口に近いところで0.8m、若干広がって焼成部との境をなすところでは0.9mを測る。天井は陥没して残存しない。

焼成部　燃焼部との境から上り傾斜となり、この傾斜変換部から奥壁まで長さ約2mを測る。床幅は中央付近で1.05mを測り最も広くなり、奥壁に向って徐々にせばまる。床面の傾斜は中位でやや変化するが約41度と急である。天井は奥壁に近い部分から煙出し部にかけて残存しており、高さは約60cmを測る。焼成部上半には置台の痕跡が明瞭で、20cmから25cm間隔で横に4列認められた。燃焼部から焼成部中位にかけて楕円形に粘土の貼付が認められ、その面より杯蓋が検出された。

煙出し部　奥壁は幅0.2mを測りわずかに内傾しながら立ち上がる。煙道と一体であり推定高約0.6m、壁面は下部において青灰色に固く焼けしまっているが、上部は赤く焼けていてもろい。

灰原　窯の規模は小さいが、灰原は2号、7号と重複するものの前庭部から斜面にかけて約14mと非常に大きい。厚さは前庭部窪穴の部分が最も厚く0.7mを測る。焚き口から約6mで地山の傾斜変換がみられ、9m付近でさらに傾斜が急になる。ここまでが実質的な灰原であり、以下は部分的に層をなす。灰原は、窯壁片や焼土を含み、須恵器の量は多い。ただ1号窯によるものと断定するのは灰原の下方ほど困難である。

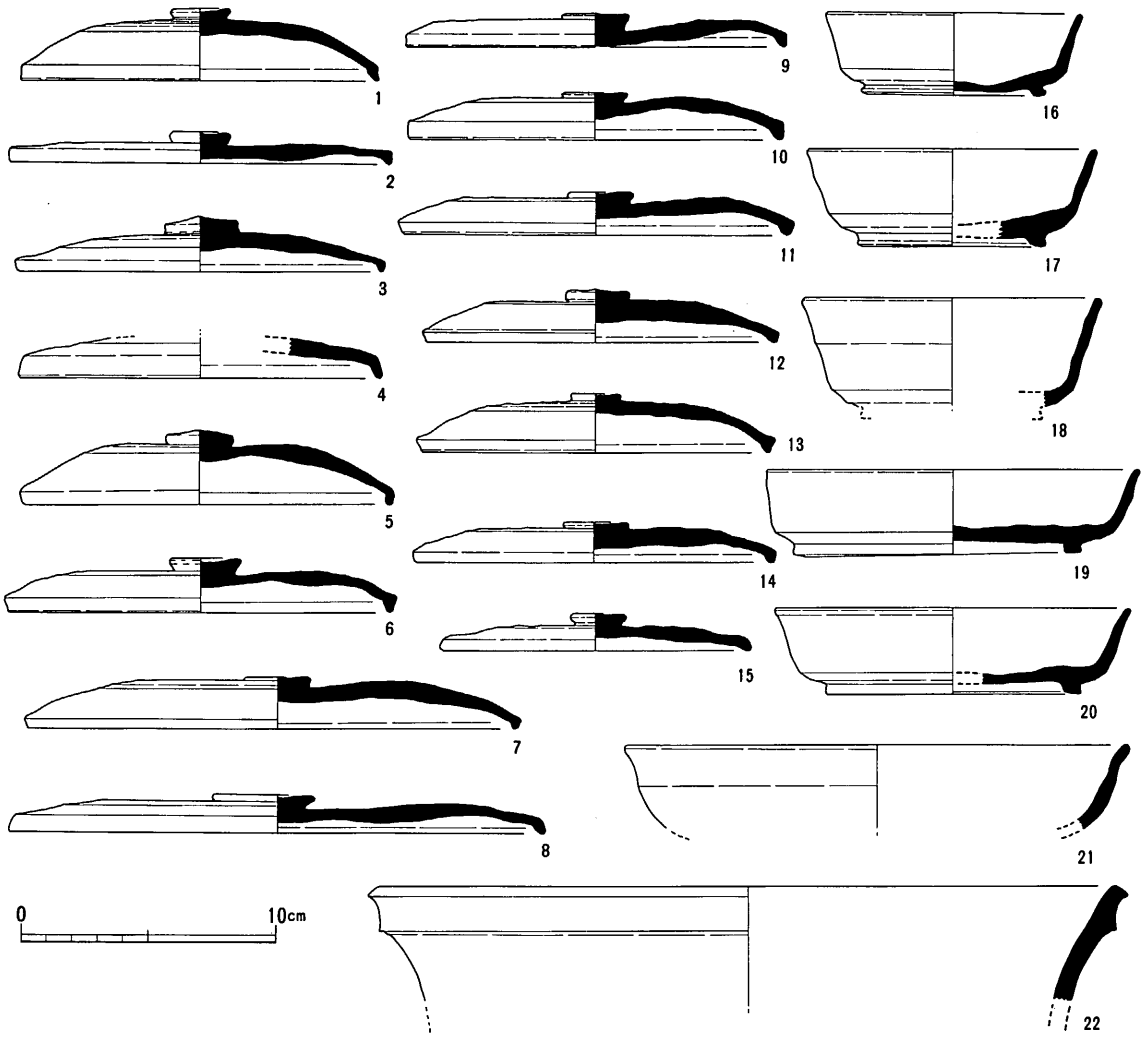
(2)　出土遺物（図版10、第8図）

①　窯内出土須恵器

蓋杯・皿・甕が出土しているが、このうち床面より検出したものは杯蓋3のみで他は埋土中に含まれていた。

杯蓋（1～3・8）　つまみは扁平で上面中央部が僅かに凸状を呈する。1は器高がやや高く口縁屈曲部が比較的長い。2・3は口縁部が断面三角形状をなす。8は大型品で口径20.9cmを測る。天井部が低く平らなつくりである。

皿(21)　体部から口縁部にかけてやや外反し口縁端部は丸く仕上げられている。底部を欠く。



第８図　１号窯出土須恵器実測図(⅓)

甕(22)　口縁部のみの資料。口縁端部は平面をなし、その下位に断面三角形の稜が巡る。内外とも回転ナデ仕上げである。

②　灰原出土須恵器

６・７号窯の灰原と明確に区分し難く、出土須恵器に関しては、焚き口部下方の凹み穴に含まれていたものの中より選別し図示した。器種は蓋杯のみである。

杯蓋(４～７、９～15)　窯内出土のものと、形態的差異は全く認められない。口径は７が19.１cmと大ぶりで、15が最も小さく12.0cmを測る。他は13.5～15cmで量的に最も多い。

杯身(16～20)　体部から口縁部へはほぼ直線状にのび、底端部よりやや内側に高台を貼付している。高台外端部がやや膨らむもの（16・17）がある。

窯内・灰原出土須恵器はともに形態・手法上の相違はなく、杯蓋は天井部外面がヘラ削り、内面はナデ仕上げを行ない他は回転ナデである。杯身は底部外面がヘラ切り、内面はナデ、他は回転ナデによる。底体部にヘラ削りを施したものもある。器種は蓋杯が圧倒的に多く、その他の器種は稀にしか見当たらない。当窯は出土須恵器に時期差を求め難く、従って操業は短期間のうちに終了したものであろう。

2．2号窯跡

(1) 遺　構（図版4、第5・6・9図）

窯体の全長は現存2.7mで、焼成部における床面の深さは現地表から約1.1mを測り、花崗岩バイラン土を刳り抜いて構築した地下式無階無段登窯である。窯体主軸の方向はN0.5°Wで1号・6号と並列し、丘陵の等高線にほぼ直交する。床幅は燃焼部と焼成部の堺でわずかにくびれ、奥壁に向って徐々にせばまる。焼成部中央付近で最大幅0.73mを測る。奥壁部分は削平流失しており全長は3m前後と推定される。天井部は残存しなかった。

焚き口　灰原方向へ急に広がる付近が相当し、幅は0.75mを測る。前庭部は0.6mの幅をもち主軸方向1.8m左右1.1mの楕円形の凹みを有する。

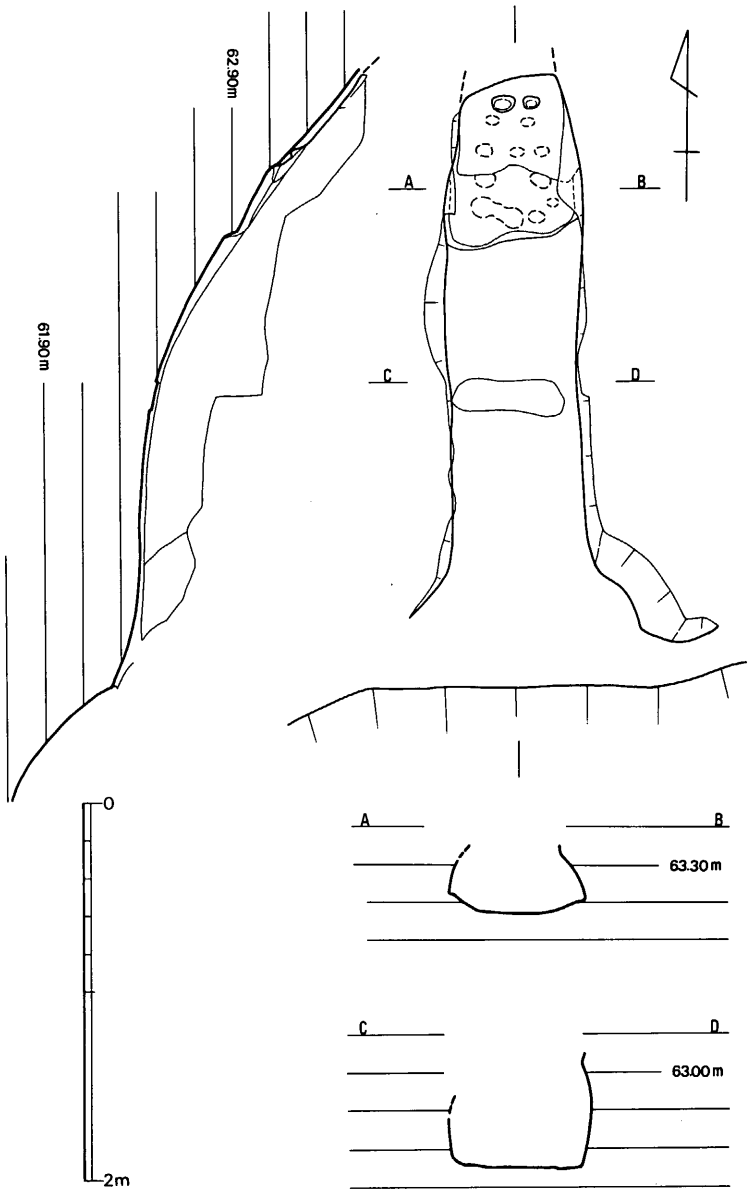
燃焼部　焚き口から傾斜変換部までの0.9mが燃焼部にあたり、ほぼ水平である。床幅は0.68mを測る。壁はかなり焼けしまっており、床も同様な様相を示すが、焼成部との堺付近を除いて1.5cmの床粘土が剝離している。

焼成部　燃焼部との境から約40度の上り傾斜となり、現存部まで長さ1.65mを測る。床幅は中位で0.73mを測り最も広くなり、奥壁に向って徐々にせばまる。中位より奥壁側の床には2度にわたり床面の貼り替えが行なわれている。それぞれの床面には置台及び置台の痕跡が認められる。

煙出し部　奥壁及び煙道は削平により不明であるが、本来現存部より0.3m長くなった所に位置すると考えられる。天井は不明であるが、焼成部のせばまる付近で0.5mの高さを示すようである。

灰原　窯の規模は小さいが、主軸延長上で焚き口から11mまで広がる。ただ2号窯・5号窯の灰原と重複しているので正確な規模は不明である。灰原は前庭部の凹穴が最も厚く0.8mを測る。窯壁片や焼土を含み須恵器の量は多いが、2号窯によるものと断定できる遺物は少ない。

(2) 出土遺物（図版10、第10図）



第9図　2号窯跡実測図(1/40)

①　窯内出土

須恵器

蓋杯が出土している。

杯蓋(1～4・8) 扁平なつまみをもつもの(1)ともたないもの(3)がある。2・4・8は天井部を欠損する。天井部は低く口縁部がほぼ垂直に屈曲し断面三角形をなす点は共通する。

杯身（13～16）高台は短くほぼ垂直に貼付されている(13・14)。15・16は底部欠損。14は体部から口縁部付近で外反する。また16は体部に2条の浅い沈線を施している。

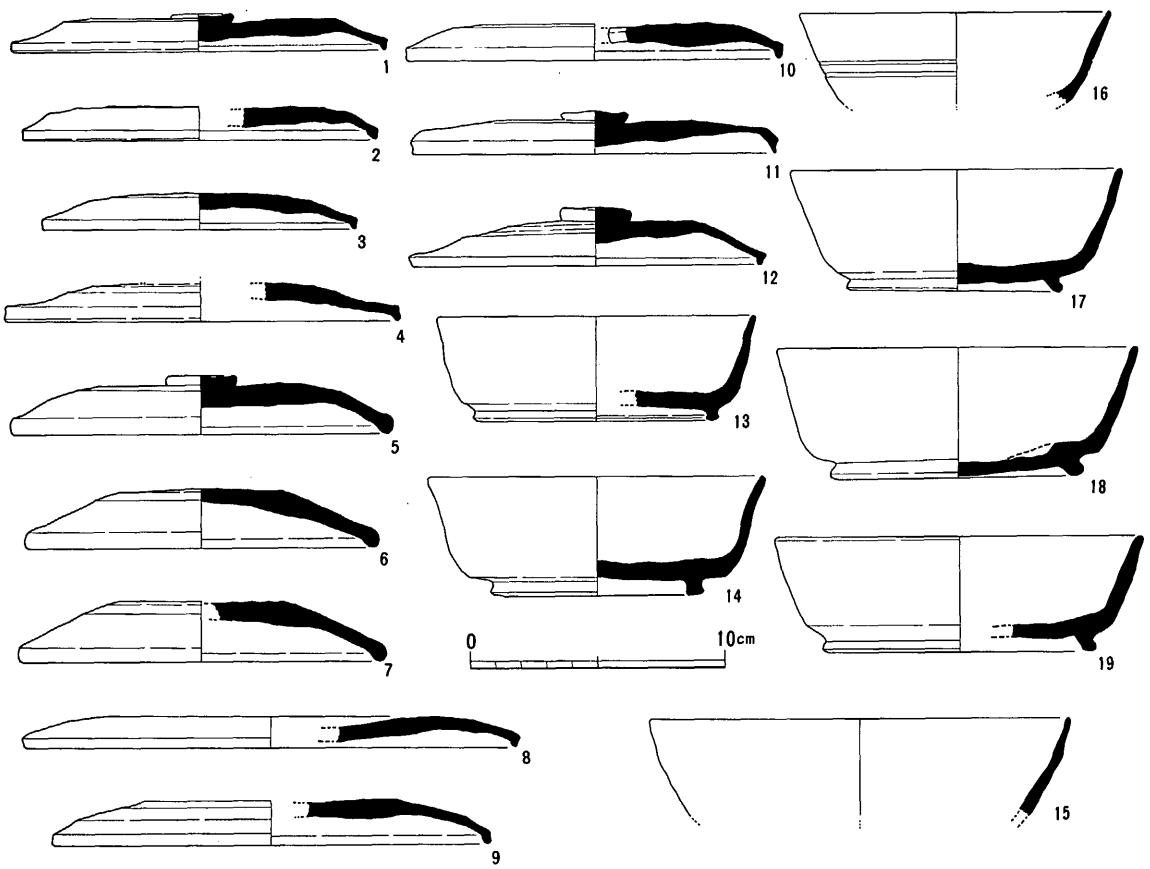
②　灰原出土

須恵器

蓋杯が出土している。

杯蓋（5～7・9～12）　口縁部の形態には、断面が球状に近く折り曲げが緩いもの(a類　5～7)と、断面が三角形をなしほぼ垂直に強く屈曲するもの(b類　9～12)とがある。前者は比較的器高が高く、つまみをもたないもの（6）も存在する。後者のうち9はやや大ぶりで口径17cmを測る。2は焼成前に天井部中央に穿孔を施している。

杯身（17～19）　体部はほぼ直線上に上外方へのび、高台は短いがハの字状に開く。



第10図　2号窯出土須恵器実測図(⅓)

当窯の場合、窯内・灰原出土須恵器ともに蓋杯について手法上の差異は認められないのであるが、蓋口縁部、杯高台部に関しては形態的にやや異なった特徴をもつ。つまり蓋では窯内のものと灰原b類は共通するがa類は口縁部が異なっている。この形態差が時期差を示すものかどうかは資料の僅少さのため判断し得ない。杯身高台は窯内出土のものに比較し灰原出土のものがやや古式の特徴を示している。

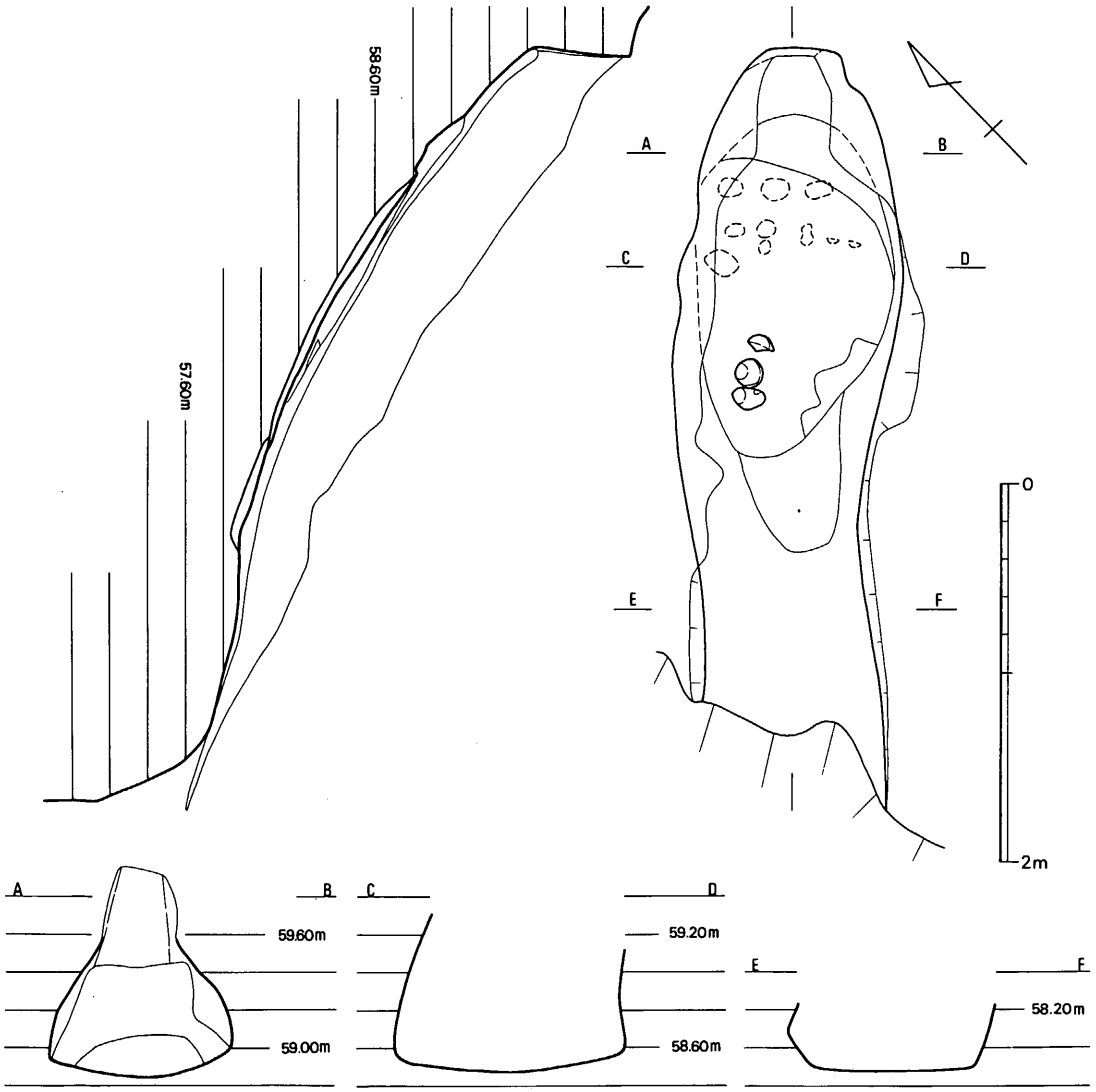
杯蓋は天井部外面ヘラ削り、内面不定方向ナデ、他は回転ナデ。杯身は底部内面不定方向ナデ、外面はヘラ切りのあとナデたものが多く、他は回転ナデによる。底体部をヘラ削りしたものもある。資料不足の感もあるが、手法に関しては窯内・灰原の相違は指摘し得ない。

当窯出土須恵器の場合、既述した如く、蓋杯に形態上の差を認め得るのであるが、操業が土器型式を越える期間幅で営まれたとは考え難く、短期間のうちに廃窯となったものであろう。

3．3号窯跡

(1) 遺　構（図版4、第11図）

窯体の全長は焚き口付近が崩壊して明確ではないが3.35ｍが考えられ、焼成部における床面の深さは現地表から約1.2ｍ、焚き口付近で約１ｍを測り、花崗岩バイラン土を刳り抜いて構築した地下式無階無段登窯である。窯体主軸の方向はＮ44°Ｅで丘陵の等高線にほぼ直交する。床幅は焼成部の中央付近で1.2ｍと最も広く、燃焼部にかけて狭くなり、さらに焚き口にかけてわずかに広くなる。天井部は残存しないが両壁より高さは復元可能である。１回以上の床上げが



第11図　３号窯跡実測図(1/40)

行なわれている。

焚き口　前庭部はもともとかなりの段差を有し灰原へ続いていたものと考えられるが、その後若干崩壊しているようである。主軸上で段落ちから0.25m上った所が焚き口と考えられる。この部分はよく焼けしまってほぼ直立し、床幅は0.92mを測る。

燃焼部　焚き口から傾斜変換部までの0.8mが燃焼部にあたり、床はわずかに傾斜する。床幅は焼成部と境をなすところで0.85mを測る。

焼成部　燃焼部との境から上り傾斜となり、奥壁まで長さ2.55mを測る。床幅は中央部で1.2mと最も広く奥壁に向って徐々にせばまる。床面の傾斜は奥壁に近づくにつれて角度を増し、約36度を示す。天井は大半が崩壊しているが、高さ約1.1mと推定される。焼成部上半に置台の痕跡が認められる。焼成部床面中央部分は楕円形に粘土による貼り替えが行なわれており、2回以上の補修が認められる。粘土上面では杯が出土している。

煙出し部　奥壁は幅0.4mを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。上部は削平を受けているが、除々にすぼまりながら煙道へ続く。煙道は径約0.3mを奥壁上部で測る。上部は赤く焼けているがもろい。

灰原　前庭部は径5m前後の不整形に大きく削平を受けている。灰原はこの部分を含め東側へ大きく広がり、12m×7.5mと大規模である。不整形の落ち込み部分は他の灰原とちがい厚い砂質層を間にはさみ形成されている。この部分は土器の出土も部分的で少なく、東側部分では約0.6mの厚さで多量に出土した。東側に灰原が広がっているのは、前庭部の落ち込みが灰原に伴うものでなく、谷中央部という地形的なものに起因するためと考えられる。

(2)　出土遺物（図版11～15、第12～18図）

蓋杯については以下の如く分類できる。

杯　蓋

〔Ⅰ〕類　身受けのかえりを有しつまみがつく。

〔Ⅱ〕類　かえりがなく口縁部がほぼ垂直に屈曲するものでつまみがつく。

〔Ⅲ〕類　〔Ⅱ〕類の小形品でつまみがつくもの(Ⅲ－A)とつまみのつかないもの(Ⅲ－B)がある。

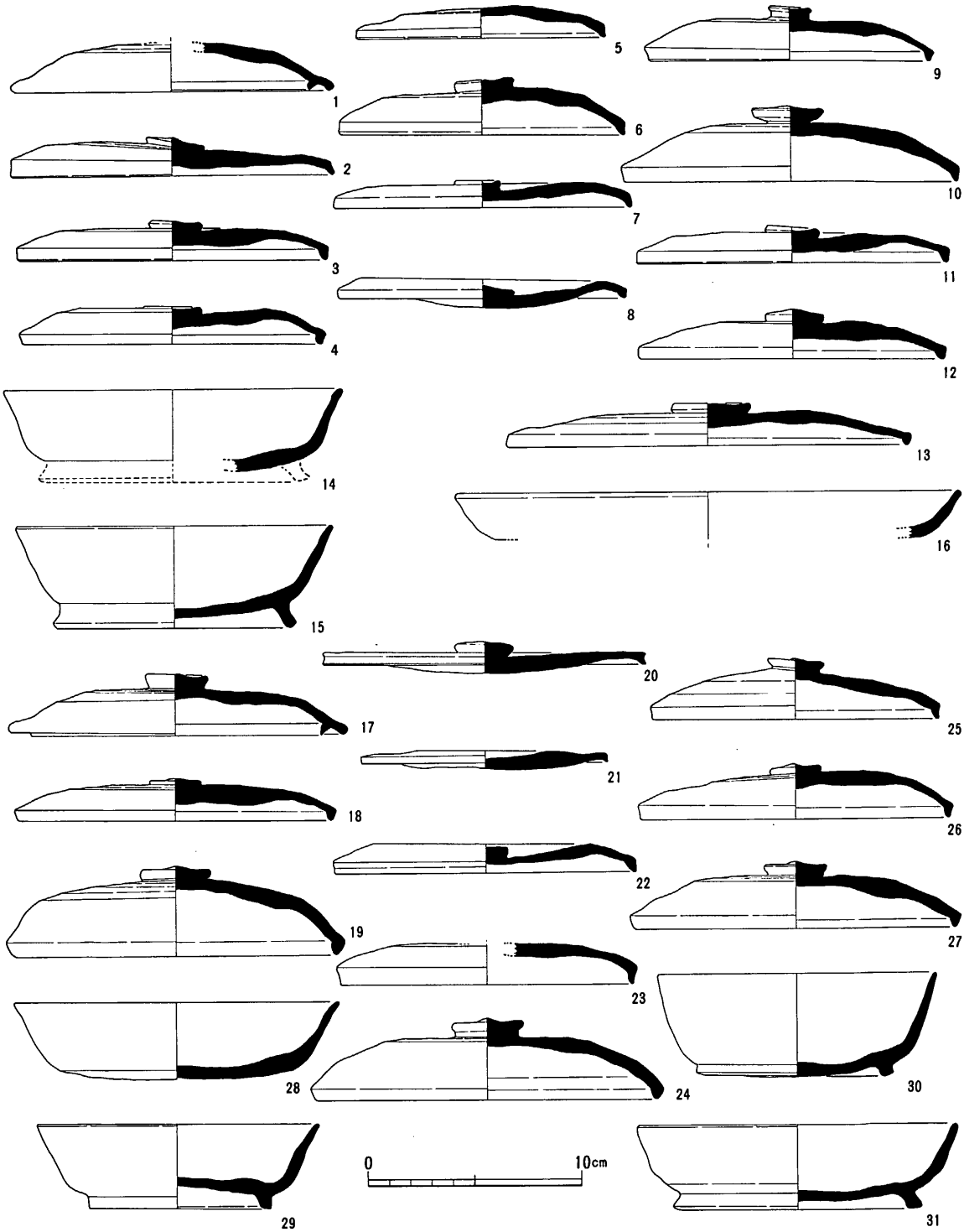
杯　身

〔Ⅰ〕類　高台を有し体部から口縁部へ外反気味にのびる。

〔Ⅱ〕類　高台を有し体部から口縁部へほぼ直線状にのびる。

〔Ⅲ〕類　高台を有し小形のもの。

〔Ⅳ〕類　高台を有さず体部から口縁部へ外反気味にのびる。



第12図　3号竈出土須恵器実測図(1)(⅓)

① 窯内出土須恵器

A 床面出土須恵器（1～16）

蓋杯及び皿が出土している。

杯蓋（1～13）〔Ⅰ〕・〔Ⅱ〕・〔Ⅲ〕類がある。

〔Ⅰ〕類（1） 天井部中央を欠くが、この類に含まれるものと思われる。

〔Ⅱ〕類（2～4・6～13） 天井部は平らなものが殆んどであるが、10のように丸味をもつものも存在する。口縁部は殆んど同様な形状を示す。口径は、13が18.6cmと最も大きく他は13～15.5cmでつまみは扁平なものが多い。

〔Ⅲ〕類（5） つまみをもたず、B類に含まれる。

杯身（14・15）〔Ⅱ〕類のみである。

〔Ⅱ〕類（14・15） 14は高台が剝落する。15は断面長方形の高台がやや開き、内端部で接地している。

皿（16） 口径23.4cmで口縁端部は丸く仕上げられている。

B 埋土中出土須恵器（17～31）

この中には当窯が廃絶された後、流れ込んだものも含まれると考えられ、当窯以外の生産品が混入した可能性がある。蓋杯が出土している。

杯蓋（17～27）〔Ⅰ〕・〔Ⅱ〕・〔Ⅲ〕類がある。

〔Ⅰ〕類（17） 完形品である。かえりが口縁部より下方にのびる。

〔Ⅱ〕類（18～20・22～27） 天井部が丸いものと平らになったものがあるが、焼け歪みの影響もあろう。口縁折曲げ部のやや長いもの（23）も存在する。

〔Ⅲ〕類（21） 口径11.5cmを測り、口縁部は鳥嘴状を呈する。B類に属す。

杯身（28～31）〔Ⅱ〕・〔Ⅳ〕類がある。

〔Ⅱ〕類（29～31） 30はやや器高が高く短めの高台をもつ。

〔Ⅵ〕類（28） 口径15.1cm、器高3.6cm。底部外面はヘラ切りの後、ナデ調整である。

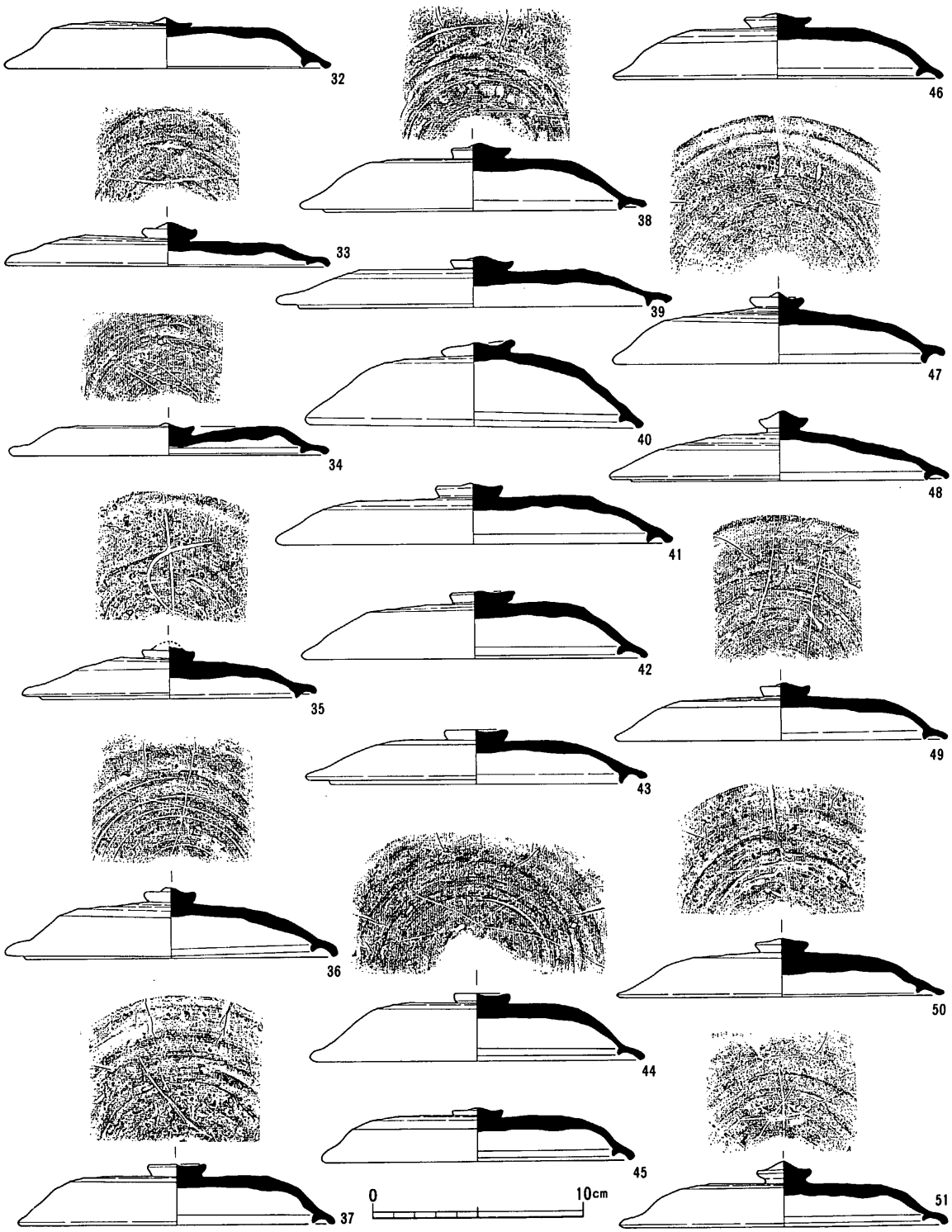
② 灰原出土須恵器

蓋杯・皿・鉢・壺・甕・高杯が出土している。

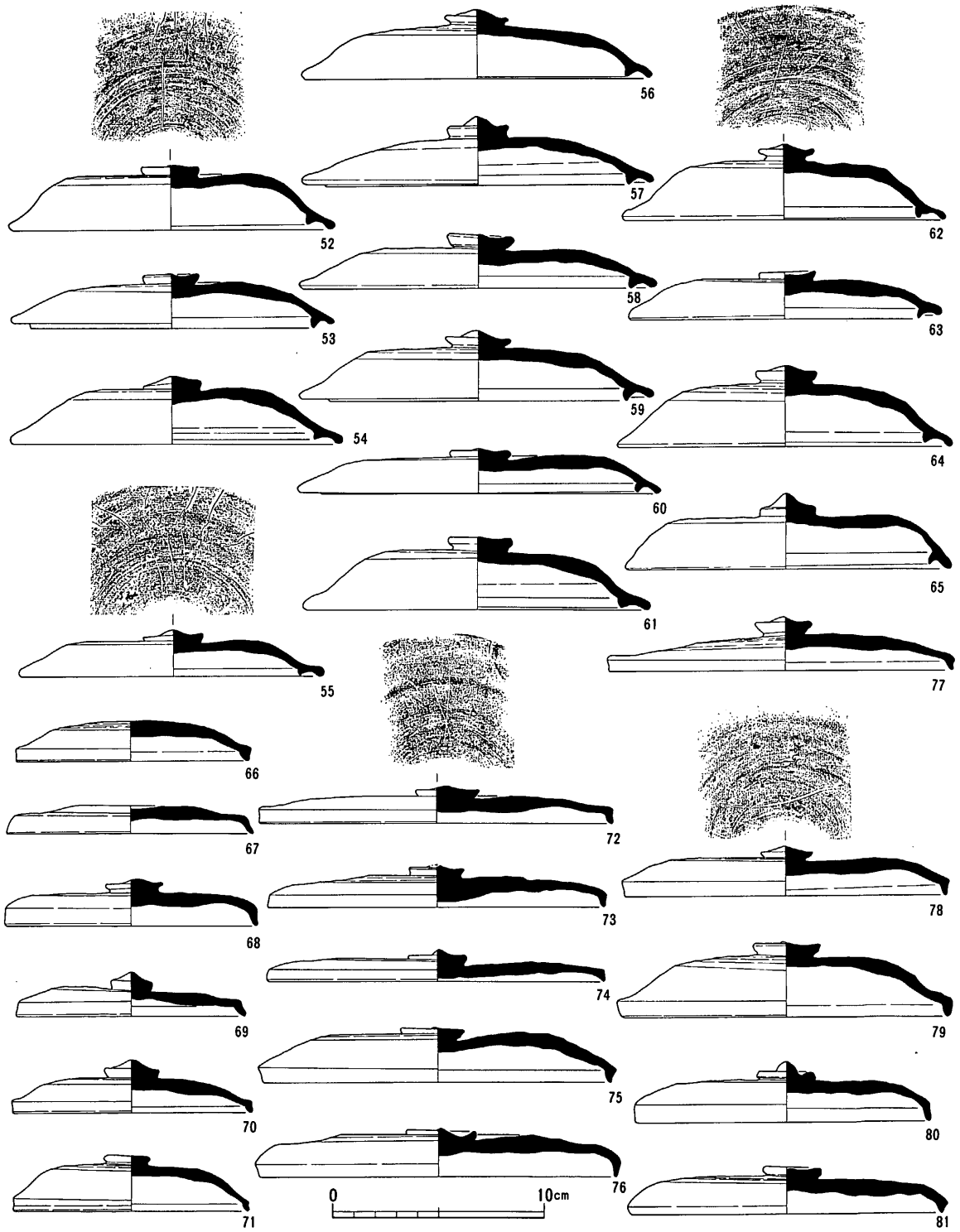
杯蓋（32～81・105・107）〔Ⅰ〕～〔Ⅲ〕類がある。

〔Ⅰ〕類（32～65・105）口径13.5～18.5cmであるが、14～16cmのものが最も多い。口縁部よりわずかにかえりが下方へ出るものもあるが、その数は少ない。かえりのつけ根内側に沈線が認められるものとなめらかになっているものとがある。量的には前者の方がやや多い。

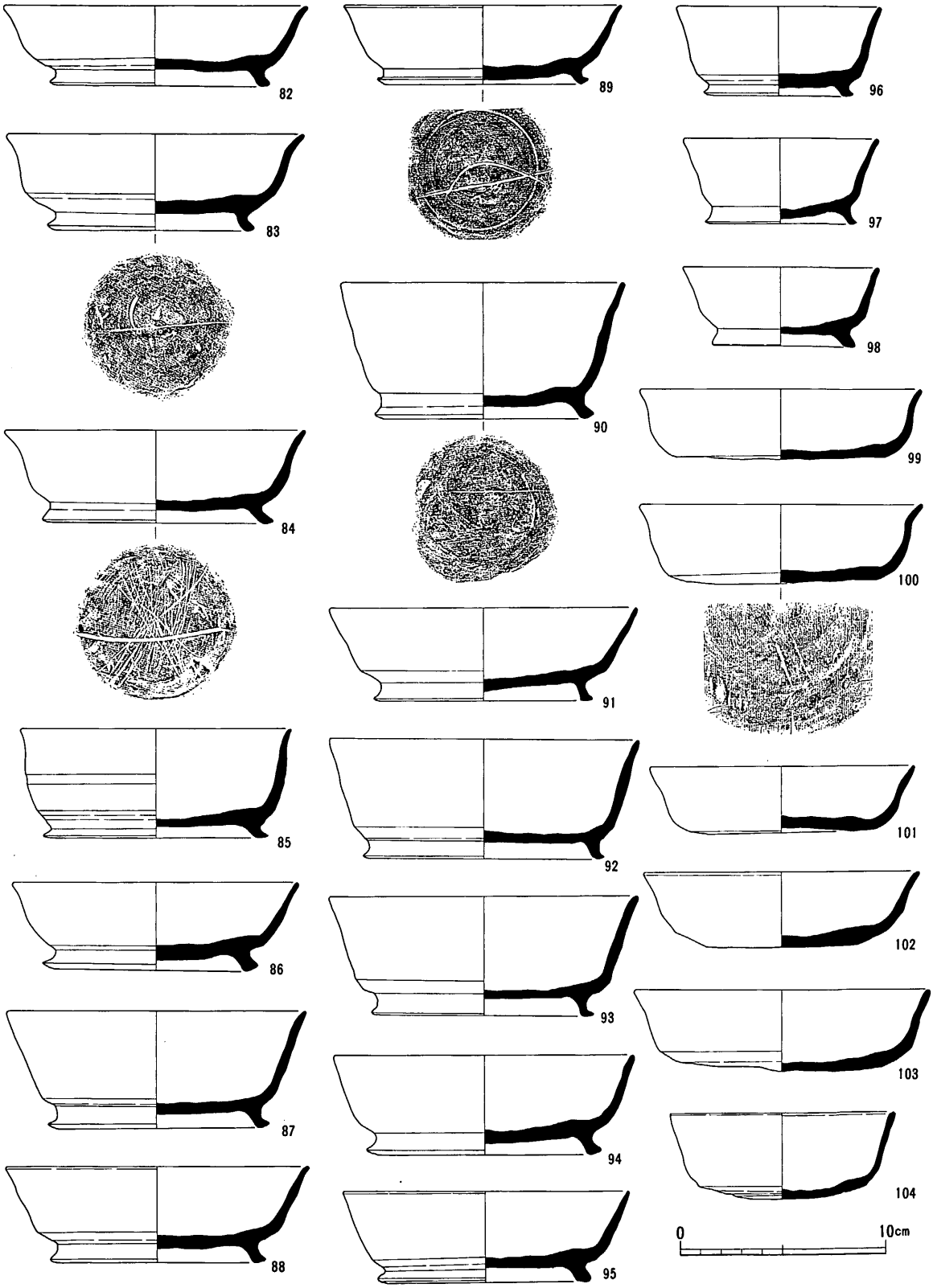
〔Ⅱ〕類（72～81・107） 口径約16～17cmのもの(72～76・107)と13.5～15.5cmのもの（78～81）に分けられる。両者とも口縁部折曲部の長いもの（76・80）が存在しており注目される。〔Ⅰ〕類に比較してやや器高が低い。



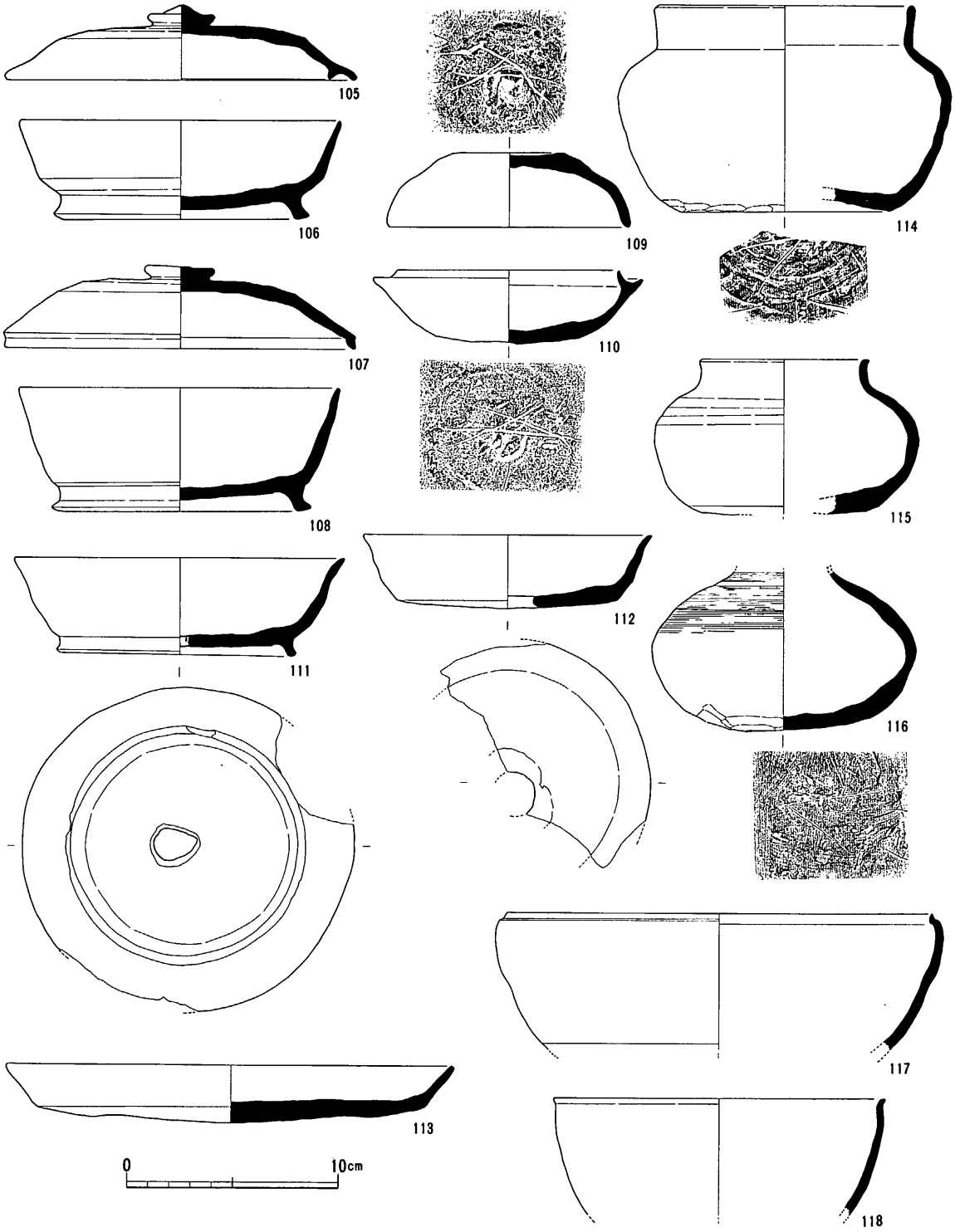
第13図　3号竈出土須恵器実測図(2)(⅓)



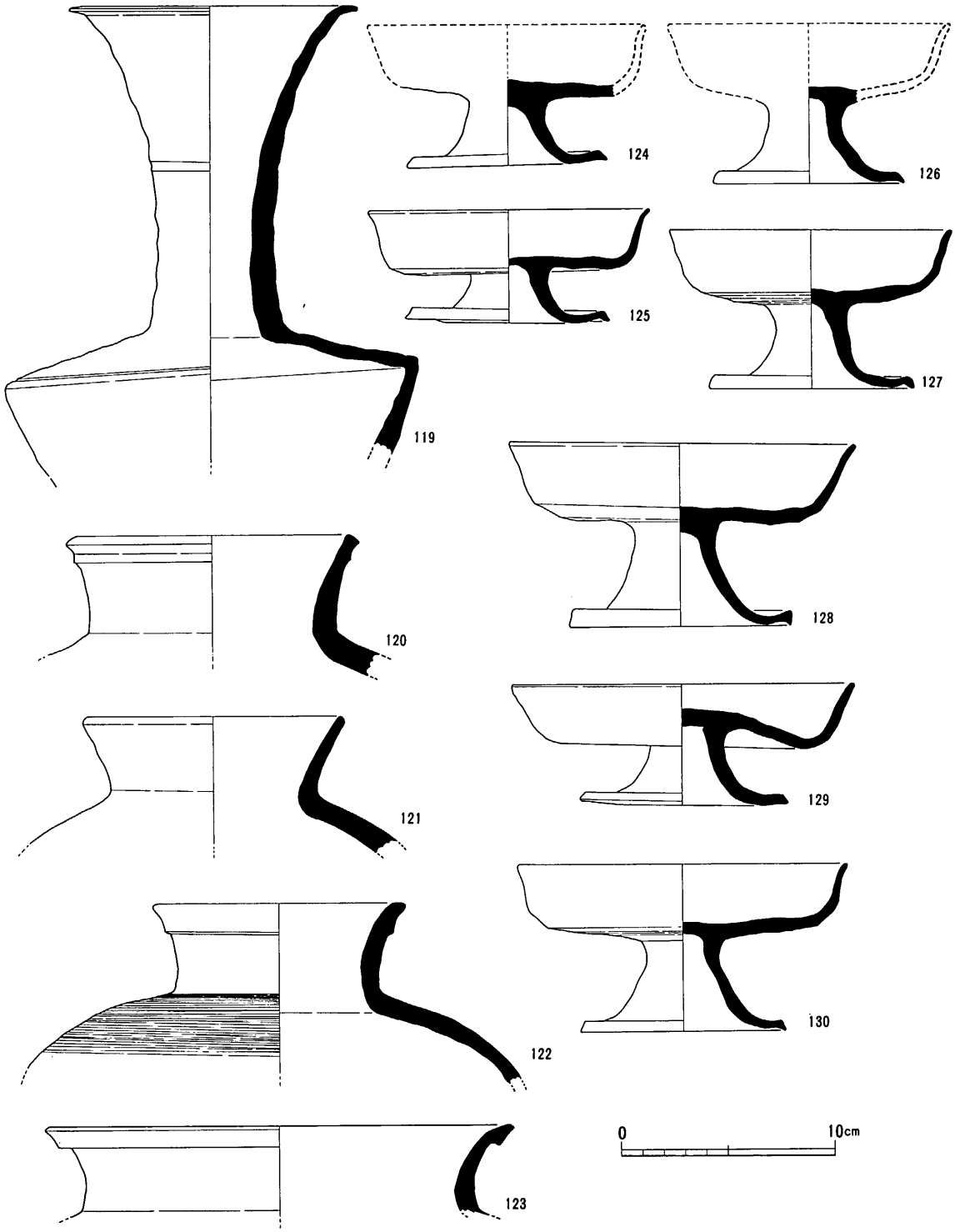
第14図　3号窯出土須恵器実測図(3)(⅓)



第15図　3号竈出土須恵器実測図(4)(1/3)



第16図　3号窯出土須恵器実測図(5)(⅓)



第17図　3号竈出土須恵器実測図(6)(1/3)

〔III〕類　A(68～71)・B(66・67)とも、つまみの有無以外は基本的な形態差は見受けられない。この類にも〔II〕類と同様、口縁折曲部が長いもの（67・68）がある。

杯身（82～104・106・108）〔Ⅰ〕～〔Ⅳ〕類がある。

〔Ⅰ〕類（82～85）　器高がやや低いもの（82～84）と体部中央に沈線が巡るもの（85）がある。

〔II〕類（86～95・106・108）器高の高いもの（87・90・92・93・108)と低いもの（86・88・89・91・94・95・106)がある。口径は約13.5～15cmを測る。

〔III〕類（96～98）　蓋〔III〕類とセットになることは確実であろう。96・97は体部がやや外反する。

〔Ⅵ〕類（99～103）　体部の形状は〔Ⅰ〕類と同様で器高も低い。口径は12.8～14.3cmである。

104は明瞭でないが底部に高台が付くものと思われる。〔III〕類に含まれるものであろう。105・106及び107・108は完形である。灰原よりの出土品であるが、それぞれ蓋をかぶせた状態で検出されセットをなすものと思われる。105は杯蓋〔Ⅰ〕類、107は〔II〕類、106・108は杯身〔II〕類に属する。109・110は灰原の下層より出土したものであるが、当窯においては窯内・灰原ともにこの種の蓋杯を他に出土しておらず当窯の製品とは考え難い。111・112は底部中央に焼成後穿孔したもの。111は〔Ⅰ〕類、112は〔Ⅳ〕類に属する。

皿（113）　復原口径21cmを測る。底部外面ヘラ切り後ナデ、内面は不定方向ナデ、他は回転ナデである。

鉢（117・118）　両方とも下半部を欠損する。117は鉄鉢形を呈する。

壺（114～116・119～122）　114・115は短頸壺。114の底端部は手持ちヘラ削り。116は口縁部を欠損する。底部外面は手持ちヘラ削り。体部上半にカキ目が残存する。119は長頸壺。口縁部は平坦で、肩部は強く張り沈線が巡る。頸部中央にも幅広の浅い沈線が施されている。120～122はやや大形の壺形土器。120・122は口縁下に断面三角形の稜を有す。122の肩部はカキ目調整が施されている。

甕（123）　口縁部資料で、残存部は内外面とも回転ナデ調整。

高杯（124～130）　脚部はハの字形に開き、裾部で水平方向にのびる。端部は鳥嘴状を呈する。杯底部外面はヘラ削り、内面は不定方向のナデ、脚部は内外とも回転ナデ調整である。

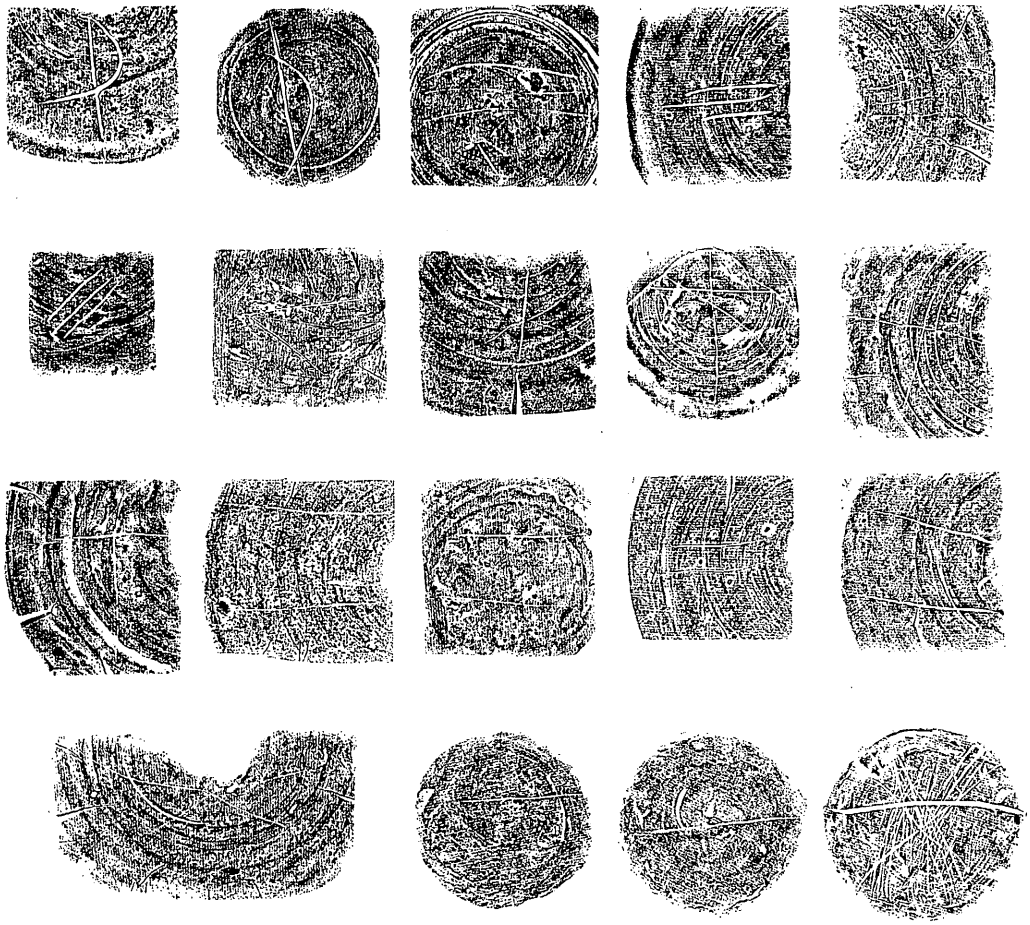
3号窯の床面に遺存していた須恵器は、当窯が廃窯となる直前に焼成されたものと推測され、従って灰原の遺物より新しい様相を示していると思われる。量的に最も多い杯蓋について検討してみると、灰原では、〔Ⅰ〕類が〔II〕・〔III〕類に比較し数量において凌駕するが、床面では逆転している。これは最終段階焼成時の状況により大きく左右される事象なのであるが、時間的推移の中で〔Ⅰ〕類から〔II〕類への形式変化が具現化されたものとも捉えられよう。いずれにしても〔Ⅰ〕・〔II〕類が同時に生産された時期があることは、遺物の出土状況よりして疑いない事実であろう。また口縁部屈曲が床面のものは短く断面三角形状を呈するが、灰原ではやや長目

のものが多い。103・104の蓋杯については先述した如く、当窯において生産された可能性は薄い。そして、この種の蓋杯が4号窯で多量に出土していること、また、蓋杯に付されたヘラ記号が4号窯出土須恵器の中に存在することなどから、4号窯で焼成されたものが3号窯灰原の下部に埋没した結果と推測される。

一方、ヘラ記号についてみると（灰原出土須恵器杯蓋に限る）、〔Ⅰ〕類がかなりの割合で天井部に付されているのに対し、〔Ⅱ〕・〔Ⅲ〕類では稀にしか見受けられない。

杯身は床面での出土例に乏しく、灰原との比較は困難である。杯蓋が〔Ⅰ〕類から〔Ⅱ〕類へ変化する段階で、杯身には目立った変化はなかったものと思われる。

当窯は比較的器種が豊富で、壺・甕等の大形品も出土しているが、数量的には蓋杯が主体的に焼成されたことは明確である。



第18図　3号窯出土須恵器ヘラ記号拓影(⅓)

4．4号窯跡

(1) 遺　構（図版5、第19～21図）

窯体の全長は現存長6.05mで、焼成部における床面の深さは現地表から1.3mを測り、花崗岩バイラン土の地山を刳り抜いて構築した地下式無階無段登窯である。窯体の主軸方向はN0.5°Eで、丘陵の等高線にほぼ直交する。床幅は焼成部の中央で1.5mを測り、燃焼部で最もせまくなり焚き口でやや広がり1.35mを測る。天井部は部分的に落ち込んだ状態で残存する。2回以上の床上げの可能性がある。

焚き口　燃焼部がわずかに左右へ開くあたりが相当し、幅は1.35mを測る。明確な前庭部は有せず、灰原の焚き口に付近が大規模に削り出されており、これに代わるものと考えられる。

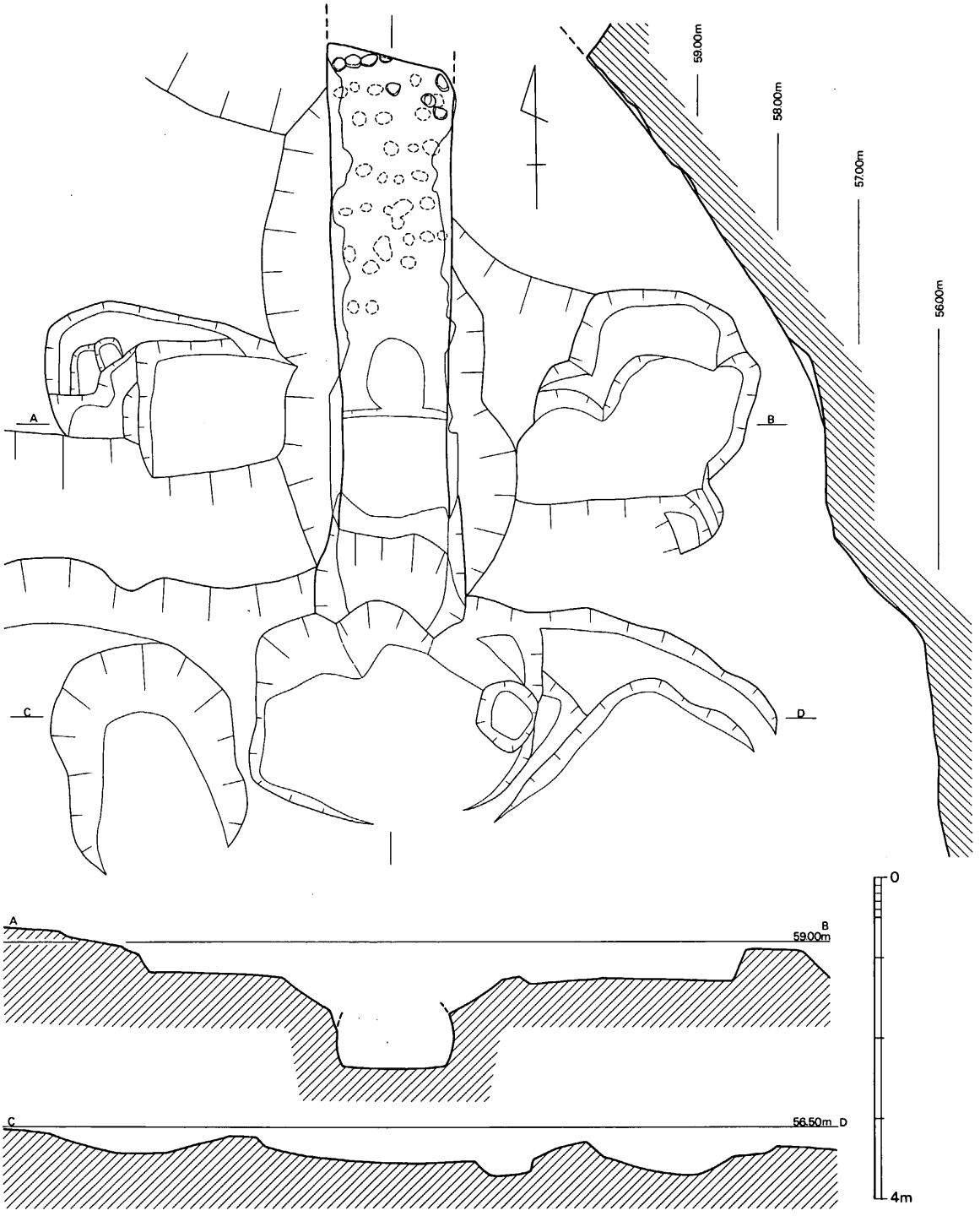
燃焼部　焚き口から傾斜変換部までの1.15mが燃焼部にあたり、ほぼ水平である。床幅は窯体内で最もせまく1.25mを測る。開窯時は焚き口から1.8mまでが燃焼部と考えられる。壁はかなり焼けしまっており、床も同様な様相を示し、焼成部との境にわずかな段をもつ。

焼成部　燃焼部との境から約35度上り傾斜をもち、現存部まで長さ4.55mを測る。床幅は上るほど除々に広がり中央部付近で1.5mを測る。現存最上部から1mまでの床には2度にわたる床面の貼り替えが認められる。また燃焼部から焼成部にかけての部分は層をなし上層・下層に別れ床上げが認められるが、下層の土器は灰原下層の土器よりも新しく、窯体内が一度さらえられた後床上げが行なわれたものと考えられる。燃焼部との境から0.8m以上には置台の痕跡が著しく、現存最上部付近には楕円形土塊の置台が検出された。焼成部上部から煙出し部にかけては削平・流失しているが、窯体の全長は本来10m前後であろう。

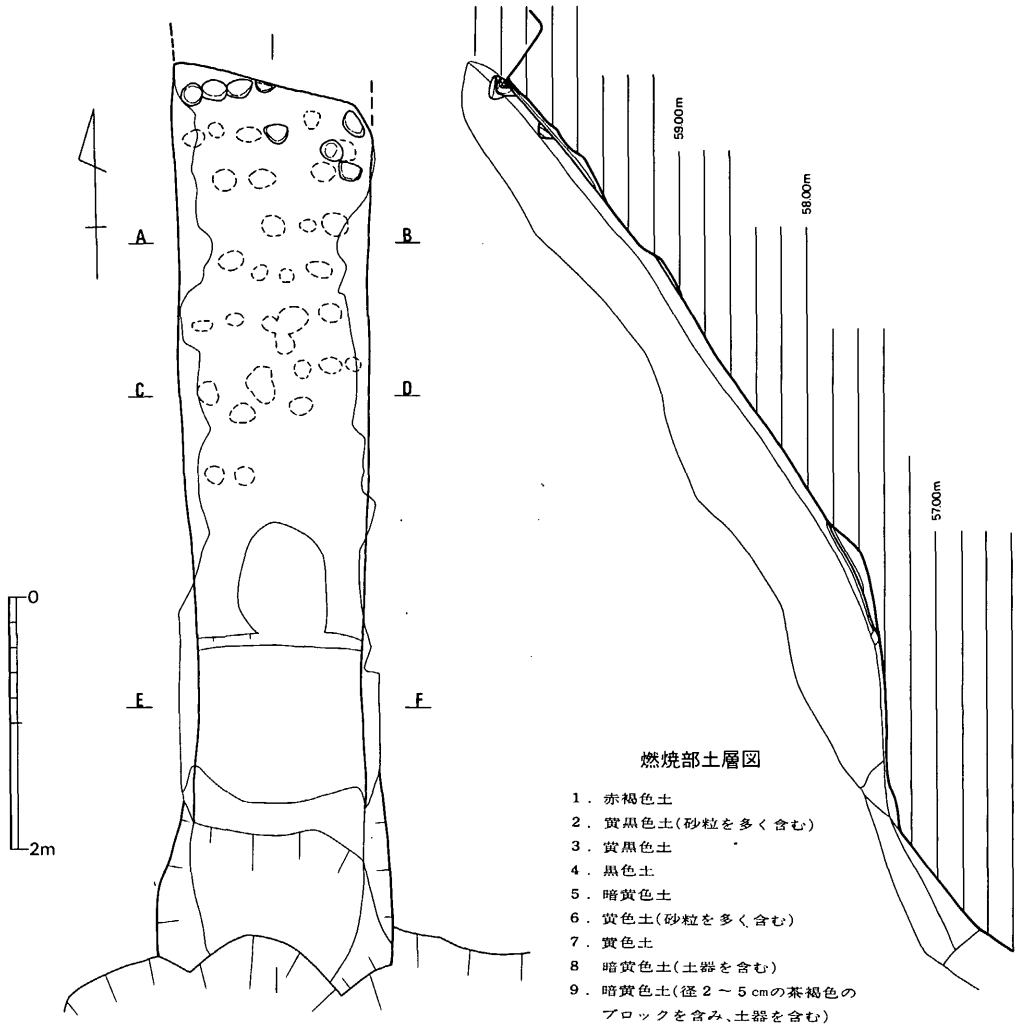
灰原　主軸延長上で焚き口から約9m、東西最大幅16mを測る規模であり、浦ノ原窯跡群の中で窯体とともに最も大きい。灰原は焚き口部近くで広範に削り出されており、さらに中央と左右に分けられ整形されている。灰原はこの整形された部分が最も厚く1.1mを測る。灰原には杯類の他に大型の須恵器もかなり含まれている。また瓦類も若干出土している。

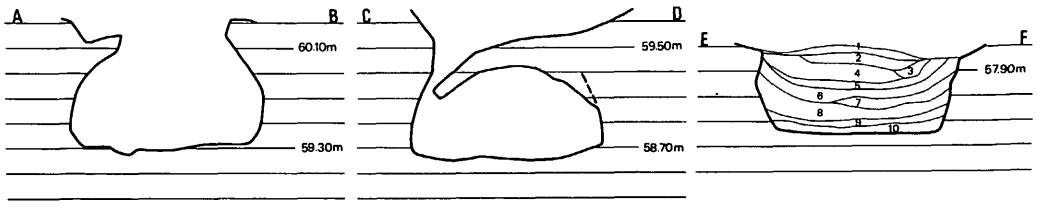
付設遺構　窯体の燃焼部から焼成部にかかる位置の左右に約2.5m四方の削り出された平坦面が存在する。若干浮いた状態ではあるが土器がかなり出土した。焚き口からすぐに灰原へ続くことから作業場としての前庭部に代わる施設と考えられる。硯の把手にあたる部分も東側平坦面の床面に近いところで検出された。

この4号窯は、浦の原窯跡群の他の窯が小型であり一群を形成してしている中で、比較的大型に属し、単独で立地していること。この窯と他の窯との間には時間的差が若干存在し大型の窯から小形化する時期にあること。A地区竪穴状遺構出土の瓦がこの4号窯で焼かれた可能性が高く、いわゆる瓦陶兼業窯として認識されることなどが特徴としてあげられる。

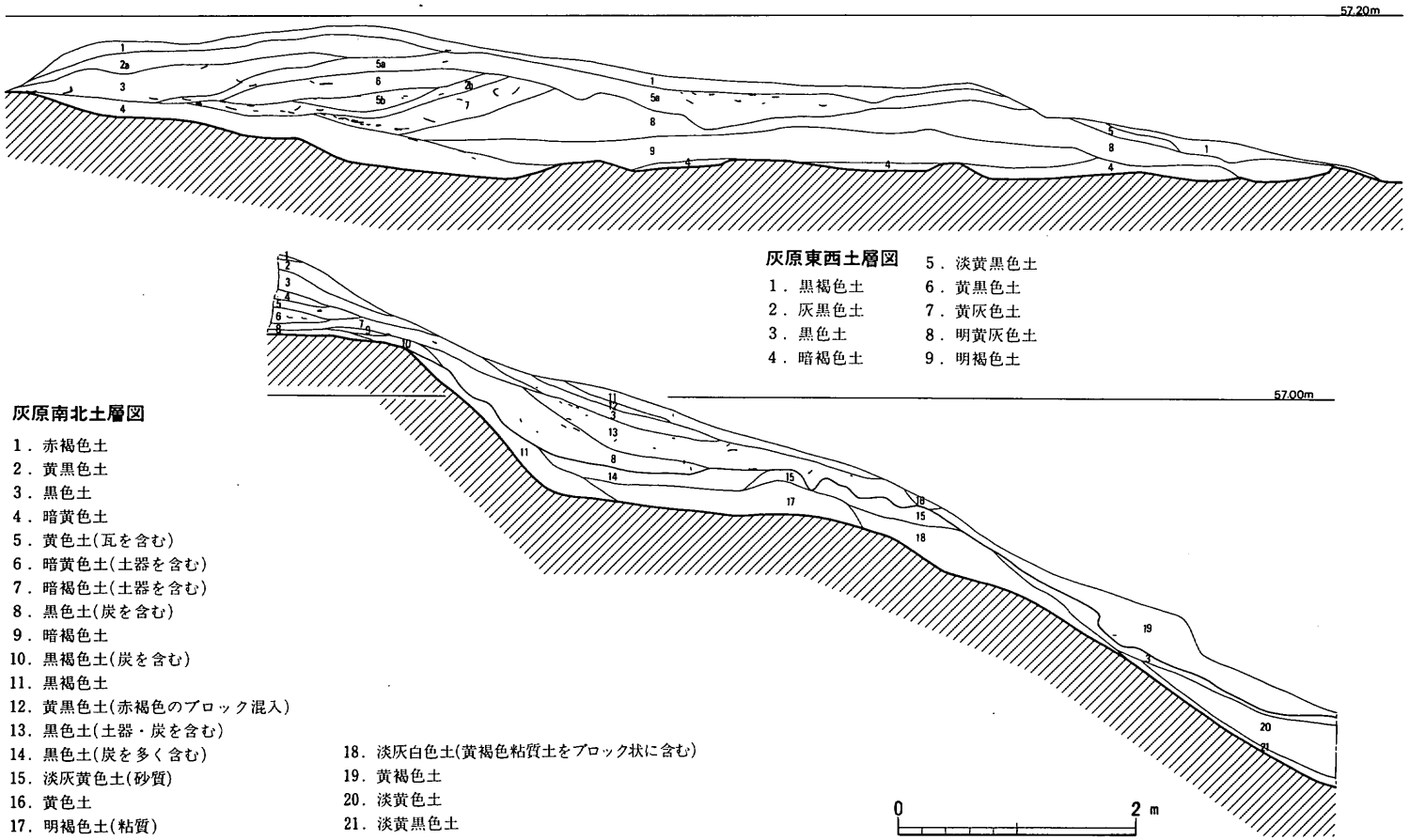


第19図　4号竪跡実測図(1)(1/80)





第20図　4号竈跡実測図(2)(1/60)



灰原東西土層図

1．黒褐色土
2．灰黒色土
3．黒色土
4．暗褐色土
5．淡黄黒色土
6．黄黒色土
7．黄灰色土
8．明黄灰色土
9．明褐色土

灰原南北土層図

1．赤褐色土
2．黄黒色土
3．黒色土
4．暗黄色土
5．黄色土(瓦を含む)
6．暗黄色土(土器を含む)
7．暗褐色土(土器を含む)
8．黒色土(炭を含む)
9．暗褐色土
10．黒褐色土(炭を含む)
11．黒褐色土
12．黄黒色土(赤褐色のブロック混入)
13．黒色土(土器・炭を含む)
14．黒色土(炭を多く含む)
15．淡灰黄色土(砂質)
16．黄色土
17．明褐色土(粘質)
18．淡灰白色土(黄褐色粘質土をブロック状に含む)
19．黄褐色土
20．淡黄色土
21．淡黄黒色土

第21図　4号窯跡灰原土層図(1/60)

(2) 出土遺物（図版16～20、第22～29図）

本窯から出土した蓋杯は、以下の如く分類することができる。

杯　蓋

〔Ⅰ〕類　口径10.5cm前後の比較的小形の蓋で、口縁部は垂直あるいは外傾気味に下るものと、内傾気味に下るものが存在する。天井部の形態は丸味を有すが、上面が平らになるものも認められる。

〔Ⅱ〕類　かえりを有する杯蓋で比較的小型のものである。天井部は丸味をもつものが多く、つまみをもつもの（A類）ともたないもの（B類）が存在する。

〔Ⅲ〕類　かえりを有する杯蓋で中形のものである。天井部は丸味を有するものと平らに近くなるものがあり、つまみをもつもの（A類）ともたないもの（B類）が存在する。

〔Ⅳ〕類　かえりをもたない杯蓋であり、口縁部は短く屈曲する形状をとる。天井部は平らか平らに近いものが多く、その中央につまみを有す。

杯　身

〔Ⅰ〕類　たちあがりと蓋受けを有す杯身で小形のものである。たちあがりは低く内傾するものと、内傾した後垂直にのびるものが存在する。底体部は丸味を有するものから平らなものまで種々認められる。

〔Ⅱ〕類　高台をもたない杯身で比較的小形のものである。体部・口縁部の形態は外反気味に上外方にのびるものと、直線的あるいは内彎気味にのびるものが存在する。前者の底部はやや丸味を有し、後者の底部は平らに近い形状をとる。

〔Ⅲ〕類　高台を付す杯身で中形のものである。体部・口縁部はゆるやかに外反してのび、底部は平らでハの字に広く高い高台を付す。

〔Ⅳ〕類　高台を付す杯身である。口縁部・体部は内彎気味にのび、底部は平らでハの字形の高台を付す。

①　窯内床面出土須恵器

A　上層出土須恵器

蓋杯と甕が出土した。

杯蓋（1～6）〔Ⅲ〕・〔Ⅳ〕類がある。

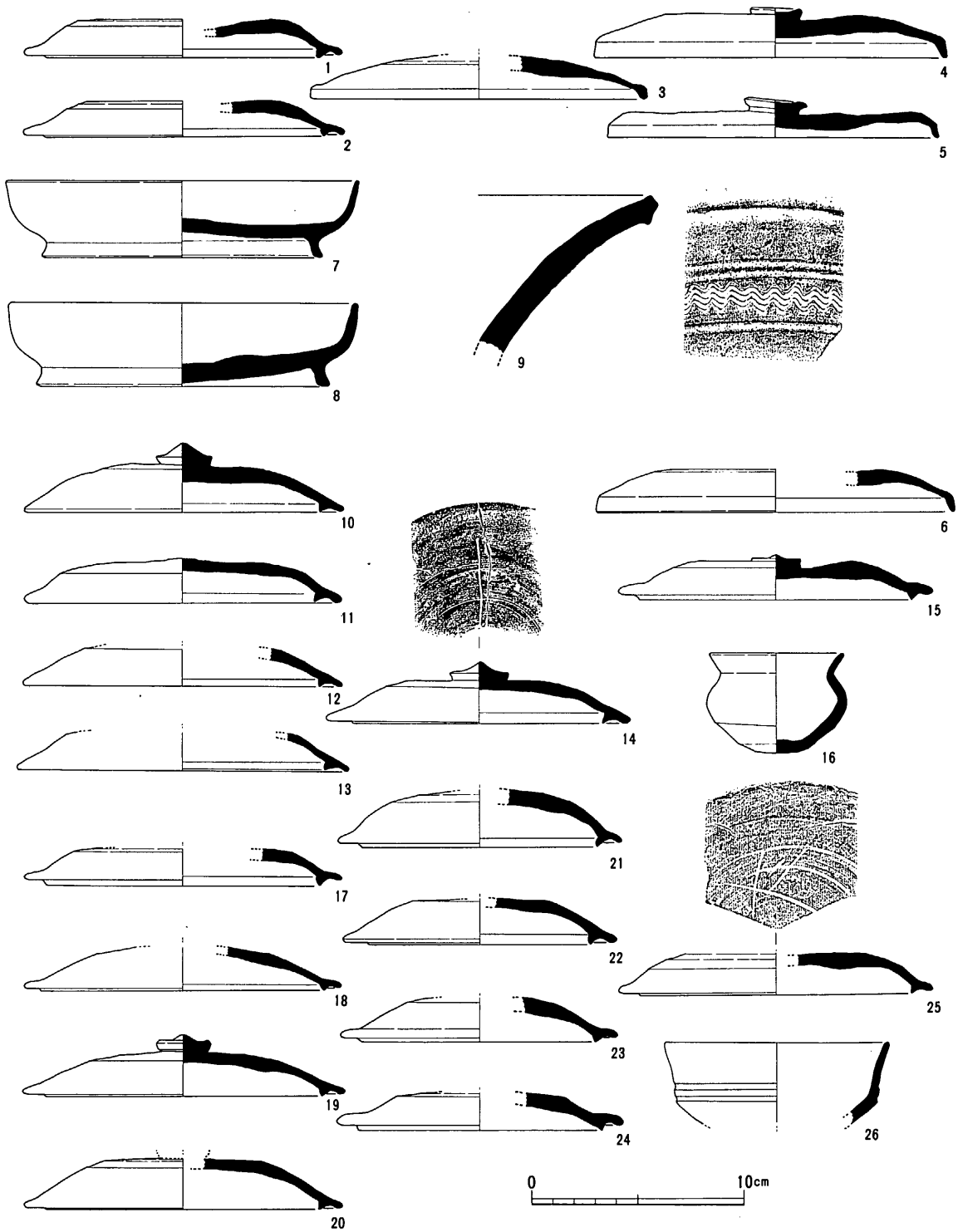
〔Ⅲ〕類　1・2が含まれる。天井部には回転ヘラ削り調整を施す。

〔Ⅳ〕類　3～6が含まれる。天井部は平らに近い形態を呈す。

杯身（7・8）〔Ⅳ〕類のみである。

〔Ⅳ〕類　7・8が含まれる。器高が低い為、やや扁平気味の形態を呈す。

甕（9）　大きく外反する大形甕の口縁部で、中央に1条の波状文と2条の沈線を有す。



第22図　4号竈出土須恵器実測図(1)(⅓)

B　下層出土須恵器

杯蓋が出土した。

杯蓋（10～14）〔III〕類のみである。

〔III〕類　10・14はA類に、11はB類に属す。他も天井部中央を欠損するがこの類に含まれる。

②　灰原出土須恵器

第22図16～26と第23図の資料は灰原の土層確認の為に南北・東西に残したベルト中から出土したものである。第24図の資料は灰原の堆積が良好な部分から出土したもので、上層出土須恵器と下層出土須恵器に大別できる。他は明確な土層に伴って出土したものではない為、一括して扱うことにする。

A　南北ベルト中出土須恵器

杯蓋・壺・高杯が出土した。

杯蓋（17～25）〔III〕類のみである。

〔III〕類　17は6層、18・19は7層、22・23は8層、20・21は13層、24・25は14層の出土である。19はつまみを有し、A類に属す。

壺（16）　5層から出土した器高4.8cmの小形壺で、底体部下半には回転ヘラ削り調整を施す。

高杯（26）　高杯の杯部であり、体部に2条の沈線を有す。脚部は欠損の為不明。

B　東西ベルト中出土須恵器

蓋杯・皿・高杯・壺・提瓶・甕が出土した。

杯蓋（27～35）〔I〕～〔III〕類が出土した。

〔I〕類　32～35が含まれる。34・35は2b層、32は3層、33は5a層から出土した。

〔II〕類　29は3層、30・31は5a層の出土。29・30は天井部中央に宝珠つまみを付すものでA類に、31はつまみを付さずB類に属す。

〔III〕類　27・28が含まれる。27は1層、28は5a層から出土した。

杯身（36～40）〔I〕・〔II〕類が出土した。

〔I〕類　36～39が含まれる。36は1層、37は3層、39は5a層、38は5b層から出土した。

〔II〕類　40が含まれる。2b層の出土で、底部は平らに近い形態を呈す。

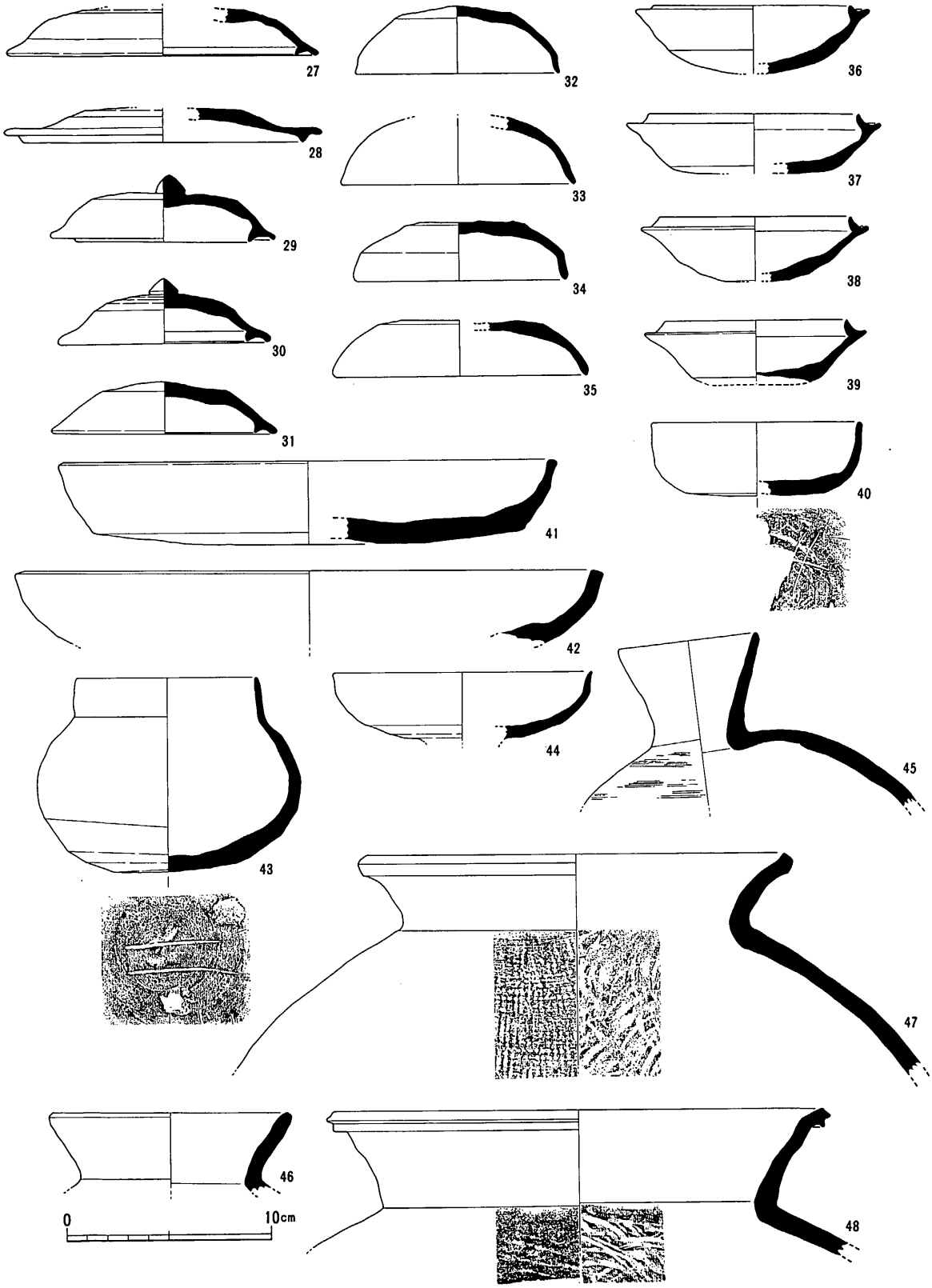
皿（41・42）　41は1層、42は7層の出土で、両者とも類似した形態をとる。

高杯（44）　3層出土の高杯の杯部であり、丁寧なつくりをしている。脚部は欠損の為不明。

壺（43・46）　43は4層出土の短頸壺で、底体部は丸味を有す。46は7層出土で中形壺の口縁部と思われる。体部は欠損の為不明。

提瓶（45）　2b層から出土した。比較的小形のもので、体部は丸味を有す。

甕（47・48）　47は7層出土で、口縁端部は肥厚する。48は8層出土で、端部下に稜を有す。



第23図　4号竈出土須恵器実測図(2)(⅓)

C　上層出土須恵器

蓋杯と皿が出土した。

杯蓋（49～50）〔II〕・〔III〕類がある。

〔II〕類　51～53が含まれる。52は天井部につまみ痕が残りA類に、他はB類に属す。

〔III〕類　49・50が含まれる。天井部は丸味を有し、回転ヘラ削り調整を施す。A類に属す。

杯身（54～56）〔II〕・〔III〕類がある。

〔II〕類　54・55が含まれる。底部は平らに近い形態をとり、比較的安定感がある。

〔III〕類　56が含まれる。高台はハの字形を呈し、端部全面で接地する。

皿（57）　器壁が全体的に厚く、粗雑なつくりをしている。

D　下層出土須恵器

蓋杯・高杯・甕が出土した。

杯蓋（58～62）〔I〕・〔II〕類がある。

〔I〕類　51～68が含まれる。天井部はヘラ切り後、ナデ調整を施すだけで、雑な感を受ける。

〔II〕類　62が含まれる。天井部中央に宝珠つまみを付す。A類に属す。

杯身（63～67）〔I〕・〔II〕類がある。

〔I〕類　65～67が含まれる。底体部はやや深く丸味をもつ。

〔II〕類　63・64が含まれる。63の底部はやや丸味をもち、64の底部は平らに近い。

高杯（68・69）　高杯の脚部で、68は短脚品である。69はやや長脚のもので2条の沈線を有す。

壺（70）　3条の沈線を有す短頸壺で、体部は丸味を有すが、底部は平底気味である。

甕（71・72）　中形甕の口縁部で、その形態は類似する。

E　灰原一括出土須恵器

蓋杯・蓋・皿・高杯・甕・壺類・鉢・硯が出土した。

杯蓋（72～95）〔I〕～〔III〕類がある。

〔I〕類　85～95が含まれる。天井部外面はヘラ切り未調整が多く、雑なつくりである。

〔II〕類　76・77はA類に、79～83はB類に含まれる。77は中形品で天井部に宝珠つまみを付す。77は天井部に乳頭状のつまみを付す。

〔III〕類　73～75は天井部に擬宝珠様のつまみを付しA類に、72はB類に含まれる。

杯身（96～109）〔I〕～〔III〕類がある。

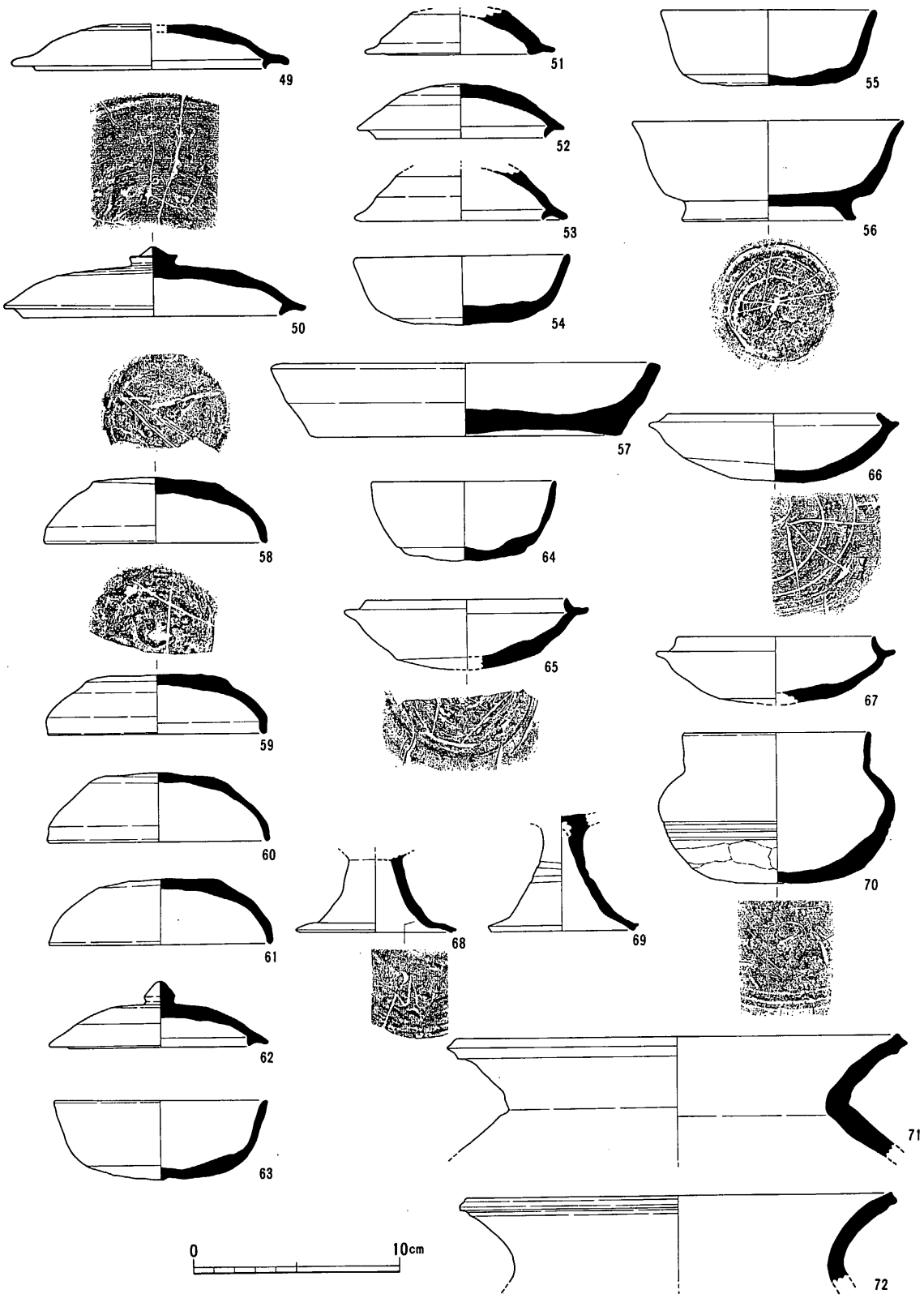
〔I〕類　104～109が含まれる。105・107・108は他と比べて丁寧なつくりである。

〔II〕類　99～103が含まれる。99は中形品で体部に2条の沈線を有す。

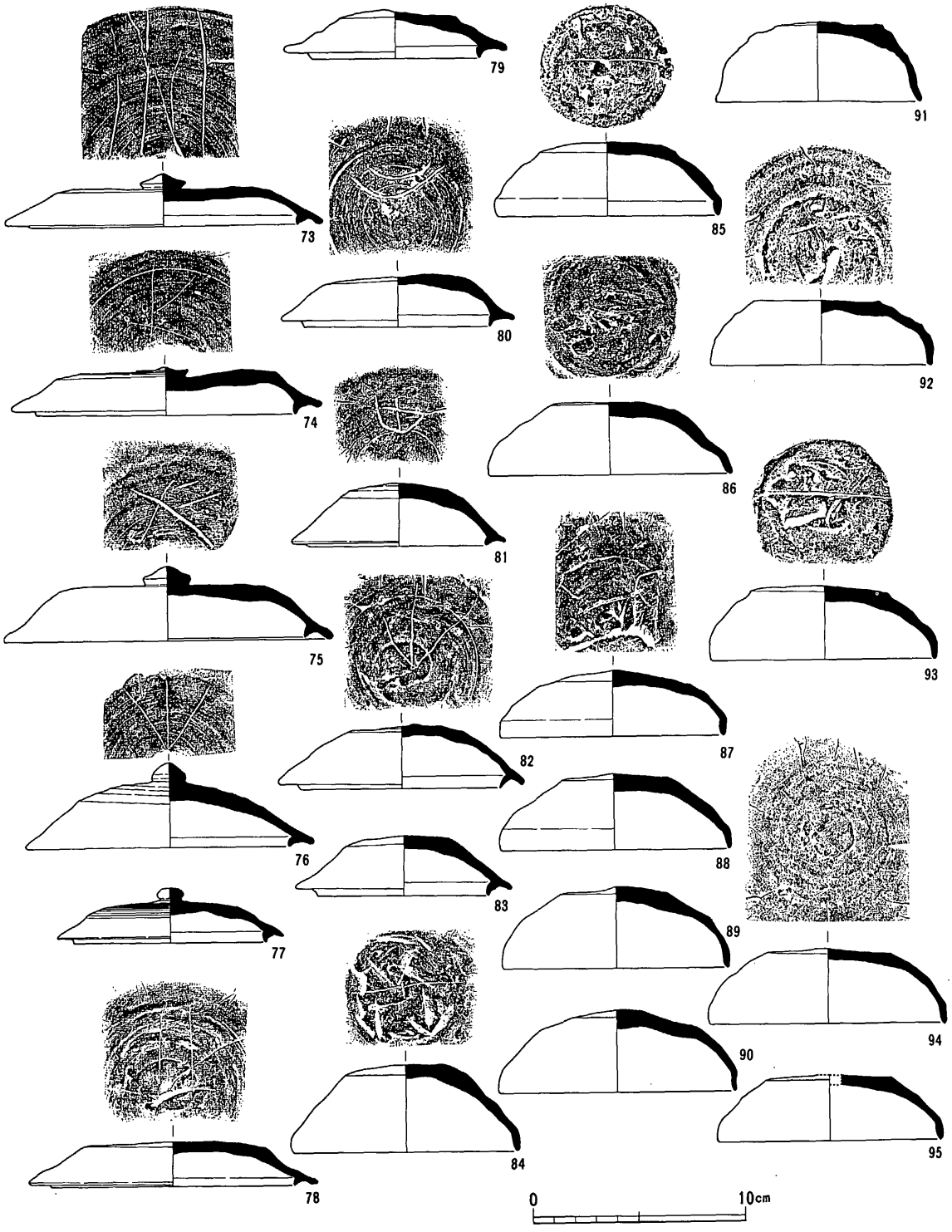
〔III〕類　96～98が含まれる。98は体部下位に回転ヘラ削りが施され、丁寧なつくりである。

蓋（110）　口径26.2cmの大形品で、かえりとつまみをもつ。皿とセットになるものであろう。

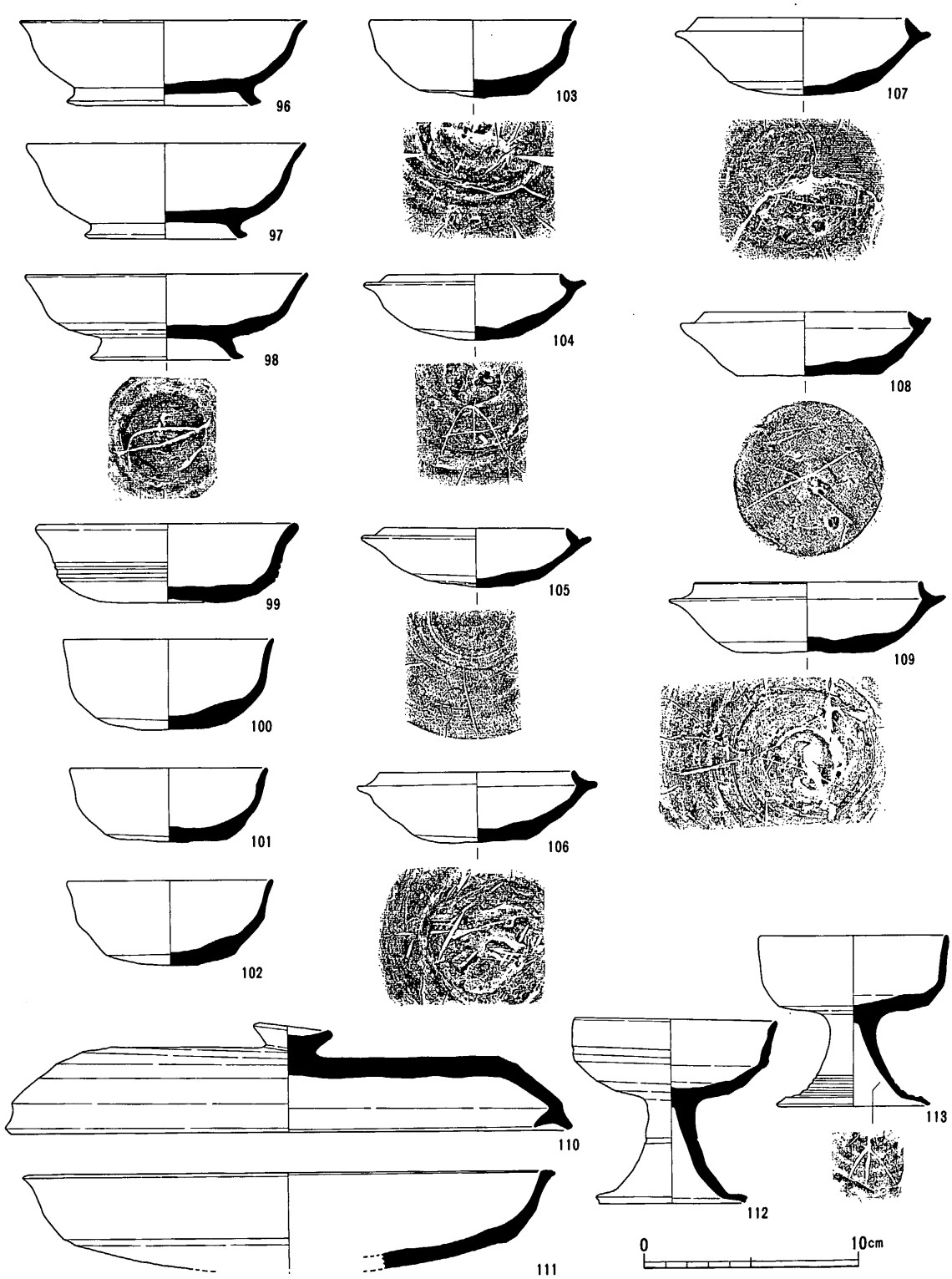
皿（111）　口径24.2cmと大形品である。底部はやや丸味をもつものと思われる。



第24図　4号竈出土須恵器実測図(3)(⅓)



第25図　4号竈出土須恵器実測図(4)(⅓)



第26図　4号竈出土須恵器実測図(5)(⅓)

高杯（112・113） 両者ともやや高めの脚を有する高杯であるが、112は杯部・脚部に各1条の沈線を有す。

甕（114～129） 大形で口縁部が長く外反するもの(114・115）と中形で口縁部がやや短いもの（116～118）がある。114は口縁部中央に1条の波状文と沈線を有している。

壺（119・123・124）119は短く外反する中形壺の口縁部である。123は長頸壺の口頸部で、2条の沈線を有す。124も123と同様の形態を呈すが、平瓶の口縁部とも考えられる。

鉢（120～122） 120はすり鉢の体部で、2条の沈線を有している。121・122はその底部であり、底面には多数の小孔を穿っている。

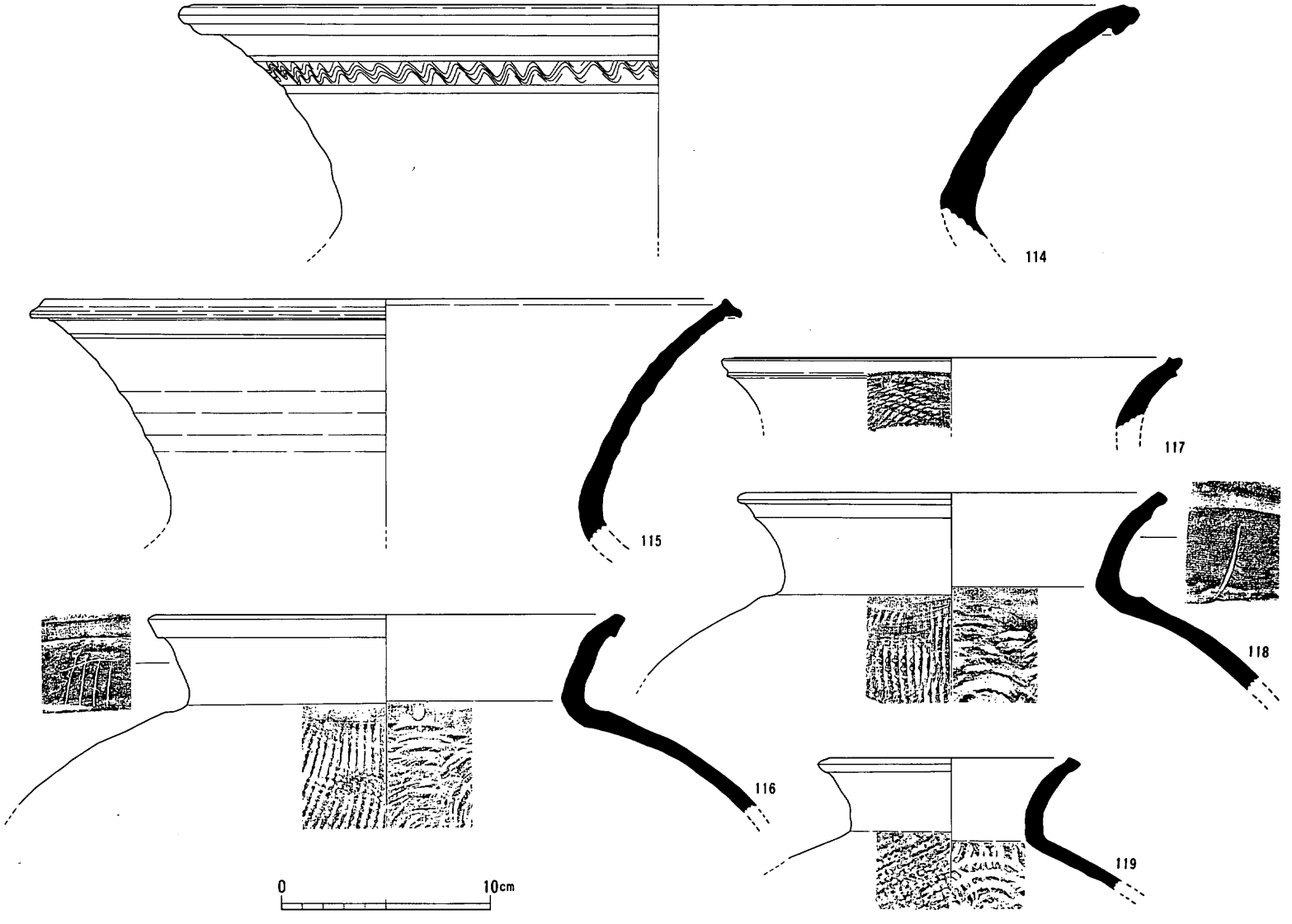
硯（125） 杯形の硯部に、本体東側平坦面出土した亀首形の把手を上下逆向きに挿入したもので、硯自体を逆転させると亀に酷似した形状となる。挿入された亀首にはヘラによって目・鼻・口が象られており、亀首中央に存在する長方形で深さ約1cmの小穴は、硯部内面と小孔によってつながっている。又先端部近くには、紐通しとも考えられる小孔が穿たれている。亀首と硯底部には入念な手持ちヘラ削りが施される。当資料は硯の海・陸部に相当する部分を欠損するが、春日地区第4地点[(1)]から類品が出土していることから、硯であることはほぼ間違いないと思われる。

その他亀首部の出土した窯体東側の平坦面からは、III類に含まれる杯蓋が出土している。(第図15)

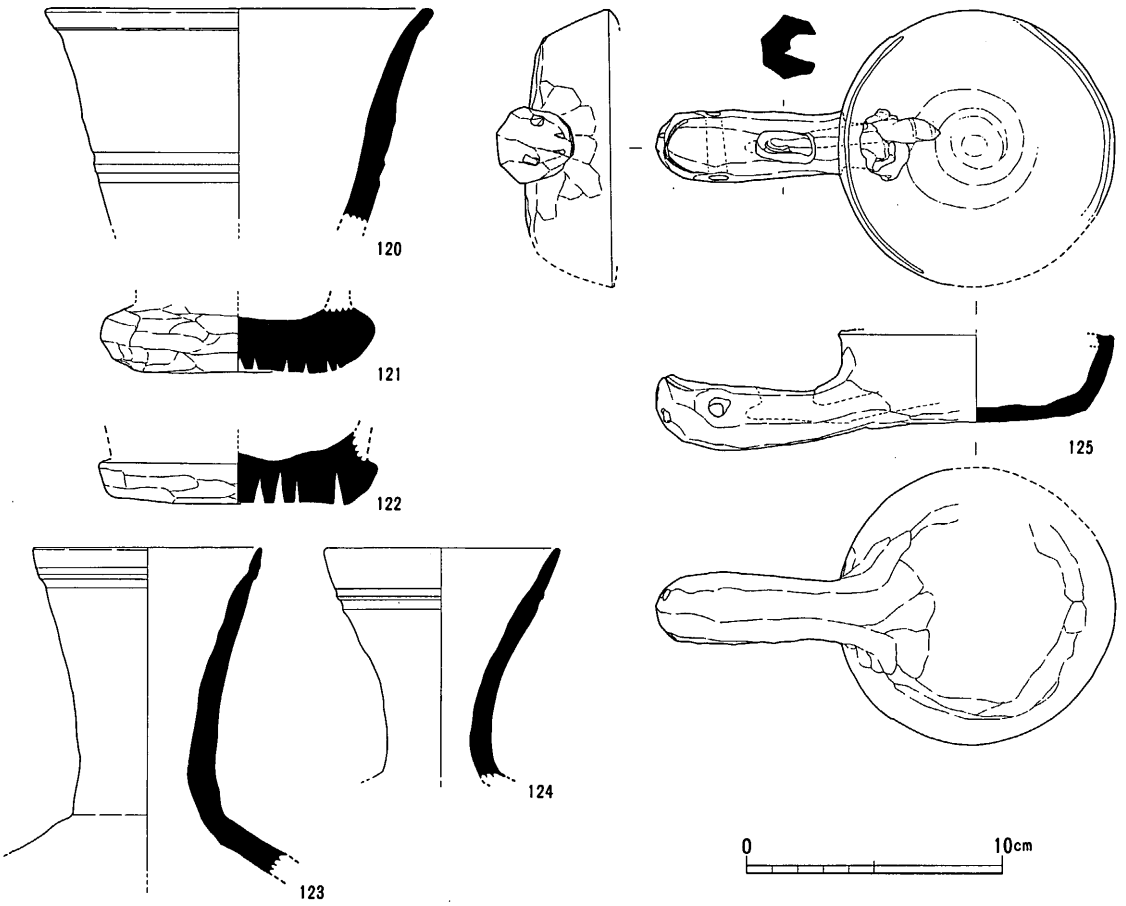
4号窯からは須恵器の他に、平瓦が燃焼部と灰原上層から、丸瓦が灰原上層から出土しているが、瓦類の詳細については9－(3)で述べることにする。

4号窯から出土した須恵器は以上の通りである。その中で数量的に最も多い蓋杯については、先に分類した杯蓋〔Ⅰ〕類と杯身〔Ⅰ〕類、杯蓋〔II〕類と杯身〔II〕類、杯蓋〔III〕類と杯身〔III〕類、杯蓋〔Ⅳ〕類と杯身〔Ⅳ〕類が、それぞれセットになるものと思われる。〔Ⅰ〕類は灰原下層のみの出土で、4号窯の操業開始期を示すものと考えられる。〔II〕類は灰原下層と灰原上層から出土しており、〔Ⅰ〕類よりやや新しい様相を示している。しかし灰原下層での出土状況から見て、〔Ⅰ〕類と同時に生産された時期も存在したと思われる。〔III〕類は窯内床面下層、窯内床面上層、灰原上層から出土している。窯内床面下層は他類の蓋杯が存在しないことから、〔III〕類のみを生産した時期と思われる。〔Ⅳ〕類は資料的に少ないが、窯内床面上層から杯蓋〔III〕類を伴って出土しており、4号窯の閉窯期を示すものと考えられる。これらの出土位置から、蓋杯の総体的な変化をとらえることはできるが、当窯においてはこれ以上の細分は不可能であった。

本窯出土の硯については、亀の形を模すという特異な形態を呈しており、亀形硯とも言うべきものである。時期は本体東側の平坦面から出土した亀首、灰原から出土した硯部ともに杯蓋〔III〕類を伴っているところから、7世紀後半代におくことができる。



第27図　4号窯出土須恵器実測図(6)(⅓)



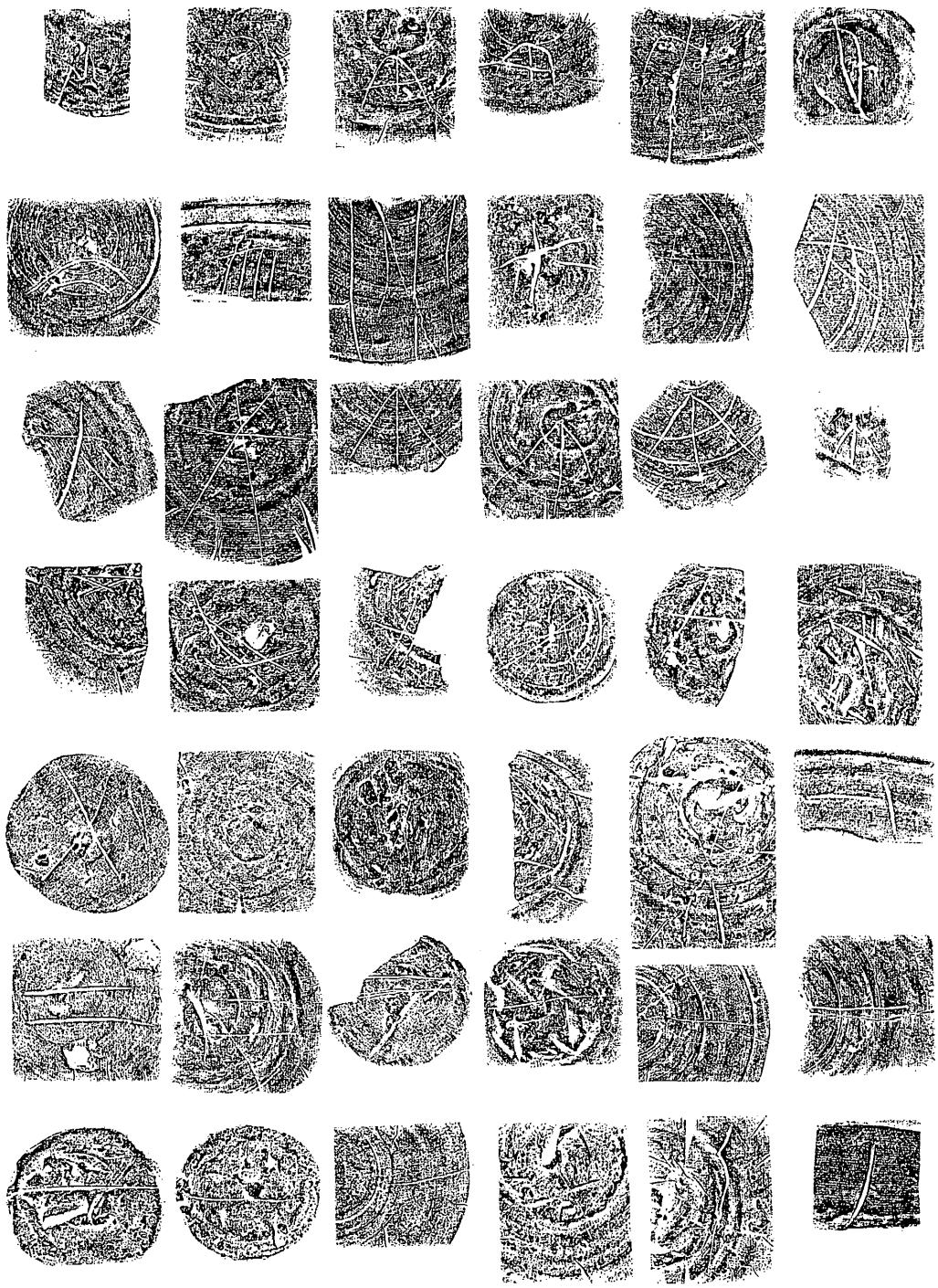
第28図　4号窯出土須恵器実測図(7)(⅓)

また本窯の燃焼部と灰原上層から、瓦が数点出土しており、4号窯操業期間の後半代において、瓦陶兼業の生産が行われていた可能性が強い。

註(1)　1980年、春日市教育委員会が調査を行なった。現在整理中である。



4号窯跡調査風景



第29図　4号窯出土須恵器ヘラ記号拓影(⅓)

5．5号窯跡

(1) 遺　構（図版4、第30図）

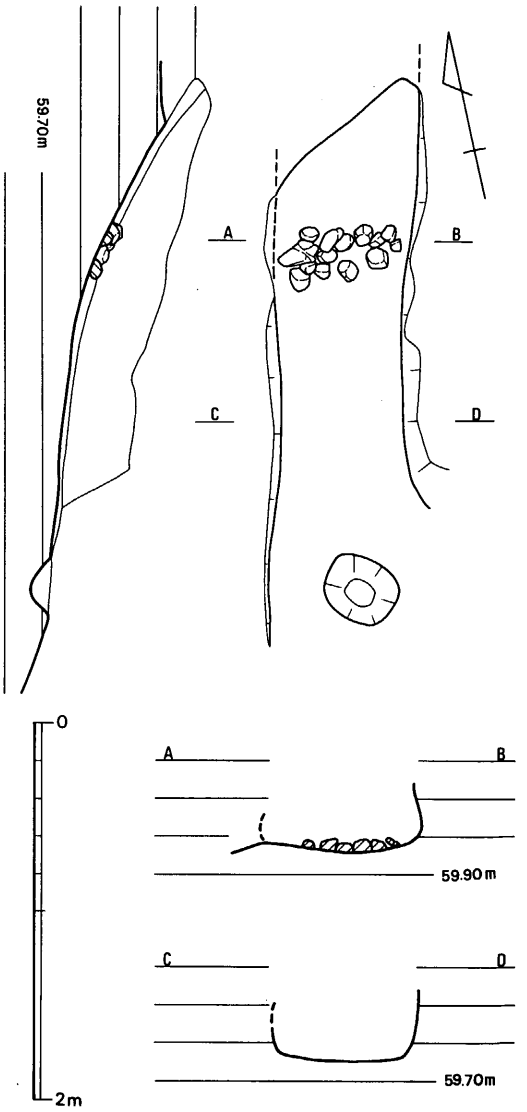
窯体の全長は現存2.3mで、焼成部における床面の深さは現地表から約0.8mを測り、花崗岩バイラン土を刳り抜いて構築した地下式無階無段登窯である。窯体の西側を溝が走り、これによって窯体西側、煙出し部及び天井部が削平・流失し、わずかに残存している状態である。

焚き口　前庭部に径0.35mと1.1×1.4mの大小2個の凹穴があり、小凹穴より0.35mの地点が焚き口と考えられる。床面幅0.7mを測る。

燃焼部　焚き口より傾斜変換部までの0.85mが燃焼部にあたり、約5度の傾斜をもつ。床幅は0.65mを測り、壁・床ともかなり焼け締まっている。

焼成部　燃焼部との境から約28度の上り傾斜をもち現存部まで1.35mが遺存している。床幅は燃焼部との境から徐々に広がり、現存する中位では0.7mを測る。傾斜変換部に近いところで土塊の置台が出土したが、中には上部より転落したものもみられる。煙出し部は不明であるが本来窯体は全長3m前後と推定される。

灰原　窯の規模に比べ灰原は大きい。主軸延長上で焚き口から約9mまで広がるが、灰原部分は西側が入り込む地形のため主軸線より西側に広がりをみせる。また東側は2号窯灰原と重複している。この灰原は、8号窯跡を完全に覆って形成されている。

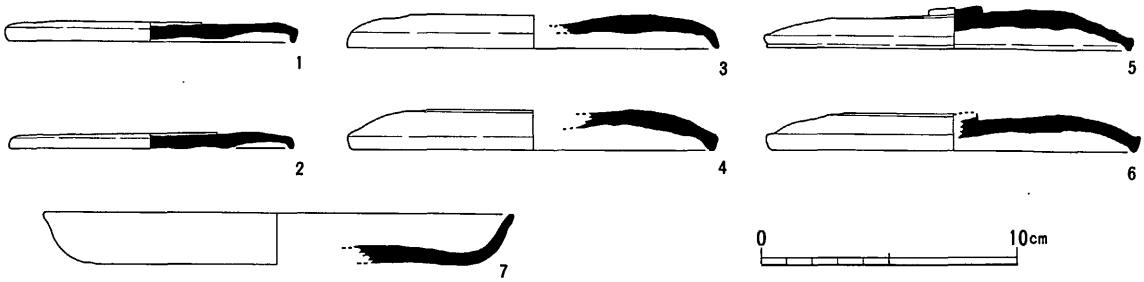


第30図　5号窯跡実測図(1/40)

(2) 出土遺物（図版20、第31図）

杯蓋・皿が出土している。このうち本体から出土したものは1・2・7であり、他は灰原から出土したものである。5号窯は2号窯と近接しており、その灰原においては2号窯との分離が難しく、明確に5号窯

に伴うと思われるものはこの７点である。



第31図　５号窯出土須恵器実測図(⅓)

杯蓋（１～６）　小型のもの(１・２）と大型のもの（３～６）に分類される。小型のものは大型のものと比べて器形が扁平でありつまみを有さず、大型のものとは形態を異にする。２は完形の資料である。大型のものにおいては、口縁部が外傾し長いもの（３）と、内傾し肥厚するもの（４～６）がある。３・４は破片資料であるが、つまみは本来ついていたものと思われる。５は完形品。

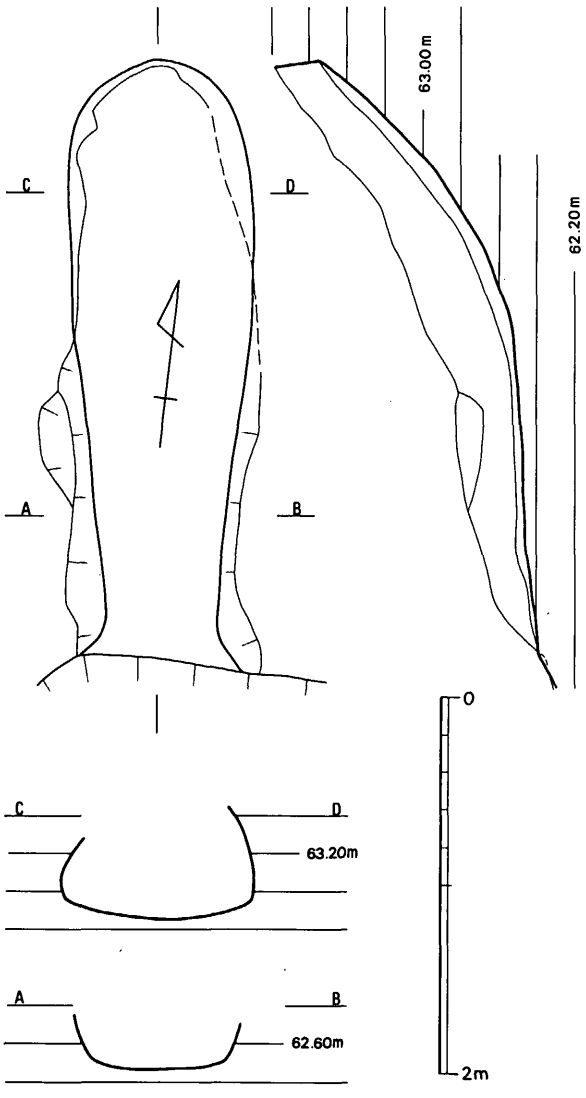
皿（７）　破片資料である。口縁部が短く上外方にのびるものである。

６．６号窯跡

(1)　遺　構

（図版４、第32図）

１号窯跡と２号窯跡に挟まれて位置する。窯体の全長は3.15ｍで１・２号窯同様花崗岩バイラン土を刳り抜いて構築した地下式無階無段登窯である。窯体主軸の方向はＮ6.5°Ｗ



第32図　６号窯跡実測図(1/40)

をとる。床面は焚き口部で最もせまく、焼成部中位にかけて徐々に広がり奥壁に近い所で急にすぼまる。焼成部の右壁は1号窯跡の左壁と近接しており5㎝前後しか間隔のない箇所もみうけられる。

他の窯に比べて、焚き口から傾斜変換部までの距離が長く、燃焼部と焼成部の長さがほぼ等しい。検出状態から天井部は構築時から時間を隔てないで崩壊したものと思われる。前庭部に凹穴も有さず灰原も認められない。焚き口付近の土層をみれば、埋没までに時間的なものが認められるが、これは構築したものの使用せず放置した結果であろう。焼土や焼け締まった痕跡は留めていないが、検出時において他の地山より若干固めではあった。

床幅は焚き口で0.6m、燃焼部と焼成部の境で0.95m、焼成部中央で0.97mを測る。

7．7号窯跡

(1) 遺　構（図版5、第33図）

浦ノ原窯跡群の中でも最も小さく、窯体の全長は2.5m、煙道を含めると3.2mを測る。焼成部における床面の深さは現地表から約1mを測り、花崗岩バイラン土を刳り抜いて構築した地下式無階無段登窯である。窯体主軸の方向はN27.5°Wで、丘陵の等高線にほぼ直交する。床面は焚き口から徐々に広がり焼成部中央で0.68mと最も広くなる。天井部はすでに崩壊していた。床上げなどの二次的な痕跡は認められなかった。

焚き口　床幅0.5mを測り灰原方向へわずかに開く。前庭部には径約1mの凹穴がある。

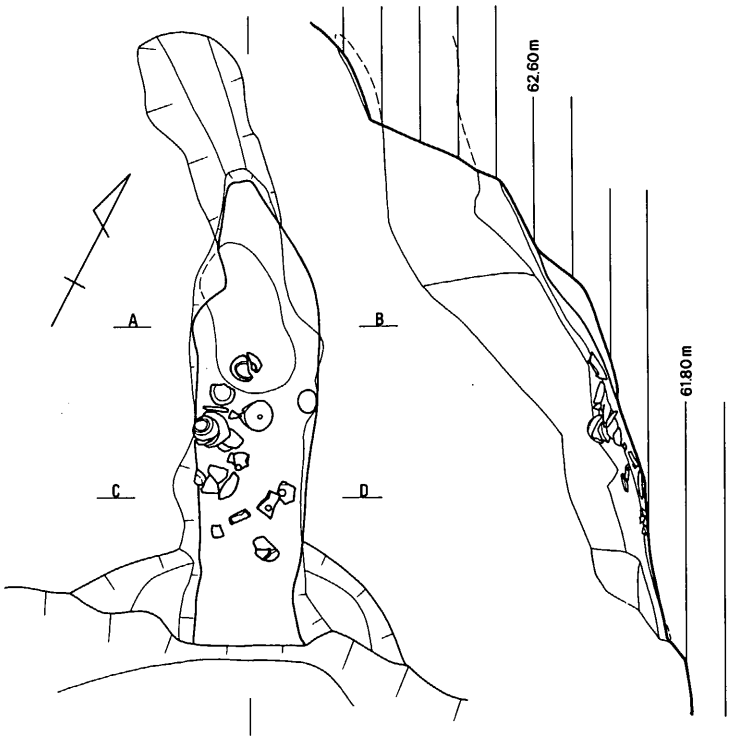
燃焼部　焚き口との境から傾斜変換部までの0.4mが燃焼部にあたり、ほぼ平坦である。床幅は0.55mを測る。

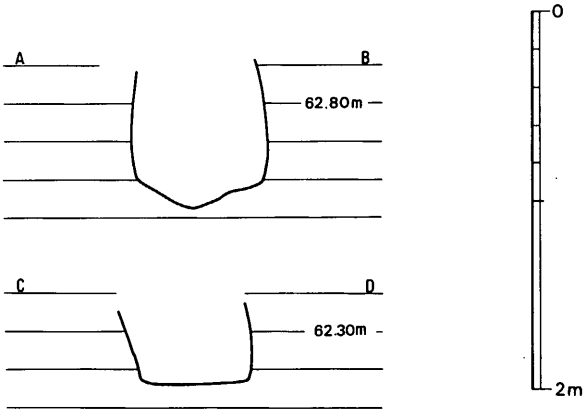
焼成部　燃焼部との境から上り傾斜となり、この傾斜変換部から奥壁まで長さ1.6mを測る。床幅は中央付近で0.68mを測り最も広くなり、奥壁に向って急にせばまる。床面の傾斜は約26度であるが、焼成部中央に楕円形の窪みがあり、部分的に16度前後のゆるい傾斜となっている。天井部は遺存しないが中央部付近で約1mと推定される。最終床面からかなりの土器が出土しているが、燃焼部にずり落ちているものもある。床上げの痕跡が認められ、少なくとも2回以上の使用が考えられる。

煙出し部　奥壁は12㎝で立ち上り、煙道へ続く。煙道はわずかに傾斜をもち0.7mほどで垂直に立ち上る。煙道は窯体主軸より西へ22度中軸線がふれている。

灰原　窯体は一群の中で最小であり、灰原の規模も1号窯・2号窯に比べるとかなり小さいようである。前庭部には凹穴があり、灰原には方形土壙がもうけられている。灰原の土器の量は部分的に多いが、灰・炭は全体的に薄い。主軸延長上は焚き口から3.5mのところで崖面になり、西側は1号窯跡の灰原と重複し規模は明確ではない。

付設遺構　7号窯跡の焚き口から南へ3.5ｍのところに0.55ｍ×0.8ｍの方形土壙が付設されている。地山に0.4ｍ掘り込み、排土は周囲に盛り上げている。7号窯跡に伴うものか、1号窯跡に伴うかは双方のほぼ中間に位置し、灰原の層位でも言明できるものはない。土壙内は特別な様相はみうけられず、周囲の灰原と同様である。





第33図　7号窯跡実測図(1/40)

(2)　出土遺物

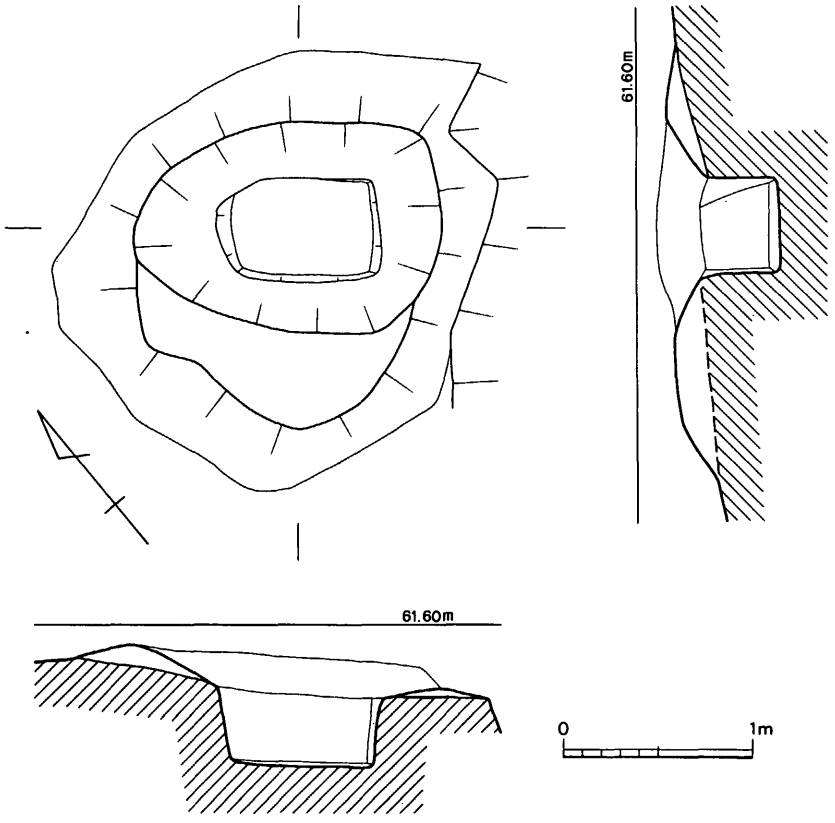
（図版21・22、第35図）

①　窯内出土須恵器

蓋杯が出土している。

杯蓋（1～8）　口径は大小各様のものがあるが13.5～15cmのものが最も多い。つまみは、上面がほぼ平坦で扁平なもの(1・2)と上面中央部がやや凸状を呈するもの(4～6・8)がある。天井部外面ヘラ削り、つまみ貼付の際に回転ナデ、内面はナデ調整、他は回転ナデ調整によっている。口縁部は1を除いた他は、垂直に鋭く屈曲する。

杯身（18～25）　高台をもつもの（〔Ⅰ〕類　18～23）ともたないもの（〔Ⅱ〕類　24・25）に



第34図　7号窯跡灰原出土方形土壙実測図(1/40)

分けられる。高台は短く、心もち外方へ開き外端部が僅かに膨らむ特徴を指摘できる。体部は上外方へ直線状にのびるか、口縁付近でやや外反する。〔Ⅰ〕類と〔II〕類とは高台の有無を除けば、形態・手法上の差異は見出せない。口径は11.6～13.9cmである。

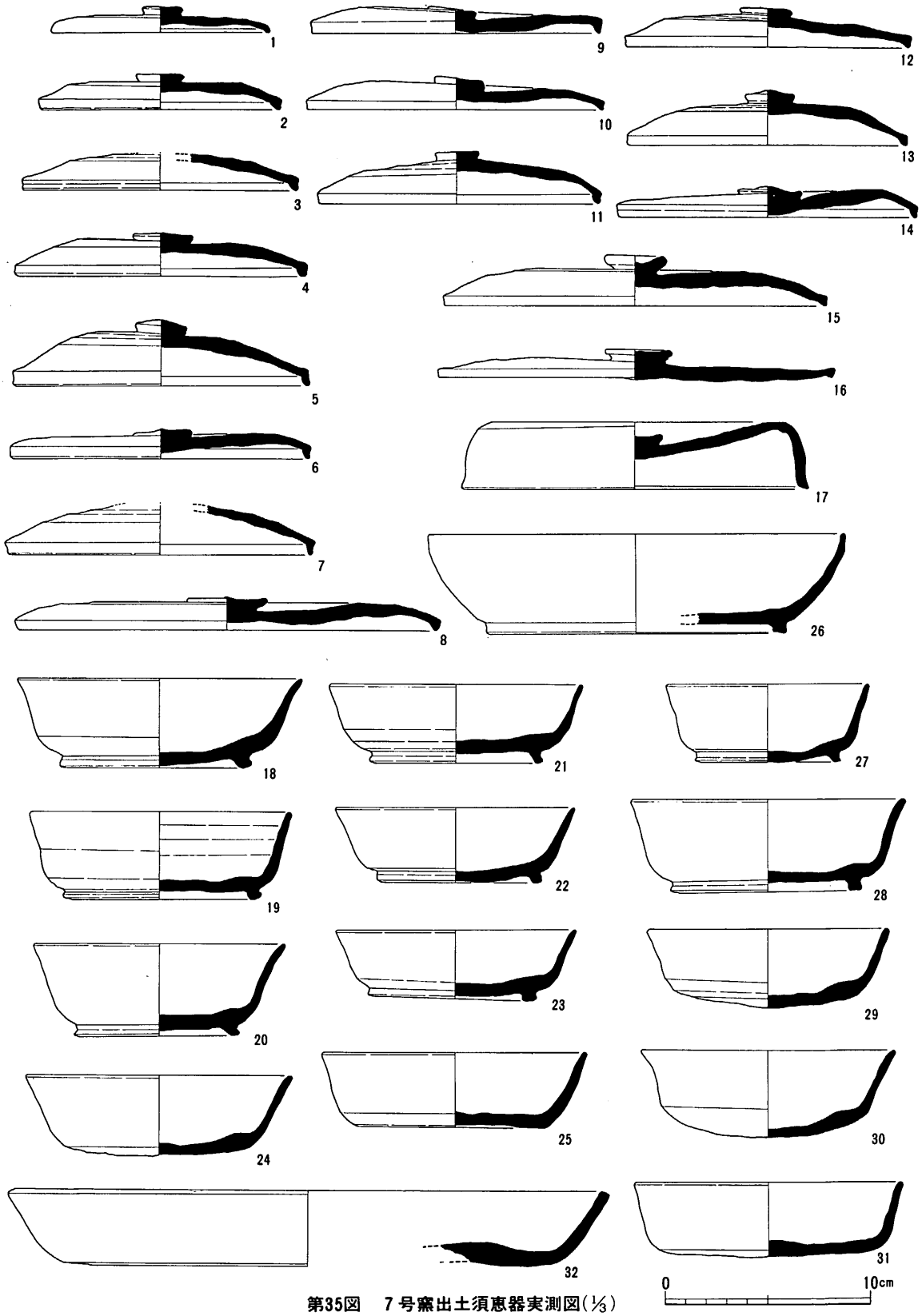
②　灰原出土須恵器

蓋杯・蓋・皿が出土している。

杯蓋（9～16）　つまみ上面が平面をなし扁平なもの（9～12）と、中央部が凸状で擬宝珠様にちかいもの（13～16）とがあるが、天井部、口縁部の形態、整形の手法は同一である。口径は9～14が約13.5～14.5cmとほぼ同大で、15・16は18.5cmを越える大形である。

杯身（26～31）　高台をもつもの（〔Ⅰ〕類　26～28）ともたないもの（〔II〕類　29～31）に分類できる。26は大形品で口径20.3cmを測る。27は高台がやや開き口径9.7cmと小形である。29・30は底部がやや丸味をもち、31は平坦に仕上げられている。

蓋（17）　壺類の蓋と思われる。上面中央部が僅かに突出する扁平なつまみをもち天井部から体部にかけてヘラ削りを施している。口縁端部は平面をなす。



第35図　7号窯出土須恵器実測図(⅓)

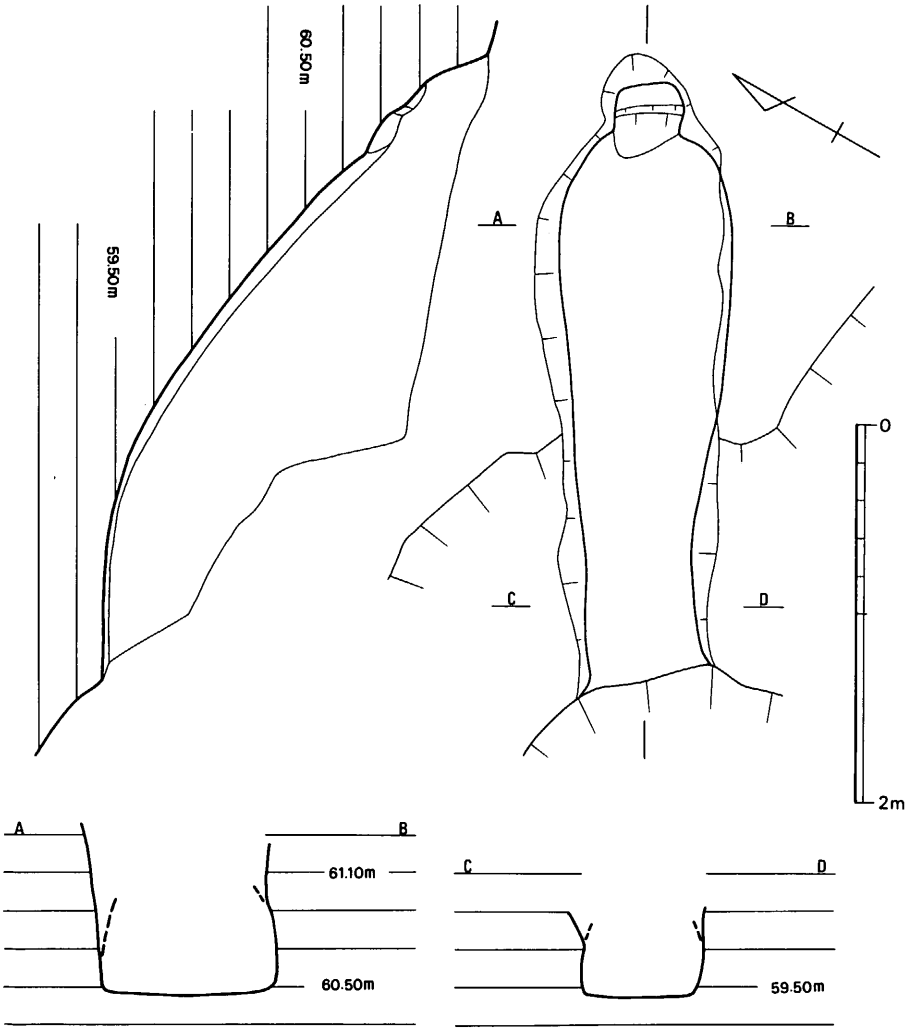
皿（32） 体部から口縁部へは、ほぼ直線状に上外方へのび、口縁端部は平面をなす。

出土遺物は窯内・灰原とも蓋杯が主体的で、他の器種は極めて少ない。また、窯内と灰原出土の須恵器は形態及び手法上の特徴等に変化が見受けられないことからも、当窯の操業が極めて短期間のものであったことが想定されよう。

8．8号窯跡

(1) 遺　構（図版5、第36図）

5号窯跡の灰原の下より検出された。窯体の全長は3.1mで、焼成部における床面までの深さ



第36図　8号窯跡実測図（1/40）

は、約2ｍを測り、花崗岩バイラン土を刳り抜いて構築した地下式無階無段登窯である。窯体主軸の方向はN60.5°Eで、丘陵の等高線に若干斜交する。床面は焚き口から若干せばまり、傾斜変換部から徐々に広がる。焼成部上部で最大幅をもつ。天井部はすでに崩壊しており、窯体内上層は5号窯跡の灰原が入り込んでいる。

焚き口　床幅は0.6ｍを測り、灰原方向へわずかに開く。前庭部は大きく削り出されており、急傾斜で灰原へ続く。

燃焼部　焚き口から傾斜変換部までの約0.8ｍがこれにあたる。床はほぼ水平で、焚き口より徐々にせばまり傾斜変換部で最小幅となる。

焼成部　燃焼部との境から上り傾斜となり、この傾斜変換部から長さ1.9ｍを測る。床幅は、燃焼部との境から徐々に広がり、奥壁に近い上部で最大幅0.9ｍを測る。床面の傾斜は約38度を示す。壁・床ともかなり焼け締まっているが、焼成部では床上げ、・置台等の痕跡は確認できなかった。

煙出し部　奥壁の中央が窪み、焼成部よりもゆるい傾斜で中間に低い段をもち、さらに立ち上り煙道へ続く。煙道は上部削平のため明らかでないが径0.3ｍの円筒状のものと考えられる。

灰原　調査途中で、5号窯跡の灰原と考えていたところから新たに検出したため、灰原も5号窯のものと考えていた南西部がこの8号窯のものと考えられる。主軸延長上より若干東側に灰原の中心があり、主軸延長上で長さ3ｍ、幅4.5ｍを測る。焚き口の前面には幅1.9ｍで凹みが斜面下方へ開いている。ここでは窯壁片と思われる黄色及び褐色土がブロック状で検出されている。焼成部では確認できなかった床等の貼り替えが、少なくとも1回以上推測される。

(2)　出土遺物（図版23・24、第37・38図）

①　窯内出土須恵器

A．床面出土須恵器（1～6・13～19・25）

蓋杯・高杯が出土している。

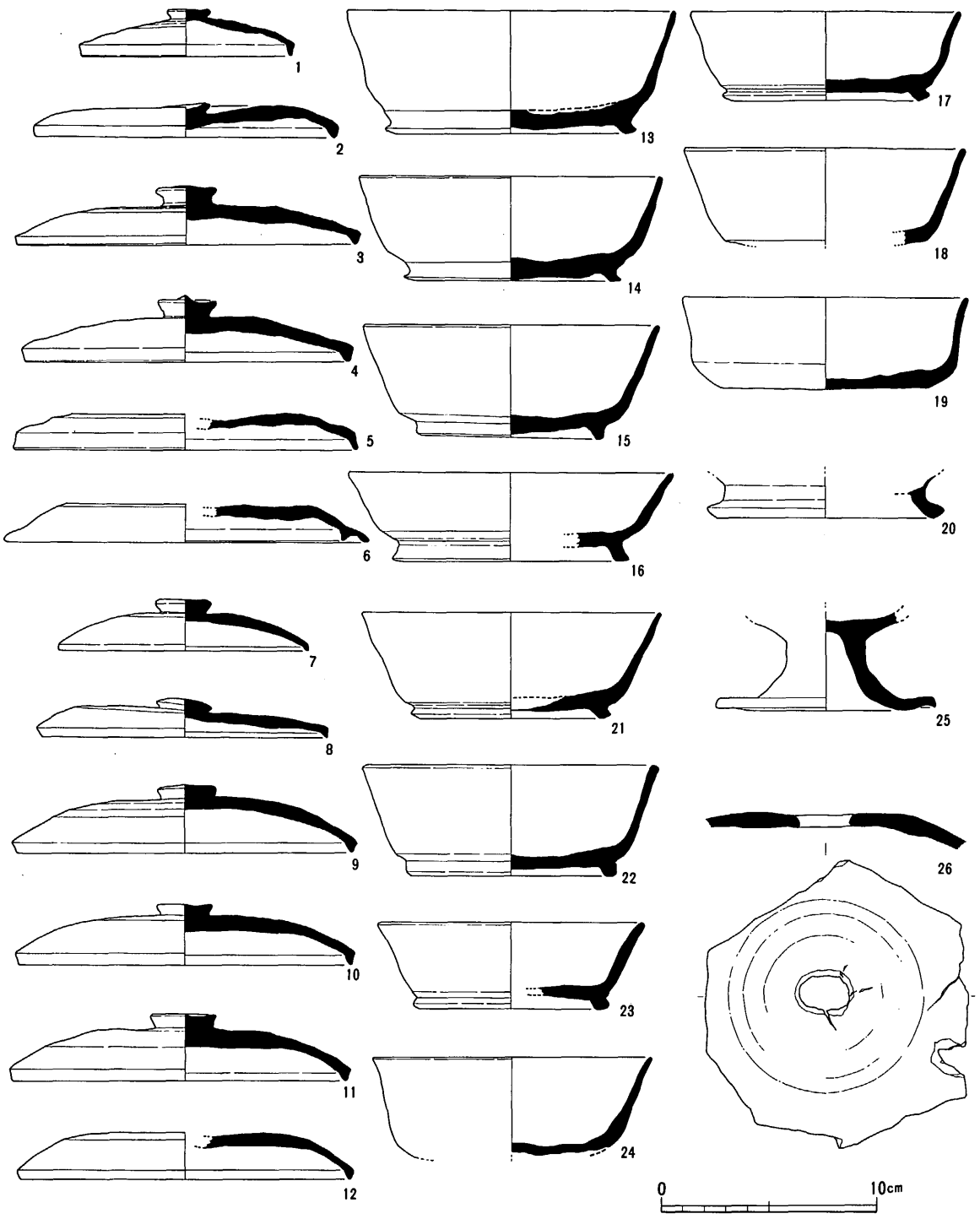
杯蓋（1～6）　かえりを有するもの（〔Ⅰ〕類）とかえりがなく口縁部を下方に折り曲げたもの（〔Ⅱ類〕）に分類できる。

〔Ⅰ〕類（6）　天井中央部を欠損するが、擬宝珠様のつまみが付されていたものと思われる。

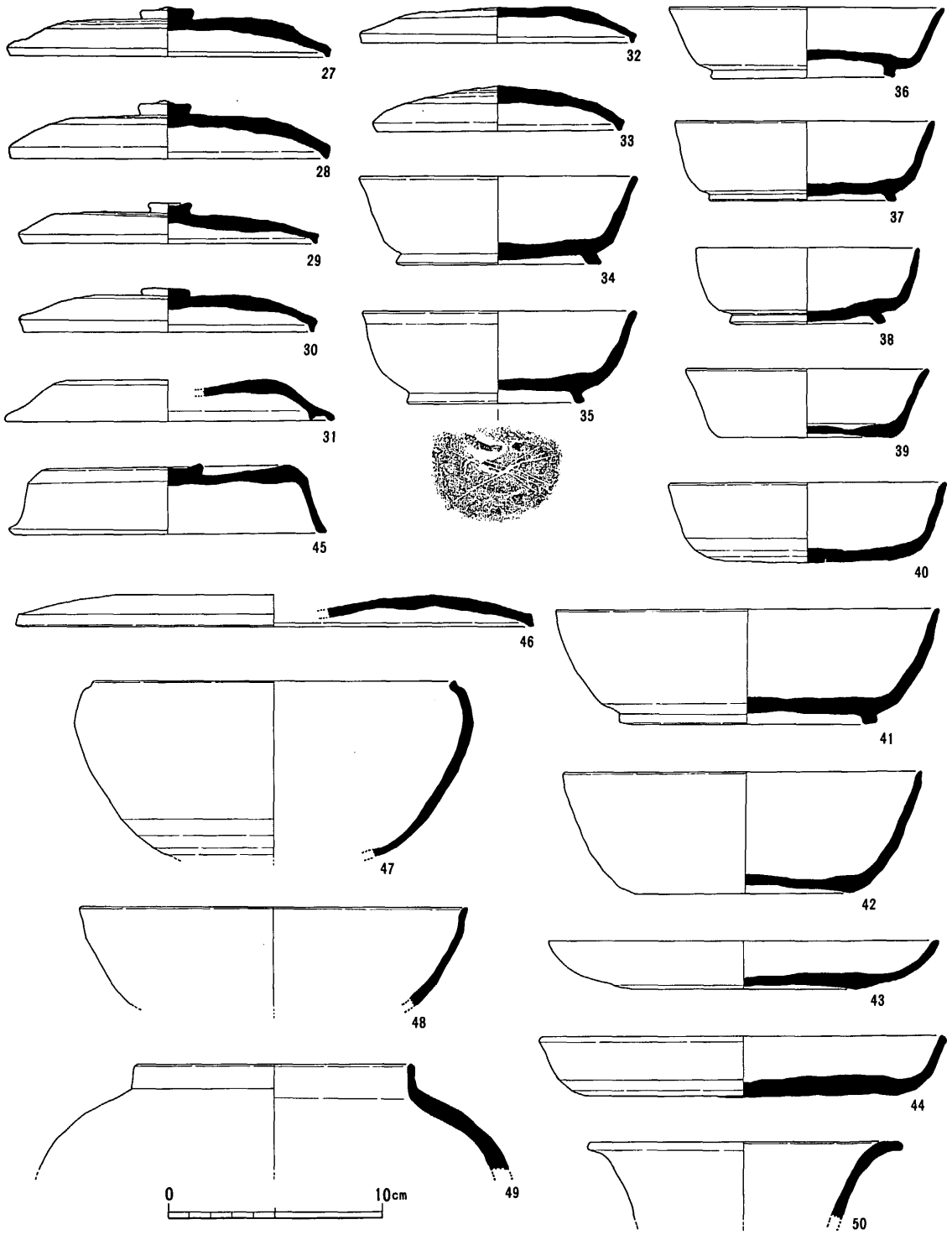
〔Ⅱ〕類（1～5）　口縁屈曲部が断面三角形を呈するもの（2～4）と、やや長く折り曲げたもの（1・5）がある。

杯身（13～19）　高台を付すもの（〔Ⅰ〕類）と、付さないもの（〔Ⅱ〕類）とがある。

〔Ⅰ〕類（13～18）　高台はやや短めであるがハの字形に開き、内端部で接地している。18は底部を欠損するが、高台をもつものと思われる。



第37図　8号竈出土須恵器実測図(1)(⅓)



第38図　8号竈出土須恵器実測図(2)(⅓)

〔II〕類（19） 体部から口縁部へ外彎気味にのび、底部は平たく仕上げられている。

高杯（25） 脚部のみの資料。短脚で裾部は水平にのび、端部は鳥嘴状を呈する。

B．埋土中出土須恵器（7～12・20～24・26）

8号窯は2・5号窯灰原に覆われており、当窯内埋土中出土の遺物は、上方より流れ込んだものが混在するものと思われる。

出土遺物としては蓋杯・焼き台がある。

杯蓋（7～12） つまみは扁平で上面中央部が僅かに凸状を呈し、口縁屈曲部は断面三角形をなしている。7・8は、口径が11.5cm・13.2cmと小ぶりで、9～12は約15.5cmを測る。

杯身（20～24） 20は高台部のみの資料。ハの字状に開き、内端部が接地する。21は床面出土杯身〔I〕類に共通した特徴を示す。22・23は高台が短く、ほぼ垂直に貼付されている。24は本来高台を有するものであろう。

焼き台（25） 杯蓋の天井部中央に焼成後、穿孔しており、焼き台として使用したものと考えられる。

② 灰原出土須恵器

蓋杯・蓋・皿・鉢・壺が出土している。

杯蓋（27～33） 窯内床面出土のものと同様、2類に分けられる。

〔I〕類（31） 内面にかえりを有し、天井部中央を欠損する。

〔II〕類 つまみをもつもの(27～30）と、もたないもの(32・33)がある。27・28のつまみは擬宝珠様を呈し、29・30は扁平な釦状をなす。

杯身（34～42） 窯内床面と同様、高台の有無により大きく2類別できる。

〔I〕類（34～38・41） 高台はやや短く、僅かに外側へ開く。38は最も小ぶりで、杯蓋33等とセットをなすものと思われる。口径12～13cmの類（34～37）が量的に多く、体部はほぼ直線状か、口縁部付近で心もち外反する。41は大ぶりで体部はやや内彎気味に口縁部へと移行する。高台は短くほぼ垂直に貼付されている。

〔II〕類（39・40・42） 39は底部が平らで、40は僅かに丸味をもつ。42は大ぶりで口径16.8cmを測る。

皿（43・44） 43は体部から口縁部へは、僅かに内彎している。44は体部が直線状に上外方へのびる。

蓋（45・46） 45は壺類の蓋と思われる。箱形を呈し、つまみは上面中央が凸状を呈す。46は口径24.3cmを測る大形品で天井部中央を欠く。

鉢（47・48） 47は鉄鉢形をなす。48は肉薄なつくりで下半部を欠損する。

壺（49・50） 49は短頸壺。口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。50は長頸壺の口縁部と思われる。

窯内床面と灰原出土の蓋杯は、ほぼ同様の特徴を示しており、当窯の操業期間が極めて短期

間であったことを示唆している。杯蓋〔Ⅰ〕類と〔Ⅱ〕類は、床面において明らかに共伴しており、〔Ⅰ〕類が普遍化した段階においても依然〔Ⅱ〕類を生産していた事実が窺われる。

また、窯内埋土中及び灰原出土須恵器については、2・5号窯からの新しい時期の遺物が若干混入している可能性があることをつけ加えておきたい。

9．A地区竪穴状遺構

(1) 遺　構（図版9、第39図）

A地区平坦面の北部に位置し、B地区1・2号窯跡群より約35m北方にあたる。東へ傾斜する斜面中位の標高58mと59mの等高線にはさまれた狭隘な平坦面と、西側斜面を掘削し設けられている。平面形態は長方形を呈し、柱穴6個を持つ。西側及び北側に壁を有し、南側も若干残存するが、東壁及び南壁東半分は地形からみて当初より無いものと考えられる。規模は南北5.2mを測り、東西は3.5mと推測される。壁は西側で高さ0.5～0.8mを測り、北側で最高0.8mを測る。北壁沿いの柱穴2個は他の柱穴に比べ検出が困難であった。柱穴は浅いもので0.4m、深いもので0.6mを測り、柱心間は1.6mを測る。上部構造は掘立柱建物といえる。溝や付設遺構は検出されなかった。遺物は北壁から西壁・南壁に沿って平瓦が9枚分以上出土し、須恵器の甕・杯、土師器の甕が出土した。

(2) 出土遺物（図版25－1・27～30、第40～45図）

須恵器の蓋杯・高杯・甕と、土師器の甕及び瓦が出土した。

① 須恵器

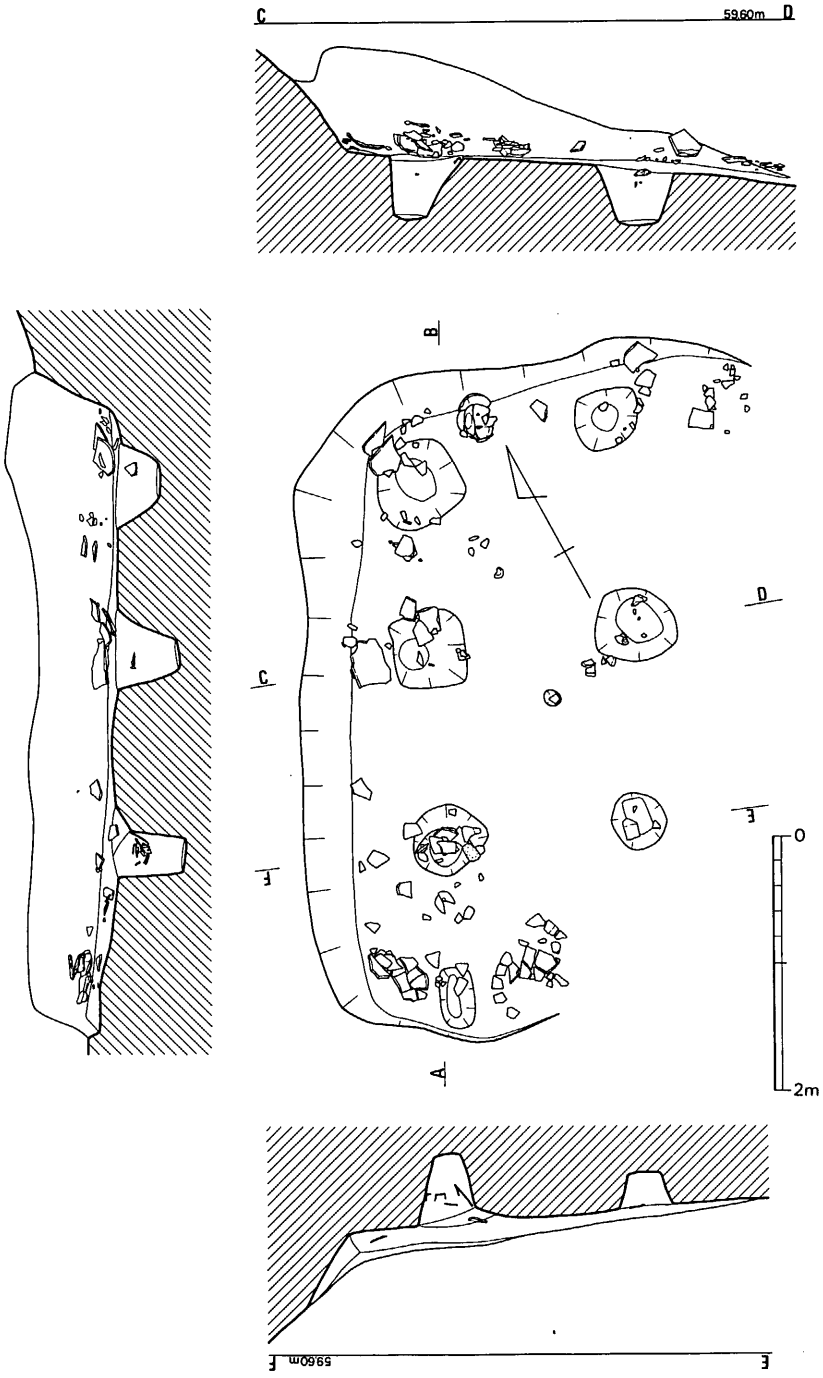
杯蓋（1・2・7）　いずれも床面近くで出土したものである。1は天井部が高く丸味をもつもの。2は宝珠つまみを付すもので、口縁部内面にかえりを有する蓋であろう。7はかえりをもたない蓋であり、天井部には擬宝珠様のつまみをもつ。

杯身（3～5）　3・4はピット2内から出土したもので、短い立ち上がりを有する杯身である。5も同様、短い立ち上がりを有するものだが、底体部外面に一定方向の静止ヘラ削りを施している。

高杯（6・8・9）　6・8は埋土中から、9は床面から出土した。6は体部に2条の沈線を有する高杯の杯部である。8は高杯の脚下半部だが、その形態からやや長脚のものとなるであろう。9は大形のもので、脚部はどのような形態を示すかは不明である。

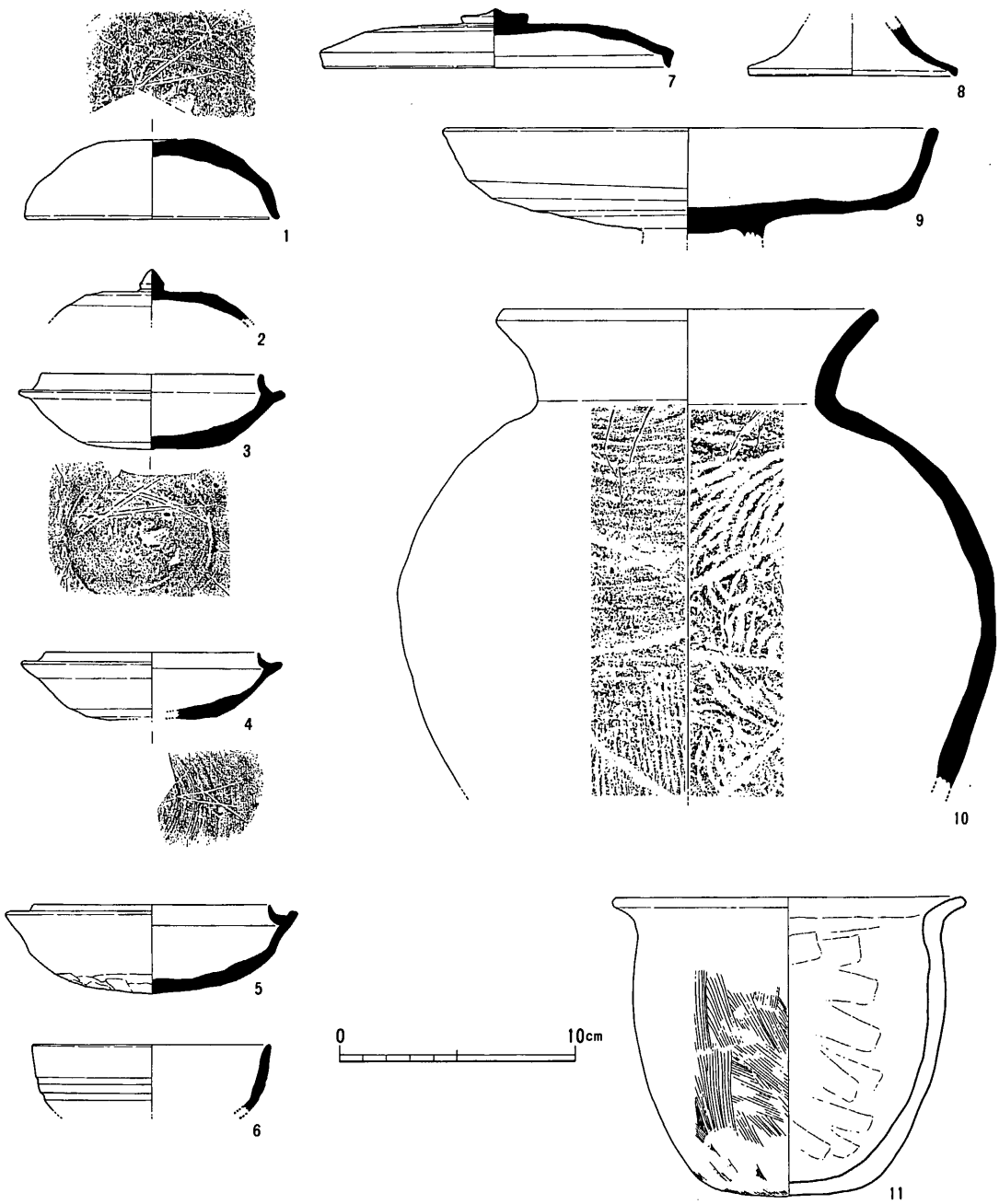
甕（10）　床面直上から出土しており、体部は丸味をもつものである。

本遺構出土の須恵器の中で、1・3・4は4号窯出土土器と同じヘラ記号が記されており、



第39図　A地区竪穴状遺構実測図(1/60)

また形態的にも類似するところから、4号窯で生産されたものと考えられる。2・5・6もその形態からみて、4号窯で生産されたものであろう。7は口縁部の特徴やつまみの形態からみて、3号窯にその類品を求めることができる。



第40図　A地区竪穴状遺構出土土器実測図(⅓)

② 土師器

甕（11） 小形の甕で、外面は比較的細いハケ調整を施し、内面にはヘラ削りを行っている。

③ 瓦 類

瓦は、当該遺構出土の平瓦の他に、4号窯及びその周辺で丸瓦・平瓦が若干出土している。

平瓦 竪穴状遺構出土の平瓦はかなりあるが、完形及び計測可能な資料は次の9点である。これらはすべて桶巻きづくりと考えられるが、成形及び調整の過程で大きく3類に分けられる。

〔Ⅰ〕 第1成形が粘土紐の巻きつけで、凹面に同心円紋圧痕の残るもの。

〔Ⅱ〕 第1成形が粘土紐の巻きつけと考えられ、凹面がナデ仕上げによるもの。

〔Ⅲ〕 第1成形が粘土板の巻きつけによるもの。

ⅠとⅡは第1成形段階は同じであるが、Ⅰは凹面に同心円紋圧痕を残し、またⅡは粘土紐の痕跡が明瞭でないことと、仕上げの段階で凹面にナデによる調整が施されている点で類別した。

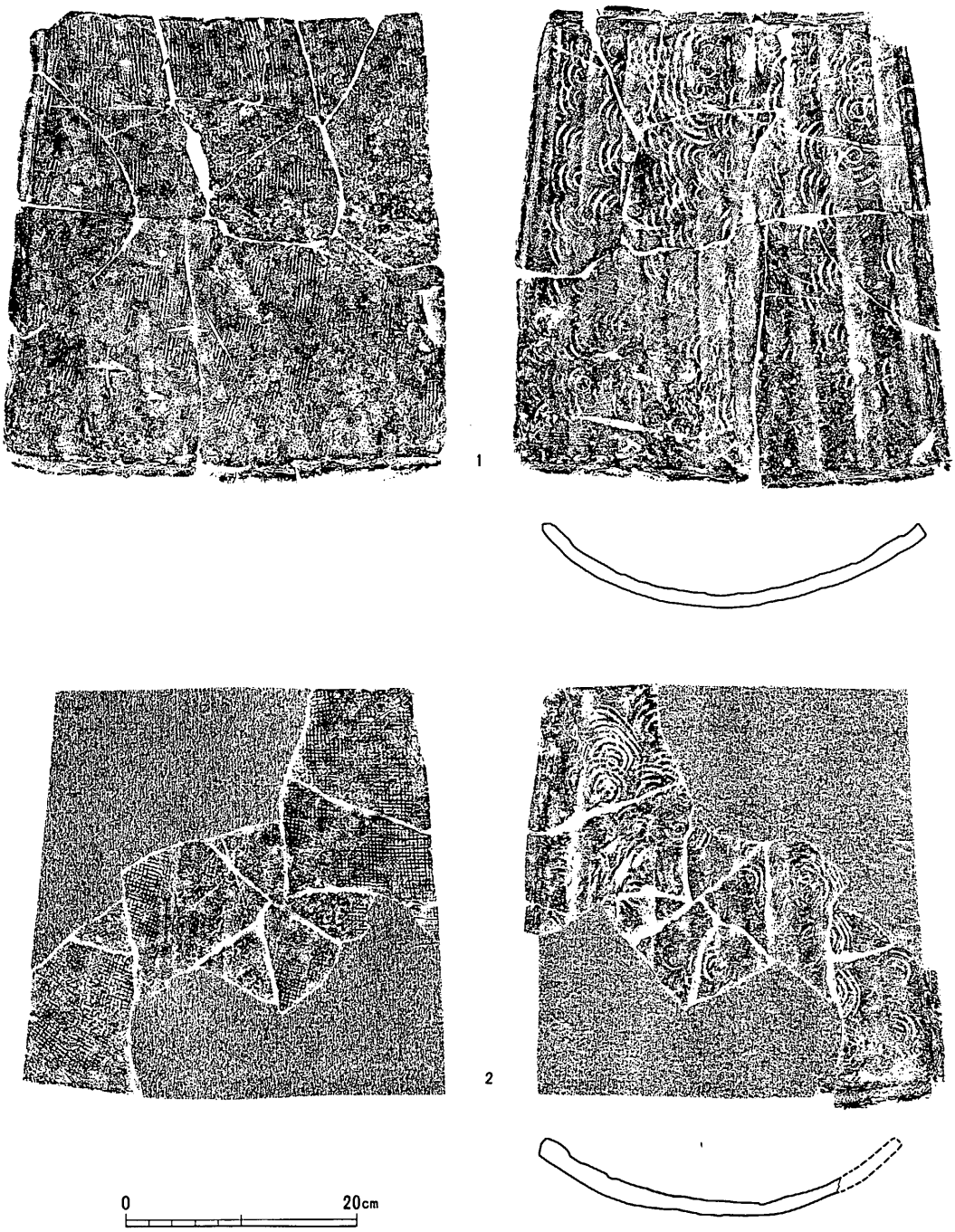
この3類はさらに第2成形段階で、（a）木目直交平行直線叩き目を有するもの、（b）木目平行直交格子叩き目を有するもの、に分けることができる。

上記の資料9点はそれぞれ、Ⅰa類——1、Ⅰb類——2・3、Ⅱa類——5・6、Ⅱb類——4、Ⅲa類——8・9、Ⅲb類——7に相当する。

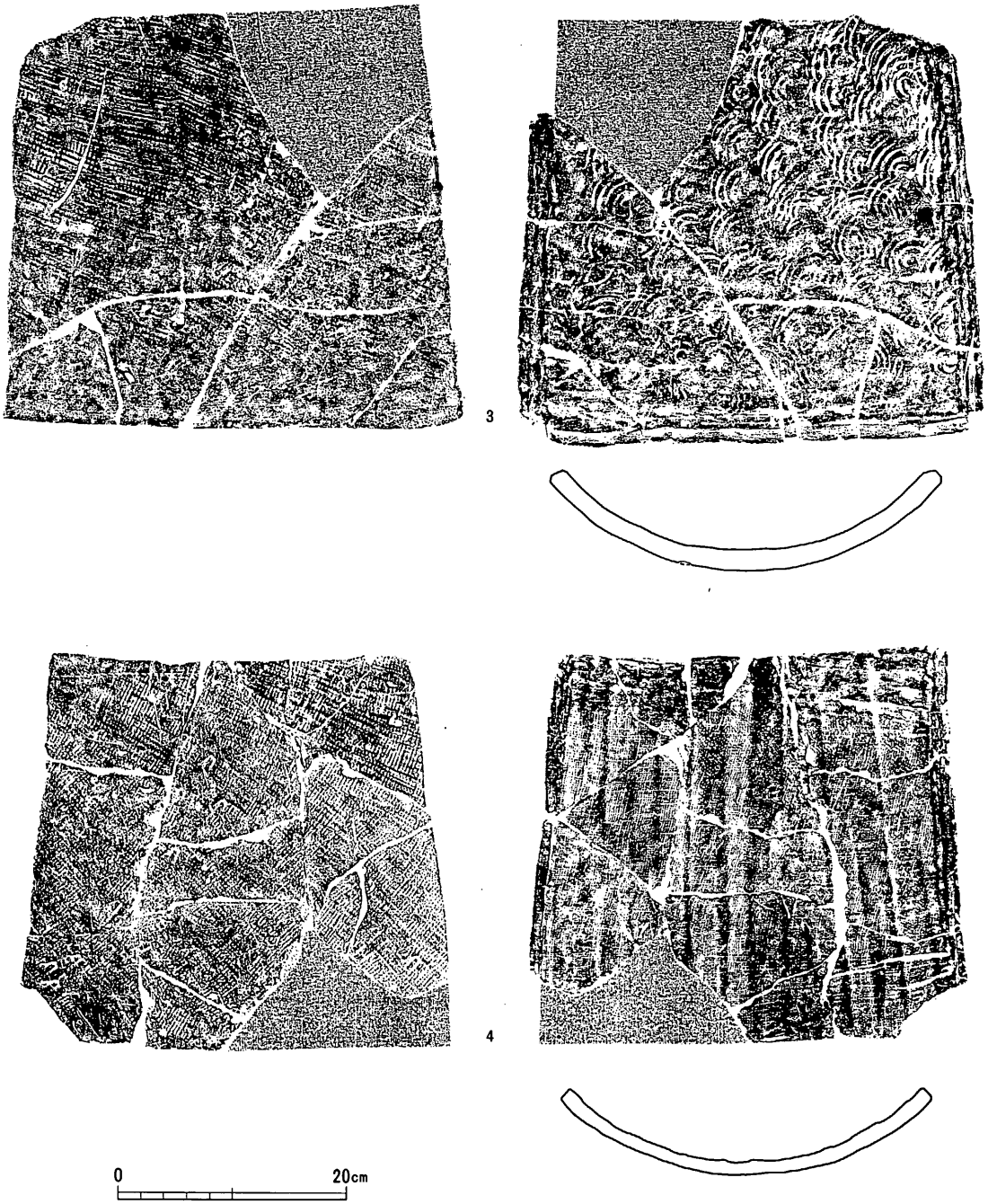
1は、分割しているが完形である。全長39.5cm、広端部幅34cm、狭端部幅29.5cm、厚さは1.0～1.4cmを測る。模骨14.5枚が認められ、模骨の幅は広端部で2.0～2.7cm、狭端部では1.9～2.4cmと広端部に比べてややせまい。布の圧痕は狭端部の端縁から2～7cm幅を除き全面にみられる。布は、截頭円錐形の桶に帯状の布を右回りに巻きつけており、交差する重ね部分が認められる。粘土紐は幅5cm前後の帯状のものを左回りに巻き上げ、叩き締めの順序は判然としないが、叩き締めの円弧は、広端部で左下から右上へ傾斜し、狭端部で端縁直交に近くなる。補足の叩き締め等は認められないが、凹面のほぼ全面に同心円紋を残す。側面と凹凸両側縁の3ヶ所（面）に広端側から狭端側方向の削り調整がみられる。

2は、復原すれば全長36cm、広端部幅34cm、狭端部幅28cmとなり、厚さは1.4cm、部分的に2.0cmを測る。模骨は3枚のみ明瞭な痕跡をとどめ、14枚前後が考えられる。模骨の痕跡は広端部で2.1cm、狭端部で1.6cm幅を測る。布の痕跡は僅かに認められる。粘土紐は6cm前後の帯状で、右巻き上げの可能性もある。叩き締めは1と同様な円弧がみられる。凹面には同心円紋を残し、凸面は指腹及びヘラ状工具によるタテ方向のナデ調整が部分的にみられる。側面は2面からなる削り調整が広端側から狭端側にかけて施されている。

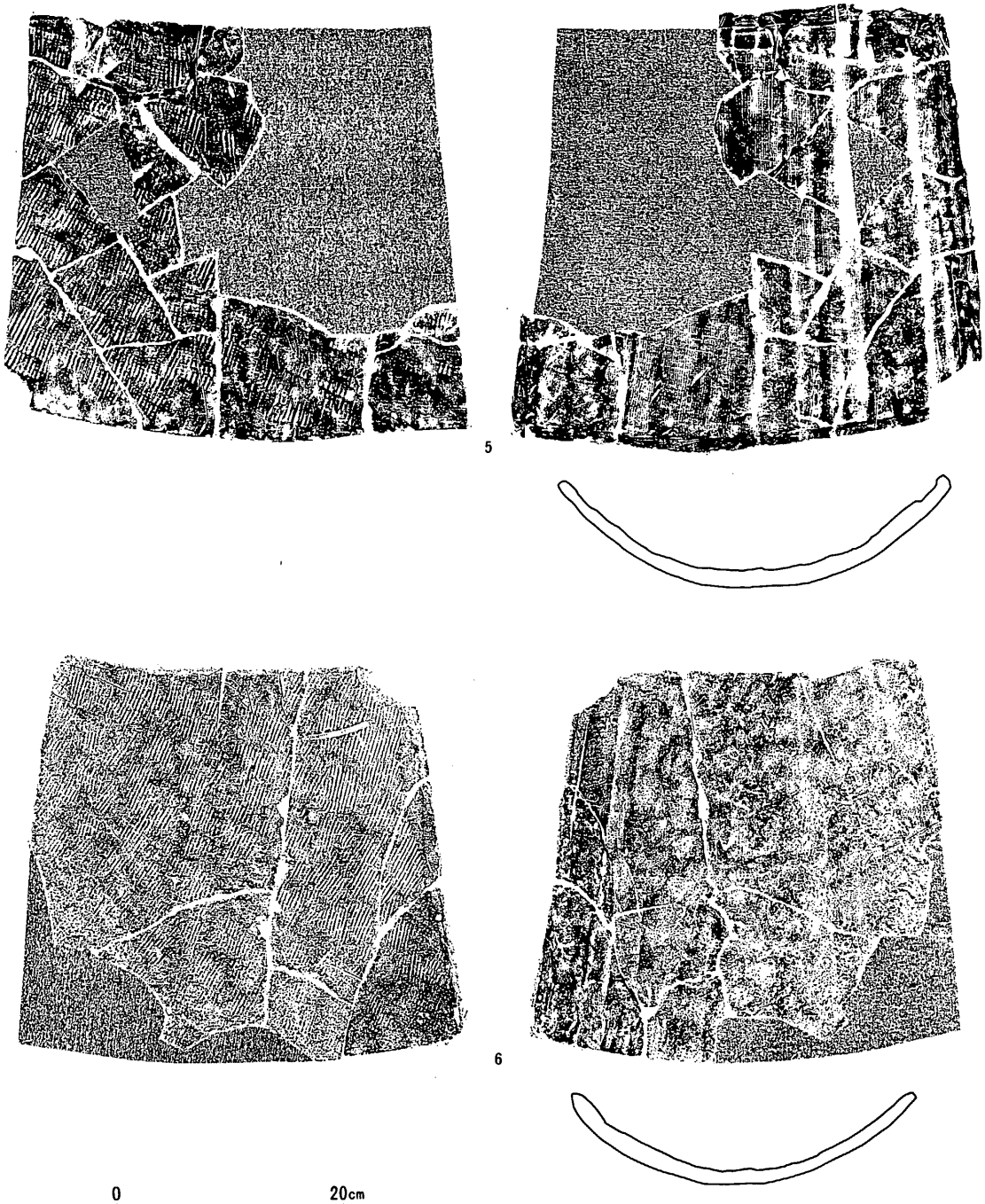
3は、全長36.5cm、広端部幅35cm、狭端部幅推定31cm、厚さ1.6～1.8cmを測る。模骨及び布の痕跡は全く認められないが、接合の痕跡から幅4cm前後の粘土紐の左巻き上げによる第1成形が想定される。叩き締めは、広端側から狭端側へ叩き上げて、これをくり返しながら右回りに一周すると判断される。叩き締めの円弧は他の平瓦と同様である。広端部の端縁から3～7



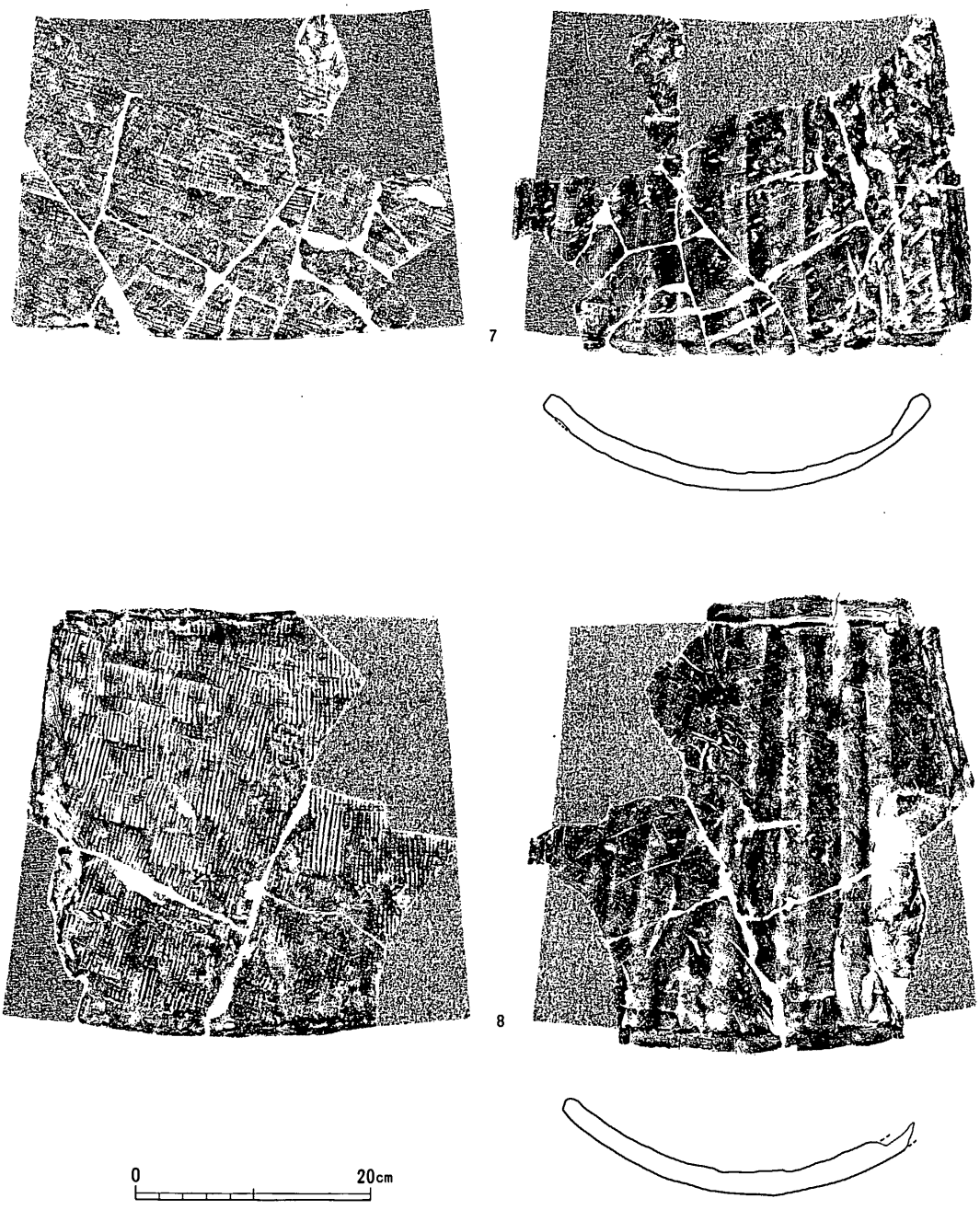
第41図　A地区竪穴状遺構出土瓦実測図・拓影(1)(1/6)



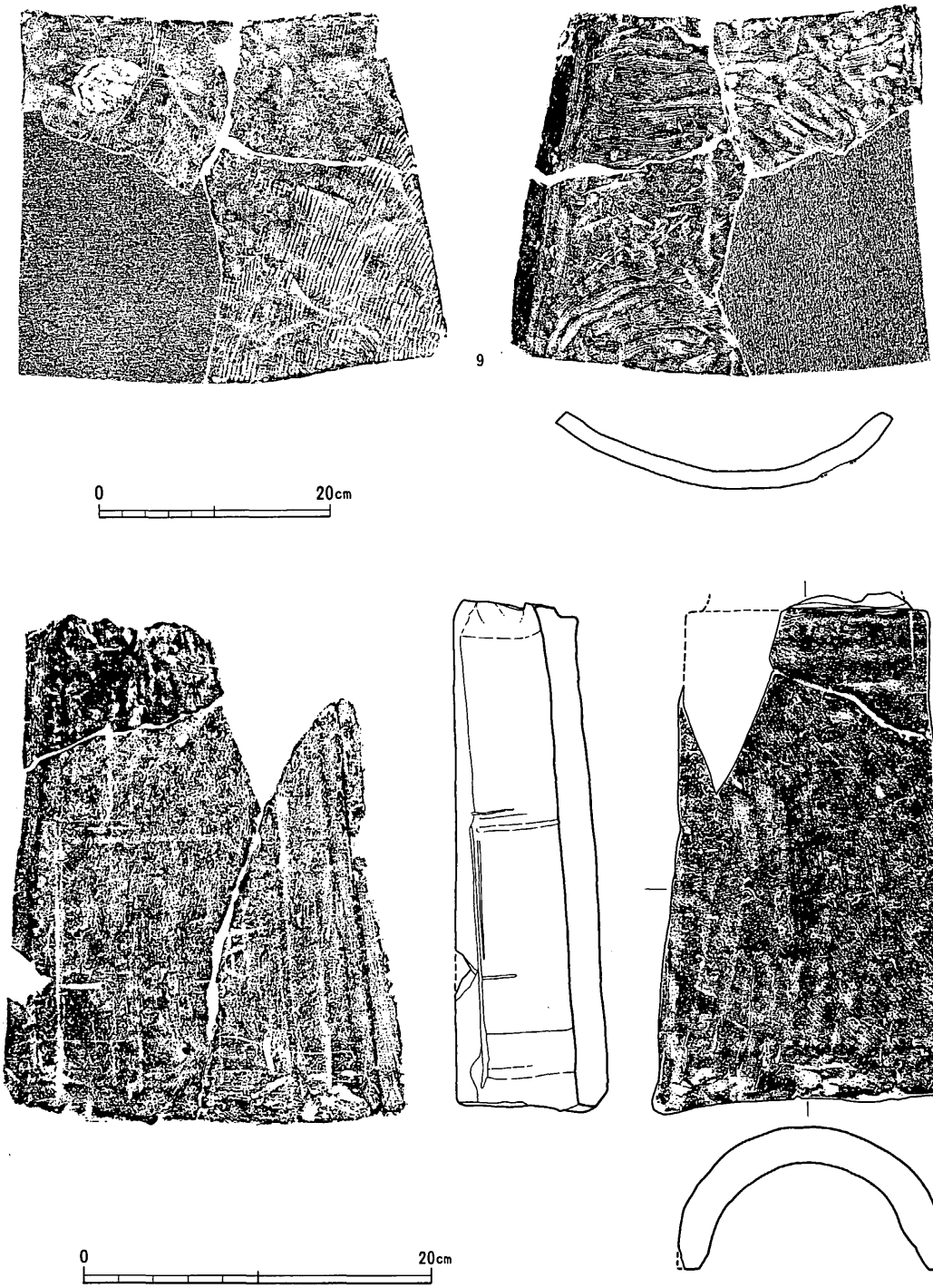
第42図　A地区竪穴状遺構出土瓦実測図・拓影(2)(1/6)



第43図　A地区竪穴状遺構出土瓦実測図・拓影(3)(1/6)



第44図　A地区竪穴状遺構出土瓦実測図・拓影(4)(1/6)



第45図　A地区竪穴状遺構出土瓦実測図・拓影(5)(1/6)・4号窯出土瓦実測図・拓影(1/4)

cm幅の叩き残しがみられるが、補足の叩き締めは認められない。凹面は全面に同心円絞が残る。凸面は最終段階でタテ方向のナデが僅かにみられ、広端部に木の葉様の線描き絞様が存在する。側面の削り調整は、側面と凹凸両側縁の3面に、中位から広端側と狭端側の2方向に向け施されている。

4は、全長34.5cm、広端部幅推定34cm、狭端部幅29cmを測り、厚さは部分的に1.3cmのところもあるが、全体に薄く1.1cmを測る。模骨は14枚が認められ、模骨の幅は差異があるが平均で、広端部2.6cm、狭端部2.0cmの圧痕を残す。布の痕跡は狭端部の一部を除き全面に残る。粘土紐の巻きつけと考えられるが、明瞭な痕跡は認められない。叩き締めの順序は明らかではないが、他と同様な叩き締めの円弧を有し、広端部にそって若干の叩き残しがみられる。凹面は第2成形以降にナデ調整が行なわれており、特に狭端縁ぞいの約6cm幅はヨコ方向のナデ仕上げが行なわれ、布の痕跡も完全に消されている。凸面狭端部端縁より1.5～3.5cmの位置に撚糸状の痕跡が一条めぐる。側面には分割截線が認められ分割截面が残る。分割截線は凹面から約半分の深さで入れており、凸面側は破面のままである。もう一方の側面にも僅かに分割截線の跡がみられ、凹面側縁に広端部から狭端部方向の削り調整がみられる。広端面は端面の調整のみであるが、狭端面は端面と凹凸両端縁に右回り方向の削り調整が施されている。

5は、全長36.5cm、広端部幅34cm、狭端部は推定で29cm、厚さは平均1.3cmで部分的に1.8cmを測る。模骨は14枚で、広端部は2.8cm狭端部は2cm幅の圧痕が認められる。布幅が瓦よりも狭い痕跡を残す。第1成形は明確ではないが、粘土紐の巻きつけが想定され、第2成形は右回りに一周叩き締め、順次くり返しながら、広端部から狭端部へ叩き上げた様相を示す。叩き締めの円弧は他と同様で、叩き重ねは半分以上と考えられるが、広端部に若干の叩き残しが存在する。凹面は部分的にナデ調整が行なわれ、また僅かにヘラ状工具痕もみられる。分割截線は、広端部から狭端部方向に、分割後の凸面側縁は狭端部から広端部方向へ削り調整が施されている。

6は、全長35cm、広端部幅推定34.5～35cm、狭端部幅25.5cm、厚さは1.1～1.5cm平均1.2cmを測る。模骨の使用枚数は不明だが、3枚分の痕跡が残る。布の痕跡は確認できない。粘土紐と考えられるが確証はなく、板の可能性もある。叩き締めの順序及び叩き締めの円弧は3と同じ様相を呈する。補足の叩き締め等は認められないが、凹面は指腹による押圧痕及びナデが全面に施され、布目は完全に消えている。分割截線が認められ、側面は分割截線の他に、凹面側縁に狭端部から広端部方向の削り調整、凸面側縁に2面よりなる広端部から狭端部方向の削り調整がみられる。また狭端部にも端面凹凸両縁に削り調整が行なわれている。

7は、狭端部を欠損する資料で、全長28cm以上、広端部幅推定35.5cm、厚さ1.5～1.8cmを測る。模骨は広端部で幅2.2cmを示し6枚が確認できるが、12～13枚が想定される。布の圧痕は全面に残っている。割れ目の状態より粘土板によるものと考えられる。叩き締めの円弧は他の瓦

と同じ様相を示すが、広端部の端縁まで補足ではないと思われる叩き締めの痕跡が残っている点は注目される。凹面はヘラ状工具及びナデによる調整が認められる。側面は側面調整の他に凹凸両側縁に削り調整が認められる。

8は、両端部分の一部を欠く資料である。全長36cm、広端部幅推定34cm、狭端部幅推定29cm、厚さは1.7～2.3cmを測る。模骨は14枚が認められ、模骨の幅は広端部で2.3cm、狭端部で1.6cmを示す。布の痕跡が部分的に残っており、布は経が太く緯が細いことが知れる。布の綴じ合せの痕跡は認められないが、端縁から1.8～3.1cmの位置を布の末端がめぐり、末端のまつりが認められる。第1成形は粘土板の巻きつけであるが、粘土板一枚は約12cm四方の小さなものと推察され、部分的に二重、三重に貼り重ねていることが観察される。また、粘土板の一枚には大きく弧を描く平行な条痕が認められ、糸切痕の可能性もある。叩き締めは、前述の3・6と同じ様相を示し、叩き締めの円弧も他の瓦と同様である。広端部は若干の叩き残しがみられるが、補足の叩き締めは認められない。分割截線全体の形状は明らかではないが、分割截面は若干残る。側面は分割截線の他に凹面側縁に1面、凸面側縁から凸面にかけて3面からなる削り調整がみられる。また広端部凸面側端縁に左方向の削り調整が加えられている。

9は、全長31.5cm、広端部幅推定32.5cm、狭端部幅27.5cmを測り、厚さは1.5～2cmを示す。模骨の本数形状は第2成形以降の凹面調整により若干は残っているものの明らかではない。割れ具合より粘土板による第1成形が考えられる。叩き締めの順序及び円弧は前述の3と同じ様相を呈するが、中央より広端部にかけては、叩き締めの円弧が狭端部と全く逆を示す。つまり、広端部の端縁に直交する円弧をとり、幅6.8cmの木目直交平行直線叩き目が施される。第2成形時の叩き締めと異なり、回転台からはずした段階以降の補足的な叩き締めと考えられる。また叩き板の基部に力を加えており、板から柄にかかる基部の圧痕が2ヶ所にみられる。これによれば叩き板は、幅6.8cm、柄の幅は1.5cmの羽子板状のものであることが判る。側面は調整のみで、さらなる削り調整は加えられていない。凹面は指腹・ヘラ状工具による不定方向のナデが全面に施されている。凸面は全体的に横ナデが施され、その上に広端部に補足の叩き締めが行なわれている。

丸瓦　丸瓦は4号窯の灰原上層より出土した1点のみである。玉縁付丸瓦であるが、玉縁部分が大きく欠損し全容は明らかではない。現存の全長は約30cm、広端部幅16.4cm、高さ8.9cm、玉縁幅推定12cm、高さ6.2cmである。模骨は広端部で幅2.1cmを測り、桶全体では18枚前後と考えられ、模骨をつないだ紐は2ヶ所で痕跡を残す。布の痕跡は部分的に認められ、布の綴じ合せ目と思われる箇所も存在する。第1成形は粘土紐の巻きつけと考えられる。第2成形の叩き締めは、すり消されているため、その痕跡をとどめない。端縁及び側面は、削り調整が加えられている。

以上の平瓦9枚及び丸瓦は、量の多少は若干差があるが胎土に砂粒を含み、焼成は軟質である。色調は平瓦が褐色及び赤褐色を呈し、丸瓦は黄褐色及び黄白色を呈する。

Ⅵ 結　　語

(1) 浦の原窯跡群の推移について

——須恵器を中心として——

浦ノ原窯跡群出土の須恵器をみると、当遺跡では一定期間連続的に操業され、間断ない須恵器生産が行なわれていたものと推測される。各窯は、操業期間の比較的短いものが多いのであるが、一時期最低一窯において操業が営まれていたようである。また須恵器の形態・灰原の状況より、窯体が小規模化した段階以降は、複数の窯による同時操業が存在したものと思われる。当窯跡群は、牛頸窯跡群の構成単位として一定期間連続的に須恵器生産活動が営まれたという点で、須恵器の編年作業のみならず、当時の工人集団の実体究明に関しても貴重な資料といえよう。

まず、当窯跡群出土の須恵器を従来の編年に照合すると、4号→3号→8号→1・2・5・7号という時期的序列をたどることができる。(1)

4号窯は8基の窯の中で最も規模が大きく、且つ操業が長期間に及んだことは、出土須恵器の型式の豊富さから判断される。当窯出土須恵器は床面出土のものと灰原出土のものがあり、後者は前者の中に存在しない古式の土器群を含んでいる。このことは、途中窯内部を改修し、堆積物を除去した結果と考えられる。床面は上下2層に明確に分離され、上層には下層に存在しない新たな須恵器（杯蓋）が主体的に出土している。これら床面より出土した須恵器は灰原上層の須恵器に概ね対応し、灰原下層出土の須恵器は床面出土の須恵器と全く形式を異にしている。このように4号窯は時期幅が最も長く、従って当窯を指標とし、浦ノ原窯跡群の推移を須恵器蓋杯を中心にして大きく3期に区分し、各期を個別にまとめてみたい。

1期　該期の資料には、浦ノ原4号窯灰原の下層出土須恵器と上層出土須恵器の一部が相当する。蓋杯は4号窯で分類した〔Ⅰ〕類と〔Ⅱ〕類の2形態が存在する。前者の蓋は天井部が高く丸味を有する形をとるが、手法的には天井部外面ヘラ切り未調整、あるいはヘラ切り後ナデ調整のものが多く、非常に雑な作りである。それに伴う身は、短く内傾するたちあがりと蓋受けを有する。また底部には蓋同様ヘラ切り未調整、あるいはヘラ切り後ナデ調整を施すものが多く、やや雑な感を受ける。後者は前者を逆転させたかの形態をとるもので、蓋の内面にかえりが付されるようになり、天井部中央にはつまみを有するものが出現する。天井部外面は回転ヘラ削り調整を施すものが多く、〔Ⅰ〕類に比べて丁寧に仕上げられている。また同形態で中型の蓋も僅かに存在するが、天井部・つまみの扁平化はまだ現われていない。これに伴う杯

身は、〔Ⅰ〕類の蓋を逆転させたかの形態を呈するものと、平底で比較的安定感を有するものの2者が存在する。両者とも底部はヘラ切り未調整、あるいはヘラ切り後ナデ調整が施されている。また中型で体部に2条の沈線を有する平底の杯身も僅かに存在する。しかし1期においては、高台を有する杯身は全く出現していない。高杯は長脚と短脚の2者があり、杯部は杯身の形態を備えている。壺類では短頸壺と長頸壺の存在が確認されており、前者は口頸部が短く直立するもので、体部は丸味を帯びている。甕は大型と小型があり、外反する口縁部は端部近くで下外方に張り出すものが多い。その他の器種では平瓶・すり鉢などが存在するが、資料が少なく、その器形の特徴を明らかにするには至らなかった。

該期は蓋杯の形態からみて、さらに2段階に細分できるものと思われるが、資料そのものがすべて灰原に依存するため、時期的な細分は不可能であった。

2期　4号窯床面及び灰原上層・3号窯・8号窯出土の須恵器が生産された時期で、これはさらに3段階に細分可能である。

2期①段階は、4号窯床面下層出土須恵器をその典型とする。この段階には3号窯も既に操業を開始していたと思われる。杯蓋は大形化し扁平となり、擬宝珠様のつまみを持ち、内部に身受けのかえりを有す。杯身は4号窯床面下層で良好な資料に恵まれないため明確にし得ないが、3号窯で分類した〔Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ〕類が存在するものと考えられる。

2期②段階の須恵器は、3号窯灰原・4号窯床面上層より出土したもので、杯蓋は身受けのかえりを有するものとかえりが消失し口縁部を下方に折り曲げたものが共伴する。後者の場合、口縁部屈曲は長目のものが多い。杯身は一段階のものと大差なく、高台をもつものともたないもの、体部から口縁部にかけて外反するものと直線的にのびるものが存在すると思われる。また3号窯蓋杯〔Ⅲ〕類のような小形品が現われるようである。

2期③段階の資料は、8号窯出土の須恵器に代表される。杯蓋は依然身受けかえりを有するものと口縁部を下方へ折り曲げたものとが共伴するが、前者の出土数がやや減少する。また、後者の口縁部には長目に折り曲げたものと断面三角形をなすものがある。杯身は高台のあるものとないものが存在し、高台は前段階と同形態のものとやや短くハの字形に開くものとがある。蓋杯ともに前段階と比較して目立った変化は認められないが杯身高台部にやや新しい特徴を示すものが出現しており、3期への移行を示す段階である。3号窯床面出土須恵器は、杯身に好資料を欠くがこの段階に属する可能性がある。

2期には高杯は杯部が大きく脚部が短くなり脚端部は鳥嘴状となる。この時期には鉄鉢形土器が出現する。4号窯より出土した亀形硯は共伴した須恵器よりすると、1段階に属するものと思われる。一方ヘラ記号は2段階以降著しく減少する傾向が窺われ、窯の小形化・複数化とともに注目すべき現象であろう。また該期には4号窯において、瓦陶兼業の生産活動が行なわれたものと推測される。

3期　1・2・5・7号窯出土の須恵器がこの時期に属する。蓋杯は大小各種がある。杯蓋は扁平な釦状のつまみが付き、口縁部の折り曲げは短く断面三角形状をなすものが多い。身受けのかえりを有する蓋は全く出土をみない。杯身高台は2期のものに比べ著しく短くなり、外方へは殆んど開かず垂直に近くなる。高台外端部がやや膨らむ特徴をもち、2期からの退化が窺われる。また高台をもたないものも存在する。他の機種には皿・甕等があるが、その出土数は極めて少なく、蓋杯を主体的に焼成したものと思われる。該期の窯は小形で同一レベルに並列して存在している。

以上のように、浦ノ原窯跡群の推移を大まかに画期したが、その根拠となる蓋杯においても形式変化は必ずしも同一時期ではなく、蓋杯以外の器種については資料不足の感もあるが、比較的変化に乏しいといえよう。

1期から2期への移行は、蓋杯の大型化・つまみの扁平化・杯身高台の出現等があげられるが、これらが同一時期に変化したものとは思われない。また、1期と2期の須恵器が同時に生産された段階が想定されるのであるが、今回の調査では2期以前の調査は4号窯灰原に頼るしかなく明確になし得なかった。2期は杯身高台がハの字形に開く時期で、杯蓋は途中、身受けかえりの消失した新型式が出現するが、身受けかえりを有する杯蓋も存続する。このような現象は陶邑古窯址群[2]でも確認されており、一般的な様相と理解される。3期に入って、身受けかえりを有する杯蓋が完全に消失し、杯身高台が一層短く直立気味になると、蓋杯以外の器種は殆んど見受けられなくなってしまう。これは窯の小形化・複数化とともに須恵器生産体制が変化し、より合理化が進んだ結果と考えられる。ちなみにヘラ記号を観察してみると、2期②段階以降急速に減少しつつあり3期に至っては皆無に近い状況となる。これは先述した窯の小形化・複数化とほぼ同時期に生じた現象であり、両者は同一の原因より生じた結果であろう。

牛頸窯跡群において浦ノ原1期とほぼ同時期の窯には、小田浦B地点1号窯[3]・大浦2号窯[4]・平田窯B地点1・3号窯[5]、同様に2期では、小田浦2号窯[6]・平田窯B地点2号窯[7]・長浦窯[8]・宮ノ本1号窯[9]、3期では、向佐野1・2・3号窯[10]等がある。また八女地方・豊前地方でもかなりまとまった窯跡の調査が行なわれており、須恵器編年[11]も大筋においては整った状況にある。浦ノ原窯跡群出土の須恵器をこれら小田氏編年に照合してみると、浦ノ原1期はⅣB期及びⅤ期2期がⅥ期、3期がⅦ期に概ね相当するものと思われる。ただ小田氏はⅥ期をa～cの3式に細分されておられるが、これは浦ノ原2期①～③段階の内容とはやや異なっている。このことは地域性あるいは各窯個々の特殊性にも起因するものと思われ、今後の重要な課題でもあろう。また当地方の須恵器編年については、岩瀬・酒井・川述氏や亀井氏[12]による整理された研究があり注目される。このような先学の成果を基礎にすると浦の原窯跡群[13]の年代は、1期を6世紀末より7世紀前半、2期を7世紀中頃から8世紀初頭、3期を8世紀前半以降に位置づけられよう。

(2) 窯について

浦ノ原窯跡群各窯の構造についてまとめると次表のようになる。

	全　長(m)	最大幅(m)	主軸方位	傾斜角度	前庭部凹み穴
1 号 窯	3.2	1.05	N12.5°W	41°	○
2 号 窯	2.7+α	0.73	N 0.5°W	40°	○
3 号 窯	3.35	1.2	N44.0°E	36°	
4 号 窯	6.05+α	1.5	N 0.5°E	35°	○
5 号 窯	3.0	0.75	N12.0°E	28°	○
6 号 窯	3.15	0.95	N 6.5°W	37°	
7 号 窯	2.5	0.68	N27.5°W	26°	○
8 号 窯	3.1	0.9	N60.5°E	38°	

先述した浦ノ原窯跡群の推移を基礎として窯についてみていくと、2期に至って急激な変化があったことがわかる。つまり、①平面形において、焚き口部から焼成部へほぼ同じ幅で長くのびていたものが焼成部に最大幅をもち、燃焼部から焚き口部付近ですぼまる形態となること。②規模において著しく小形化すること。③操業期間が短期間となること等があげられる。②については、1回の窯入れに際して焼成される須恵器の数が減少することとなるが、須恵器需要減少の結果でなく、窯の増加に起因するものとして捉えるべきであろう。③に関しては、出土須恵器からだけでなく灰原の規模によっても明らかである。また、1期に構築された窯（4号窯）は途中床を改修したものと思われ、その後も1回の床上げが観察されるのであるが、2期以降構築された窯については床の堆積は存在しなかった。このような窯構造の著しい変化は、牛頸窯跡群[14]に限らず、八女古窯跡群[15]においても指摘されており、この地方における普遍的事象と理解されよう。

次に窯の位置についてみると、3・4号窯が最も低い位置にあり、小谷を挟んで18m程の間隔をもつ。次に8号窯が低く、3号窯と主軸をほぼ同じくしてその上方約4m（水平距離）の位置に構築している。1・2・5・6・7号は最も高い位置に存在しており、ほぼ同一等高線上に並列する。このうち6号窯は未使用と考えられ、これを除くと4基の窯はほぼ等間隔を保っていることが指摘できる。このように当窯跡群にあっては、時期が下るにつれ窯が高位置に移動していく現象が看取される。また各窯間の距離も重要な意味をもつものと思われる。

窯の方向は、焚き口部が南側に開口するものが多いが3・8号窯はやや西向きに開いている。これは、窯体主軸が等高線に直交するよう構築されるため、地形の変化に制約された結果であろう。

各窯は、床傾斜角度が約30°～40°をなし、かなりの急勾配でもって築かれている。1・2・3・4・5号窯の場合、急傾斜をなした焼成部にパン状を呈した粘土塊が整然と設置された状況が窺われる。大部分は燃焼部付近へ転落しており、焼成部床面に痕跡を留めるだけであるが、原位置を保ったものも存在した。これが焼台として設置されたことは疑いなく、当時の焼成技術・方法等を検討するにあたって貴重な資料となろう。

次に焚き口部下方の前庭部に設けられた凹み穴について若干ふれてみたい。当遺跡では、1・2・4・5・7号窯の前庭部に、窯体の規模に応じた大きさの楕円形を呈した凹み穴が存在し注目される。いずれも灰によって埋没しており、開窯以後は殆んど意味をもたなかったものと推測される。ただ未使用と考えられる6号窯には凹み穴が存在しないことは留意すべきであろう。小田氏はこの凹み穴に関して窯構築段階における構築粘土のこね場などの材料溜めとしての用途[16]及び排水施設としての機能を併用したものと考えておられる。また浦の原4号窯においては、窯体下部の左右両翼にも階段状の浅い凹み[17]が検出され注目される。窯体改修時の土取り場とも考えられるが、その性格は明らかでない。今後は、このような窯体周辺を注意深く調査し、窯業の場全体の状況を把握していく必要があろう。

(3) 瓦について

浦ノ原窯跡群では前述したA地区竪穴状遺構出土瓦の他にも、4号窯及び周辺で少量ながら出土している。基本的には、9枚の平瓦と同じと考えられるが、若干様相を異にする点も含まれている。併せて平瓦の製作過程をたどり整理してみよう。

まず、桶巻作りか、一枚づくりかであるが、後にふれる布[18]の形状、粘土紐の巻き上げ、分割截線などから桶巻作りと判断される。

桶の形態は、截頭円錐形をなすと考えられ、模骨の幅が広端部より狭端部がせまく、さらに狭端部では(1)のように模骨の重なりがみられるものもある。桶の大きさは、一定の規格が存在していたものと考え、各々の弧長及び求められる径から復原すれば、Ⓐ下端径48cm、上端径42cm、高さ40cm、Ⓑ下端径36cm、上端径32cm、高さ37cmの2種類が考えられる。高さは使用された上端をさすので、実際はこれよりも高く、それにつれて上端径も若干小さいものが想定されうる。9枚のうちⒷの桶を使用したと考えられるのは(5)、(6)であり、この桶の大きさは分割枚数との関連が考えられ、Ⓑ桶は3分割と考えられる。桶は56枚前後の板で構成され、その連綴状態の明瞭な痕跡をとどめるものはなく、外から紐がみえない連綴方法による桶が想定される。

桶の周囲にかぶせた布は、布目の方向から横方向に連続した輪状をなすものと考えられるが、綴じ合わせの縫い目は確認できない。さらに(1)では、帯状の布を截頭円錐形の桶に右回りに巻

きつけた場合に表われる交差する重ね部分が認められる。(8)では、狭端縁から1.8～3.1cmの位置に末端の痕跡がめぐり、その部分にまつりが認められ、(1)でも認められる。布は粗目で1cmあたり約6本であり、(4)・(8)にみられるように経が太く、緯が若干細いことが全体的にいえる。

次に桶に粘土を巻きつける成形第1段階に入るが、(7)・(8)・(9)は粘土板で、その他は粘土紐と考えられる。粘土紐は、(1)・(3)より4～6cm前後の帯状のものを桶に左回りに巻き上げた痕跡を残すが、(2)の場合、右回りの可能性もある。左回りの場合(1)では帯状の布を右回りに巻きつけておりこれと逆である。布を綴じ合わせてない限り、回転台を右に回さない限り疑問が残る。

粘土板によるものは、本来の粘土板桶巻作りで行なわれる粘土角材より、糸あるいは弓等を用いて切りとられた板状の粘土板ではなく、(7)・(8)及び窯跡周辺出土の瓦片から考えられる「板」とは、10cm前後の粘土塊を部分的に二重、三重の重貼りを行っているものであり、粘土塊を板状にのばし、こま切れの粘土板を貼り合わせたものである。竪穴状遺構では粘土紐が大半を占めたが、窯及び周辺出土瓦は粘土板で厚手のものが多く、若干様相を異にする。

成形第2段階にあたる叩きしめは、大きく2種の叩き板を用いて行なわれており、(a)木目直交平行線叩き目を有するものと、(b)木目平行直交格子叩き目を有するものがある。(a)は木目の痕跡もあらわれ格子状になるものと、木目の痕跡が表われないものがあり、後者は木目平行平行線叩き板の可能性も考えたが、叩きしめの円弧からみて妥当ではなく、叩き板がT字形をなすものでない限り区別できない。ここでは刻目の浅深、使い込みによるものと考えたい。叩き板の形態が判るものに(9)がある。全容は不明であるが、幅6.8cm、柄の幅は1.5cm、板から柄に至る間は約3cmを示す羽子板状のものである。叩きしめの順序は、広端側から狭端側に向かって行なっているが、広端側から狭端側まで叩くという動作を反復して粘土円筒を一周するもの((3)・(6)・(8)・(9))と広端部を横方向に一周し、ひきつづいてその上を一周するという動作を反復する方法のもの(5)がある。いずれも回転台を左に回し、叩き目自体は右回りになっている。

叩きしめの円弧は、どの叩き板を用いても木目に直交する平行線が広端部で左下り右上りを示し、狭端部で端縁に直交あるいはそれに近い形態をとっている。これは工人と粘土円筒との位置関係を示しており、工人の手より下位に粘土円筒が位置していたといえる。

第2成形が終わり桶からはずすわけであるが、その際に補足の叩きしめが行なわれる。(9)は広端側の下半に上半部と逆の叩きしめの円弧を有する叩きしめが認められ、補足の叩きしめと考えられる。また凹面に同心円絞を残すI類はこの段階で粘土円筒の内側に同心円絞の「あて板」を用い叩きしめたものと考えられるが、この場合凸面の補足叩きしめの痕跡は不明である。(3)については模骨の跡を全く残さないことから、桶で粘土円筒の形のみをつくり、第2成形は桶からはずして行なったという考えも成り立つ。(1)・(2)の凹面に残る模骨の跡が、紐を巻き上げ、叩きしめの準備段階で手圧によりついたものであれば、(3)と同様なことがいえる。広端部

の叩き残しに対しての補足の叩きしめはみられない。

分割界線及び界面は不明であるが、分割截線は(4)・(5)・(8)にみられる。(4)では凹面から約半分の深さまで入れられており、凸面側は破面を残す。他方の側面は分割截線の痕跡がわずかに認められるものの分割方法の種類は判別できない。(5)では分割截線が広端側から狭端側方向へ入れられたことがわかる。分割は4分割が考えられるが、一部3分割も想定される((5)・(6))。例えば(1)は広端部径は47cm、狭端部径は41cmを示す。この場合、円周は広端部で147.58cm、狭端部で128.74cmとなる。これを4等分すれば36.9cm、32.9cmとなり、3等分すれば、49.2cm、42.9cmとなる。(1)の弧長は36cm、30.5cmであるから4等分に近く、その差は削り調整等によるものである。また(5)は広端部径は36cm、狭端部径は33cmを示し、円周は4等分すれば28.3cm、25.9cmとなる。3等分すれば37.7cm、34.5cmとなり、(5)の弧長はそれぞれ39.5cm、32.5cmであるから3等分に近くなる。この差は逆に大きくなることから削り調整ではなく、乾燥時の歪みに起因すると考えられる。しかし乾燥時の歪みが全体的にいえるとすれば、3分割、4分割は資料から割り出された径が適正なものでなければ言及できかねるという問題点を内在している。

削り調整はほとんどの瓦でみられ、広端部から狭端部にかけて施されている。

以上、平瓦を製作過程をたどりながらみてきた。牛頸窯跡群にも古瓦を生産した遺跡があるが、様相を異にし類例に乏しい。浦ノ原窯跡群出土の瓦は一貫した技法によらず、瓦製作の試行過程といえよう。今後詳細な検討を要する。なお、瓦製作の時期は伴出の須恵器から7世紀後半代といえる。

註(1) 小田富士雄ほか『塚ノ谷窯跡群』（八女古窯跡群調査報告Ⅰ）八女市教育委員会 1969
(2) 中村浩ほか『陶邑』II 大阪府文化財報告書第29輯 大阪文化財センター 1978
(3) 大野城市教育委員会『大野城市の文化財』第9集 1977
(4) 小田富士雄・柳田康雄・真野和夫『野添・大浦窯跡群』福岡県文化財報告書第43集 1979
(5) 坂詰秀一編『筑前平田窯跡』雄山閣 1974
(6) 註(3)に同じ。
(7) 註(5)に同じ。
(8) 亀井明徳・酒井仁夫・高橋章「向佐野・長浦窯跡」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅵ 福岡県教育委員会 1975
(9) 山本信夫ほか『宮ノ本遺跡』太宰府町の文化財第3集 太宰府町教育委員会 1980
(10) 註(8)に同じ。
(11) a．註(1)に同じ。
b．小田富士男ほか『天観寺山窯跡群』 北九州市埋蔵文化財調査会 1977
(12) 岩瀬正信・酒井仁夫・川述昭人「御笠川東岸における須恵器の編年について」『九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅷ 福岡県教育委員会 1977
(13) 註(8)に同じ。
(14) 副島邦弘「牛頸窯跡群の編年的研究に関する覚書」『牛頸中通遺跡群』大野城市文化財調査報告書第4集 大野城市教育委員会 1980
(15) 註(1)に同じ。
(16) 註(1)に同じ。
(17) 註(11)bに同じ。
(18) 佐原真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』58巻2号 1972 によるところが多い。

遺物観察表

—— 凡　例 ——

1．遺物番号は窯ごとに通し番号とし、実測図番号、写真番号と共通である。

2．法量欄の（　）内は復原値、推定値を示す。

3．備考欄のAはロクロの回転、Bは色調、Cは胎土、Dは焼成を示す。

1 号 窯

遺物番号	挿図図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	第8図	蓋杯(蓋)	窯内	口径(14.0) 器高(2.9) つまみ径 2.4 つまみ高 0.4	口縁部は、垂直に下がり、端部はやや鋭い。天井部は、丸みをもち、中央に上面凹状のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。天井部内面¼、不定方向のナデ調整。他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．青灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅓
2	第8図 図版10	同上	同上	口径 14.9 器高 1.3 つまみ径 2.4 つまみ高 0.4	口縁部は、ほぼ垂直に下がり、端部は丸い。天井部は、平らに近く、中央に上面平坦のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。天井部内面¾、不定方向のナデ調整。他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．黒灰色 C．粗 D．堅緻 残存⅔
3	第8図 図版10	同上	同上	口径 14.3 器高 2.2 つまみ径 2.9 つまみ高 0.7	口縁部は、やや内傾し、端部は丸い。天井部は、丸みをもち、中央に扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。天井部内面¾、不定方向のナデ調整。他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗紫色 C．粗 D．堅緻 ほぼ完形
4	第8図	同上	灰原	口径(14.2)	口縁部は、外傾し、端部はやや鋭い。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。天井部内面¾、不定方向のナデ調整。他は、回転ナデ調整。	B．淡黄灰色 C．やや粗 D．やや軟質 残存、口縁部⅙
5	第8図 図版10	同上	同上	口径 14.4 器高 2.9 つまみ径 2.7 つまみ高 0.6	口縁部は、やや内傾し、端部は丸い。天井部は、丸みをもち、中央に扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。天井部内面¾、一定方向ナデ調整。他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡黄灰色 C．やや粗 D．やや軟質 完形品
6	第8図	同上	同上	口径(15.0) 器高(2.2) つまみ径 2.8 つまみ高 0.5	口縁部は、内傾し、端部は鋭い。天井部は、やや丸味をもち、中央に上面凹状のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。天井部内面¾、不定方向のナデ調整。他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．青灰色 C．密 D．堅緻 残存⅓
7	第8図	同上	同上	口径(19.1) 器高(2.1) つまみ径 2.7 つまみ高 0.5	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。天井部は、やや丸みをもち、中央に擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。天井部内面¾、不定方向のナデ調整。他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．黄灰色 C．やや粗 D．やや軟質 残存⅓
8	第8図	同上	窯内	口径 20.9 器高 1.5 つまみ径 4.0 つまみ高 0.5	口縁部は、外傾し、端部は丸い。天井部は、平らに近く、中央に扁平な上面凹状のつまみをもつ。	天井部外面¾、回転ヘラ削り調整。天井部内面½、不定方向のナデ調整。他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡青灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅔
9	第8図	同上	灰原	口径(14.9) 器高(1.3) つまみ径 2.7 つまみ高 0.7	口縁部は、垂直に下り、端部はやや鋭い。天井部は、平坦で、中央に上面平坦のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。天井部内面¾、不定方向のナデ調整。他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存⅓
10	第8図	同上	同上	口径(14.6) 器高(1.9) つまみ径 2.6 つまみ高 0.4	口縁部は、垂直に下り、端部は丸い。天井部は、やや高く、丸味をもつ。天井部中央に上面平坦のつまみをもつ。	天井部外面¾、回転ヘラ削り調整。天井部内面¾、不定方向のナデ調整。他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅙

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
11	第8図	蓋杯(蓋)	灰原	口径 15.0 器高 1.7 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	口縁部は、内傾し、端部は丸い。 天井部は、平らに近く、中央に上面凹状のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。他は、回転ナデ調整。	A. 右方向 B. 暗灰色 C. やや密 D. 堅緻 残存¼
12	第8図 図版10	同上	同上	口径 13.7 器高 2.1 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	口縁部は、やや内傾し、端部は丸い。 天井部は、やや高く、丸みをもつ。天井部中央に扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、一定方向のナデ調整。他は、回転ナデ調整。	A. 右方向 B. 黄灰色 C. 密 D. やや軟質 残存⅚
13	第8図	同上	同上	口径(13.6) 器高(2.4) つまみ径 2.0 つまみ高 0.3	口縁部は、内傾し、端部は鋭い。 天井部は、高く丸い。天井部中央に扁平な上面凹状のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。他は、回転ナデ調整。	A. 右方向 B. 暗灰色 C. やや粗 D. 堅緻 残存¼
14	第8図	同上	同上	口径(14.0) 器高(1.6) つまみ径 2.6 つまみ高 0.3	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、低く、平らに近い。天井部中央に扁平で上面凹状のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不定方向のナデ調整。他は、回転ナデ調整。	A. 右方向 B. 内、灰色 断、灰色 外、暗灰色 C. やや密 D. 堅緻 残存⅔
15	第8図	同上	同上	口径(12.0) 器高(1.6) つまみ径 2.2 つまみ高 0.5	口縁部は、外傾し、端部は丸い。 天井部は、低く、平らに近い。天井部中央に上面平坦のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅚、不定方向のナデ調整。他は、回転ナデ調整。	A. 右方向 B. 暗茶褐色 C. やや粗 D. 堅緻 残存¼
16	第8図 図版10	蓋杯(身)	同上	口径(9.9) 器高(3.3) 高台径 7.3 高台高 0.4	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。底部は平らで、やや内側に短い高台をもつ。高台端部は丸く、端部中央で接地する。	底部外面、回転ヘラ削り調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B. 淡灰色 C. 密 D. やや軟質 残存⅚
17	第8図	同上	同上	口径(11.3) 器高(3.9) 高台径 7.4 高台高 0.5	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。底部は平らで、やや内側に短い高台をもつ。高台端部は平面で、外側近くで接地する。	体部外面⅓、回転ヘラ削り調整。底部外面、ヘラ切り未調整。底部内面、不定方向のナデ調整。他は、回転ナデ調整。	B. 暗青灰色 C. 粗 D. 堅緻 残存⅓
18	第8図	同上	同上	口径(11.5)	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。	体部外面⅓、回転ヘラ削り調整。他は、回転ナデ調整。	B. 灰色 C. 密 D. 堅緻 残存¼
19	第8図 図版10	同上	同上	口径(14.5) 器高 3.4 高台径 11.4 高台高 0.4	体部は、上外方にのび、口縁部付近でやや内傾する。口縁端部は丸い。底部は平らで、内側に短い高台をもつ。高台端部は凹面をなし内側で接地する。	底部外面、ヘラ切り未調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B. 淡黄灰色 C. 密 D. やや軟質 残存½
20	第8図	同上	同上	口径 13.9 器高 3.4 高台径 10.1 高台高 0.4	体部は、上外方にのび、口縁付近でやや外反する。口縁端部は丸い。底部は平らで内側に高台をもつ。高台端部はやや凹面をなし、外側で接地する。	底部外面、回転ヘラ削り調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B. 青灰色 C. 密 D. 堅緻 残存⅙

遺物番号	挿図番号 図版	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
21	第8図	蓋杯(身)	窯内	口径 19.7	体部はやや内彎し、口縁付近で外反してのび、口縁端部は丸い。	体部・口縁部内外面、回転ナデ調整。	B．内、暗灰色 外．暗紫色 C．密 D．堅緻 残存½
22	第8図	甕	同上	口径 28.8	口縁部は外反して上外方にのび、端部は平面をなす。外端部は鋭く、その下に断面三角形の稜がめぐる。	口縁部内外面、回転ナデ調整。	B．内、灰色 断、灰色 外、暗灰色 C．やや密 D．堅緻 残存、口縁部¼

2 号 窯

遺物番号	挿図番号 図版	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	第10図 図版10	蓋杯(蓋)	窯内	口径 14.5 器高 1.5 つまみ径 2.5 つまみ高 0.4	口縁部は、やや内傾し、端部はやや鋭い。天井部は低く、平らに近い。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面¾、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡青灰色 C．やや粗 D．堅緻 完形品
2	第10図	同上	同上	口径 13.8 器高 1.4	口縁部は、垂直に下り、凹面をなす。 端部は丸い。 天井部は低く、平らに近い。	天井部外面¾、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．青灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存、口縁部天井部½
3	第10図 図版10	同上	同上	口径(12.2) 器高 1.5	口縁部は、垂直に下り、凹面をなす。 端部はやや鋭い。 天井部は低く、平らである。	天井部外面¾、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．黒灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存、口縁部天井部½
4	第10図	同上	同上	口径 (15.4)	口縁部はやや内傾し、凹面をなす。 端部はやや鋭い。 天井部は低く、平らに近い。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．黒灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存⅓
5	第10図 図版10	同上	灰原	口径(14.7) 器高 2.4 つまみ径 2.9 つまみ高 0.4	口縁部は、やや外傾し、端部は丸い。 天井部は、やや低く、丸味をもつ。 天井部中央に、上面凹状のつまみをもつ。	天井部外面¾、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B淡黄灰色 C．やや密 D．軟質 口縁部½欠損
6	第10図	同上	同上	口径(13.6) 器高 2.4	口縁部は外傾し、端部は丸い。 天井部はやや高く、丸味をもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡灰色 C．粗 D．軟質 残存½
7	第10図	同上	同上	口径(14.0)	口縁部は、やや外傾し、端部は丸い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡褐色 C．やや密 D．軟質 残存¼

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
8	第10図	蓋杯(蓋)	窯内	口径(19.2)	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は低く、平らに近い。	天井部外面¾、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅘、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 残存¼
9	第10図	同上	灰原	口径(17.0)	口縁部は、やや外傾し、端部は丸い。 天井は低く、平らである。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅗、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡黄灰色 C．やや粗 C．軟質 残存½
10	第10図	焼き台	同上	口径(14.5)	口縁部は、垂直に下り、端部はやや鋭い。 天井部は低く、平らである。天井部中央に、焼成前に人工的に孔を穿っている。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．内、暗褐色 断、灰色 外、茶褐色 C．やや密 D．やや軟質 残存¼
11	第10図	蓋杯(蓋)	同上	口径(14.2) 器高 1.7 つまみ径 2.7 つまみ高 0.5	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は低く、丸味をもつ。 天井部中央に、基部の太い扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅗、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．粗 D．堅緻 残存¼
12	第10図	同上	同上	口径 13.6 器高 2.3 つまみ径 2.9 つまみ高 0.6	口縁部は、内傾し、凹面を成す。 口縁端部はやや鋭い。 天井部はやや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、基部の太い扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 口縁部¼欠損
13	第10図 図版10	蓋杯(身)	窯内	口径(12.3) 器高 4.2 高台径 9.7 高台高 0.5	体部は、ほぼ垂直にのび、口縁部付近でやや外反し、端部は丸い。底部は平らで、底部端に、短い高台をもつ。 高台端部は丸く、端部中央部で接地する。	体部外面⅛、回転ヘラ削り調整後、回転ナデ調整。 底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．密 D．堅緻 残存⅔
14	第10図	同上	同上	口径(13.1) 器高 4.7 高台径 (8.4) 高台高 0.7	体部は、上外方にのび、口縁部付近で外反する。口縁端部は丸い。 底部は平らで、内側に高台をもつ。 高台端部は、やや凹面をなし、内側で接地する。	体部外面⅛、回転ヘラ削り調整後、回転ナデ調整。 底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．黄灰色 C．密 D．やや軟質 残存¼
15	第10図	同上	同上	口径(16.3)	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸い。	口縁・体部内外面、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 残存¼
16	第10図	同上	同上	口径(12.1)	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 体部中央に2条の沈線を有す。	口縁・体部内外面、回転ナデ調整。	B．灰色 C．やや密 D．堅緻 残存¼
17	第10図 図版10	同上	灰原	口径 12.9 器高 4.8 高台径 8.5 高台高 0.5	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、やや内側にハの字形の高台をもつ。 高台端部は丸く、内側で接地する。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡黄灰色 C．やや密 D．軟質 口縁部⅛欠損

遺物番号	挿図図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
18	第10図	蓋杯(身)	灰原	口径 14.0 器高 5.1 高台径 10.0 高台高 0.8	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部はやや丸く、内側に高台をもつ。 高台端部は丸く、内側で接地する。	調整は磨滅の為不明。	B．淡黄灰色 C．やや密 D．軟質 完形品
19	第10図 図版10	同上	同上	口径 14.2 器高 4.5 高台径 10.7 高台高 0.5	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸い。底部は平らで、底部端にハの字形の高台をもつ。 高台端部は平面をなし、外側で接地する。	体部⅙、回転ヘラ削り調整後、回転ナデ調整。 底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。	B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 残存½

3 号 窯

遺物番号	挿図図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	第12図	蓋杯(蓋)	窯内床面	口径(14.6)	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾し、端部は鋭い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。	天井部外面⅓、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．密 D．堅緻 残存¼
2	第12図 図版11	同上	同上	口径 15.1 器高 1.8 つまみ径 2.8 つまみ高 0.4	口縁部は、外傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅓、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．密 D．堅緻 完形品
3	第12図 図版11	同上	同上	口径 14.3 器高 1.9 つまみ径 2.5 つまみ高 0.4	口縁部は、垂直に下り、端部は丸い。 天井部は、やや高く、平坦に近い。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅓、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 口縁部⅔欠損
4	第12図	同上	同上	口径 13.9 器高 1.8 つまみ径 2.8 つまみ高 0.4	口縁部は、内傾し、端部は丸い。 天井部は、やや低く、平坦に近い。 天井部中央に、上面平坦のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．やや密 D．堅緻 残存¾
5	第12図 図版11	同上	同上	口径 11.6 器高 1.4	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は、やや低く、平坦に近い。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．内、背灰色 外、黒灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品
6	第12図 図版11	同上	同上	口径 13.3 器高 2.7 つまみ径 2.8 つまみ高 0.5	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は、高く、丸い。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井郎内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．密 D．堅緻 完形品
7	第12図 図版11	同上	同上	口径 13.8 器高 1.3 つまみ径 2.2 つまみ高 0.5	口縁部は、外傾し、端部は丸い。 天井部は、低く、平らに近い。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅓、調整不明。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．黒灰色 C．密 D．堅緻 完形品

遺物番号	挿図図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
8	第12図 図版11	蓋杯 (蓋)	窯内床面	焼け歪みの為 不明。	口縁部は、やや内傾し、端部は丸い。 天井部は、焼け歪みの為、不明。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．黒灰色 C．やや粗 D．堅緻 完形品 焼け歪みあり
9	第12図 図版11	同上	同上	口径 13.1 器高 2.6 つまみ径 2.1 つまみ高 0.5	口縁部は、内傾し、端部は丸い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、上面凹状のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、回転ナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．黒灰色 C．粗 D．堅緻 残存⅚
10	第12図 図版11	同上	同上	口径 15.5 器高 3.6 つまみ径 3.4 つまみ高 0.9	口縁部は、内傾し、端部は丸い。 天井部は、高く、丸味をもつ。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．明褐色 C．密 D．軟質 完形品
11	第12図 図版11	同上	同上	口径 14.4 器高 1.7 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	口縁部は、垂直に下り、端部はやや鋭い。 天井部は低く、平坦に近い。 天井部中央に、扁平な上面凹状のつまみをもつ。	天井部外面¼、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅘
12	第12図 図版11	同上	同上	口径 14.1 器高 2.4 つまみ径 2.8 つまみ高 0.6	口縁部は、垂直に下り、端部付近でやや内彎し、端部は丸い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面¼、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡黄灰色 C．やや密 D．やや軟質 残存⅚
13	第12図 図版11	同上	同上	口径 18.6 器高 2.1 つまみ径 3.7 つまみ高 0.5	口縁部は、外傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、やや低く、平坦に近い。 天井部上面に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．青灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存⅚
14	第12図 図版11	蓋杯 (身)	同上	口径(15.7)	体部は、上外方にのび、中央から外反する。端部は丸い。 底部はやや丸い。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡黄灰色 C．密 D．やや軟質 残存½ 高台は欠損
15	第12図 図版11	同上	同上	口径 14.7 器高 4.8 高台径 11.4 高台高 1.2	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部はやや丸く、底部端にハの字形の高台をもつ。 高台端部は丸く、端部中央で接地する。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡黄灰色 C．密 D．やや軟質 残存⅔
16	第12図	皿	同上	口径(23.4)	体部・口縁部は、短く上外方にのび、端部は丸い。	体部・口縁部内外面、回転ナデ調整。	B．淡黄灰色 C．やや密 D．やや軟質 残存¼
17	第12図	蓋杯 (蓋)	窯内埋土中	口径 15.5 器高 2.9 つまみ径 3.0 つまみ高 0.8	口縁部は、下外方にのび、端部は丸い。 かえりは、内傾し、口縁部より下方にのび接地し、端部は鋭い。 天井部は、丸味をもち、中央に扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅗、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品 ヘラ記号あり

遺物番号	挿図図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
18	第12図	蓋杯(蓋)	窯内埋土中	口径 14.6 器高 2.0 つまみ径 2.5 つまみ高 0.3	口縁部は、内傾し、端部は丸い。 天井部は低く、平らに近い。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗紫色 C．密 D．堅緻 残存⅔
19	第12図	同上	同上	口径 14.9 器高 4.3 つまみ径 3.3 つまみ高 0.7	口縁部は、内傾し、端部は丸い。 天井部は、高く、丸い。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．赤褐色 C．密 D．軟質 完形品
20	第12図	同上	同上	つまみ径 2.8 つまみ高 0.5 他は焼け歪みの為不明	口縁部は、垂直に下り、凹面をなし、端部は鋭い。 天井部は低く、平らで、天井部中央に扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存½ 焼け歪みあり
21	第12図	同上	同上	焼け歪みの為不明	口縁部は、垂直に下り、端部は鋭い。 天井部は、平らである。	天井部外面½、ヘラ切り未調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗紫色 C．やや粗 D．堅緻 定形品 焼け歪みあり
22	第12図	同上	同上	つまみ径 2.1 つまみ高 0.5 他は焼け歪みの為不明	口縁部は、垂直に下り、凹面をなし、端部は丸い。 天井部は、焼け歪みの為、不明。 天井部中央に、上面凹状のつまみをもつ。	天井部外面¾、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．やや密 D．堅緻 残存¾ 焼け歪みあり
23	第12図	同上	同上	口径(13.6)	口縁部は、やや内傾し、端部は鋭い。 天井部は、やや高く、平坦に近い。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存⅓
24	第12図	同上	同上	口径 15.9 器高 3.9 つまみ径 3.4 つまみ高 0.9	口縁部は、内傾し、端部は丸い。 天井部は、高く、丸い。天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ナデ調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．赤褐色 C．やや密 D．軟質 残存⅚
25	第12図	同上	同上	口径(13.2) 器高(2.9) つまみ径 2.7 つまみ高 0.6	口縁部は、垂直に下り、端部はやや鋭い。 天井部は、高く、丸味をもつ。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面¾、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．黒灰色 C．やや密 D．堅緻 残存½
26	第12図	同上	同上	口径 14.3 器高 2.6 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	口縁部は、やや内傾し、端部は丸い。 天井部は高く、丸味をもつ。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅓、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗茶褐色 C．やや密 D．やや軟質 残存¾
27	第12図	同上	同上	口径(14.9) 器高(3.2) つまみ径 3.0 つまみ高 0.7	口縁部は、内傾し、端部は丸い。 天井部は高く、丸味をもつ。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．明褐色 C．密 D．やや軟質 残存¼

遺物番号	挿図図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
28	第12図	蓋杯(身)	竈内埋土中	口径 15.1 器高 3.6	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸い。 底部は、やや丸味をもつ。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．赤褐色 C．密 D．軟質 残存¼
29	第12図	同上	同上	口径 13.1 器高 4.0 高台径 8.6 高台高 0.6	体部・口縁部は、上外方にのび、端部はやや鋭い。 底部は、やや上り、底部端に、高台をもつ。 高台端部は、平面をなし、外側で接地する。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．黄灰色 C．密 D．やや軟質 完形品
30	第12図	同上	同上	口径 12.9 器高 4.9 高台径 9.2 高台高 0.6	体部・口縁部は、やや内彎しながら、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、丸味をもち、やや内側に高台をもつ。 高台端部は、ほぼ平面をなし、内側で接地する。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．赤褐色 C．密 D．軟質 残存½
31	第12図 図版11	同上	同上	口径 14.7 器高 4.0 高台径 11.6 高台高 0.8	体部・口縁部は、内彎しながら、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、底部端にハの字形の高台をもつ。 高台端部は、ほぼ平面をなし、内端部で接地する。	体部外面½、回転ヘラ削り調整後、回転ナデ調整。 底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．密 D．堅緻 残存⅝
32	第13図 図版12	蓋杯(蓋)	灰原	口径 15.1 器高 2.4 つまみ径 2.4 つまみ高 0.5	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、やや高く、平らに近い。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみを持つ。	天井部外面⅗、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅗、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品
33	第13図	同上	同上	口径 15.3 器高 2.1 つまみ径 2.7 つまみ高 0.8	口縁部は、下外方に下り、端部はやや鋭い。 かえりは内傾し、端部は鋭い。 天井部は、やや低く、平らに近い。	天井部外面⅗、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存¾ ヘラ記号あり
34	第13図	同上	同上	口径 14.9 器高 1.6 つまみ径 2.4 つまみ高 0.6	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾し、端部は鋭い。 天井部はやや低く、平坦に近い。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅗、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅗、不定方向のナデ調整。他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品 ヘラ記号あり
35	第13図 図版12	同上	同上	口径 13.8 つまみ径 2.5	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは垂直に下り、端部はやや鋭い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．左方向 B．暗茶褐色 C．粗 D．堅緻 完形品 ヘラ記号あり
36	第13図	同上	同上	口径 15.4 器高 3.4 つまみ径 2.5 つまみ高 0.7	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾した後、端部付近で垂直に下る。端部はやや鋭い。天井部は、やや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅗、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．左方向 B．明褐色 C．密 D．軟質 完形品 ヘラ記号あり
37	第13図	同上	同上	口径 14.7 器高 2.9 つまみ径 2.8 つまみ高 0.6	口縁部は、下外方に下り、端部はやや鋭い。 かえりは内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、やや高く、平らに近い。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡黄灰色 C．密 D．やや軟質 完形品 ヘラ記号あり

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
38	第13図 図版12	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 16.1 器高 3.3 つまみ径 2.9 つまみ高 0.8	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。かえりは内傾し、端部で接地する。かえり端部はやや鋭い。天井部は高く平らに近い。天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡黄灰色 C．密 D．軟質 残存⅚ ヘラ記号あり
39	第13図	同上	同上	口径 18.4 器高 2.5 つまみ径 3.0 つまみ高 0.6	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。かえりは垂直に下り、端部で接地する。かえり端部は鋭い。天井部は、やや高く、平らに近い。天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面¾、回転ヘラ削り調整。天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗茶褐色 C．やや密 D．堅緻 残存½
40	第13図	同上	同上	口径 15.6 器高 4.0 つまみ径 3.5 つまみ高 0.7	口縁部は、下外方に下り、端部はやや鋭い。かえりは内傾し、端部は鋭い。天井部は高く、丸い。 天井部中央に扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。天井部内面⅚、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅚
41	第13図	同上	同上	口径 18.4 器高 2.9 つまみ径 3.2 つまみ高 0.7	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。かえりは内傾し、端部は鋭い。天井部はやや高く、平らに近い。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。天井部内面⅚、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．赤褐色 C．やや粗 D．堅緻 残存⅚
42	第13図 図版12	同上	同上	口径 16.1 器高 3.2 つまみ径 3.1 つまみ高 0.7	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。かえりは内傾し、端部はやや丸い。 天井部は、やや高く、平らに近い。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．内、暗茶褐色 外、赤褐色 C．粗 D．堅緻 残存½
43	第13図	同上	同上	口径 15.6 器高 2.6 つまみ径 3.1 つまみ高 0.5	口縁部は、下外方に下り、端部はやや鋭い。 かえりは内傾した後、垂直に下り、端部で接地する。かえり端部はやや鋭い。 天井部は、やや低く平らに近い。天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．内、灰色 外、黒灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅚
44	第13図 図版12	同上	同上	口径 15.5 器高 3.2 つまみ径 2.7 つまみ高 0.7	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。かえりは内傾し、端部は鋭い。 天井部は、高く、平らに近い。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡黄灰色 C．密 D．堅緻 残存¾ ヘラ記号あり
45	第13図 図版12	同上	同上	口径 14.5 器高 2.6 つまみ径 2.4 つまみ高 0.4	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。かえりは内傾し、端部は鋭い。 天井部は、やや高く、平らに近い。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡茶褐色 C．密 D．堅緻 残存¾
46	第13図 図版12	同上	同上	口径 15.4 器高 3.1 つまみ径 3.2 つまみ高 0.8	口縁部は、下外方に下り、端部はやや丸い。かえりは内傾し、端部は丸い。 天井部はやや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗茶褐色 C．密 D．堅緻 残存¾
47	第13図 図版12	同上	同上	口径 15.5 器高 3.4 つまみ径 2.6 つまみ高 0.7	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。かえりはやや内傾し、端部は鋭い。 天井部はやや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡青灰色 C．粗 D．堅緻 完形品 ヘラ記号あり

遺物番号	挿図図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
48	第13図	蓋杯(蓋)	灰原	口径 15.9 器高 3.4 つまみ径 2.4 つまみ高 1.1	口縁部は、下外方に下り、端部はやや鋭い。 かえりはやや内傾して下り、端部で接地する。 天井部はやや低く、丸味をもつ。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¼、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．左方向 B．淡灰色 C．粗 D．堅緻 残存⅔
49	第13図	同上	同上	口径 15.5 器高 2.7 つまみ径 2.4 つまみ高 0.7	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりはやや内傾し、端部は鋭い。 天井部はやや低く、丸味をもつ。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡青灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品 ヘラ記号あり
50	第13図	同上	同上	口径 14.9 器高 2.8 つまみ径 2.6 つまみ高 0.8	口縁部は、下外方に下り、端部はやや鋭い。 かえりは内傾し、端部は鋭い。 天井部はやや低く、丸味をもつ。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、ヘラ切り後、ナデ調整。 天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．粗 D．堅緻 残存¾ ヘラ記号あり
51	第13図 図版12	同上	同上	口径 15.3 器高 3.1 つまみ径 2.7 つまみ高 1.1	口縁部は、下外方に下り、端部はやや鋭い。 かえりは内傾し、端部は鋭い。 天井部はやや低く、平らに近い。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．やや粗 D．堅緻 完形品 ヘラ記号あり
52	第14図 図版12	同上	同上	口径 15.1 器高 3.1 つまみ径 2.8 つまみ高 0.5	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾し、端部はやや丸い。 天井部は高く、丸味をもつ。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅗、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．やや密 D堅緻 完形品 ヘラ記号あり
53	第14図	同上	同上	口径 15.1 器高 2.6 つまみ径 2.7 つまみ高 0.5	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾し、端部は鋭い。 天井部はやや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡青灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品
54	第14図 図版12	同上	同上	口径 15.5 器高 3.3 つまみ径 2.7 つまみ高 0.8	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾し、端部は鋭い。 天井部はやや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．粗 D．堅緻 残存⅚
55	第14図	同上	同上	口径 14.3 器高 2.2 つまみ径 2.9 つまみ高 0.6	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾した後、垂直に下り、端部は鋭い。 天井部はやや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．密 D．堅緻 残存⅚ ヘラ記号あり
56	第14図	同上	同上	口径 16.4 器高 3.3 つまみ径 3.1 つまみ高 0.7	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾し、端部は鋭い。 天井部はやや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面は、磨滅の為不明。 他は、回転ナデ調整。	B．明褐色 C．密 D．軟質 完形品
57	第14図 図版12	同上	同上	口径 16.3 器高 3.4 つまみ径 3.0 つまみ高 1.1	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾し、端部はやや丸い。 天井部はやや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面は、磨滅の為不明。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．黄灰色 C．密 D．やや軟質 残存⅚

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
58	第14図 図版12	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 16.5 器高 2.6 つまみ径 3.2 つまみ高 0.7	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾し、端部は丸い。 天井部はやや低く、平らに近い。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．密 D．軟質 完形品
59	第14図 図版12	同上	同上	口径 16.5 器高 3.4 つまみ径 3.1 つまみ高 0.9	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾した後、垂直に下り、端部で接地する。かえり端部はやや丸い。 天井部はやや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．赤褐色 C．密 D．軟質 完形品
60	第14図 図版13	同上	同上	口径 17.0 器高 2.1 つまみ径 2.9 つまみ高 0.5	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりはやや内傾し、端部は丸い。 天井部は、やや低く、平らに近い。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅓、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗紫色 C．粗 D．堅緻 残存⅝
61	第14図	同上	同上	口径 16.2 器高 3.5 つまみ径 3.1 つまみ高 0.7	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりはやや内傾し、端部は丸い。 天井部は高く、丸い。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面は、磨滅の為、不明。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．明褐色 C．やや密 D．軟質 完形品
62	第14図 図版13	同上	同上	口径 15.1 器高 3.6 つまみ径 2.7 つまみ高 0.9	口縁部は、下外方に下り、端部はやや鋭い。 かえりはほぼ垂直に下り、端部はやや丸い。 天井部は高く、丸い。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡黄灰色 C．密 D．軟質 完形品 ヘラ記号あり
63	第14図 図版13	同上	同上	口径 14.5 器高 2.2 つまみ径 2.7 つまみ高 0.4	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりはやや内傾し、端部は鋭い。部分的にかえり端部で接地する。 天井部はやや低く、丸味をもつ。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅝
64	第14図	同上	同上	口径 15.7 器高 3.9 つまみ径 2.9 つまみ高 0.9	口縁部は、下外方に下り、端部はやや丸い。 かえりは短く、内傾し、端部は鋭い。 天井部は高く、丸い。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅜、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅜、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．赤褐色 C．密 D．軟質 完形品
65	第14図 図版13	同上	同上	口径 15.0 器高 3.6 つまみ径 2.7 つまみ高 1.1	口縁部は、下外方に下り、端部はやや丸い。 かえりは短く、ほぼ垂直に下り、端部はやや鋭い。 天井部はやや高く、平らに近い。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	調整は磨滅の為不明	B．淡黄色 C．密 D．軟質 完形品
66	第14図 図版13	同上	同上	口径 11.0 器高 1.9	口縁部は、内傾し、端部は丸い。 天井部はやや低く、丸味をもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗赤褐色 C．密 D．堅緻 完形品
67	第14図	同上	同上	口径 11.6 器高 1.4	口縁部は、外傾し、端部は鋭い。 天井部は、低く、平らに近い。	天井部外面⅜、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．密 D．堅緻 残存⅝

遺物番号	挿図図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
68	第14図 図版13	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 11.8 器高 2.2 つまみ径 2.8 つまみ高 0.7	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部はやや鋭い。 天井部は、やや低く、平らに近い。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．黄灰色 C．密 D．やや軟質 残存⅚
69	第14図 図版13	同上	同上	口径 10.8 器高 2.1 つまみ径 2.1 つまみ高 0.9	口縁部は、やや外傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、低く、平らに近い。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．黒灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅔
70	第14図	同上	同上	口径 11.3 器高 2.5 つまみ径 2.6 つまみ高 0.9	口縁部は、垂直に下り、端部は鋭い。 天井部は、やや低く、丸味をもつ。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗茶褐色 C．密 D．堅緻 完形品
71	第14図 図版13	同上	同上	口径 11.1 器高 2.6 つまみ径 2.2 つまみ高 0.5	口縁部は、ほぼ垂直に下り、凹面をなし、端部は鋭い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、上部平坦のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．明褐色 C．密 D．軟質 完形品
72	第14図 図版13	同上	同上	口径 16.6 器高 1.8 つまみ径 3.1 つまみ高 0.5	口縁部は、ほぼ垂直に下り、やや凹面をなし、端部はやや鋭い。 天井部は低く、平らに近い。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．密 D．堅緻 残存⅚ ヘラ記号あり
73	第14図	同上	同上	口径 15.8 器高 2.0 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	口縁部は、外傾し、端部は丸い。 天井部は、低く、平らに近い。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅚
74	第14図	同上	同上	口径 15.9 器高 1.6 つまみ径 2.8 つまみ高 0.8	口縁部は、やや外傾し、端部は鋭い。 天井部は低く、平らである。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．密 D．堅緻 完形品
75	第14図 図版13	同上	同上	口径 16.5 器高 2.6 つまみ径 3.1 つまみ高 0.6	口縁部は、内傾し、やや凹面をなし、端部は鋭い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．内、黄灰色 外、灰色 C．密 D．堅緻 完形品
76	第14図 図版13	同上	同上	口径 16.8 器高 2.3 つまみ径 3.3 つまみ高 0.6	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、やや低く平らに近い。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗紫色 C．やや粗 D．堅緻 残存⅚
77	第14図	同上	同上	口径 16.2 器高 2.6 つまみ径 2.7 つまみ高 0.9	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は鋭い。 天井部はやや低く、平らに近い。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．青灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅔

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
78	第14図 図版13	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 15.1 器高 2.4 つまみ径 2.4 つまみ高 0.6	口縁部は、やや内傾し、端部は鋭い。 天井部はやや低く、平らに近い。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．内、灰色 外、暗灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存¾ ヘラ記号あり
79	第14図 図版13	同上	同上	口径 15.3 器高 3.6 つまみ径 3.2 つまみ高 0.7	口縁部は、やや内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は高く、丸い。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．やや粗 D．堅緻 完形品
80	第14図 図版13	同上	同上	口径 13 7 器高 2.9 つまみ径 2.8 つまみ高 0.9	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部はやや鋭い。 天井部はやや低く、平らに近い。 天井部中央に、上面凸状のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．内、青灰色 外、黒灰色 C．密 D．堅緻 完形品
81	第14図	同上	同上	口径 14.6 器高 2.3 つまみ径 2.8 つまみ高 0.5	口縁部は、内傾し、端部は鋭い。 天井部はやや低く、平らに近い。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．黄灰色 C．密 D．堅緻 完形品
82	第15図 図版14	蓋杯 (身)	同上	口径 14.7 器高 3.9 高台径 10.8 高台高 0.8	体部・口縁部は、やや外反して上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、やや内側にハの字形の高台をもつ。 高台端部は平面をなし、内側で接地する。	体部下端、回転ヘラ削り調整。 底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．内、暗紫色 外、暗灰色 C．密 D．堅緻 完形品
83	第15図 図版14	同上	同上	口径 14.5 器高 5.0 高台径 10.2 高台高 1.1	体部・口縁部は、やや外反して上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、内側にハの字形の高台をもつ。 高台端部はやや丸く、内側で接地する。	体部下端、回転ヘラ削り調整後、回転ナデ調整。 底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．内、黄灰色 外、灰色 C．密 D．堅緻 残存⅘ ヘラ記号あり
84	第15図	同上	同上	口径 14.5 器高 4.6 高台径 11.3 高台高 1.0	体部・口縁部は、やや外反して上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、やや内側にハの字形の高台をもつ。 高台端部は平面をなし、内側で接地する。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．茶灰色 C．密 D．堅緻 残存⅘ ヘラ記号あり
85	第15図	同上	同上	口径 13.1 器高 5.4 高台径 11.0 高台高 0.9	体部・口縁部は、内彎気味に上外方にのび、端部は丸い。体部に、1条の沈線を有する。 底部は平らで、底部端にハの字形の高台をもつ。高台端部は平面をなし、内側で接地する。	体部下端、回転ヘラ削り調整。 底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗茶灰色 C．やや密 D．堅緻 残存¾
86	第15図 図版14	同上	同上	口径 13.9 器高 4.3 高台径 10.5 高台高 1.0	体部・口縁部は、内彎気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、底部端にハの字形の高台をもつ。 高台端部は平面をなし、内側で接地する。	体部下端、回転ヘラ削り調整。 底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．粗 D．堅緻 完形品
87	第15図 図版14	同上	同上	口径 14.5 器高 5.8 高台径 10.9 高台高 1.1	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、深く、底部端にハの字形の高台をもつ。 高台端部は平面をなし、内側で接地する。	底部外面、回転ヘラ削り調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．黄灰色 C．密 D．堅緻 完形品

遺物番号	挿図図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
88	第15図 図版14	蓋杯 (身)	灰原	口径 14.6 器高 4.7 高台径 10.6 高台高 1.0	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、やや内側にハの字形の高台をもつ。 高台端部は平面をなし、内側で接地する。	体部下端、回転ヘラ削り調整。 底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品
89	第15図 図版14	同上	同上	口径 13.4 器高 3.9 高台径 10.3 高台高 0.9	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、やや内側にハの字形の高台をもつ。 高台端部は平面をなし、内側で接地する。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．赤褐色 C．やや密 D．堅緻 残存3/4 ヘラ記号あり
90	第15図 図版14	同上	同上	口径 13.7 器高 6.7 高台径 10.7 高台高 1.3	体部・口縁部は、上外方にのび、端部はやや丸い。 底部は平らで、深く、底部端にハの字形の高台をもつ。 高台端部は平面をなし、内側で接地する。	体部下端、回転ヘラ削り調整。 底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品 ヘラ記号あり
91	第15図	同上	同上	口径 14.9 器高 4.6 高台径 10.7 高台高 0.9	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部はやや平らで、やや内側にハの字形の高台をもつ。 高台端部は平面で、内側で接地する。	体部下端、回転ヘラ削り調整。 底部外面、磨滅の為、不明。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．明褐色 C．密 D．軟質 残存3/4
92	第15図 図版14	同上	同上	口径 15.1 器高 5.9 高台径 11.8 高台高 0.9	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、深く、やや内側にハの字形の高台をもつ。 高台端部は平面で、内側で接地する。	底部外面、回転ヘラ削り調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．内、赤褐色 外、淡褐色 C．密 D．軟質 完形品
93	第15図 図版14	同上	同上	口径 15.0 器高 5.9 高台径 10.9 高台高 1.1	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、深く、やや内側にハの字形の高台をもつ。 高台端部は平面をなし、内側で接地する。	体部下端、回転ヘラ削り調整。 底部外面、磨滅の為不明。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．内、明褐色 外、淡褐色 C．密 D．軟質 完形品
94	第15図	同上	同上	口径 14.6 器高 4.9 高台径 11.5 高台高 1.1	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、やや内側にハの字形の高台をもつ。 高台端部は平面をなし、内側で接地する。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．赤褐色 C．密 D．軟質 残存3/4
95	第15図	同上	同上	口径 13.8 器高 4.5 高台径 10.4 高台高 0.9	体部・口縁部は、やや内彎気味に上外方にのび、端部はやや鋭い。 底部は平らで、やや内側にハの字形の高台をもつ。 高台端部は平面をなし、全面で接地する。	底部外面、回転ヘラ削り調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．内、淡褐色 外、淡茶灰色 C．密 D．やや軟質 残存5/6
96	第15図	同上	同上	口径 9,9 器高 4.4 高台径 7.3 高台高 0.8	体部・口縁部は、やや外反気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、やや内側にハの字形の高台をもつ。 高台端部は平面をなし、内側で接地する。	体部下端、回転ヘラ削り調整後、回転ナデ調整。 底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．内、暗茶灰色 外、暗灰色 C．密 D．堅緻 残存3/4
97	第15図	同上	同上	口径 (9.4) 器高 (4.2) 高台径 (7.4) 高台高 0.9	体部・口縁部は、やや外反気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、やや内側にハの字形の高台をもつ。 高台端部は、平面をなし、内側で接地する。	底部外面、ヘラ切り未調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡灰色 C．密 D．やや軟質 残存1/3

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
98	第15図 図版14	蓋杯 (身)	灰原	口径 9.4 器高 3.9 高台径 7.0 高台高 0.9	体部・口縁部は、やや外反気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、やや内側にハの字形の高台をもつ。 高台端部は、平面をなし、外側で接地する。	底部外面、ヘラ切り未調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗紫色 C．やや粗 D．堅緻 残存¾
99	第15図	同上	同上	口径 13.6 器高 3.5	体部・口縁部は、上外方にのびた後、外反し、端部は丸い。 底部は平らである。	底部外面、ヘラ切り未調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡灰色 C．やや粗 D．やや軟質 残存⅔
100	第15図 図版14	同上	同上	口径 13.6 器高 3.9	体部・口縁部は、上外方にのびた後、やや外反し、端部は丸い。 底部は平らである。	底部外面、ヘラ切り未調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡灰色 C．やや粗 D．やや軟質 完形品 ヘラ記号あり
101	第15図 図版14	同上	同上	口径 12.8 器高 3.3	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らである。	底部外面、ヘラ切り未調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．内、灰色 外、黒灰色 C．やや粗 D．堅緻 完形品
102	第15図	同上	同上	口径 13.4 器高 3.8	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は、やや丸い。 底部は、丸味をもつ。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．内、淡灰色 外、黒灰色 C．密 D．堅緻 残存⅔
103	第15図	同上	同上	口径 14.3 器高 4.0	体部・口縁部は、やや外反して上外方にのび、端部は丸い。 底部は、平らに近い。	底部下端、回転ヘラ削り調整。 底部内面、ヘラ切り後、ナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡黄灰色 C．やや密 D．やや軟質 残存⅚
104	第15図	同上	同上	口径(10.9) 器高(4.2)	体部・口縁部は、やや外反して上外方にのび、端部は丸い。 底部は、丸味をもつ。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡灰色 C．密 D．堅緻 残存⅓ 高台欠損
105	第16図 図版15	蓋杯 (蓋)	同上	口径 16.5 器高 3.6 つまみ径 3.2 つまみ高 1.0	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾し、端部は鋭い。 天井部は、高く、丸味をもつ。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅜、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．明褐色 C．密 D．軟質 完形品 106とセット
106	第16図 図版15	蓋杯 (身)	同上	口径 15.1 器高 4.7 高台径 12.1 高台高 1.1	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、やや内側にハの字形の高台をもつ。 高台端部は、平面をなし、内側で接地する。	体部下端、回転ヘラ削り調整。 底部外面、磨滅の為不明。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．明褐色 C．密 D．軟質 完形品 105とセット
107	第16図 図版15	蓋杯 (蓋)	同上	口径 16.5 器高 3.9 つまみ径 3.4 つまみ高 0.7	口縁部は、ほぼ垂直で、凹面をなし、端部はやや鋭い。 天井部は、高く、丸い。 天井部中央に、上面平坦のつまみをもつ。	天井部外面⅜、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡褐色 C．やや密 D．軟質 完形品 108とセット

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
108	第16図 図版15	蓋杯(身)	灰原	口径 15.0 器高 5.9 高台径 12.3 高台高 1.2	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は深く、平らで、底部端にハの字形の高台をもつ。 高台端部は、平面をなし、内側で接地する。	体部下端、回転ヘラ削り調整。 底部外面、磨滅の為不明。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡褐色 C．やや密 D．軟質 完形品 107とセット
109	第16図	蓋杯(蓋)	同上	口径 11.3 器高 3.5	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 天井部は高く、上面は平らである。	天井部外面1/4、ヘラ切り調整。 他は、回転ナデ調整。	B．黒灰色 C．やや密 D．堅緻 残存5/6 ヘラ記号あり
110	第16図	蓋杯(身)	同上	口径 10.4 器高 3.4 たちあがり高 0.7 受け部径12.6	たちあがりは、内傾し、端部は丸い。 受け部は、上外方にのび、端部は丸い。 底体部は、深く、底部は、平らに近い。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡青灰色 C．やや粗 D．堅緻 完形品 ヘラ記号あり
111	第16図 図版15	同上	同上	口径 15.5 器高 4.6 高台径 11.3 高台高 0.8	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、平らで、やや内側に短いハの字形の高台をもつ。 高台端部は、丸く、中央で接地する。 底部中央に、焼成後、人工的に穿孔された穴がある。	調整は、磨滅の為不明。	B．黄褐色 C．粗 D．軟質 口縁部1/6欠損
112	第16図	同上	同上	口径(13.4) 器高 (3.5)	口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、平らに近い。 底部中央に、焼成後、人工的に穿孔された穴がある。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．粗 D．堅緻 残存1/3
113	第16図	皿	同上	口径(21.0) 器高 (2.8)	体部・口縁部は、上外方に短くのび、端部は丸い。 底部は、浅く、やや凹状である。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．明褐色 C．やや密 D．軟質 残存5/6
114	第16図	短頸壺	同上	口径(11.9) 器高 (9.8) 頸部径(12.1) 最大径(15.7)	口縁部は、短くほぼ垂直にのび、端部は丸い。 体部は、やや丸く、中央よりやや上位で最大径をなす。 底部は平らである。	体部下部・底部、一定方向のヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗茶灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存1/3 ヘラ記号あり
115	第16図 図版15	同上	同上	口径 (7.8) 頸部径 8.0 最大径 12.5	口縁部は、短く垂直にのび、端部付近で、やや外反し、端部はやや鋭い。 体部は丸く、中央で最大径をなす。 底部は平らである。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 底部1/2欠損
116	第16図	壺	同上	最大径 12.5	体部は丸く、中央で最大径をなす。 底部は丸い。	体部外面1/3、カキ目調整。 底部外面、一定方向のヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡青灰色 C．密 D．堅緻 口縁部欠損 ヘラ記号あり
117	第16図	鉢	同上	口径(20.0)	口縁部は、内彎後、短く垂直にのび、端部は鋭い。	残存部の体部外面下端、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	B．黒灰色 C．密 D．堅緻 残存、口縁部1/4

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
118	第16図	鉢	灰原	口径(15.6)	口縁部は、やや内彎し、端部付近で、短く外反する。 端部は、やや鋭い。	残存部内外面、回転ナデ調整。	B．黒灰色 C．密 D．堅緻 残存、口縁部¼
119	第17図 図版15	長頸壺	同上	口径 12.3 最大径 19.5 口頸部径 6.5 口頸部高15.6	口頸部は、外彎して上外方に立ち上り、口縁端部で水平にのび、端部は丸い。口頸部の中央に、浅い1条の沈線を有す。 肩部は下外方に下り、屈曲し、最大径をなす。 体部は下内方に下る。	残存部内外面、回転ナデ調整。	B．灰色 C．密 D．堅緻 体部下半・底部欠損
120	第17図	直口壺	同上	口径 12.7 頸部径 11.8	口頸部は、外反して立ち上り、端部近くで、やや外方に短く張り出し、さらに凹面をなしながら上外方にのび、端部は平面をなす。 肩部は、丸味をもち、下外方へ下る。	体部外面、擬格子タタキ。 体部内面、同心円文。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．やや密 D．堅緻 残存、口頸部・肩部¼
121	第17図	同上	同上	口径 11.9 頸部径 9.7	口頸部は、外反してのび、端部は丸い。 肩部は、丸味をもち、下外方へ下る。	口頸部内外面、回転ナデ調整。 他は、磨滅の為不明。	B．淡褐色 C．密 D．軟質 残存、口頸部・肩部½
122	第17図	同上	同上	口径 11.0 頸部径 9.8	口頸部は、外反して立ち上り、端部近くで、やや外方に短く張り出し、さらに凹面をなしながら上外方にのび、端部は丸い。 肩部は、丸味をもち、下外方へ下る。	体部外面、カキ目調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．やや密 D．堅緻 残存、口頸部・肩部¾
123	第17図	甕	同上	口径(21.6) 頸部径(18.8)	口頸部は、外反して立ち上り、端部近くで、やや外方に張り出し、さらにやや凹面をなしながら上外方にのび、端部はやや丸い。	残存部内外面、回転ナデ調整。	B．灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存、口頸部¼
124	第17図	高杯	同上	焼け歪みの為不明。	杯底部は、平らであり、脚部は、短く下外方に下った後、水平にのび、やや外傾気味に屈曲し、端部は丸い。	杯部外面、ヘラ切り未調整。 杯部内面、不定方向のナデ屈曲調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．やや粗 D．堅緻 杯・体部欠損 焼け歪みあり
125	第17図 図版15	同上	同上	口径 13.2 他は、焼け歪みの為不明。	杯・体部・口縁部は、やや外反し、端部は丸く、底部は平らである。 脚部は、短く下外方に下った後、水平にのび、やや外傾気味に屈曲する。 端部は丸い。	杯・体部下端、回転ヘラ削り調整。 杯・底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．黄灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品 焼け歪みあり
126	第17図	同上	同上	脚部径 8.9 脚部高 3.6	脚部は、やや短く下外方に下った後、水平にのび、外傾気味に屈曲する。 端部は丸い。	杯・底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整	B．淡青灰色 C．やや密 D．堅緻 杯部欠損
127	第17図	同上	同上	口径 13.1 器高 7.5 脚部径 9.5 脚部高 3.9	杯・体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らに近い。 脚部は、やや短く下外方に下った後、やや水平にのび、外傾気味に屈曲する。 端部は丸い。	杯・体部下端・底部、回転ヘラ削り調整。 内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．青灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存¾

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
128	第17図	高杯	灰原	口径 16.2 器高 8.7 脚部径 10.3 脚部高 5.0	杯・体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らに近い。 脚部はやや長く、下外方に下った後、水平にのび、ほぼ垂直に屈曲し、端部は丸い。	杯・体部下端・底部、回転ヘラ削り調整。 内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．明褐色 C．やや密 D．軟質 完形品
129	第17図	同上	同上	焼け歪みの為不明	杯部・脚部、焼け歪みの為不明。	杯・内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．粗 D．堅緻 杯部、口縁部1/3欠損焼け歪みあり
130	第17図 図版15	同上	同上	口径(15.4) 器高 8.0 脚部径 (9.5) 脚部高 4.3	杯・体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、平らに近い。 脚部は、やや高く、下外方に下り、やや外傾気味に屈曲する。 端部は丸い。	杯・底部、回転ヘラ削り調整。 内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整	A．右方向 B．暗紫色 C．やや粗 D．堅緻 杯部1/3、脚端部1/3欠損

4 号窯

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	第22図	蓋杯(蓋)	窯内上層床面	口径(14.8)	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾し、端部で接地する。 かえり端部は丸い。 天井部は、やや低く、平らに近い。	天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．やや密 D．堅緻 残存1/4
2	第22図	同上	同上	口径(14.9)	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは、ほぼ垂直に下り、端部で接地する。 天井部は、やや低く、平らに近い。	天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面1/2、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 残存1/3
3	第22図	同上	同上	口径(15.5)	口縁部は、やや外傾し、凹面をなし、端部は丸い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。	天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．密 D．堅緻 残存1/4
4	第22図 図版16	同上	同上	口径 16.4 器高 2.4 つまみ径 2.4 つまみ高 0.5	口縁部は、やや外傾し、端部は丸い。 天井部は、やや低く、平らに近い。 天井部中央に、上面凹状のつまみをもつ。	天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。 天井部内面1/2、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．密 D．堅緻 残存2/3
5	第22図 図版16	同上	同上	口径 15.4 器高 1.8 つまみ径 3.0 つまみ高 0.7	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は、低く平らである。 天井部中央に、上面凹状のつまみをもつ。	天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．粗 D．堅緻 残存3/4
6	第22図	同上	同上	口径(16.7)	口縁部は、やや外傾し、端部は丸い。 天井部は、やや低く、平らに近い。	天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。 天井部内面2/3、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．黄灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存1/4

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
7	第22図	蓋杯(身)	竪穴上層床面	口径 16.5 器高 3.7 高台径 13.2 高台高 0.8	体部・口縁部は、内彎気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は浅く、平らに近く，内側にハの字形の高台をもつ。 高台端部は、やや丸く、外側で接地する。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 残存2/3
8	第22図 図版16	同上	同上	口径 16.2 器高 4.0 高台径 13.9 高台高 0.9	体部・口縁部は、内彎気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は浅く、平らに近く、内側にハの字形の高台をもつ。 高台端部は、やや丸く、外側で接地する。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存1/6
9	第22図	甕	同上		口縁部は、外反し、上外方にのび、端部付近で外方に張り出し、さらに凹面を成しながら上外方にのびる。 端部は平らで、口縁部中央に、波状文を有し、その上下に沈線をもつ。	残存部内外面、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存、口縁部1/6
10	第22図 図版16	蓋杯(蓋)	竪穴下層床面	口径 14.8 器高 3.4 つまみ径 2.7 つまみ高 1.1	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾し、端部は鋭い。 天井部は、やや低く、平らに近い。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面1/2、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．赤褐色 C．やや粗 D．やや軟質 残存1/3
11	第22図 図版16	同上	同上	口径(14.5) 器高 (2.1)	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾し、端部は鋭い。 天井部は、やや低く、平らに近い。	天井部外面1/2、ヘラ切り後、ナデ調整。 天井部内面3/4、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．内、茶褐色 外、赤褐色 C．やや密 D．堅緻 残存1/3
12	第22図	同上	同上	口径(14.9)	口縁部は、下外方に下り、端部はやや鋭い。 かえりは内傾し、端部は鋭い。 天井部は、やや低く、平らに近い。	天井部外面、残存部端、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	B．赤褐色 C．やや密 D．軟質 残存、口縁部1/4
13	第22図	同上	同上	口径(15.5)	口縁部は、下外方に下り、端部はやや鋭い。 かえりは内傾し、端部は鋭い。 天井部は、やや低く、平らに近い。	残存部内外面、回転ナデ調整。	B．赤褐色 C．やや密 D．軟質 残存、口縁部1/4
14	第22図 図版16	同上	同上	口径 13.9 器高 3.0 つまみ径 2.8 つまみ高 0.9	口縁部は、下外方に下り、端部はやや丸い。 かえりは内傾し、端部は鋭い。 天井部は、やや低く、平らに近い。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。 天井部内面3/4、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．赤褐色 C．やや密 D．堅緻 残存5/6 ヘラ記号あり
15	第22図	同上	本体東側	口径(14.5) 器高 (2.2) つまみ径 2.4 つまみ高 0.6	口縁部は、水平気味に下外方に下り、端部は丸い。 かえりは垂直に下り、端部は鋭い。 天井部は、やや低く、平らに近い。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。 天井部内面1/2、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．粗 D．堅緻 残存1/4
16	第22図 図版16	小形壺	灰原南北ベルト中	口径 6.3 器高 4.8 頸部径 5.4 最大径 6.6	口頸部は、くの字に曲り、上外方にのび、端部は丸い。 底体部は、丸味をもつ。	体部外面1/3、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡褐色 C．密 D．軟質 完形品

遺物番号	挿図図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
17	第22図	蓋杯(蓋)	灰原南北ベルト中	口径(14.8)	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは、内傾し、端部で接地する。 かえり端部は、鋭い。 体部は、やや低く、平らに近い。	天井部外面⅗、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅗、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存、口縁部¼
18	第22図	同上	同上	口径(14.7)	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは、ほぼ垂直に下り、端部で接地する。かえり端部は、やや丸い。 天井部は、やや低く、平らに近い。	調整は、磨滅の為不明。	B．明褐色 C．やや粗 D．軟質 残存、口縁部¼
19	第22図	同上	同上	口径(14.6) 器高(3.0) つまみ径 2.6 つまみ高 0.8	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は、やや低く、平らに近い。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅗、ヘラ切りナデ調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．内、青灰色 外、黒灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存¼
20	第22図	同上	同上	口径(14.5)	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾し、端部で接地する。 かえり端部は、やや鋭い。 天井部は、やや低く、平らに近い。	天井部外面⅓、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅓、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．茶灰色 C．密 D．堅緻 残存¼ つまみ欠損
21	第22図	同上	同上	口径(13.1)	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾し、端部で接地する。 かえり端部は、鋭い。 天井部は、やや低く、平らに近い。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．密 D．堅緻 残存¼
22	第22図	同上	同上	口径(12.4)	口縁部は、下外方に下り、端部はやや丸い。 かえりは内傾した後、垂直に下り、端地で接地する。 かえり端部は、やや鋭い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。	天井部外面⅓、ヘラ切り後ナデ調整。 天井部内面⅓、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗茶褐色 C．やや密 D．堅緻 残存⅓
23	第22図	同上	同上	口径(12.7)	口縁部は、水平気味に下外方に下り、端部は丸い。 かえりは垂直に下り、端部で接地する。 かえり端部は、やや鋭い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。	天井部外面⅔、ヘラ切り後ナデ調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡灰色 C．やや密 D．やや軟質 残存¼ ヘラ記号あり
24	第22図	同上	同上	口径(13.0)	口縁部は、水平気味に下外方に下り、端部は丸い。 かえりは垂直に下り、端部で接地する。 かえり端部は、やや鋭い。 天井部は、やや低く、平らに近い。	天井部外面⅗、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 残存¼
25	第22図	同上	同上	口径 14.3	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは垂直に下り、端部で接地する。 かえり端部は、やや鋭い。 天井部は、やや低く、平らに近い。	天井部外面⅗、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右回り B．灰色 C．やや密 D．堅緻 残存¼ ヘラ記号あり
26	第22図	高杯	同上	口径(10.4)	体部・口縁部は、ほぼ垂直にのび、端部は丸い。 体部下位に、2条の沈線を有す。	残存部内外面、回転ナデ調整。	B．淡灰色 C．やや密 D．やや軟質 残存¼

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
27	第23図	蓋杯(蓋)	灰原東西ベルト中	口径(15.0)	口縁部は、下外方にのび、端部はやや鋭い。 かえりは内傾し、端部は鋭い。 体部は、やや高く、丸みをもつ。	天井部外面⅗、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．やや密 D．やや軟質 残存¼ ヘラ記号あり
28	第23図	同上	同上	口径(15.1)	口縁部は、水平気味に下外方に下り、端部は丸い。 かえりは、ほぼ垂直に下り、端部で接地する。 端部はやや丸い。 天井部は、やや低く、平らに近い。	天井部外面⅗、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 残存¼
29	第23図	同上	同上	口径(10.8) 器高 3.3 つまみ径1.4 つまみ高0.9	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりはやや内傾し、端部で接地する。 端部は丸い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、宝珠つまみをもつ。	天井部外面⅓、ヘラ切り後ナデ調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存½ 少し焼け歪みあり
30	第23図 図版16	同上	同上	口径(10.1) 器高 3.2 つまみ径1.4 つまみ高0.8	口縁部は、下外方に下り、端部はやや丸い。 かえりは短く内傾し、端部はやや丸い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、宝珠つまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．明褐色 C．やや密 D．やや軟質 残存½
31	第23図	同上	同上	口径 10.7 器高 2.6	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。	天井部外面⅔、ヘラ切り未調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．明褐色 C．やや密 D．やや軟質 残存¾
32	第23図	同上	同上	口径(9.9) 器高(3.4)	口縁部は、やや外傾して下り、端部は丸い。 天井部は、高く、丸い。	天井部外面⅓、ヘラ切り未調整。 天井部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅓
33	第23図	同上	同上	口径(11.4)	口縁部は、外傾して下り、端部は丸い。 天井部は、高く、丸い。	残存部内外面、回転ナデ調整。	B．灰色 C．密 D．堅緻 残存¼
34	第23図 図版16	同上	同上	口径 10.2 器高 2.9	口縁部は、外傾して下り、端部は丸い。 天井部は、高く、上面は平らである。	天井部外面½、ヘラ切り未調整。 天井部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．密 D．堅緻 残存⅔
35	第23図	同上	同上	口径(12.3)	口縁部は、外傾して下り、端部は丸い。 天井部は、高く、上面は平らである。	天井部外面½、ヘラ切り未調整。 天井部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．内、灰色 外、黒灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存⅓
36	第23図	蓋杯(身)	同上	口径(9.7) たちあがり高 0.2 受け部径 (11.5)	たちあがりは、短く内傾し、端部は丸い。 受け部は、上外方にのび、端部は丸い。 底体部は、やや深く、丸い。	底部外面、ヘラ切り未調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡褐色 C．粗 D．軟質 残存⅓

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
37	第23図	蓋杯（身）	灰原東西ベルト中	口径(10.2) たちあがり高 0.5 受け部径 (12.5)	たちあがりは、内傾した後、垂直にのび、端部はやや鋭い。 受け部は、上外方にのび、端部はやや鋭い。 底体部は、やや深く、底部は平らである。	底部外面、ヘラ切り未調整。 底部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡黄灰色 C．粗 D．堅緻 残存½
38	第23図	同上	同上	口径(9.4) たちあがり高 0.4 受け部径 (11.2)	たちあがりは、内傾した後、垂直にのび、端部はやや鋭い。 受け部は、上外方にのび、端部はやや鋭い。 底部は、やや深く、底部は丸い。	底部外面、ヘラ切り未調整。 底部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．内、暗黄灰色外、灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存⅓
39	第23図	同上	同上	口径 8.9 たちあがり高 0.5 受け部径10.9	たちあがりは、内傾し、端部は丸い。 受け部は、上外方にのび、端部はやや鋭い。 底部は、やや深く、底部は平らである。	底部外面、ヘラ切り未調整。 底部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡褐色 C．やや密 D．軟質 底部欠損
40	第23図	同上	同上	口径 10.1	体部・口縁部は、ほぼ垂直にのび、端部は丸い。 底部は、やや深く、平らである。	底部外面、ヘラ切り未調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．青灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存⅔
41	第23図	皿	同上	口径(24.0)	体部・口縁部は、やや内彎気味に上外方にのび、端部はやや丸い。 底部は浅く、平らである。	底部外面、ヘラ切り未調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗茶褐色 C．粗 D．堅緻 残存¼
42	第23図	同上	同上	口径(27.7)	体部・口縁部は、やや内彎気味に上外方にのび、端部は平らである。	残存部内外面、回転ナデ調整。	B．紫灰色 C．粗 D．堅緻 残存、口縁部¼
43	第23図 図版16	短頸壺	同上	口径 8.7 器高 9.6 頸部径 9.4 最大径 13.0	口縁部は、短く、ほぼ垂直にのび、端部は丸い。 底体部は丸く、体部中央に最大径をなす。	底体部⅚、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．やや粗 D．堅緻 口縁部¼欠損 ヘラ記号あり
44	第23図	高杯	同上	口径(12.6)	杯・体部・口縁部は、内彎気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は、やや浅く、丸い。	杯、底体部⅓、回転ヘラ削り調整。 底部内面⅓、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．黒灰色 C．密 D．堅緻 残存、杯部⅓
45	第23図	平瓶	同上	口径 6.7 頸部径 4.9	口頸部は、上外方にのび、端部は丸い。 体部は丸味をもつ。	体部外面、カキ目調整後、回転ナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．茶灰色 C．密 D．堅緻 体部下半欠損
46	第23図	壺	同上	口径(11.5) 頸部径 (8.9)	口頸部は、上外方にのび、端部は丸い。	残存部内外面、回転ナデ調整。	B．赤褐色 C．密 D．軟質 残存⅓

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
47	第23図 図版16	甕	灰原東西ベルト中	口径(20.4) 頸部径(17.5)	口縁部は、外反気味に上外方にのび、端部下で肥厚し、断面長方形を呈す。 端部は外傾し、平面をなす。 肩部は、丸味をもち、下外方に下る。	体部外面、擬格子タタキ。 体部内面、同心円文。 他は、回転ナデ調整。	B．淡褐色 C．やや密 D．軟質 残存、口縁部½ 体部上半⅓
48	第23図	同上	同上	口径(23.8) 頸部径(19.3)	口縁部は、外反気味に上外方に上った後、下外方に短く下り、再び上外方にのびる。 端部は、平面をなす。 肩部は、丸味をもち、下外方に下る。	体部外面(残存部)、平行タタキ後、回転ナデ調整。 体部内面（残存部)、同心円文後、回転ナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗茶褐色 C．やや粗 D．堅緻 残存、口縁部⅓ 体部上部¼
49	第24図	蓋杯（蓋）	灰原上層	口径(13.0)	口縁部は、水平気味に下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾し、端部で接地する。 かえり端部は鋭い。 天井部は、やや低く、平らに近い。	天井部外面⅓、回転ヘラ削り調整。 天井部内面は不明。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．黒灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅓
50	第24図	同上	同上	口径 14.3 器高 3.5 つまみ径 2.3 つまみ高 0.9	口縁部は、下外方に下り、端部はやや鋭い。 かえりは長く、内傾し、端部で接地する。かえり端部は、やや鋭い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅗、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．黄灰色 C．やや粗 D．軟質 完形品 ヘラ記号あり
51	第24図	同上	同上	口径 (9.0)	口縁部は、ほぼ水平に下外方に下り、端部は鋭い。 かえりは厚く、極端に内傾し、端部で接地する。かえり端部は丸い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。	天井部外面上端（残存部)、ヘラ切り未調整。 他は、磨滅の為不明。	B．淡灰色 C．粗 D．軟質 残存⅓ ヘラ記号あり
52	第24図 図版16	同上	同上	口径 (9.9) 器高 2.7	口縁部は、下外方に下り、端部は、やや鋭い。 かえりは内傾し、端部で接地する。 かえり端部は、やや鋭い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、つまみ痕あり。	天井部外面⅗、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅗、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．赤褐色 C．密 D．軟質 残存½
53	第24図	同上	同上	口径 (9.8)	口縁部は、下外方に下り、端部は、やや鋭い。 かえりは内傾し、端部で接地する。 かえり端部は、やや鋭い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。	天井部外面上部（残存部)、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅓
54	第24図	蓋杯（身）	同上	口径(10.2) 器高 3.4	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は深く、平らに近い。	底部外面、ヘラ切り後ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡灰色 C．やや密 D．やや軟質 残存½
55	第24図	同上	同上	口径(10.2) 器高 3.7	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は深く、平らである。	底部外面、ヘラ切り後ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡灰色 C．密 D．やや軟質 残存½
56	第24図	同上	同上	口径 13.0 器高 4.8 高台径 8.5 高台高 1.0	体部・口縁部は、外反気味に上外方にのび、端部はやや丸い。 底部は平らで、やや内側にハの字形の高台をもつ。 高台端部は、ほぼ平面をなし、全面で接地する。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡青灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存⅔ ヘラ記号あり

遺物番号	挿図図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
57	第24図 図版16	皿	灰原上層	口径(17.8) 器高(3.5)	体部・口縁部は、短く上外方にのび、端部は、丸味をもつ。 底部は浅く、平らであり、器壁は厚い。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡茶灰色 C．やや粗 D．やや軟質 残存⅓
58	第24図 図版17	蓋杯(蓋)	灰原下層	口径 10.7 器高 3.2	口縁部は、外傾気味に下り、端部は丸い。 天井部は、やや高く、上面は平らである。	天井部外面½、ヘラ切り後、ナデ調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗紫色 C．やや粗 D．堅緻 残存⅔ ヘラ記号あり
59	第24図	同上	同上	口径(10.4) 器高(2.8)	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部はやや鋭い。 天井部は、やや高く、上面は平らである。	天井部外面½、ヘラ切り後、ナデ調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．密 D．堅緻 残存⅓
60	第24図 図版17	同上	同上	口径(10.6) 器高 3.4	口縁部は、外傾気味に下り、端部は丸い。 天井部は高く、丸い。	天井部外面⅓、ヘラ切り後、ナデ調整。 天井部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．黒灰色 C．やや密 D．堅緻 口縁部½欠損
61	第24図 図版17	同上	同上	口径 10.7 器高 3.2	口縁部は、外傾気味に下り、端部は丸い。 天井部は高く、丸い。	天井部外面½、ヘラ切り後、ナデ調整。 天井部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．黒灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅔ ヘラ記号あり
62	第24図	同上	同上	口径(10.4) 器高 3.2 つまみ径1.4 つまみ高1.1	口縁部は、下外方に下り、端部はやや鋭い。 かえりは内傾し、端部で接地する。 かえり端部は、やや鋭い。 天井部は、やや低く、丸味をもつ。 天井部中央に、宝珠つまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面、磨滅の為、不明。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡黄灰色 C．密 D．軟質 残存½ ヘラ記号あり
63	第24図	蓋杯(身)	同上	口径 10.2 器高 3.9	口縁部・体部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、深く、丸味をもつ。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．赤褐色 C．やや粗 D．やや軟質 残存⅔
64	第24図	同上	同上	口径(8.8) 器高 3.9	体部・口縁部は、内彎気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は深く、平らに近い。	底部外面、ヘラ切り未調整。 底部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗黄灰色 C．やや粗 D．やや軟質 残存½
65	第24図 図版17	同上	同上	口径 9.6 たちあがり高 0.5 受け部径11.8	たちあがりは、内傾した後、垂直にのび、端部は、やや鋭い。 受け部は、ほぼ水平にのび、端部は丸い。 底体部は、やや深く、丸味をもつ。	底部外面、ヘラ切り未調整。 底部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗青灰色 C．粗 D．堅緻 底部½欠損 ヘラ記号あり
66	第24図 図版17	同上	同上	口径 10.1 器高 3.3 たちあがり高 0.4 受け部径12.1	たちあがりは、内傾し、端部は丸い。 受け部は、ほぼ水平にのび、端部は丸い。 底体部は、やや深く、丸味をもつ。	底体部外面⅓、回転ヘラ削り調整。 底体部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．青灰色 C．密 D．堅緻 完形品 ヘラ記号あり

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
67	第24図 図版17	蓋杯 (身)	灰原 下層	口径 9.5 たちあがり高 0.7 受け部径11.6	たちあがりは、内傾した後、垂直にのび、端部は、やや鋭い。 受け部は、ほぼ水平にのび、端部は、やや鋭い。 底体部は、やや深く、丸みをもつ。	底部外面ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．茶灰色 C．やや密 D．堅緻 底部½欠損
68	第24図	高杯	同上	脚部径 7.2 脚部高 3.5	脚部は短く、下外方に下り、端部は鋭い。	残存部内外面、回転ナデ調整。	B．黒灰色 C．やや粗 D．堅緻 杯部欠損
69	第24図	同上	同上	脚部径 6.9 脚部高 5.1	脚部は、やや長く下外方に下り、端部は内傾し、鋭い。 脚部中央に、浅い2条の沈線を有し、基部は細い。	残存部内外面、回転ナデ調整。	B．黒灰色 C．密 D．堅緻 残存、脚部
70	第24図 図版17	短頸壺	同上	口径 (8.9) 器高 (7.3) 頸部径 (8.9) 最大径(11.4)	口縁部は、短くほぼ垂直にのび、端部は丸い。 体部に、3条の沈線を有し、体部上位に最大径をもつ。 平部は、丸い。	底体部外面½、一定方向のヘラ削り調整。 底体部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存½ ヘラ記号あり
71	第24図	甕	同上	口径(21.3) 頸部径(16.5)	口頸部は、外反してのび、端部近くで、やや下外方に張り出し、さらに凹面をなしながら、上外方にのび、端部は凹面をなす。 肩部は、下外方に下る。	体部外面（残存部）、平行タタキ。 体部内面下端（残存部）、同心円文。 他は、回転ナデ調整。	B．暗褐色 C．やや粗 D．堅緻 残存、口頸部⅓
72	第24図	同上	同上	口径(20.5)	口頸部は外反し、端部近くで、やや外方に張り出し、さらに凹面をなしながら、上外方にのびる。 端部は凹面をなす。	残存部内外面、回転ナデ調整。	B．灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存、口頸部⅓
73	第25図	蓋杯 (蓋)	灰原	口径(14.6) 器高 (2.5) つまみ径2.2 つまみ高0.8	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾し、端部で接地する。 かえり端部は、やや鋭い。 天井部は、やや低く、平らに近い。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．青灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅓ ヘラ記号あり
74	第25図 図版17	同上	同上	口径 14.2 器高 2.4 つまみ径 2.1 つまみ高 0.5	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾し、端部で接地する。 かえり端部は、やや鋭い。 天井部は、やや低く、平らに近い。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品
75	第25図	同上	同上	口径(15.4) 器高 (3.6) つまみ径2.2 つまみ高0.9	口縁部は、下外方に下り、端部はやや鋭い。 かえりは内傾し、端部は鋭い。 天井部は、高く、上面は平らである。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡黄灰色 C．やや密 D．やや軟質 残存⅓ ヘラ記号あり
76	第25図	同上	同上	口径 13.5 器高 4.0 つまみ径 1.6 つまみ高 0.9	口縁部は、下外方に下り、端部は、やや鋭い。 かえりは内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は高く、丸い。 天井部中央に、宝珠つまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡茶褐色 C．やや密 D．堅緻 残存⅔ ヘラ記号あり

遺物番号	挿図図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
77	第25図	蓋杯(蓋)	灰原	口径(10.6) 器高(2.7) つまみ径1.3 つまみ高0.6	口縁部は、下外方に下り、端部は鋭い。 かえりは内傾した後、垂直に下り、端部で接地する。 かえり端部はやや鋭い。 天井部は、やや低く、丸味をもつ。	天井部外面⅔、カキ目調整。 天井部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．青灰色 C．やや密 D．堅緻 残存½
78	第25図 図版17	同上	同上	口径 13.2 器高 2.1	口縁部は、下外方に下り、端部はやや鋭い。 かえりは内傾し、端部で接地する。 かえり端部はやや鋭い。 天井部は、やや低く、平らに近い。	天井部外面½、ヘラ切り後、ナデ調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡青灰色 C．密 D．堅緻 口縁部⅙欠損
79	第25図 図版17	同上	同上	口径 10.2 器高 2.3	口縁部は、水平気味にのび、端部はやや鋭い。 かえりはほぼ垂直に下り、端部は鋭い。 天井部は、やや低く、平らに近い。	天井部外面⅓、ヘラ切り未調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡黄灰色 C．やや密 D．やや軟質 完形品
80	第25図 図版17	同上	同上	口径 10.9 器高 2.4	口縁部は、下外方に下り、端部はやや鋭い。 かえりは垂直気味に下り、端部で接地する。かえり端部はやや鋭い。 天井部は、やや低く、平らに近い。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品 ヘラ記号あり
81	第25図 図版17	同上	同上	口径 10.0 器高 3.0	口縁部は、下外方に下り、端部はやや鋭い。 かえりは内傾し、端部で接地する。 かえり端部はやや鋭い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。	天井部外面⅓、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡灰色 C．やや粗 D．軟質 完形品 ヘラ記号あり
82	第25図 図版17	同上	同上	口径 11.4 器高 3.0	口縁部は、下外方に下り、端部はやや鋭い。 かえりは長く、内傾し、端部で接地する。かえり端部はやや鋭い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．やや密 D．堅緻 口縁部½欠損 ヘラ記号あり
83	第25図 図版17	同上	同上	口径 10.0 器高 2.8	口縁部は、下外方に下り、端部はやや鋭い。 かえりは内傾し、端部で接地する。 かえり端部はやや鋭い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。	天井部外面⅓、ヘラ切り後、ナデ調整。 天井部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．黄灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品
84	第25図 図版18	同上	同上	口径(10.5) 器高 4.2	口縁部は、外傾し、端部は丸い。 天井部は、高く、上面は平らである。	天井部上面、ヘラ切り未調整。 天井部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡褐色 C．やや密 D．軟質 欠損、口縁部⅔ ヘラ記号あり
85	第25図 図版18	同上	同上	口径 10.4 器高 3.5	口縁部は、やや内傾し、端部は丸い。 天井部は、やや高く、上面は平らである。	天井部上面、ヘラ切り未調整。 天井部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．粗 D．堅緻 残存⅔ ヘラ記号あり
86	第25図 図版18	同上	同上	口径 11.3 器高 3.5	口縁部は、やや外傾し、端部は丸い。 天井部は、高く、上面は平らである。	天井部上面、ヘラ切り未調整。 天井部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．密 D．やや軟質 残存¾ ヘラ記号あり

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
87	第25図 図版18	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 10.5 器高 3.2	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。	天井部上面、ヘラ切り未調整。 天井部中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡黄灰色 C．密 D．やや軟質 残存⅝ ヘラ記号あり
88	第25図 図版18	同上	同上	口径 10.7 器高 3.6	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。	天井部上面、ヘラ切り未調整。 天井部中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡黄灰色 C．やや密 D．軟質 完形品
89	第25図 図版18	同上	同上	口径 10.6 器高 3.9	口縁部は、外傾気味に下り、端部は丸い。 天井部は、高く、丸い。	天井部外面½、ヘラ切り未調整。 天井部中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡黄灰色 C．やや密 D．軟質 残存⅝
90	第25図 図版18	同上	同上	口径 11.0 器高 3.9	口縁部は、外傾気味に下り、端部は丸い。 天井部は、高く、丸い。	天井部外面⅓、ヘラ切り未調整。 天井部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡褐色 C．やや密 D．やや軟質 完形品
91	第25図	同上	同上	口径 10.5 器高 3.8	口縁部は、外傾気味に下り、端部は丸い。 天井部は高く、上面は平らである。	天井部上面、ヘラ切り未調整。 天井部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．赤褐色 C．密 D．軟質 残存½
92	第25図 図版18	同上	同上	口径 10.4 器高 3.1	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は、やや高く、上面は平らである。	天井部上面、ヘラ切り未調整。 天井部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．粗 D．堅緻 完形品 ヘラ記号あり
93	第25図 図版18	同上	同上	口径 10.5 器高 3.5	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は、やや高く、上面は平らである。	天井部上面、ヘラ切り未調整。 天井部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品 ヘラ記号あり
94	第25図	同上	同上	口径 11.0 器高 3.6	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。	天井部上面、ヘラ切り未調整。 天井部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．密 D．堅緻 口縁部⅔欠損 ヘラ記号あり
95	第25図	同上	同上	口径(10.4)	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は、やや高く、上面は平らである。	天井部上面、ヘラ切り未調整。 天井部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 残存½
96	第26図	蓋杯 (身)	同上	口径 13.4 器高 4.0 高台径 9.1 高台高 0.8	体部・口縁部は、外傾気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、内側にハの字形の高台をもつ。高台端部は、平面をなし、内側で接地する。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．密 D．堅緻 残存⅔

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
97	第26図 図版18	蓋杯 (身)	灰原	口径(13.0) 器高 4.5 高台径 7.7 高台高 0.7	体部・口縁部は、外彎気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、内側にハの字形の高台をもつ。 高台端部は、平面をなし、内側で接地する。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．密 D．堅緻 残存½
98	第26図	同上	同上	口径(13.2) 器高 4.0 高台径 7.3 高台高 1.0	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部はやや浅く、平らで、内側にハの字形の高台をもつ。 高台端部は、ほぼ平面をなし、内側で接地する。	体部外面下位、回転ヘラ削り調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．密 D．堅緻 残存½
99	第26図	同上	同上	口径(12.1) 器高 3.6	体部・口縁部は、外彎気味に上外方にのび、端部は丸い。 体部中央に、2条の沈線を有す。 底部はやや深く、平らである。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．粗 D．堅緻 残存½
100	第26図 図版18	同上	同上	口径 9.9 器高 4.3	体部・口縁部は、垂直気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は、深く、丸味をもつ。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡褐色 C．やや密 D．やや軟質 残存⅔
101	第26図 図版18	同上	同上	口径 9.2 器高 3.5	口縁部は、外彎気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は、深く、平らである。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．茶灰色 C．密 D．堅緻 完形品
102	第26図 図版18	同上	同上	口径 9.6 器高 4.0	口縁部は、外彎気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は、深く、平らである。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡黄褐色 C．やや密 D．軟質 残存⅔
103	第26図 図版18	同上	同上	口径 9.6 器高 3.6	口縁部は、外彎気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は、深く、平らである。	底部外面、ヘラ切り未調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗褐色 C．やや粗 D．堅緻 完形品 ヘラ記号あり
104	第26図 図版19	同上	同上	口径 8.1 器高 3.2 たちあがり高 0.3 受け部径10.5	たちあがりは内傾し、端部はやや丸い。 受け部は、上外方にのび、端部は丸い。 底体部は、やや浅く、丸味をもつ。	底部外面、ヘラ切り未調整。 底部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．赤褐色 C．やや粗 D．堅緻 完形品 ヘラ記号あり
105	第26図	同上	同上	口径 8.6 器高 2.8 たちあがり高 0.4 受け部径10.8	たちあがりは内傾し、端部は鋭い。 受け部は、ほぼ水平にのび、端部はやや丸い。 底体部は、浅く、やや丸味をもつ。	底体部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 底部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅚ ヘラ記号あり
106	第26図 図版19	同上	同上	口径 9.2 器高 3.3 たちあがり高 0.6 受け部径11.3	たちあがりは、内傾し、端部は丸い。 受け部は、ほぼ水平にのび、端部は丸い。 底体部は、深く、底面は、平らである。	底部外面、ヘラ切り未調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．青灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品 ヘラ記号あり

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
107	第26図 図版19	蓋杯(身)	灰原	口径 9.8 器高 3.7 たちあがり高 0.7 受け部径12.0	たちあがりは、内傾し、端部はやや鋭い。 受け部は、ほぼ水平にのび、端部は丸い。 底体部は、やや深く、丸味をもつ。	調整は、磨滅の為不明。	B．明褐色 C．やや密 D．軟質 完形品 ヘラ記号あり
108	第26図 図版19	同上	同上	口径 9.6 器高 3.0 たちあがり高 0.3 受け部径11.8	たちあがりは、内傾し、端部は丸い。 受け部は、上外方にのび、端部は丸い。 底体部は、やや深く、底面は、平らである。	底部外面、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品 ヘラ記号あり
109	第26図 図版19	同上	同上	口径 10.6 器高 3.3 たちあがり高 0.7 受け部径13.0	たちあがりは、内傾した後、垂直にのび、端部はやや丸い。 受け部は、上外方にのび、端部はやや鋭い。 底体部は、やや深く、底面は平らである。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗褐色 C．粗 D．堅緻 残存⅘ ヘラ記号あり
110	第26図 図版19	蓋	同上	口径 26.2 器高 5.0 つまみ径 3.8 つまみ高 1.2	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾し、端部は丸い。 天井部は、やや高く、上面は、平らである。 天井部中央に、上面凹状のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 口縁部⅙欠損
111	第26図	皿	同上	口径(24.2)	体部・口縁部は、短く上外方にのび、端部は、平面をなす。 底部は、やや深く、平らに近い。	体部外面下端、回転ヘラ削り調整。 底部外面、ヘラ切り未調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．黒灰色 C．粗 D．堅緻 残存¼
112	第26図 図版19	高杯	同上	口径 9.4 器高 8.7 脚部径 6.9 脚部高 4.8	杯・体部・口縁部は、ほぼ垂直に上り、端部は丸い。 底部は、深く、丸味をもつ。 脚部は、やや長く下外方にのび、端部近くで、短く水平にのび、端部は、凹面をなす。 杯部中央に、1条の沈線をもつ。	杯・底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗褐色 C．やや密 D．やや軟質 完形品
113	第26図 図版19	同上	同上	口径 8.8 器高 8.1 脚部径 7.0 脚部高 4.4	杯・体部・口縁部は、ほぼ垂直に上り、端部は丸い。 底部は、深く、丸味をもつ。 脚部は、やや長く下外方にのび、端部近くで、やや水平にのび、端部はやや鋭い。 脚、下部に、4本の凹面をもつ。	杯底部外面、回転ヘラ削り調整。 杯底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．黒灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品 ヘラ記号あり
114	第27図 図版19	甕	同上	口径(44.5)	口縁部は、外反し、端部下で、下方に張り出し、さらに凹面をなしながら、上外方にのび、端部は丸い。 口縁部上位に、1条の波状文を有し、その上下に沈線をもつ。	残存部内外面、回転ナデ調整。	B．暗紫色 C．やや密 D．堅緻 残存、口縁部⅓
115	第27図	同上	同上	口径(32.5)	口縁部は、外反してのび、端部は凹面をなす。	残存部内面下端、ナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．青灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存、口縁部¼
116	第27図	同上	同上	口径 22.0 頸部径 18.9	口縁部は、やや外反し、端部下で、やや下外方に張り出し、凹面をなしながら、上外方にのびる。 端部は、やや平面をなす。 体部は、丸味を有しながら、下外方に下る。	体部外面、擬格子タタキ。 体部内面、同心円文。 他は、回転ナデ調整。	B．暗褐色 C．やや密 D．堅緻 残存、口縁部・体部上位⅓ ヘラ記号あり

遺物番号	挿図 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
117	第27図	甕	灰原	口径 20.8	口縁部は、外反してのび、端部は凹面を呈す。 端部下と端部内面に稜をもつ。	口縁部外面、斜格子タタキ後、回転ナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡褐色 C．やや密 D．軟質 残存、口縁部¼
118	第27図	同上	同上	口径 19.7 頸部径 16.2	口縁部は、やや外反し、端部下で、やや下外方に張り出し、凹面をなしながら、上外方にのびる。 端部は、やや肥厚し、丸味をもつ。	残存部内外面、回転ナデ調整。	B．赤褐色 C．やや粗 D．軟質 残存、口縁部⅓ ヘラ記号あり
119	第27図 図版19	同上	同上	口径 11.4 頸部径 9.3	口縁部は、やや外反し、端部は肥厚し、断面長方形をなし、上面は平坦をなす。 体部は、丸味をもちながら、下外方に下る。	体部外面、擬格子タタキ。 体部内面、同心円文。 他は、回転ナデ調整。	B．暗紫灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存、口縁部 体部上位½
120	第28図	すり鉢	同上	口径 14.6	体部・口縁部は、上外方に直線的にのび、端部は丸い。 体部上位に、2条の沈線をもつ。	残存部内外面、回転ナデ調整。	B．淡灰色 C．やや粗 D．やや軟質 残存⅓
121	第28図 図版19	同上	同上	底径 8.3	厚い円盤状を呈し、底部外面に、多数の小孔を穿っている。	底部外面、一定方向のヘラ削り調整。	B．灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存、底部
122	第28図	同上	同上	底径 9.4	厚い円盤状を呈し、底部外面に、多数の小孔を穿っている。	底部外面、一定方向のヘラ削り調整。	B．褐色 C．やや密 D．やや軟質 残存、底部
123	第28図 図版20	長頸壺	同上	口径 8.9 頸部径 5.9 口頸部高10.6	口頸部は、基部より直立して上外方にのび、端部は丸い。 口頸部上位に、2条の沈線を有する。 肩部は、丸味をもち、上外方に下る。	残存部内外面、回転ナデ調整。	B．淡黄灰色 C．やや密 D．堅緻 残存、口頸部 肩部½
124	第28図 図版20	同上	同上	口径 9.1	口頸部は、上外方にのび、端部は丸い。 口頸部上位に、2条の沈線を有する。	残存部内外面、回転ナデ調整。	B．灰色 C．やや密 D．堅緻 残存、口頸部
125	第28図 図版20	硯	亀首部本体東側 硯部 灰原	全長 18.0 硯部最大径 10.8 器高 3.5	硯・体部は、内彎気味に上外方にのびる。 底部は平らである。 体部下位に、亀首を挿入する。	硯・底部・亀首、一定方向のヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	B．青灰色 C．密 D．堅緻 硯(海・陸部)欠損

5 号 窯

遺物番号	挿図図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	第31図 図版20	蓋杯 (蓋)	窯内	口径 11.2 器高 0.8	口縁部は、短く内傾し、端部は丸い。 天井部は、低く、平らである。	天井部外面3/5、回転ヘラ削り調整。 天井部中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．やや粗 D．堅緻 口縁部1/3欠損
2	第31図 図版20	同上	同上	口径 11.1 器高 0.6	口縁部は、短くほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は、低く、平らである。	天井部外面3/5、回転ヘラ削り調整。 天井部内面1/2、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．やや粗 D．堅緻 完形品
3	第31図	同上	灰原	口径(14.4)	口縁部は、やや外傾し、端部は丸い。 天井部は、低く、平らである。	天井部外面3/5、回転ヘラ削り調整。 天井部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡黄灰色 C．密 D．やや軟質 残存1/3
4	第31図	同上	同上	口径(14.1)	口縁部は、やや内傾し、端部は丸い。 天井部は、低く、平らに近い。	天井部外面3/5、回転ヘラ削り調整。 天井部内面3/5、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡黄灰色 C．やや密 D．やや軟質 残存1/3
5	第31図 図版20	同上	同上	口径 14.2 器高 1.6 つまみ径 2.1 つまみ高 0.3	口縁部は、内傾し、端部は丸い。 天井部は、低く、平らである。 天井部中央に、上面平坦のつまみをもつ。	天井部外面3/5、回転ヘラ削り調整。 天井部内面1/2、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡黄灰色 C．やや密 D．やや軟質 完形品
6	第31図	同上	同上	口径(14.2)	口縁部は、内傾し、端部は丸い。 天井部は、低く、平らに近い。 天井部中央に、つまみ痕あり。	天井部外面3/5、回転ヘラ削り調整。 天井部内面1/2、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．密 D．堅緻 残存1/4 つまみ欠損
7	第31図 図版20	皿	窯内	口径(18.2)	体部・口縁部は、短く上外方にのび、底部は、浅く、平らである。	底部外面、回転ヘラ削り調整。 底部内面3/5、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．内、淡灰色 外、暗灰色 C．密 D．堅緻 残存1/4

7 号 窯

遺物番号	挿図図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	第35図 図版21	蓋杯 (蓋)	窯内	口径(10.7) 器高 1.3 つまみ径 2.1 つまみ高 0.4	口縁部は、外傾し、端部は丸い。 天井部は、低く、平らである。 天井部中央に、扁平で上面平坦のつまみをもつ。	天井部外面3/5、回転ヘラ削り調整。 天井部内面3/5、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．やや密 D．堅緻 残存1/2
2	第35図 図版21	同上	同上	口径 11.7 器高 1.8 つまみ径 2.4 つまみ高 0.4	口縁部は、内傾し、端部は丸い。 天井部は、低く、平らに近い。 天井部中央に、扁平で上面平坦のつまみをもつ。	天井部外面3/5、回転ヘラ削り調整。 天井部内面1/2、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡青灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手段の特徴	備考
3	第35図	蓋杯 (蓋)	竈内	口径(13.5)	口縁部は、ほぼ垂直に下り、凹面をなし、端部は丸い。 天井部は、やや低く、平らに近い。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	A. 右方向 B. 淡青灰色 C. やや密 D. 堅緻 残存⅓
4	第35図 図版21	同上	同上	口径 14.1 器高 2.2 つまみ径 3.0 つまみ高 0.5	口縁部は、内傾し、端部は丸い。 天井部は、やや低く、平らに近い。 天井部中央に、上面平坦のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A. 右方向 B. 淡灰色 C. やや密 D. やや軟質 残存¾
5	第35図 図版21	同上	同上	口径(14.4) 器高 3.3 つまみ径 2.5 つまみ高 0.8	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、上面凸状のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A. 右方向 B. 灰色 C. 粗 D. 堅緻 残存½
6	第35図 図版21	同上	同上	口径 14.6 器高 1.5 つまみ径 3.2 つまみ高 0.5	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部はやや丸い。 天井部は、低く、平らである。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A. 右方向 B. 灰色 C. やや粗 D. 堅緻 残存⅔
7	第35図	同上	同上	口径(14.8)	口縁部は、やや内傾し、端部はやや丸い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A. 右方向 B. 暗茶灰色 C. やや密 D. 堅緻 残存½
8	第35図	蓋	同上	口径 20.4 器高 1.7 つまみ径 4.0 つまみ高 0.7	口縁部は、やや内傾し、端部は丸い。 天井部は低く、平らである。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A. 右方向 B. 青灰色 C. やや密 D. 堅緻 残存½
9	第35図 図版21	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 14.1 器高 1.2 つまみ径 2.4 つまみ高 0.6	口縁部は、やや内傾し、端部はやや丸い。 天井部は、焼け歪みの為不明。 天井部中央に、上面平坦のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A. 右方向 B. 灰色 C. やや密 D. 堅緻 残存¾ 焼け歪みあり。
10	第35図 図版21	同上	同上	口径 14.3 器高 1.6 つまみ径 2.4 つまみ高 0.6	口縁部は、やや内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、低く、平らに近い。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A. 右方向 B. 暗灰色 C. やや密 D. 堅緻 完形品
11	第35図 図版21	同上	同上	口径 13.5 器高 2.6 つまみ径 2.2 つまみ高 0.4	口縁部は、やや内傾し、端部は丸い。 天井部は、やや低く、丸味をもつ。 天井部中央に、扁平で上面平坦のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A. 右方向 B. 淡灰色 C. やや粗 D. やや軟質 残存⅚
12	第35図 図版21	同上	同上	口径 13.8 器高 1.9 つまみ径 2.6 つまみ高 0.4	口縁部は、やや内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、やや低く、平らに近い。 天井部中央に、上面平坦のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A. 右方向 B. 淡灰色 C. 密 D. やや軟質 残存⅔

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
13	第35図 図版21	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 13.5 器高 2.7 つまみ径 2.4 つまみ高 0.7	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部はやや丸い。 天井部は、やや低く、丸味をもつ。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品
14	第35図 図版21	同上	同上	口径 14.5 器高 1.5 つまみ径 3.2 つまみ高 0.6	口縁部は、内傾し、端部は、やや鋭い。 天井部は、焼け歪みのため不明。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品
15	第35図 図版21	同上	同上	口径 18.7 器高 2.5 つまみ径 3.1 つまみ高 0.7	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は、やや低く、平らに近い。 天井部中央に、上面凹状のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅚
16	第35図 図版21	同上	同上	口径 19.3 器高 1.5 つまみ径 3.3 つまみ高 0.6	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は、低く、平らである。 天井部中央に、上面凹状のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅚
17	第35図 図版21	同上	同上	口径 16.9 器高 3.3 つまみ径 2.8 つまみ高 0.5	口縁部は、垂直に下り、端部は平面をなす。 天井部は、焼け歪みの為不明。 天井部中央に、上面中央部がわずかに突出するつまみをもつ。	天井部上面、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．密 D．堅緻 完形品 焼け歪みあり
18	第35図 図版22	蓋杯 (身)	窯内	口径 13.9 器高 4.4 高台径 9.5 高台高 0.6	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、平らに近く、内側に高台をもつ。 高台端部は、ほぼ平らで、内側で接地する。	底部外面、磨滅の為不明。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡黄灰色 C．密 D．やや軟質 完形品
19	第35図 図版22	同上	同上	口径 12.7 器高 4.4 高台径 9.8 高台高 0.5	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、平らで、やや内側に高台をもつ。 高台端部は、平面をなし、内側で接地する。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．青灰色 C．密 D．堅緻 完形品
20	第35図 図版22	同上	同上	口径 12.2 器高 4.6 高台径 8.2 高台高 0.6	体部・口縁部は、外反気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は、平らに近く、やや内側に高台をもつ。 高台端部は、平面をなし、ほぼ全面で接地する。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品
21	第35図 図版22	同上	同上	口径 12.2 器高 3.9 高台径 8.5 高台高 0.6	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、平らで、やや内側に高台をもつ。 高台端部は、平面をなし、内側で接地する。	底部外面、回転ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．密 D．堅緻 完形品
22	第35図 図版22	同上	同上	口径 11.7 器高 3.7 高台径 8.1 高台高 0.6	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、丸味をもち、やや内側に高台をもつ。 高台端部は、平面をなし、内側で接地する。	底部外面、回転ヘラ削り調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡黄灰色 C．密 D．やや軟質 完形品

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
23	第35図 図版22	蓋杯 (身)	窯内	口径 11.7 器高 3.4 高台径 8.3 高台高 0.4	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、ほぼ平らで、やや内側に高台をもつ。 高台端部は、ほぼ平らで、内側で接地する。	底部外面、ヘラ切り調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品
24	第35図 図版22	同上	同上	口径 12.9 器高 3.9	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は丸味をもつ。	底部外面、ヘラ切り未調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．黄灰色 C．密 D．堅緻 残存⅚
25	第35図 図版22	同上	同上	口径 12.7 器高 3.7	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らである。	底部外面、ヘラ切り未調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．青灰色 C．密 D．堅緻 完形品
26	第35図 図版22	同上	灰原	口径(20.3) 器高(4.9) 高台径(14.8) 高台高 0.6	体部・口縁部は、内彎気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は、深く、平らで、底部端に短い高台をもつ。 高台端部は、凹面をなし、外側で接地する。	底部外面、回転ヘラ削り調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．密 D．堅緻 残存⅓
27	第35図 図版22	同上	同上	口径 9.7 器高 3.8 高台径 7.2 高台高 0.5	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、丸味をもち、やや内側に、短いハの字形の高台をもつ。 高台端部は、平面をなし、内側で接地する。	底部外面、ヘラ切り未調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 残存½
28	第35図 図版22	同上	同上	口径 13.1 器高 4.6 高台径 9.4 高台高 0.5	体部・口縁部は、外反気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は、丸味をもち、やや内側に高台をもつ。 高台端部は、やや凹面をなし、内側で接地する。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．やや粗 D．堅緻 完形品
29	第35図 図版22	同上	同上	口径 11.5 器高 3.9	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、やや丸味をもつ。	体部外面下端、回転ヘラ削り調整。 底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．密 D．堅緻 残存⅗
30	第35図 図版22	同上	同上	口径 12.3 器高 4.3	体部・口縁部は、外反気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は、低く、丸味をもつ。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．茶灰色 C．やや粗 D．やや軟質 残存⅗
31	第35図 図版22	同上	同上	口径(12.9) 器高(3.7)	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らである。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡褐色 C．やや密 D．やや軟質 残存⅓
32	第35図	皿	同上	口径(28.7)	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は平面をなす。 底部は、やや深く、平らである。	底部外面(残存部)、回転ヘラ削り調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．密 D．堅緻 残存¼

8 号窯

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	第37図 図版23	蓋杯 (蓋)	窯内床面	口径 9.7 器高 2.2 つまみ径 2.0 つまみ高 0.4	口縁部は、内傾し、端部は鋭い。 天井部は、やや低く、丸味をもつ。 天井部中央に、中央がややふくらむ扁平なつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面は、不明。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．黒灰色 C．やや粗 D．堅緻 完形品
2	第37図 図版23	同上	同上	口径 13.9 器高 1.5 つまみ径 2.4 つまみ高 0.4	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は、低く、平らに近い。 天井部中央に、上面がやや凹状のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．内、淡灰色 外、暗灰色 C．やや密 D．やや軟質 完形品
3	第37図 図版23	同上	同上	口径 15.7 器高 2.8 つまみ径 2.9 つまみ高 0.8	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は、やや低く、平らに近い。 天井部中央に、上面が、ややふくらむつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡黄灰色 C．密 D．やや軟質 残存⅝
4	第37図	同上	同上	口径 14.9 器高 3.1 つまみ径 2.8 つまみ高 1.0	口縁部は、やや内傾し、端部は丸い。 天井部は、焼け歪みの為不明。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	灰かぶりの為不明。	B．黒灰色 C．粗 D．堅緻 残存⅝ 焼け歪みあり 灰かぶり
5	第37図	同上	同上	口径(15.9)	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は、低く、平らに近い。 天井部中央に、つまみ痕あり。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 残存½ つまみ欠損
6	第37図	同上	同上	口径(16.7)	口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。 かえりは、やや内傾し、端部は丸い。 天井部は、低く、平らに近い。 天井部中央に、つまみ痕あり。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡青灰色 C．やや密 D．堅緻 残存½ つまみ欠損
7	第37図 図版23	同上	窯内埋土中	口径 11.4 器高 2.4 つまみ径 2.6 つまみ高 0.6	口縁部は、短くほぼ垂直に下り、端部はやや丸い。 天井部は、やや低く、丸味をもつ。 天井部中央に、上面がほぼ平坦で、扁平なつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面、磨滅の為不明。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡黄灰色 (部分的に黒灰色) C．密 D．軟質 完形品
8	第37図 図版23	同上	同上	口径 13.2 器高 1.8 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	口縁部は、やや内傾し、端部は丸い。 天井部は、やや低く、平らに近い。 天井部中央に、扁平で、上面がややふくらむつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．青灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品
9	第37図	同上	同上	口径(15.5) 器高 3.2 つまみ径 2.7 つまみ高 0.6	口縁部は、内傾し、端部は、やや丸い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、上面中央部が、やや突出するつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面、磨滅の為不明。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．茶灰色 C．やや密 D．やや軟質 残存½
10	第37図	同上	同上	口径(15.4) 器高 2.8 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	口縁部は、内傾し、端部は、やや丸い。 天井部は、やや低く、丸味をもつ。 天井部中央に、上面凹状で、中央部がやや突出するつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．黄灰色 C．やや密 D．やや軟質 残存½

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
11	第37図 図版23	蓋杯 (蓋)	窯内埋土中	口径 15.4 器高 3.1 つまみ径 3.0 つまみ高 0.6	口縁部は、内傾し、端部はやや丸い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。 天井部中央に、上面凹状で、中央部がやや突出するつまみをもつ。	調整は磨滅の為不明。	B. 淡黄灰色 (部分的に黒灰色) C. やや密 D. 軟質 完形品
12	第37図	同上	同上	口径(15.4)	口縁部は、内傾し、端部はやや丸い。 天井部は、やや低く、平らに近い。	天井部外面⅜、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A. 右方向 B. 淡黄灰色 C. やや密 D. やや軟質 残存⅓
13	第37図	蓋杯 (身)	窯内床面	口径(15.1) 器高 5.8 高台径 11.7 高台高 1.1	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、底部端に、やや短いハの字形の高台をもつ。 高台端は、平面をなし、内側で接地する。	調整は磨滅の為不明。	B. 淡黄灰色 C. やや密 D. 軟質 残存½
14	第37図 図版23	同上	同上	口径(13.9) 器高(4.9) 高台径(10.1) 高台高 0.9	体部・口縁部は、内彎気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は、平らに近く、やや内側に、短いハの字形の高台をもつ。 高台端部は、平面をなし、内側で接地する。	底部外面、ヘラ切り未調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B. 淡灰色 C. やや粗 D. 堅緻 高台¼欠損
15	第37図 図版23	同上	同上	口径 13.6 器高 5.2 高台径 8.7 高台高 0.7	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、やや丸く、やや内側に、短い高台をもつ。 高台端部は、ほぼ平面をなし、端部中央で接地する。	底部外端、回転ヘラ削り調整。 底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 他は、磨滅の為不明。	B. 淡黄灰色 C. 密 D. 軟質 完形品
16	第37図	同上	同上	口径(15.0) 器高(4.2) 高台径 11.0 高台高 0.8	体部・口縁部は、外反気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部のやや内側に、ハの字形の高台をもつ。 高台端部は、平面をなし、内側で接地する。	底部外端、回転ヘラ削り調整。 底部内面(残存部)、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B. 灰色 C. 密 D. 堅緻 残存⅓
17	第37図 図版23	同上	同上	口径 12.3 器高 4.2 高台径 9.6 高台高 0.6	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、やや内側に、短いハの字形の高台をもつ。 高台端部は、平面をなし、内側で接地する。	底部外端、回転ヘラ削り調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B. 灰色 C. やや密 D. 堅緻 残存½
18	第37図 図版23	同上	同上	口径 12.9	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。	残存部内外面、回転ナデ調整。	B. 黄灰色 C. 密 D. 軟質 底部欠損
19	第37図 図版23	同上	同上	口径 13.1 器高 4.3	体部・口縁部は、垂直気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は、平らである。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B. 黄灰色 C. 密 D. 軟質 残存⅔
20	第37図	同上	窯内床面	高台径 11.0 高台高 1.5	ハの字形に張り出す高台で、端部は、ほぼ平面をなし、内側で接地する。 杯部との接合面に、刻みを入れている。	回転ナデ調整。	B. 灰色 C. 密 D. 堅緻 杯部欠損

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
21	第37図	蓋杯 (身)	窯内埋土中	口径(13.8) 器高 5.0 高台径 9.3 高台高 0.7	体部・口縁部は、直線的に上外方にのび、端部は丸い。 底部は、平らに近く、やや内側に短い高台をもつ。 高台端部は、ほぼ平面をなし、内側で接地する。	底部外端、回転ヘラ削り調整。 他は、磨滅の為不明。	B．黄灰色 C．やや密 D．軟質 残存½
22	第37図	同上	同上	口径 13.4 器高 5.2 高台径 9.8 高台高 0.7	体部・口縁部は、直線的に上外方にのび、端部は丸い。 底部は、平らに近く、底部端に短い高台をもつ。 高台端部は、丸く、端部中央で接地する。	底部下端、回転ヘラ削り調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．内、暗黄灰色 外、黒褐色 C．やや粗 D．軟質 残存⅔
23	第37図	同上	同上	口径(12.2) 器高(4.1) 高台径 9.2 高台高 0.8	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らに近く、底部端に短い高台をもつ。 高台端部は、平面をなし、内側で接地する。	底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅓
24	第37図 図版23	同上	同上	口径 12.8	体部・口縁部は、やや外反気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は、平らに近い。	底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．黄灰色 C．やや粗 D．軟質 高台、底部外面欠損
25	第37図	高杯	同上	焼け歪みの為不明	短脚であり、杯底部から、下外方に下った後、水平にのび、端部近くで、外傾気味に屈曲する。	杯、底部内面、不定方向のナデ調整。	B．黄灰色 C．やや密 D．やや軟質 残存、脚部¾ 杯部欠損 焼け歪みあり
26	第37図 図版23	焼き台	同上	焼け歪みの為不明	蓋杯の蓋の中央に、焼成後、穿孔したものであり、形態は焼け歪みの為不明。	天井部外面、回転ヘラ削り調整。 他は不明。	B．灰色 C．粗 D．堅緻 焼け歪みあり
27	第38図 図版24	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 15.0 器高 2.4 つまみ径 2.5 つまみ高 0.6	口縁部は、やや内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、やや低く、平らに近い。 天井部中央に、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅗、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．赤褐色 C．やや粗 D．やや軟質 残存⅗
28	第38図 図版24	同上	同上	口径 14.9 器高 2.7 つまみ径 2.4 つまみ高 0.7	口縁部は、やや内傾し、端部は丸い。 天井部は、やや低く、丸味をもつ。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅗、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡褐色 C．やや密 D．やや軟質 残存⅗
29	第38図	同上	同上	口径 13.8 器高 1.9 つまみ径 2.1 つまみ高 0.5	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、やや低く、平らに近い。 天井部中央に、上面凹状のつまみをもつ。	天井部外面⅗、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅔
30	第38図 図版24	同上	同上	口径 13.6 器高 2.1 つまみ径 2.3 つまみ高 0.4	口縁部は、やや内傾し、端部はやや丸い。 天井部は、やや低く、平らに近い。 天井部中央に、上面平坦のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．粗 D．堅緻 完形品

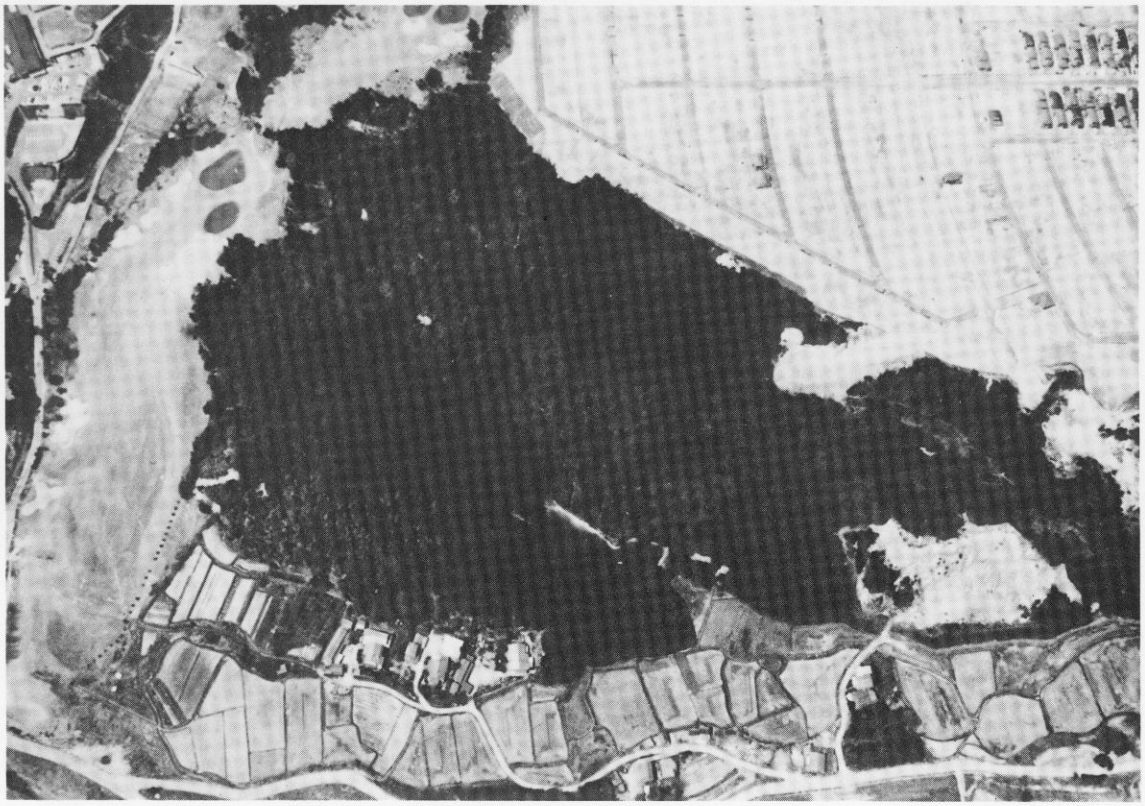
遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
31	第38図	蓋杯 (蓋)	灰原	口径(15.4)	口縁部は、水平気味に下外方に下り、端部は丸い。 かえりは内傾し、端部は鋭い。 天井部は、焼け歪みの為不明。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存⅓
32	第38図 図版24	同上	同上	口径 12.7 器高 1.7	口縁部は、内傾し、端部はやや丸い。 天井部は、やや低く、平らに近い。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．淡灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品
33	第38図 図版24	同上	同上	口径 11.5 器高 2.2	口縁部は、内傾し、端部は丸い。 天井部は、やや低く、丸味をもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．灰色 C．やや粗 D．堅緻 完形品 焼け歪みあり。
34	第38図 図版24	蓋杯 (身)	同上	口径 13.0 器高 4.2 高台径 9.7 高台高 0.5	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、やや内側に短いハの字形の高台をもつ。 高台端部は凹面をなし、外側で接地する。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 残存½
35	第38図	同上	同上	口径 12.7 器高 4.4 高台径 8.4 高台高 0.5	体部は、内攣気味に上外方にのび、口縁部近くでやや外反する。端部は丸い。 底部は平らで、やや内側に短いハの字形の高台をもつ。 高台端部は、平面をなし、外側近くで接地する。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅔
36	第38図 図版24	同上	同上	口径 12.9 器高 3.4 高台径 8.6 高台高 0.4	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、やや上方にふくらみ、内側に短い高台をもつ。 高台端部は、やや凹面をなし、外側で接地する。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 残存¾
37	第38図 図版24	同上	同上	口径 12.1 器高 3.8 高台径 8.8 高台高 0.4	体部・口縁部は、上外方にのび、端部はやや丸い。 底部は、平らで、やや内側に高台をもつ。 高台端部は、平面をなし、外側で接地する。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．内、黄灰色 外、暗灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅚
38	第38図	同上	同上	口径 10.3 器高 3.6 高台径 7.3 高台高 0.6	体部・口縁部は、内攣気味に上外方にのび、端部はやや丸い。 底部は、平らで、内側に短い高台をもつ。 高台端部は平面をなし、内側で接地する。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 残存½
39	第38図	同上	同上	口径(11.3) 器高(3.3)	体部・口縁部は、外反気味に上外方にのび、端部はやや丸い。 底部は、平らである。	底部外面、ヘラ切り未調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．密 D．堅緻 残存⅓
40	第38図 図版24	同上	同上	口径 12.9 器高 3.8	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、丸味をもつ。	体部、外面下端、底部外面、回転ヘラ削り調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．黄灰色 C．やや粗 D．軟質 残存⅕

遺物番号	挿図図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
41	第38図 図版24	蓋杯 (身)	灰原	口径 18.0 器高 5.4 高台径 12.0 高参高 0.5	体部・口縁部は、内彎気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は、平らで、やや内側に高台をもつ。 高台端部は、平面をなし、内側で接地する。	底部外面、ヘラ切り後、回転ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．黄灰色 C．密 D．堅緻 残存⅔
42	第38図 図版24	同上	同上	口径 16.6 器高 5.7	底部・口縁部は、内彎気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は、深く、平らに近い。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅚
43	第38図	皿	同上	口径 18.2 器高 2.3	体部・口縁部は、内攣気味に上外方にのび、端部はやや丸い。 底部は、浅く、平らである。	調整は磨滅の為不明。	B．黄灰色 C．やや密 D．軟質 残存½
44	第38図	同上	同上	口径 18.7 器高 2.9	体部・口縁部は、上外方にのび、端部はやや丸い。 底部は、やや浅く、平らである。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡黄灰色 C．やや密 C．堅緻 残存½
45	第38図 図版24	蓋	同上	口径 14.3 器高 3.2 つまみ径 3.4 つまみ高 0.5	口縁部は、下外方に下り、端部付近で外反する。端部は、やや鋭い。 天井部は、高く、平らで、中央に扁平な、擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．黒灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅚
46	第38図	同上	同上	口径(24.3)	口縁部は、外傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、低く平らである。	調整は磨滅の為不明。	B．黄灰色 C．やや密 D．軟質 残存½
47	第38図	鉢	同上	口径(16.9)	口縁部は、内彎後、短く垂直にのび、端部は、やや鋭い。 体部は、丸味をもち、下内方に下る。	外面⅓(残存部)、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．内、灰色 外、淡灰色 C．やや密 D．堅緻 残存⅓
48	第38図	同上	同上	口径(18.1)	口縁部は、内彎気味にのび、端部は、やや鋭い。 体部は、やや丸味をもち、下内方に下る。	残存部外面下端、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	B．灰色 C．密 D．堅緻 残存¼
49	第38図	短頸壺	同上	口径(12.7)	口縁部は、ほぼ垂直に立ち上がり、端部は、やや鋭い。 体部は、丸味をもち、下外方に下る。	残存部内外面、回転ナデ調整。	B．灰色 C．密 D．堅緻 残存¼
50	第38図	壺	同上	口径 14.5	外反気味に上外方に上り、端部近くで水平にのびる。口縁端部は、やや丸い。	残存部内外面、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．やや密 D．堅緻 残存、口縁部

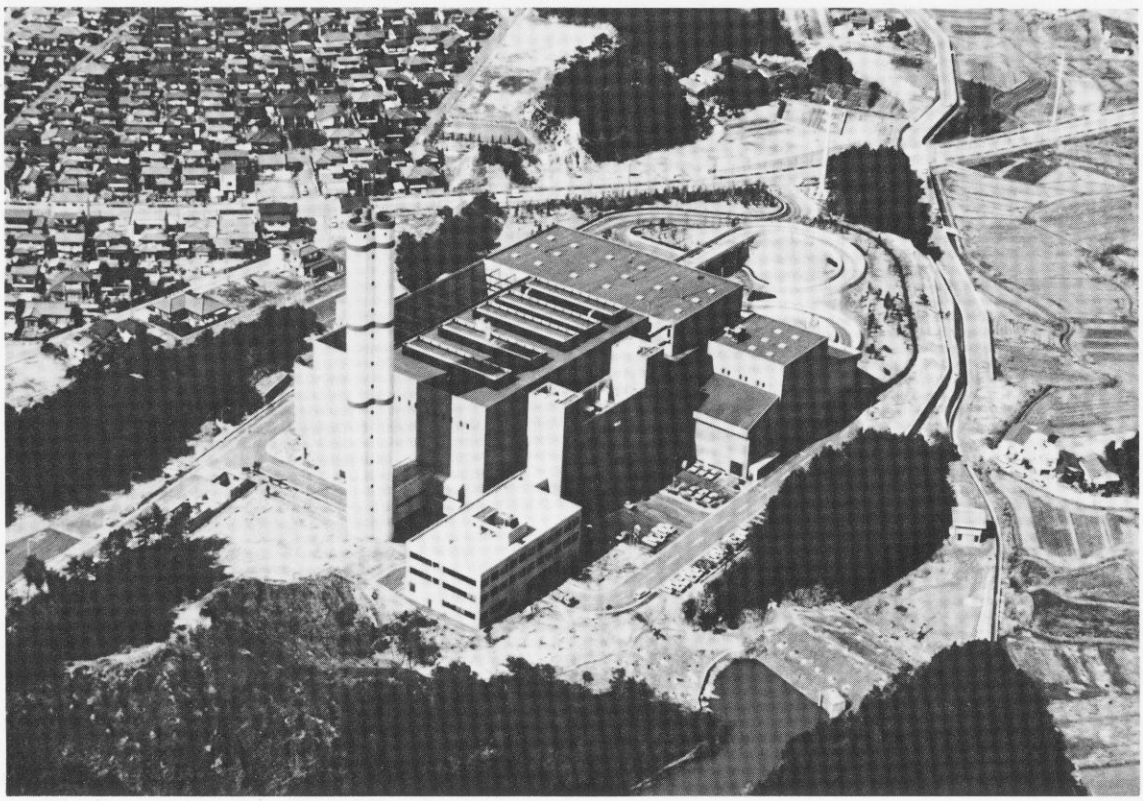
A 地区竪穴状遺構

遺物番号	挿図番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	第40図 図版25	蓋杯 (蓋)	竪穴内	口径 10.7 器高 3.4	口縁部は、やや外傾し、端部はやや丸い。 天井部は、高く、丸味をもつ。	外面は、灰かぶりの為不明。 天井部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．黄灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存⅔ ヘラ記号あり 灰かぶり
2	第40図	同上	同上	つまみ径 1.1 つまみ高 1.0	天井部は、丸味をもち、中央に宝珠つまみをもつ。	天井部外面(残存部)¾、回転ヘラ削り調整。 天井部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．暗灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存、天井部⅓
3	第40図 図版25	蓋杯 (身)	同上	口径 9.3 器高 3.4 たちあがり高 0.8 受け部径11.4	たちあがりは内傾し、端部は丸い。 受け部は、上外方にのび、端部は丸い。 底体部はやや深く、底部は平らである。	底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．暗灰色 C．やや粗 D．堅緻 残存¾ ヘラ記号あり
4	第40図	同上	同上	口径(9.1) たちあがり高 0.4 受け部径11.2	たちあがりは内傾し、端部はやや鋭い。 受け部は、上外方にのび、端部はやや鋭い。 底体部は、やや浅く、丸味をもつ。	底体部外面½、回転ヘラ削り調整。 底部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．青灰色 C．やや密 D．堅緻 残存½ ヘラ記号あり
5	第40図	同上	同上	口径 10.0 器高 3.8 たちあがり高 0.3 受け部径12.5	たちあがりは内傾した後、垂直にのび端部はやや鋭い。 受け部は、上外方にのび、端部はやや鋭い。 底体部は、やや深く、丸味をもつ。	底体部外面½、一定方向のヘラ削り調整。 底部内面中央、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	B．淡茶灰色 C．やや密 D．堅緻 残存½
6	第40図	同上	同上	口径(10.0)	体部・口縁部は、垂直気味に上外方にのび、端部は丸い。 体部中央に、2条の沈線を有す。	残存部内外面、回転ナデ調整。	B．淡灰色 C．やや密 D．堅緻 残存¼ 高杯の可能性あり
7	第40図 図版25	蓋杯 (蓋)	同上	口径 14.7 器高 2.5 つまみ径 2.9 つまみ高 0.6	口縁部は、やや内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、やや低く、平らに近い。 天井部中央に、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。	天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不定方向のナデ調整。 他は、回野ナデ調整。	A．右方向 B．淡青灰色 C．やや密 D．堅緻 完形品
8	第40図	高杯	同上	脚部径(8.7)	ハの字形に下外方に下り、端部は、垂直に下り、やや鋭い。	残存部内外面、回転ナデ調整。	B．淡灰色 C．密 D．堅緻 残存、脚部⅓
9	第40図 図版25	同上	同上	口径 20.9	杯・体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、やや深く、平らに近い。 脚・基部は太く、安定感がある。	杯・底体部⅔、回転ヘラ削り調整。 底部内面、不定方向のナデ調整。 他は、回転ナデ調整。	A．右方向 B．茶灰色 C．やや密 D．やや軟質 残存、杯部
10	第40図 図版25	甕	同上	口径 15.8 頸部径 12.7 最大径(25.4)	口縁部は、外反してのび、端部は丸い。 体部は、丸味をもち、中央よりやや上位に最大径を有す。	体部外面、平行タタキ。 体部内面、同心円文。 他は、回転ナデ調整。	B．淡褐色 C．やや粗 D．軟質 体部⅓欠損

図　　版



(1) 清掃工場建設前の浦ノ原窯跡群周辺(1975年, 東から)

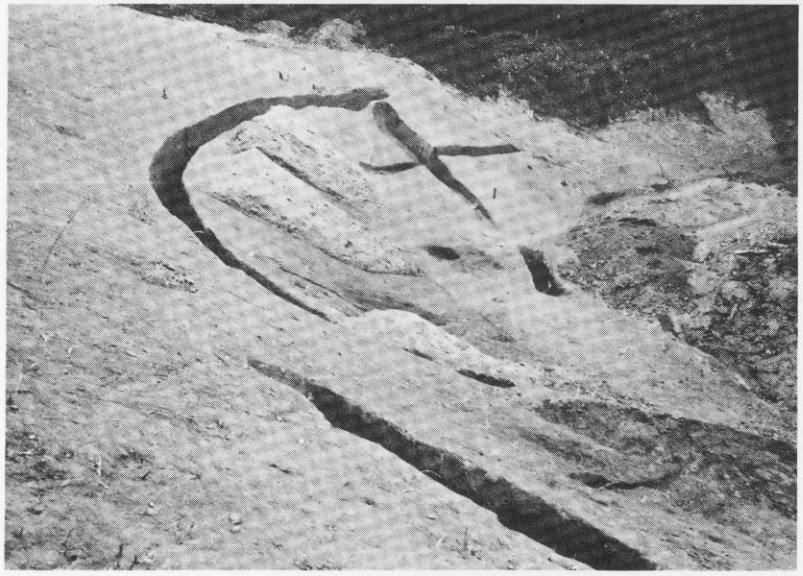


(2) 福岡市南部清掃工場全景(1981年, 南東から)

図版 2



(1) A地区調査前全景(南から)



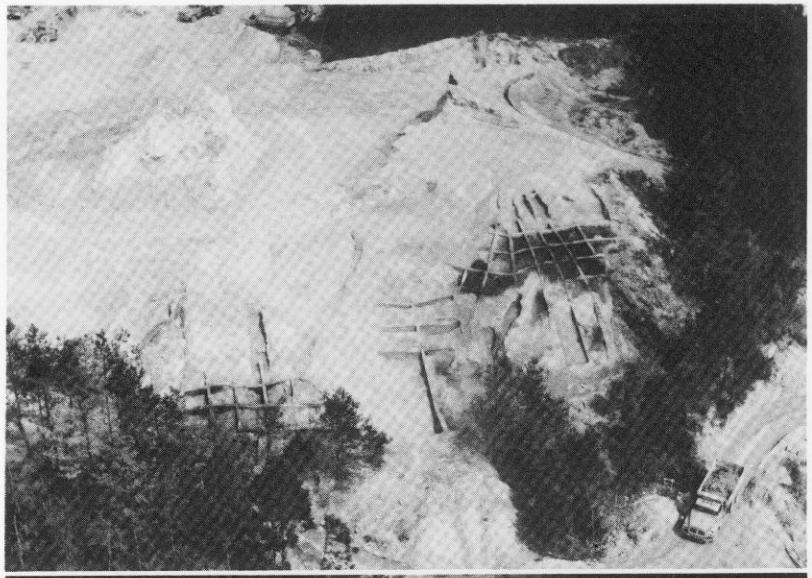
(2) A地区予備調査全景(南から)



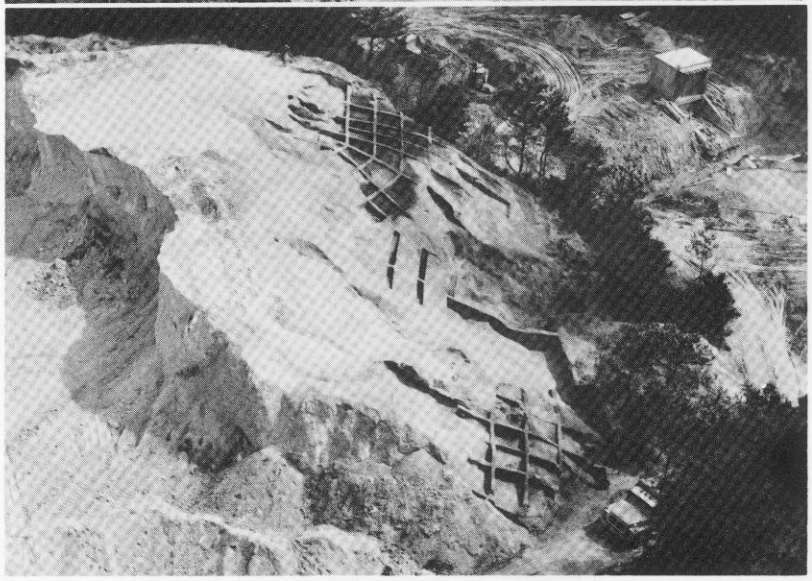
(3) B地区調査前全景(西から)



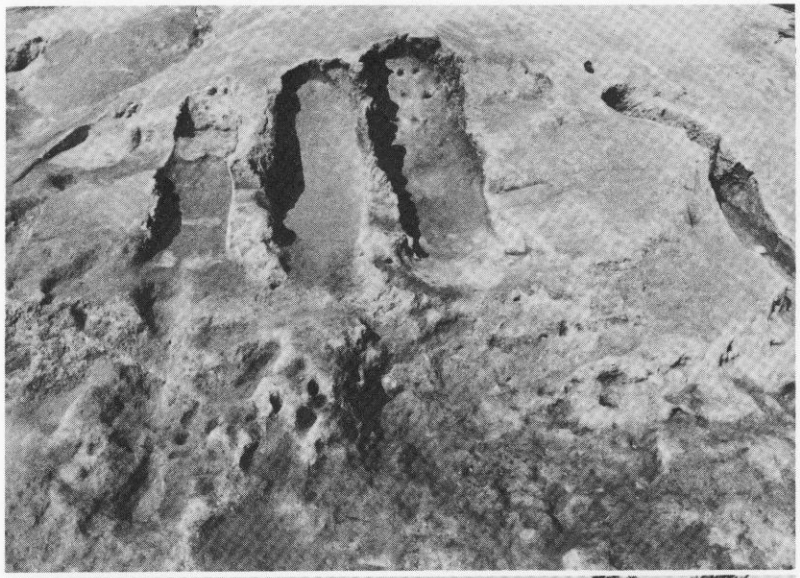
(4) B地区調査風景(東から)



(1) 浦ノ原窯跡群全景(南から)



(2) 浦ノ原窯跡群全景(西から)

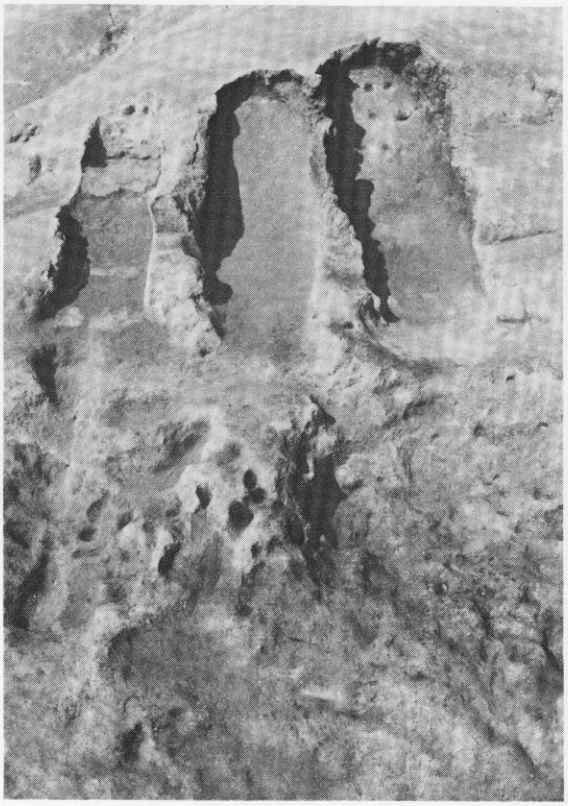


(3) 1・2・5・6・7号窯跡全景

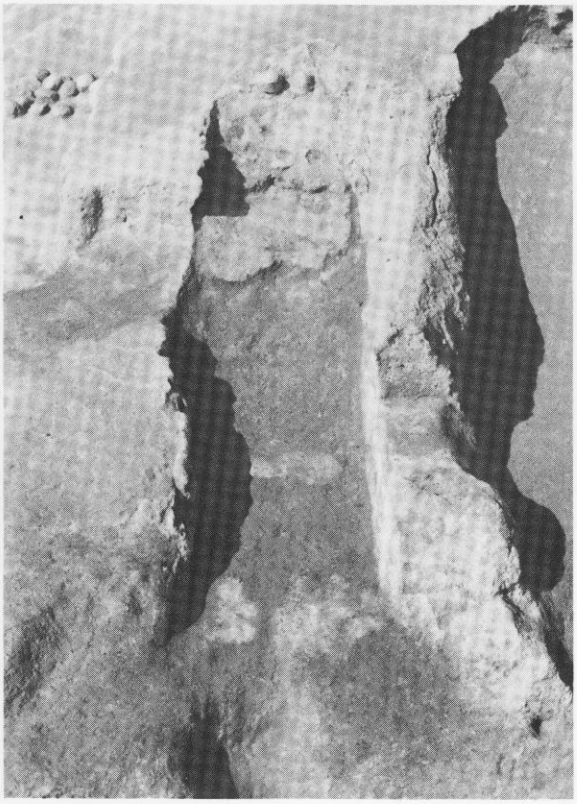


(4) 1・2・3・5・6・7・8号窯跡全景

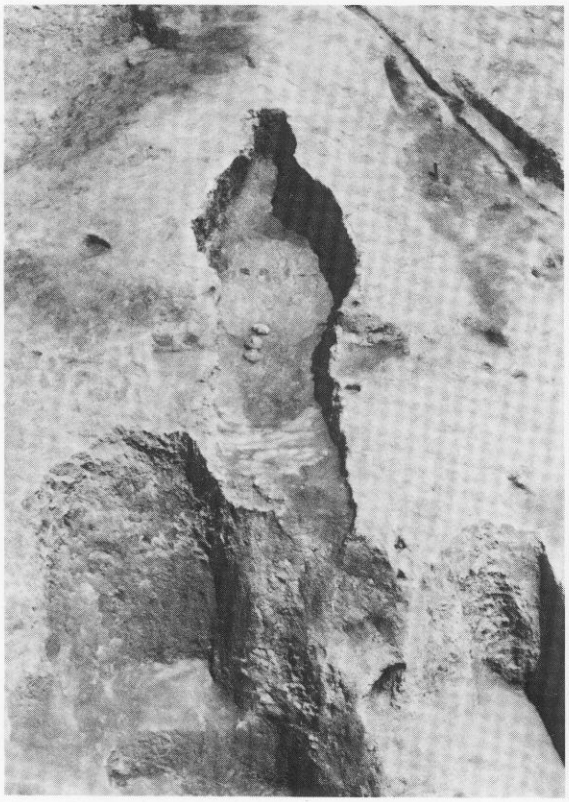
図版 4



(1) 1・2・6号窯跡全景



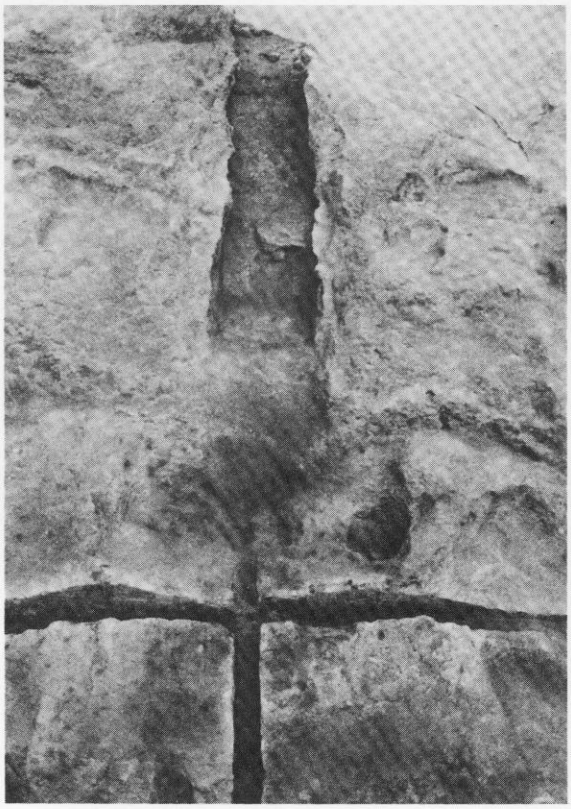
(2) 2号窯跡全景



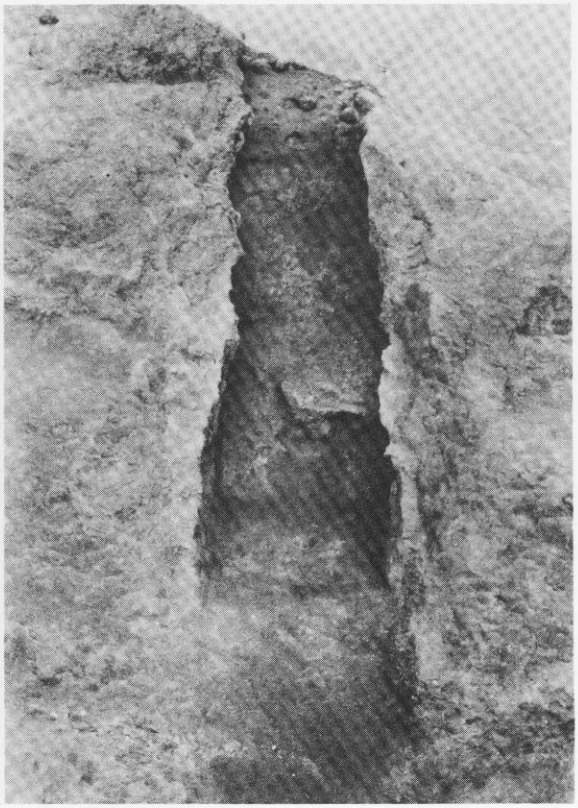
(3) 3号窯跡全景



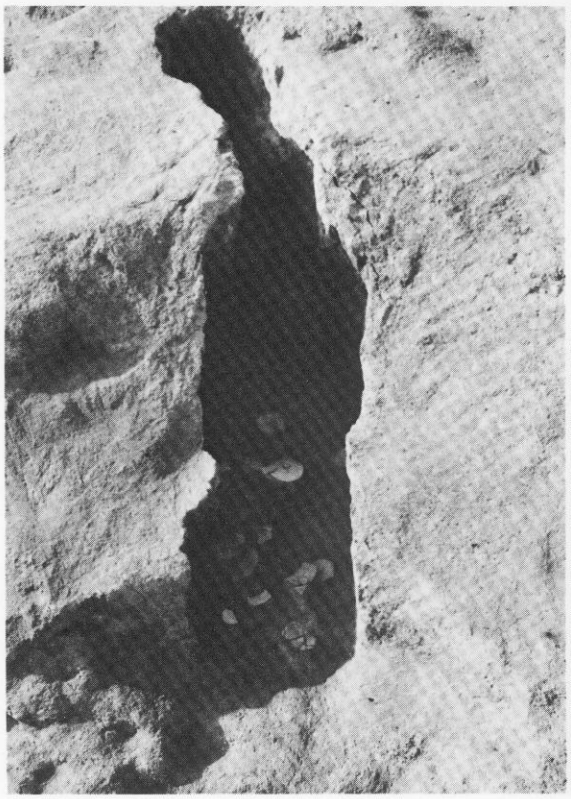
(4) 5号窯跡全景



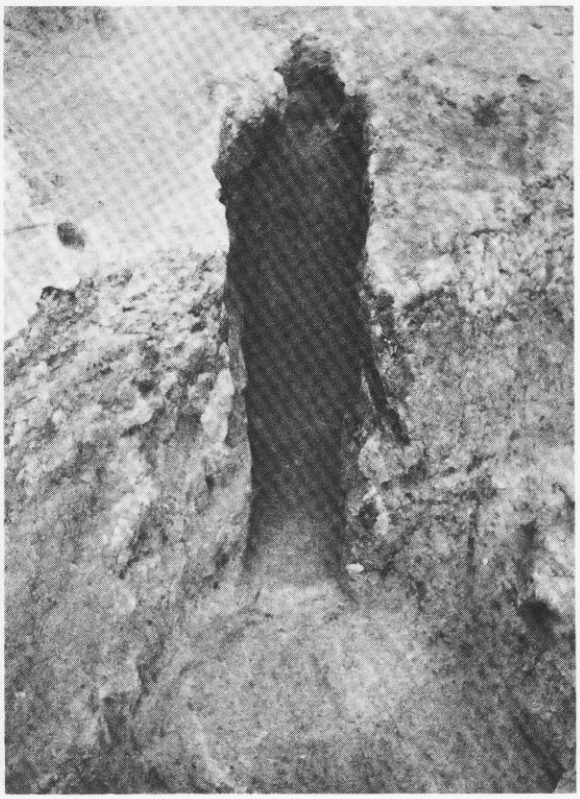
(1) 4号窯跡全景



(2) 4号窯跡本体

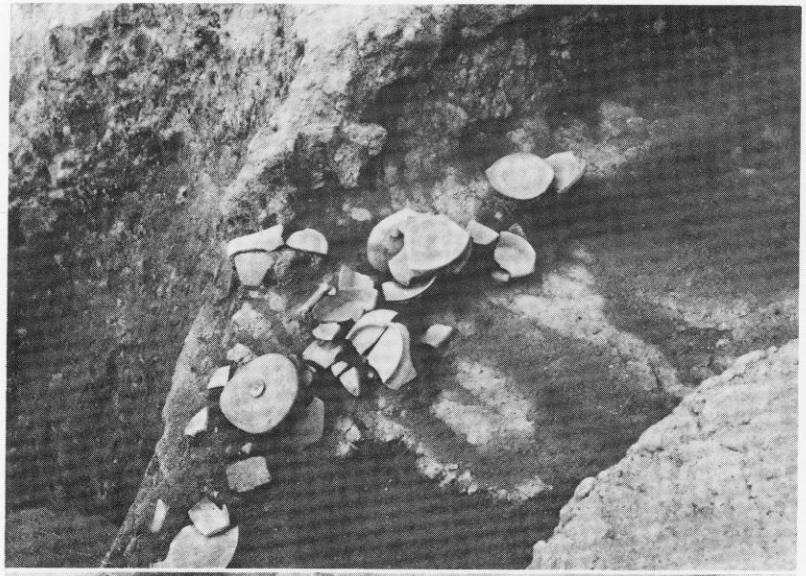


(3) 7号窯跡全景

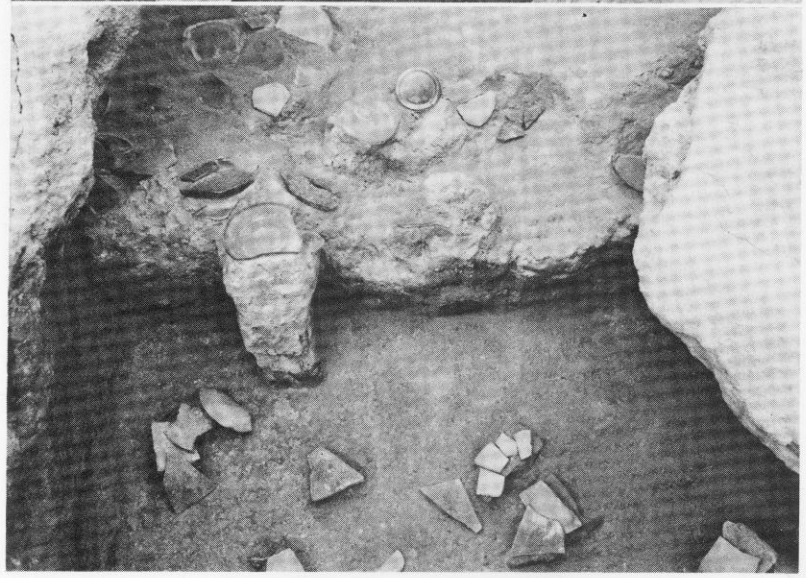


(4) 8号窯跡全景

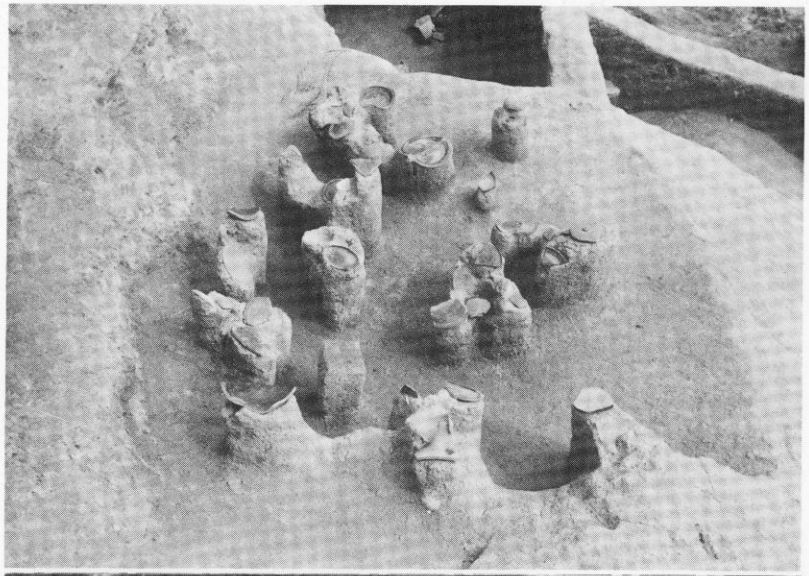
(1) 3号窯跡本体内土器出土状態



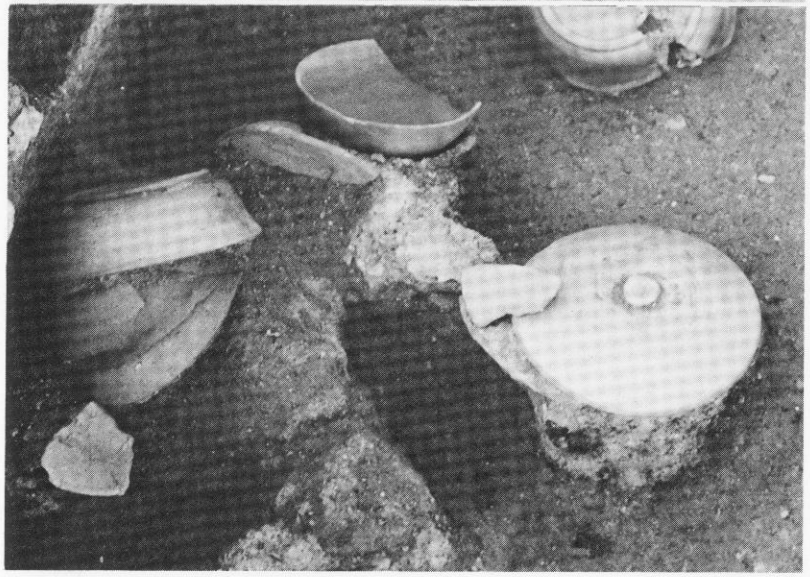
(2) 4号窯跡本体内土器出土状態



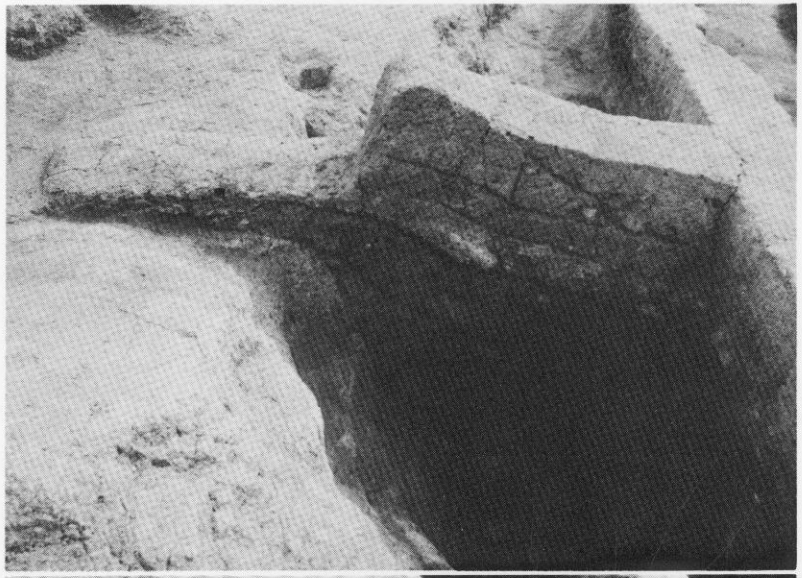
(3) 4号窯跡西側付設遺構土器出土状態



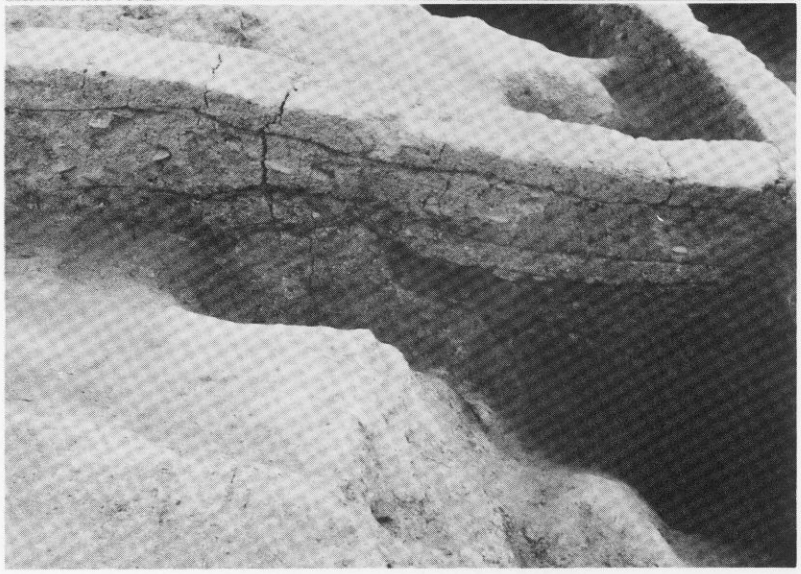
(4) 7号窯跡本体内土器出土状態



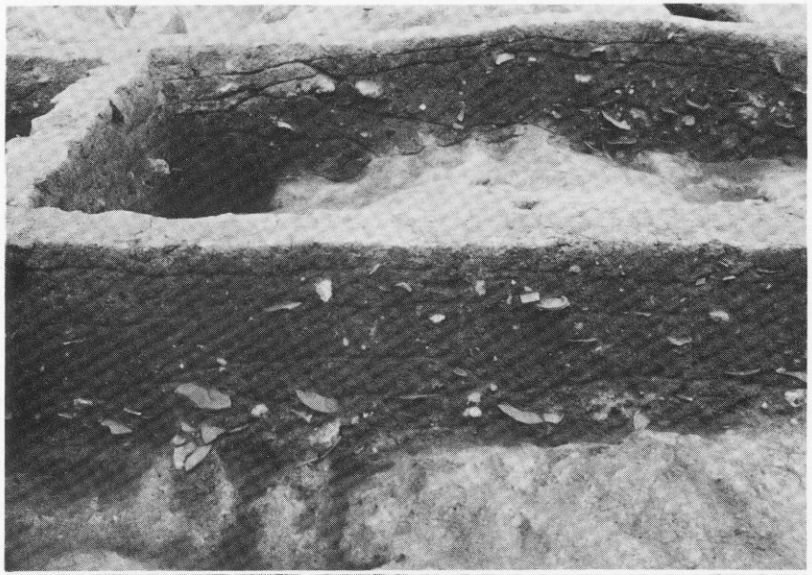
(1) 1号窯跡焚き口付近土層



(2) 2号窯跡焚き口付近土層



(3) 1号窯跡灰原土層



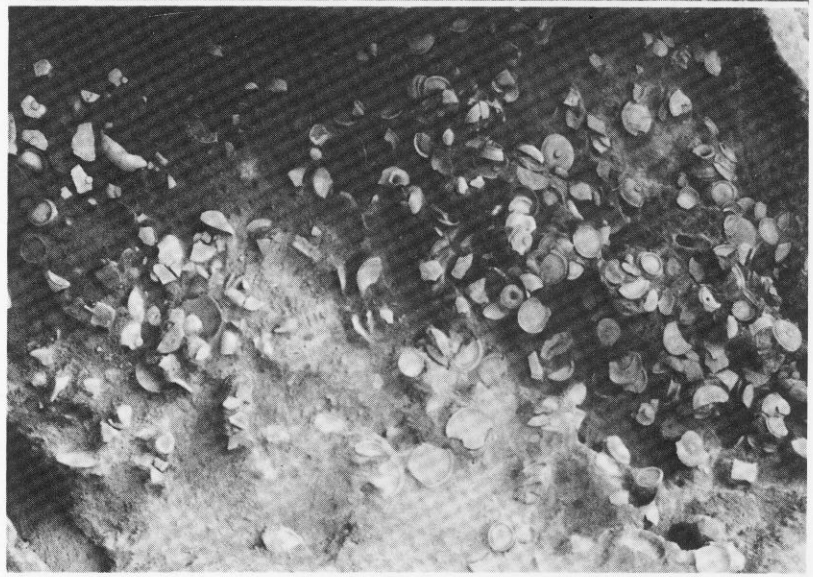
(4) 7号窯跡灰原土層



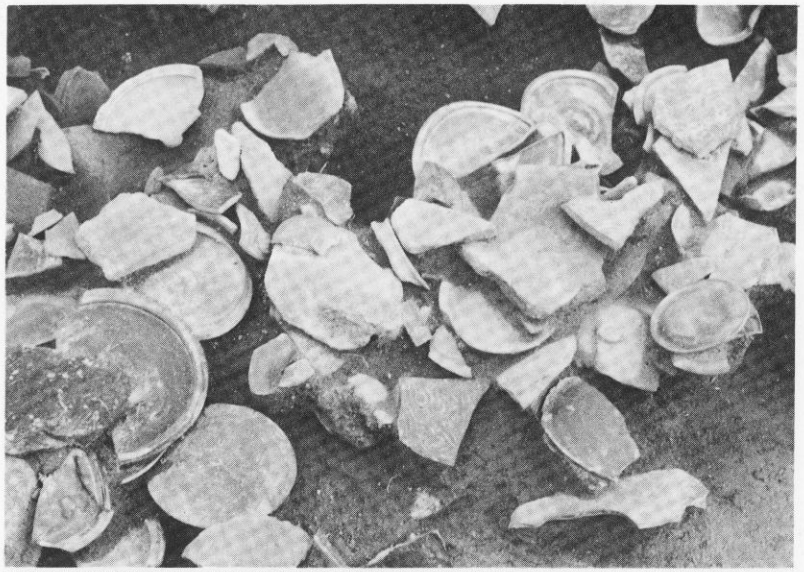
(1) 2号窯跡灰原土器出土状態



(2) 3号窯跡灰原土器出土状態

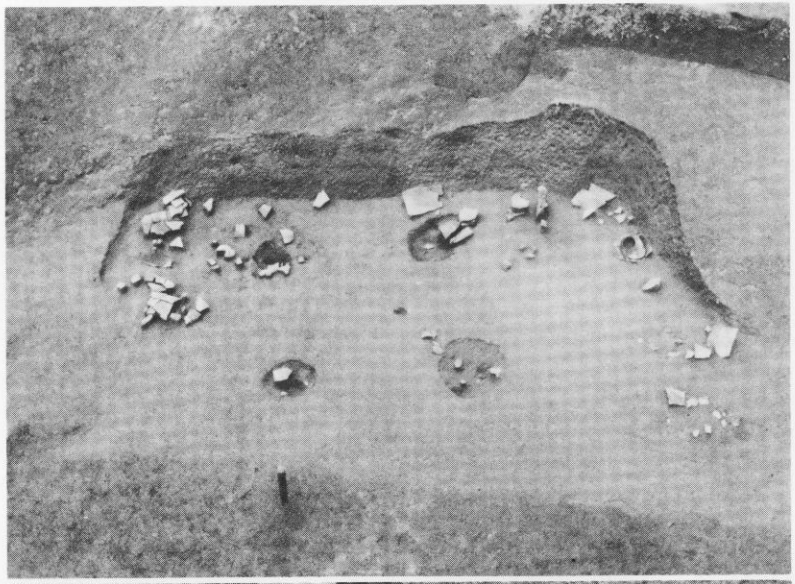


(3) 4号窯跡灰原土器出土状態

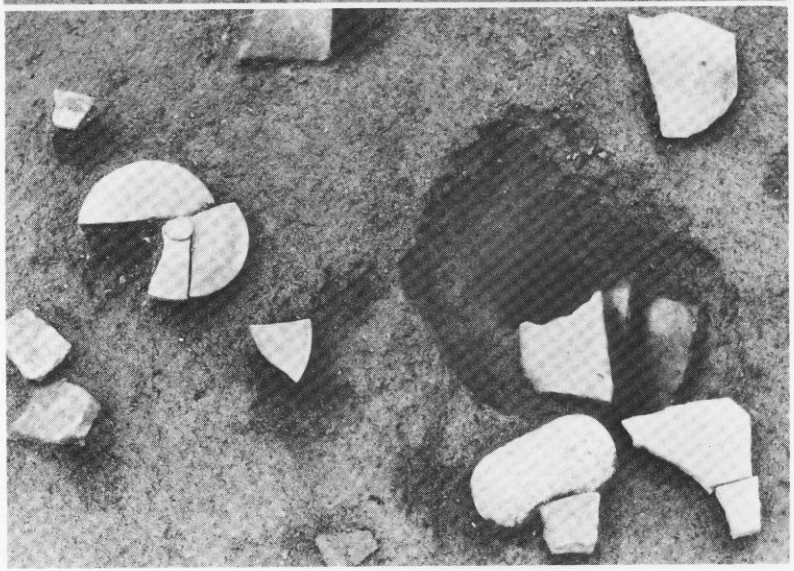


(4) 5号窯跡灰原土器出土状態

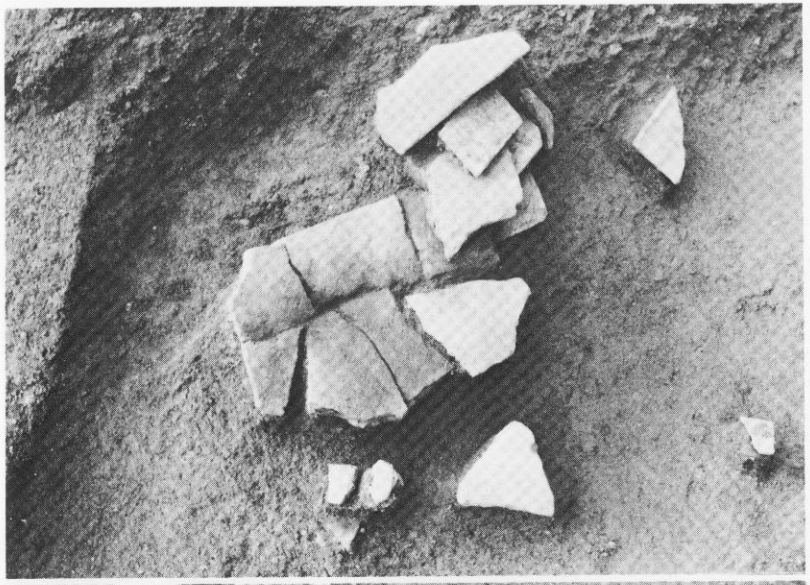




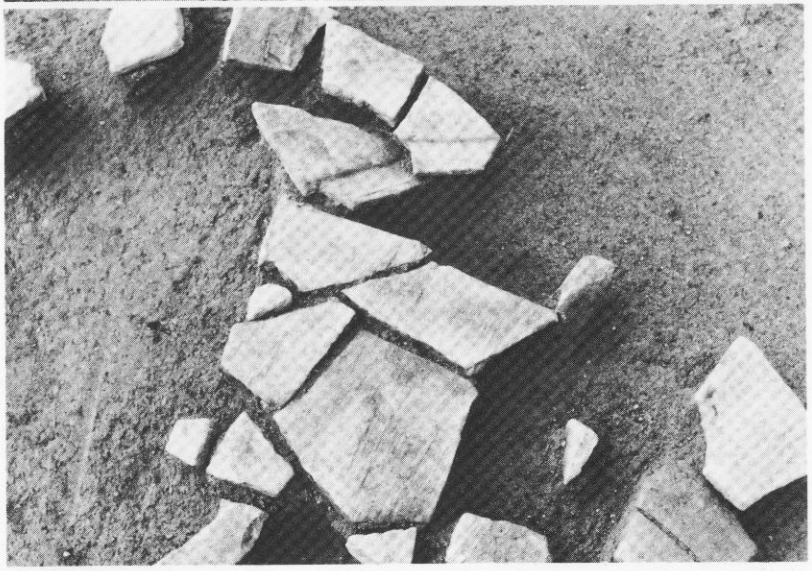
(1) A地区竪穴状遺構全景



(2) 竪穴状遺構土器出土状態



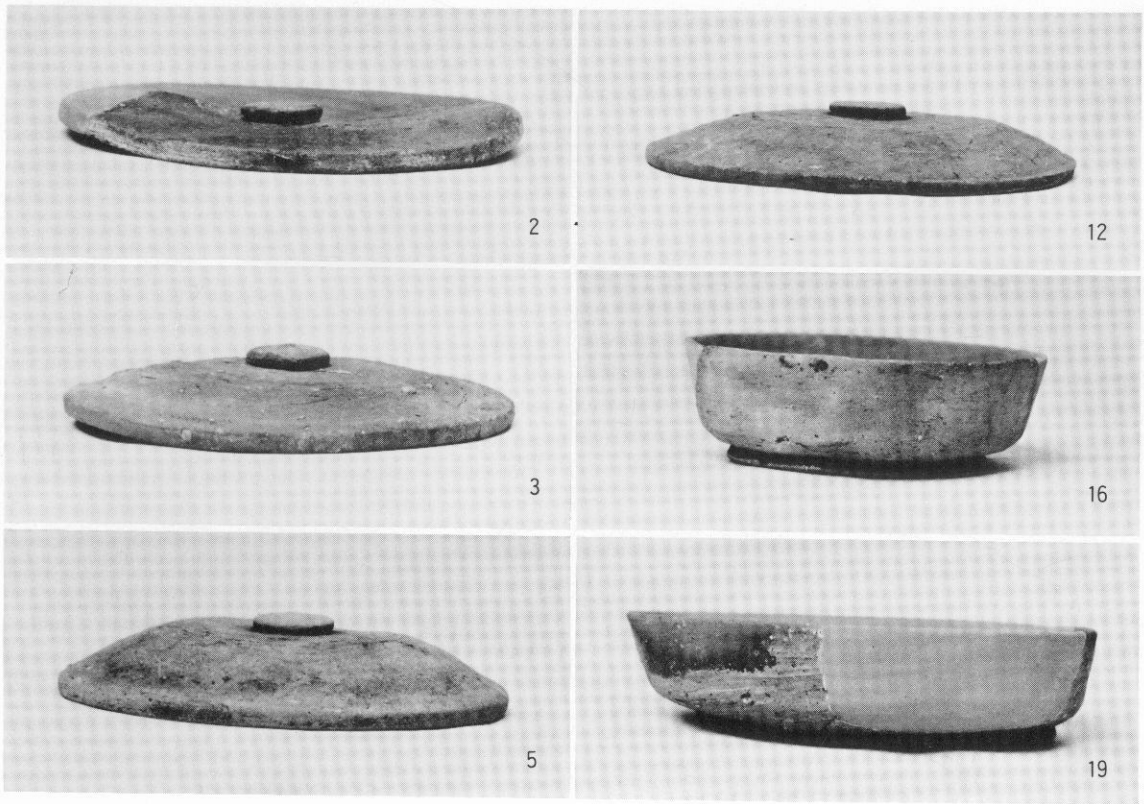
(3) 竪穴状遺構瓦出土状態



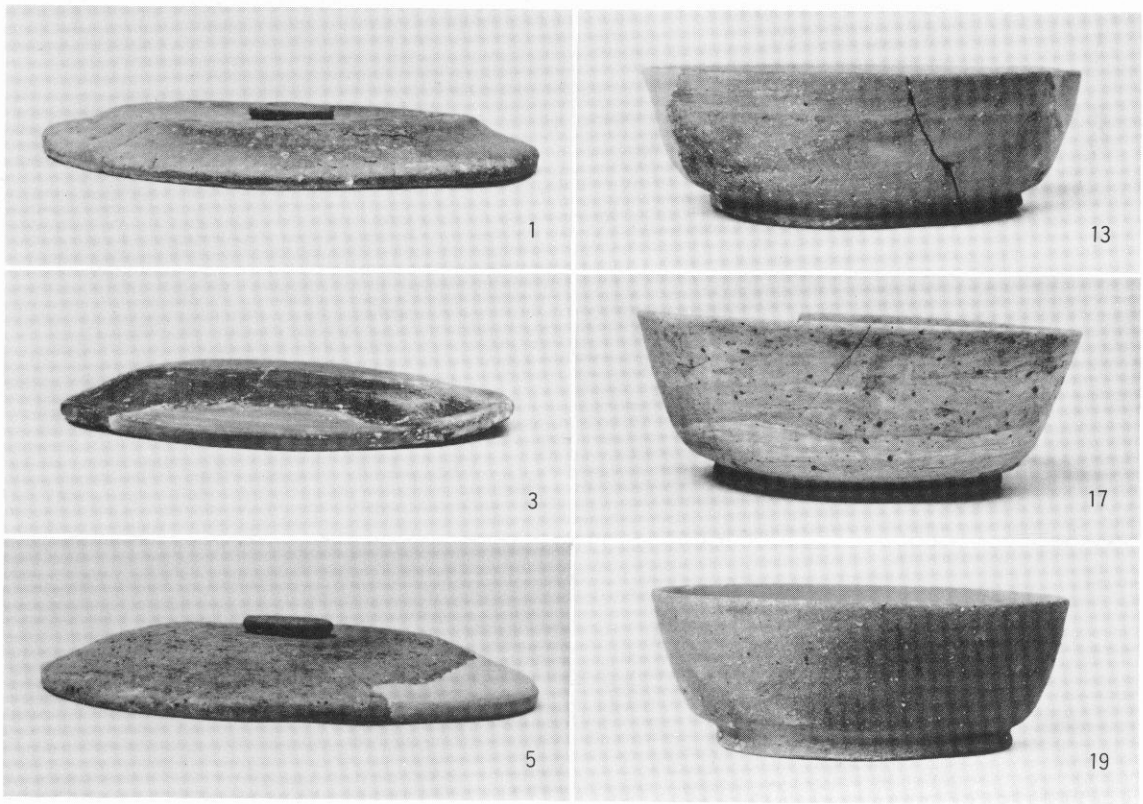
(4) 竪穴状遺構瓦出土状態

図版 9

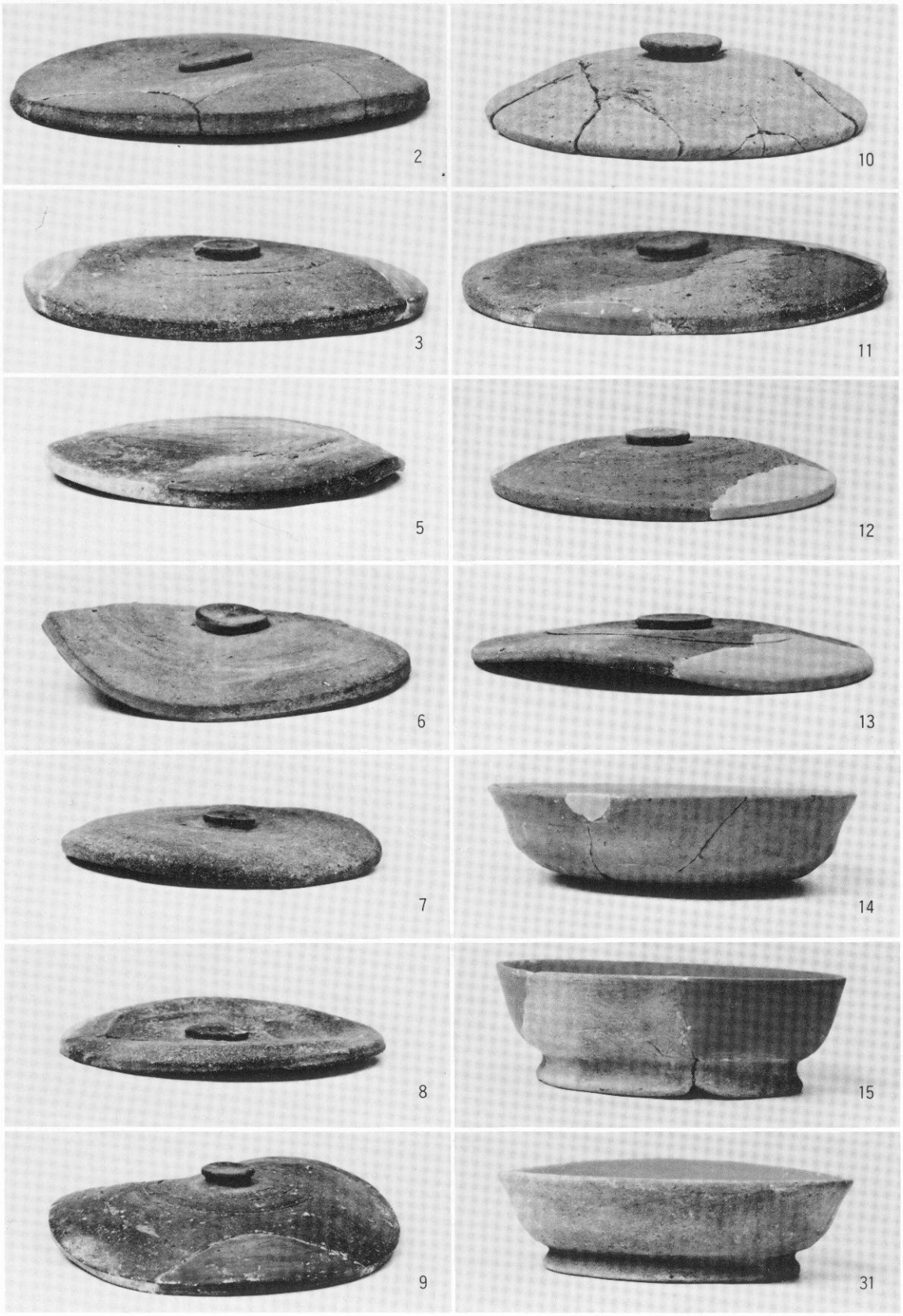
図版10



(1) 1号窯出土須恵器

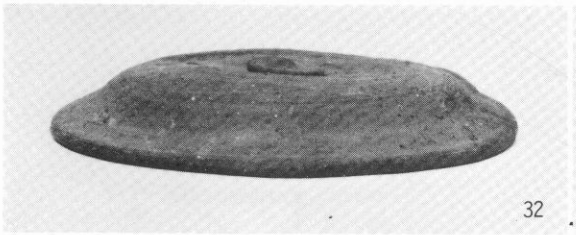


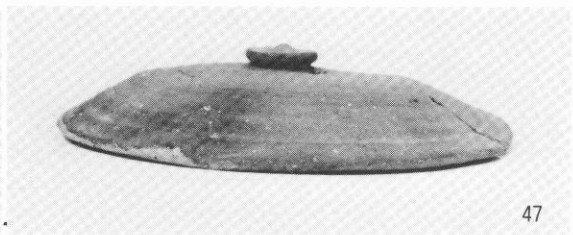
(2) 2号窯出土須恵器

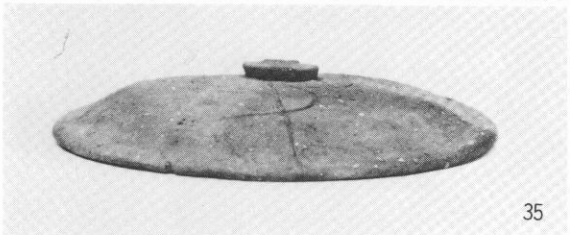


3号窯出土須恵器（1）

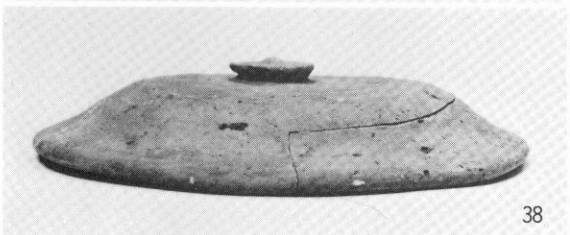
図版12

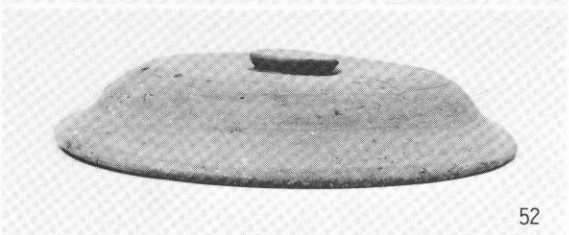

32

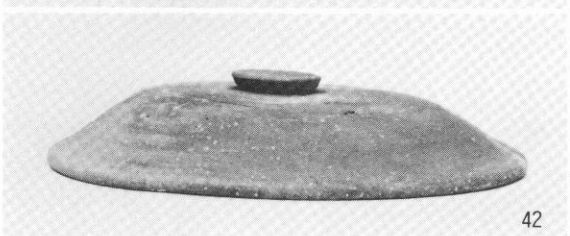

47

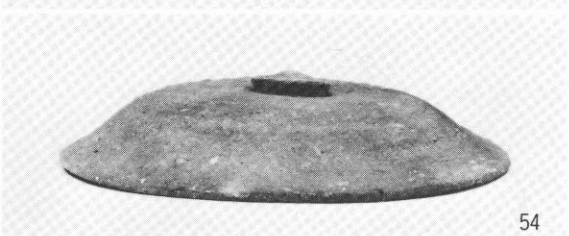

35

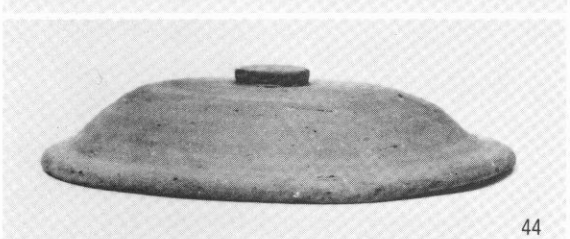

51

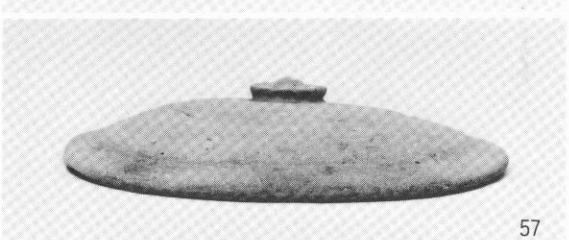

38


52

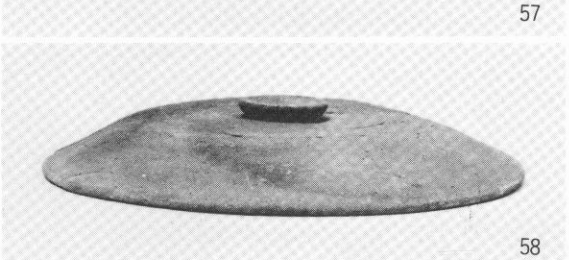

42

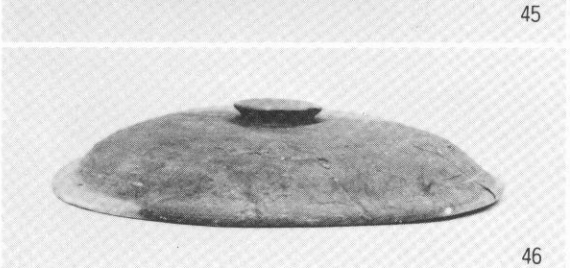

54

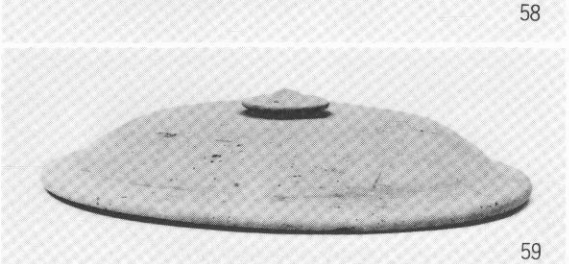

44


57

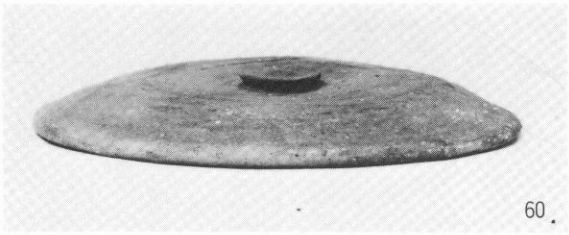

45

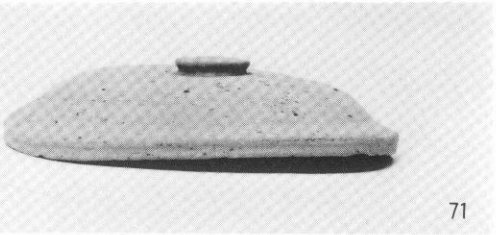

58

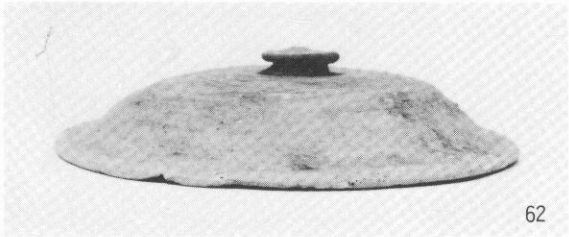

46

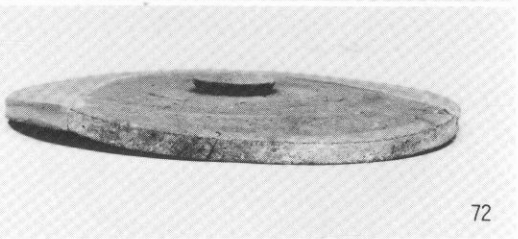

59

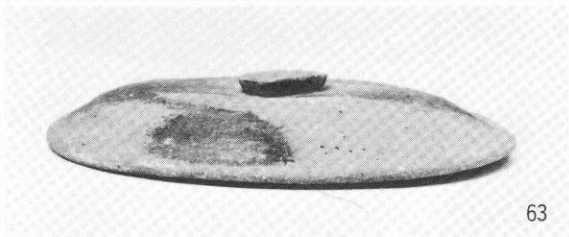
3号窯出土須恵器（2）

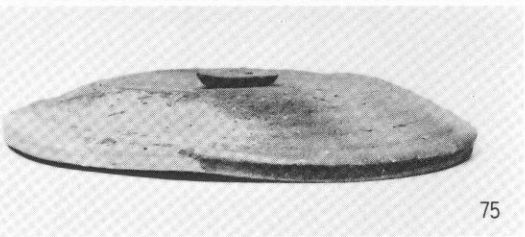

60

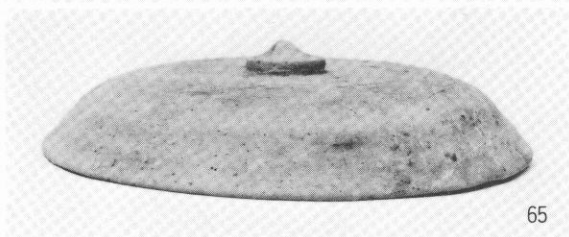

71

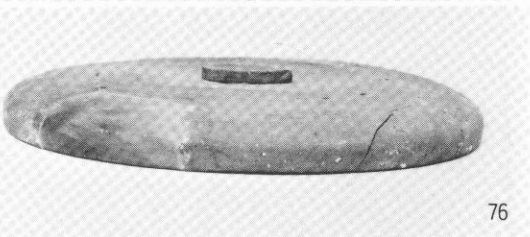

62


72


63


75


65

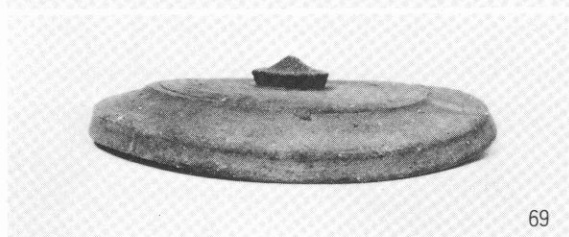

76


66


78


68

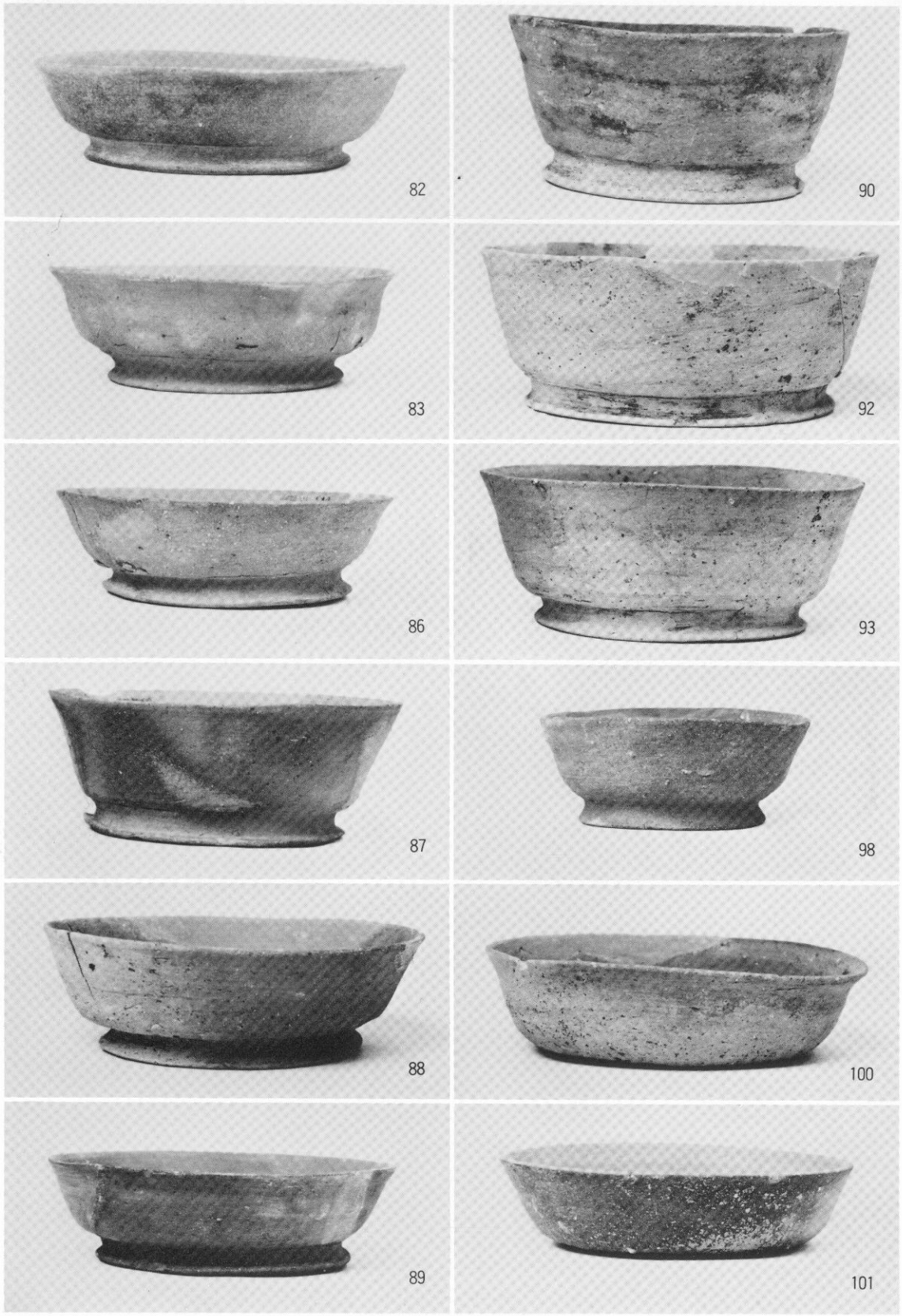

79


69

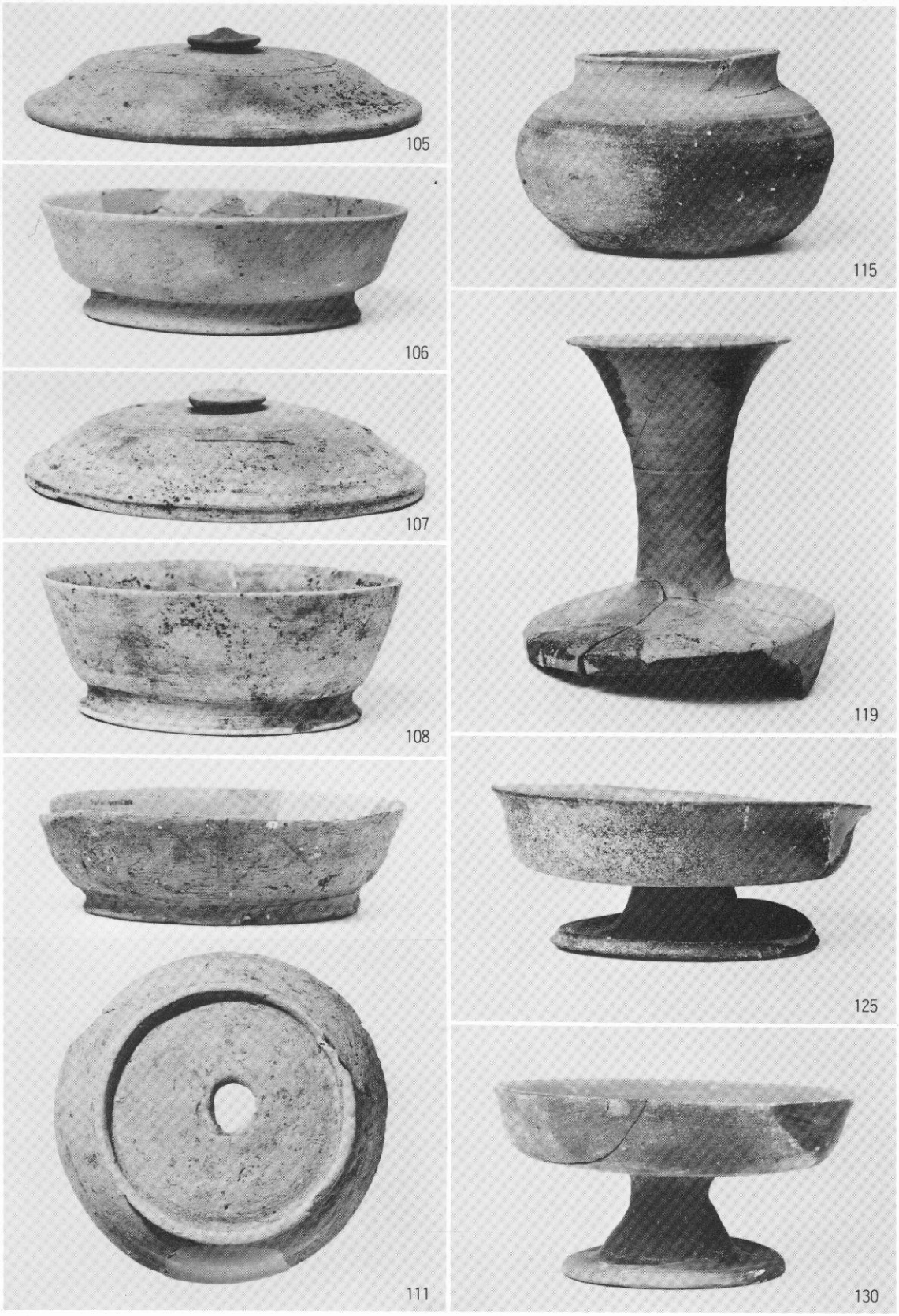

80

3号窯出土須恵器（3）

図版14

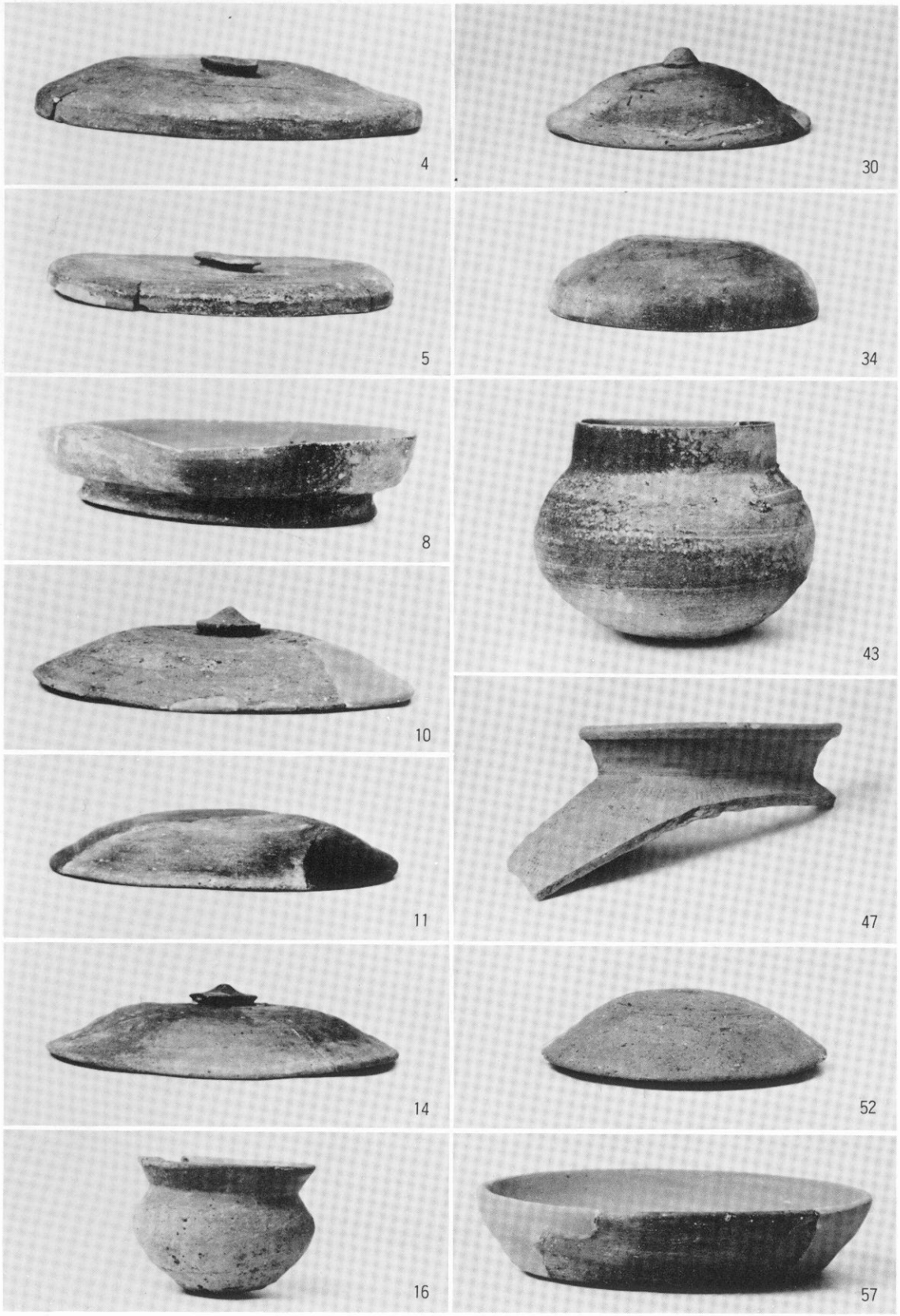


3号窯出土須恵器（4）

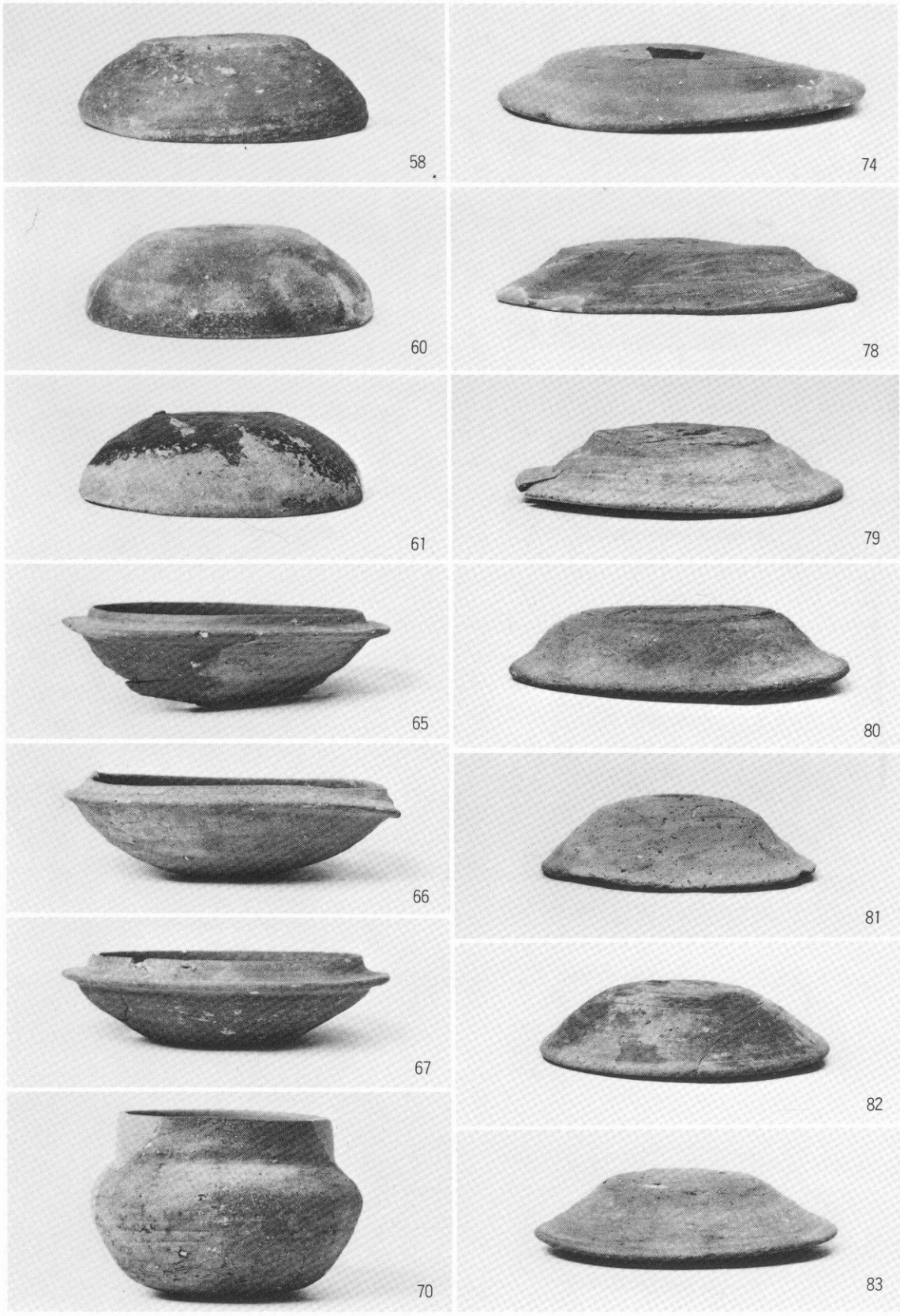


3号窯出土須恵器（5）

図版16

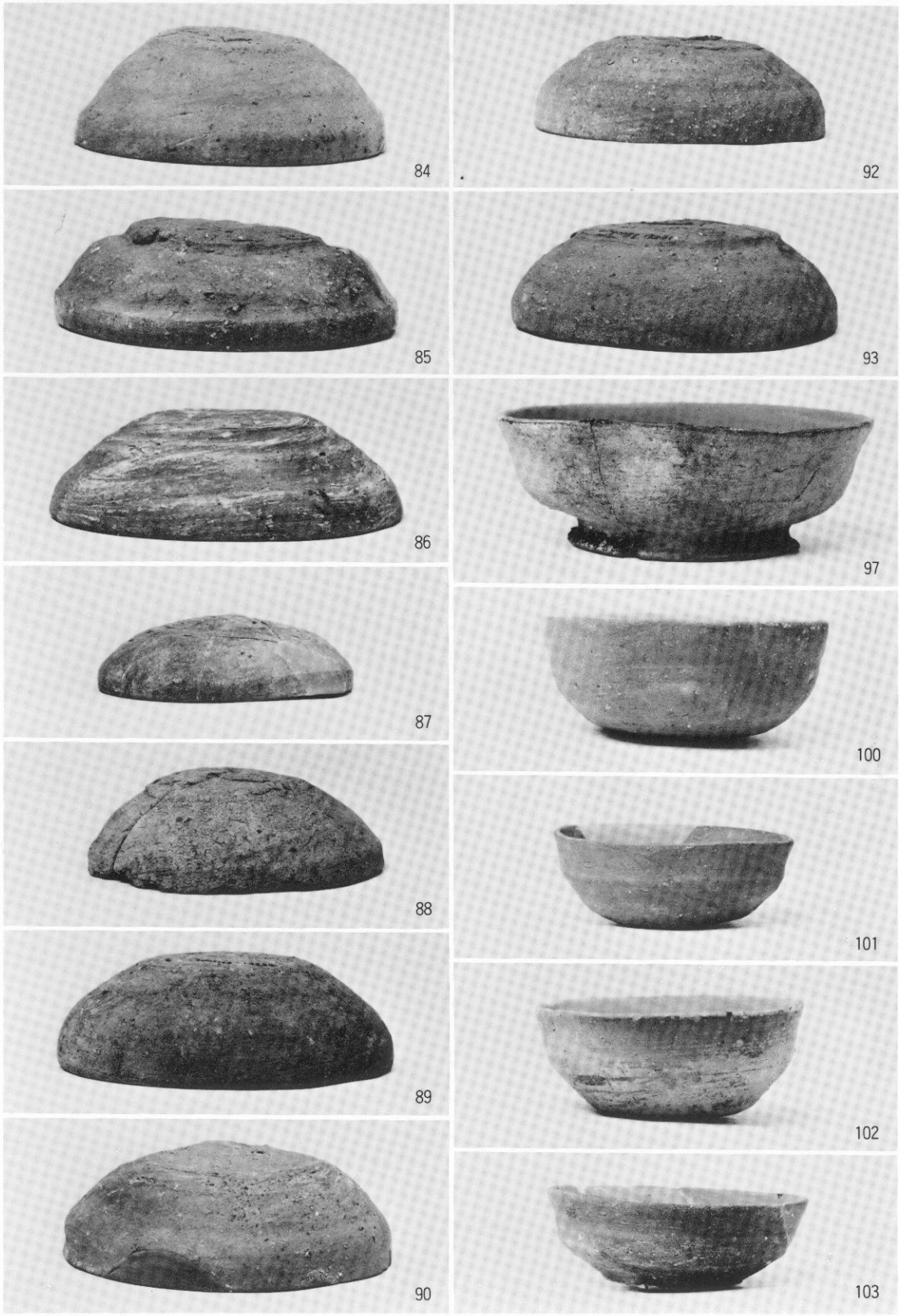


4号窯出土須恵器（1）



4号窯出土須恵器（2）

図版18



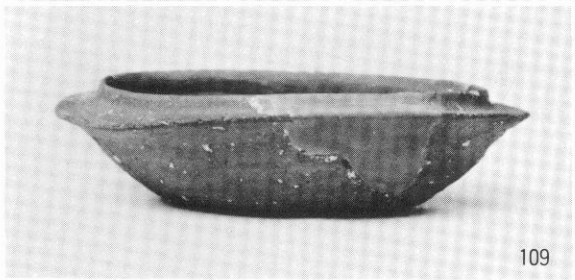
4号窯出土須恵器（3）

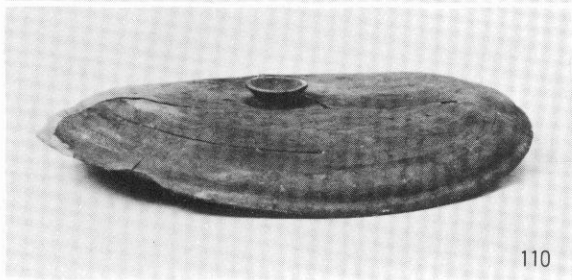

104


106


107

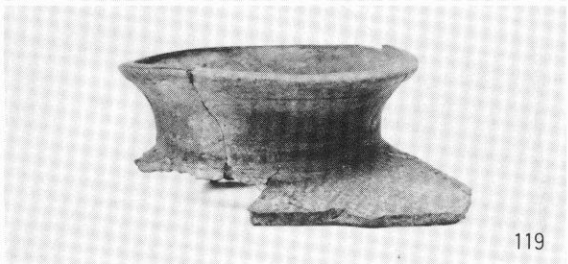

108


109

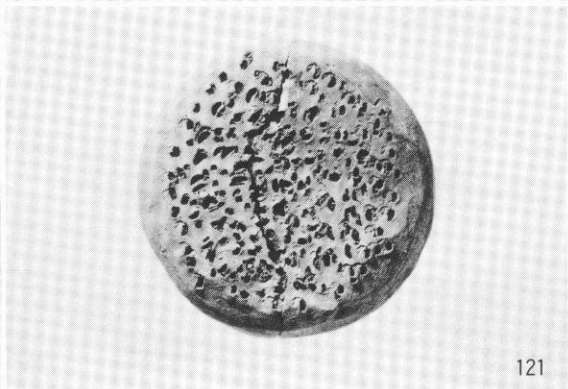

110


112


113


119


121

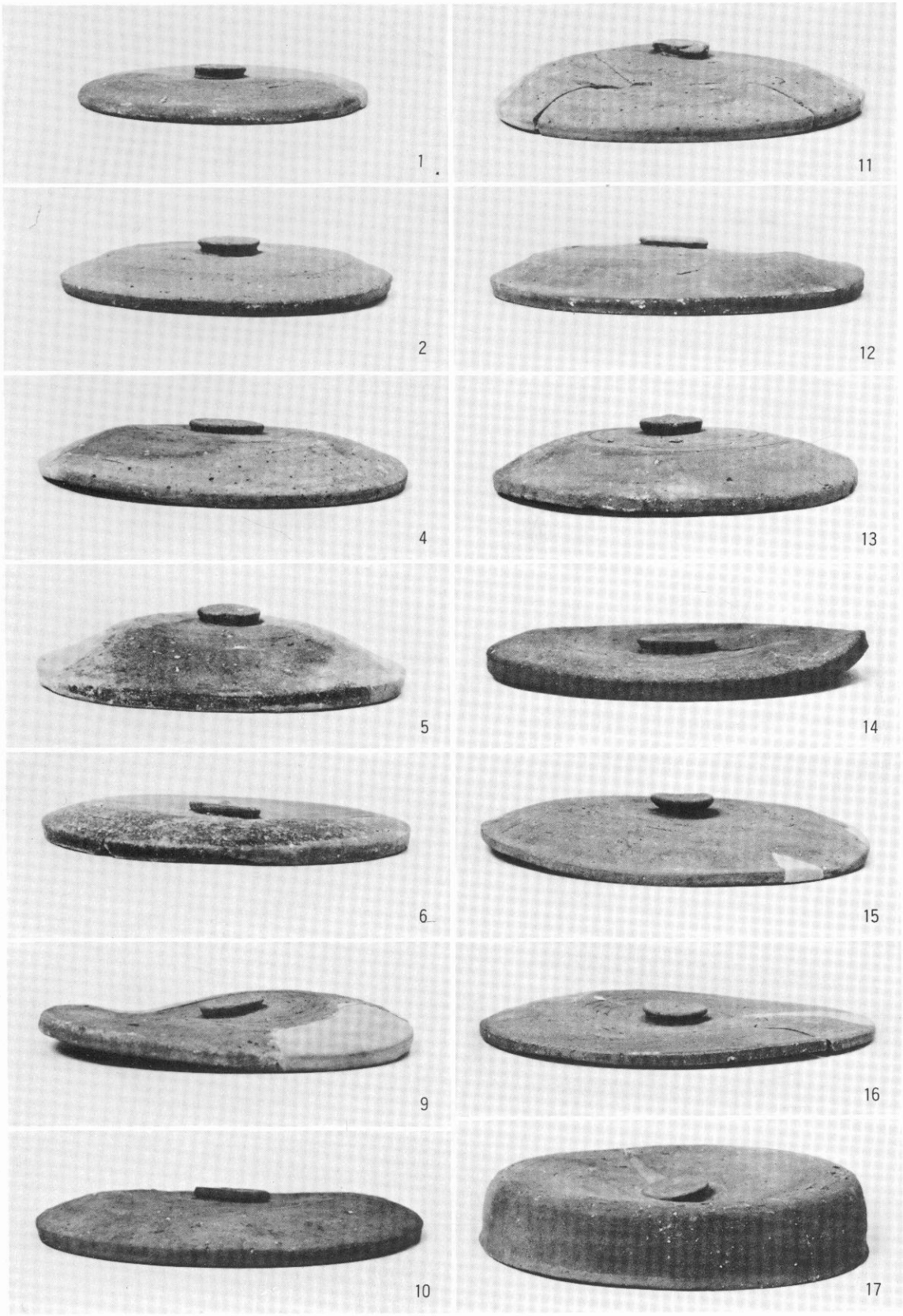

121

4号窯出土須恵器（4）

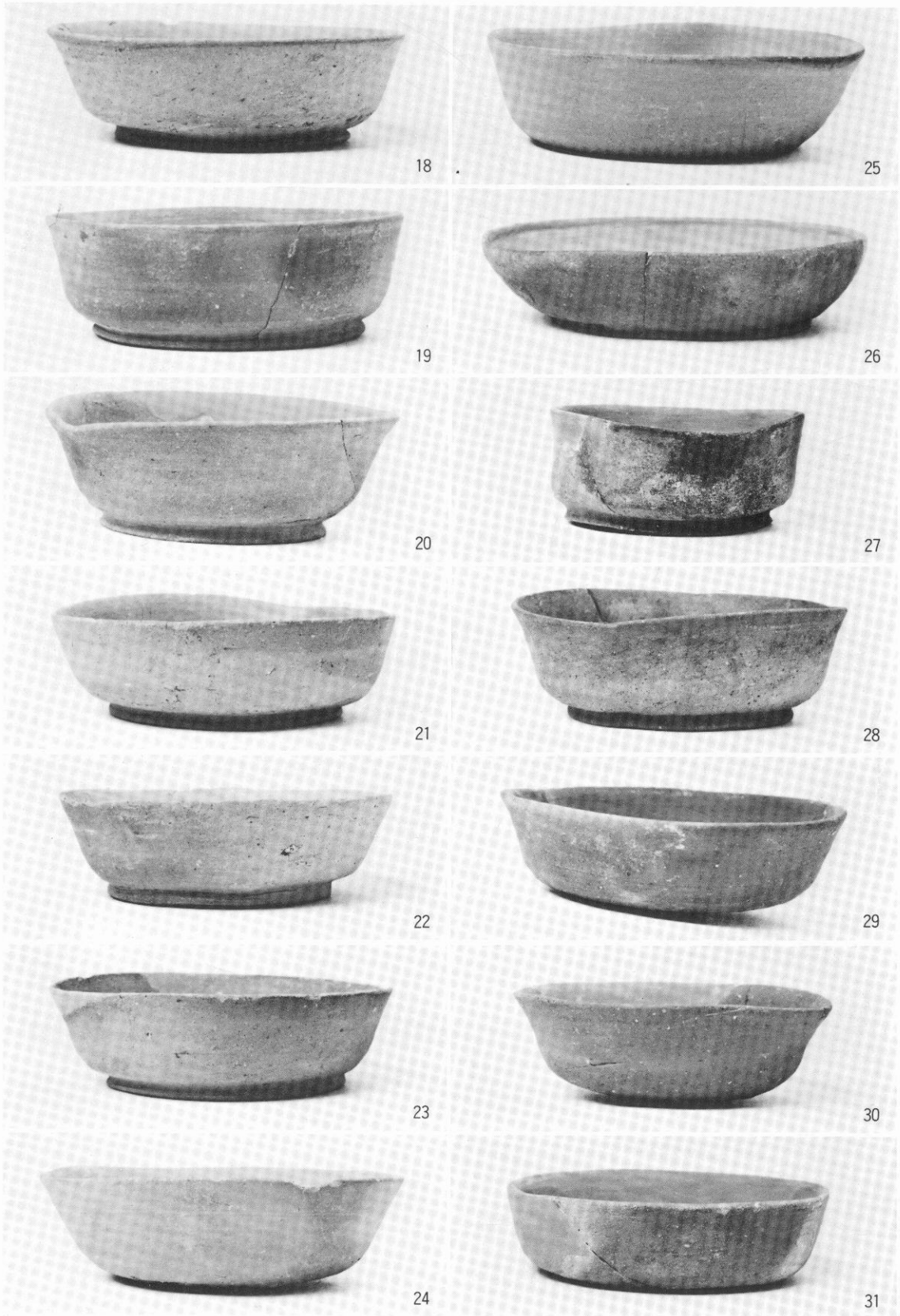
図版20



4号窯出土須恵器 (5)(123～125)・5号窯出土須恵器(1～7)



7号窯出土須恵器（1）

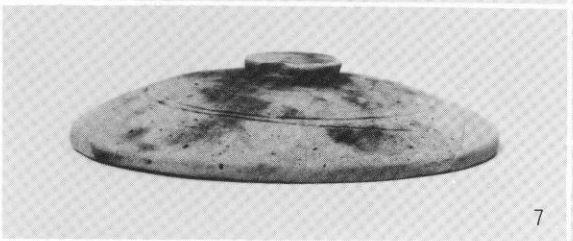


7号窯出土須恵器（2）


1


2


3

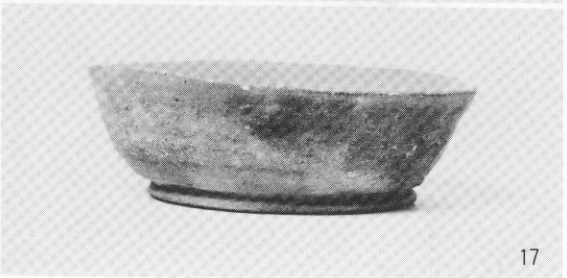

7


8


11


14

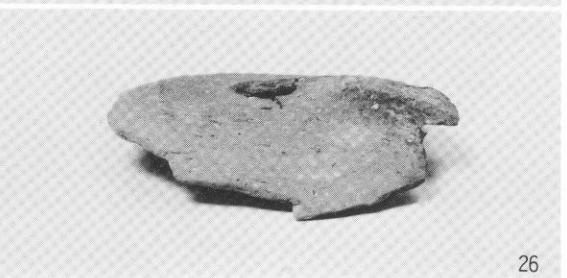

15


17

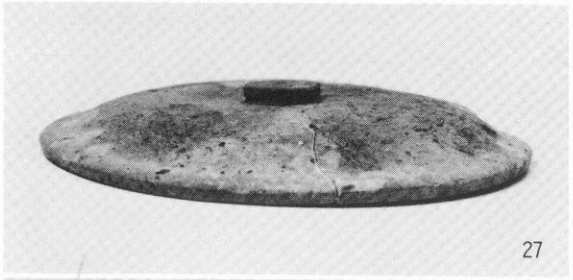

18

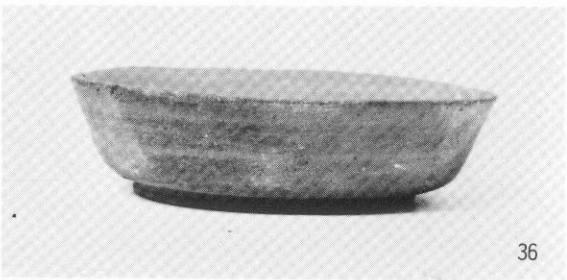

19

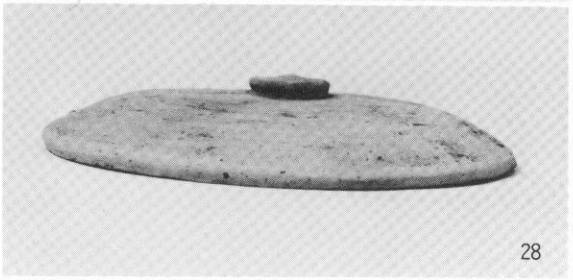

24


26

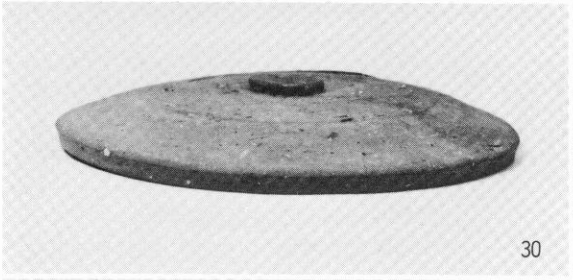
8号窯出土須恵器（1）


27


36

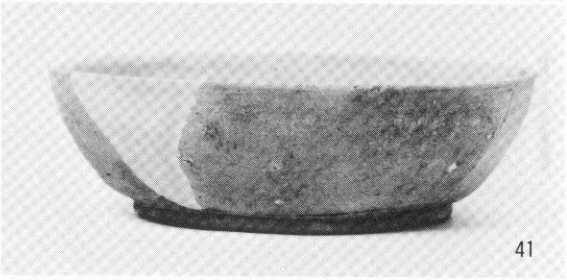

28


37


30


40


32


41

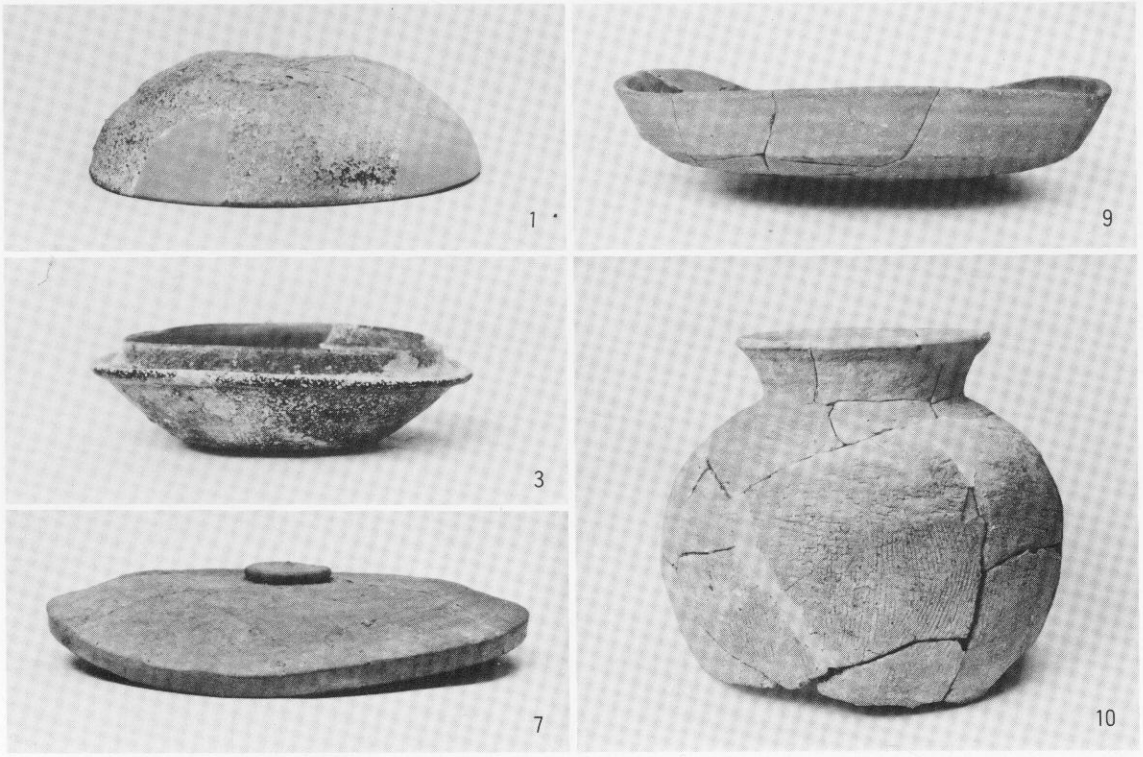

33


42

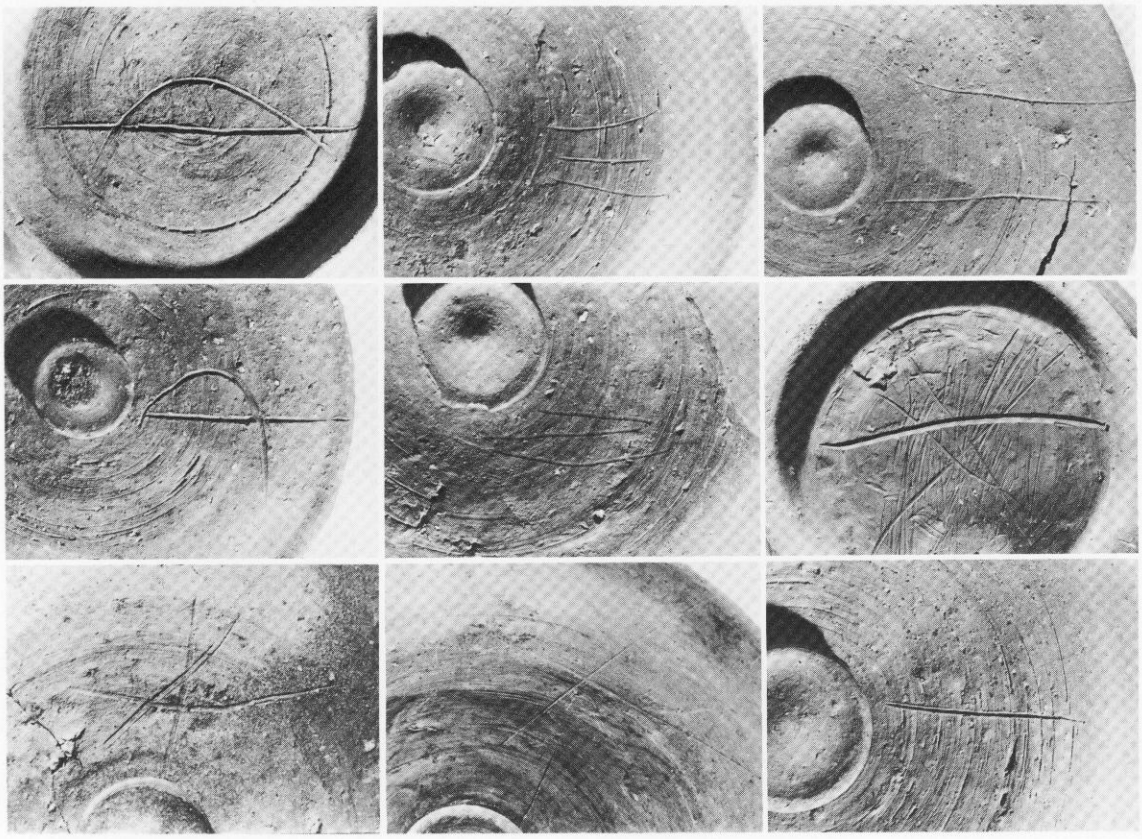

34


45

８号窯出土須恵器（2）

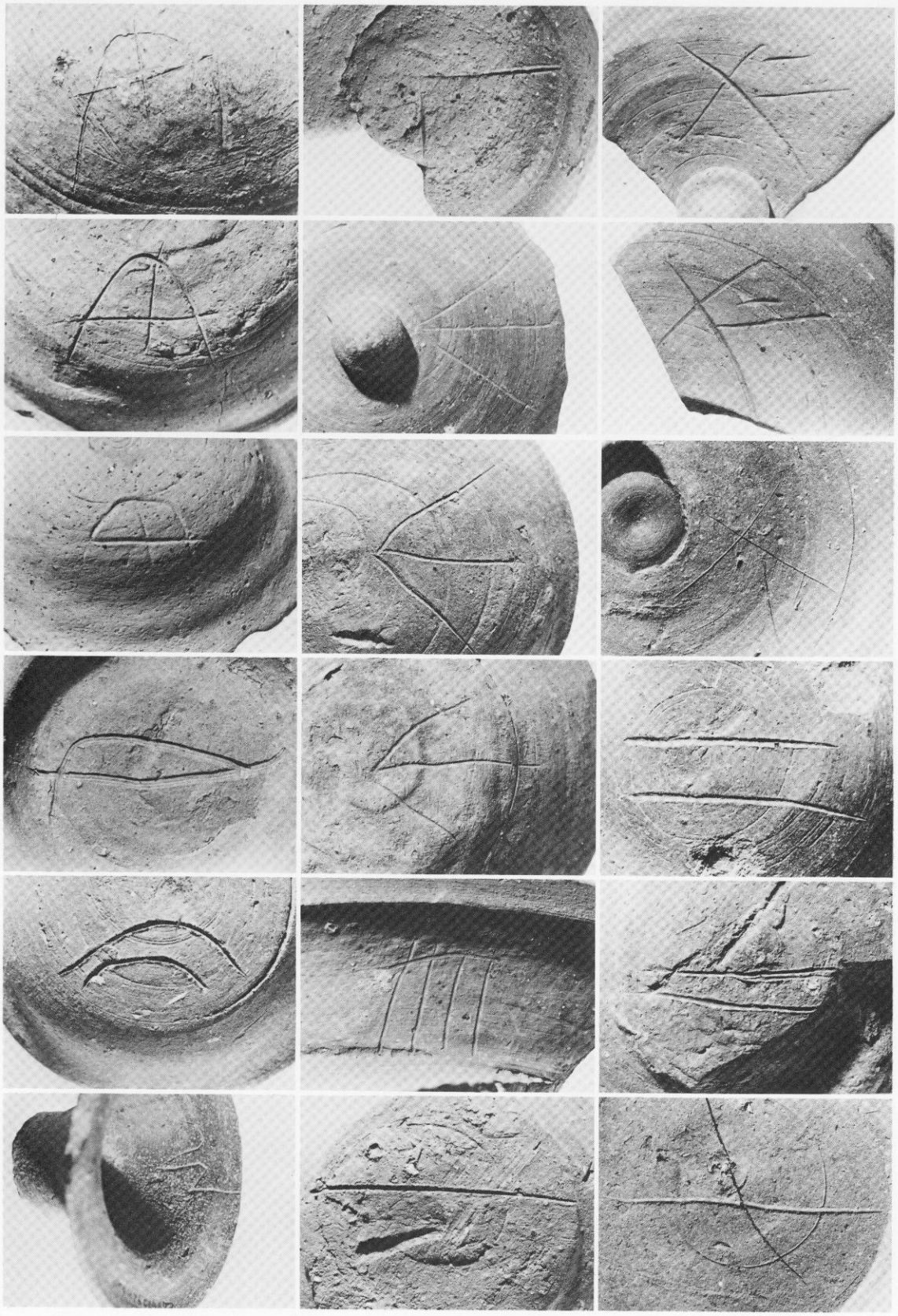


(1) A地区竪穴状遺構出土土器

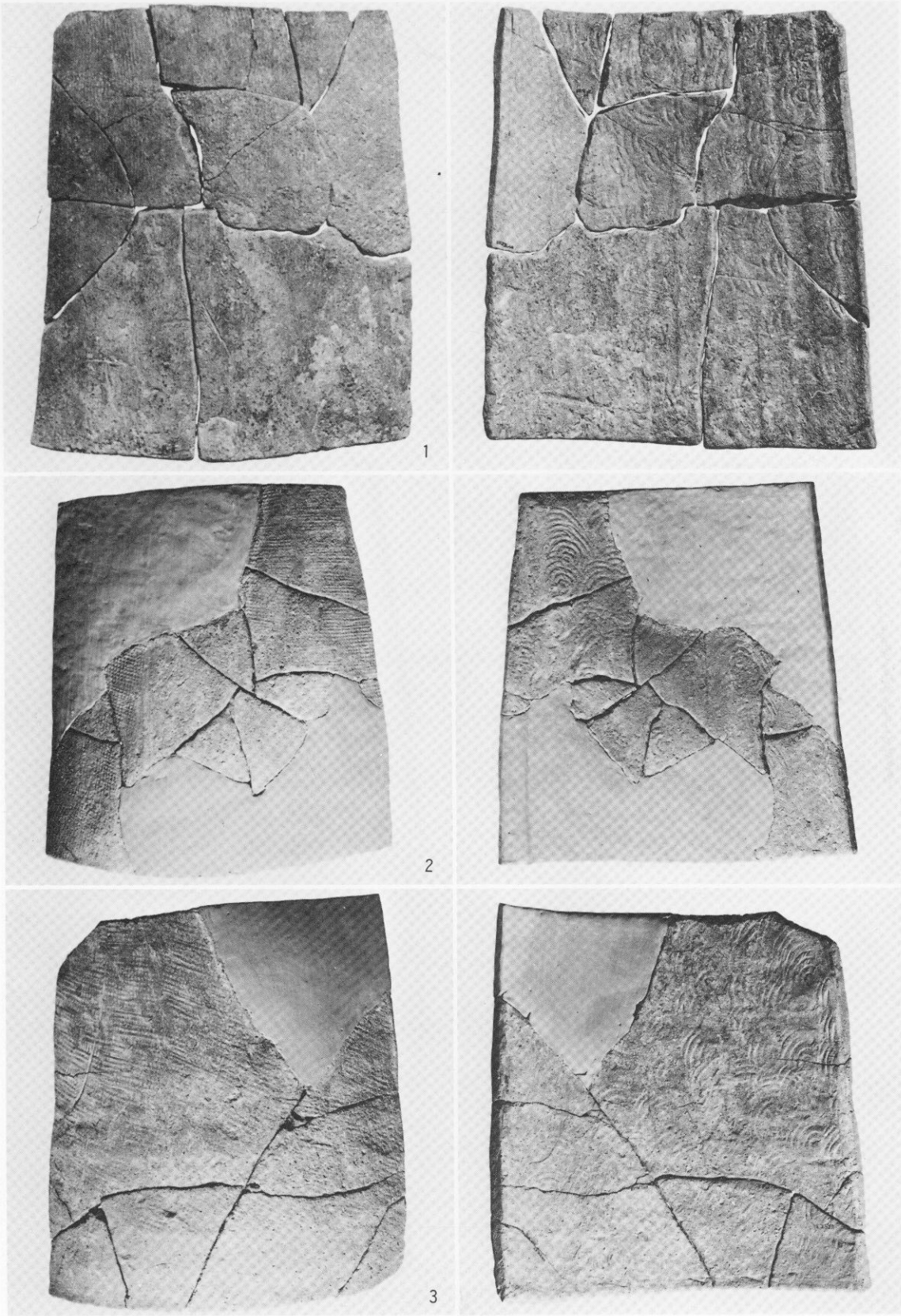


(2) 3号窯出土須恵器ヘラ記号

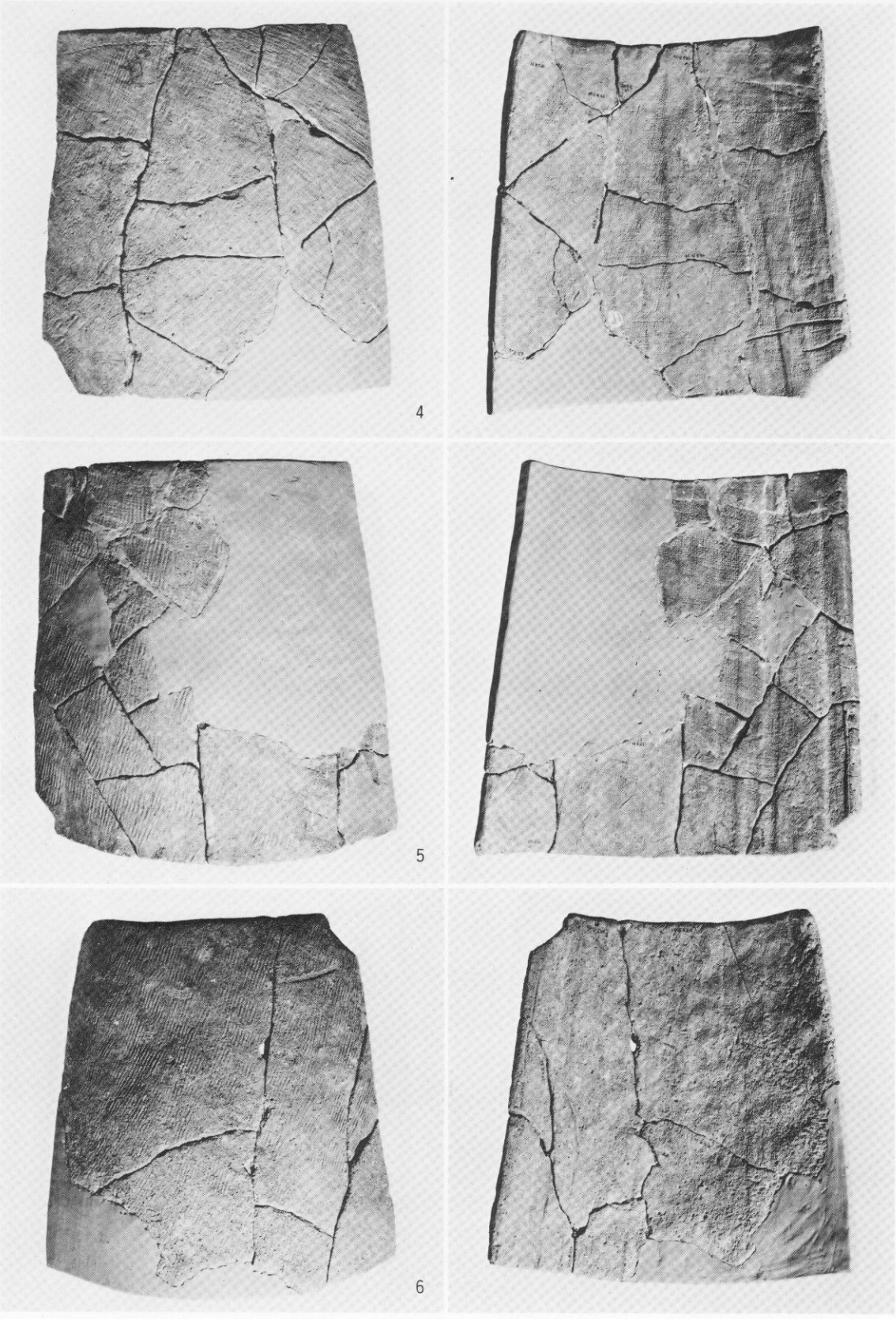
図版26



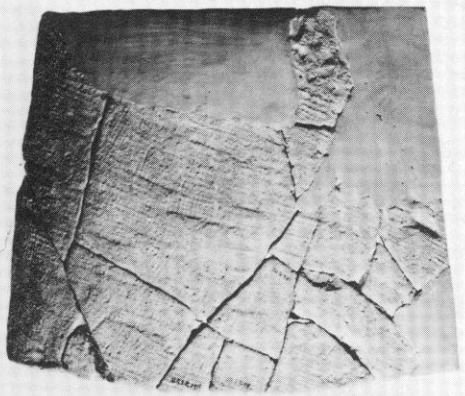
4号窯出土須恵器ヘラ記号

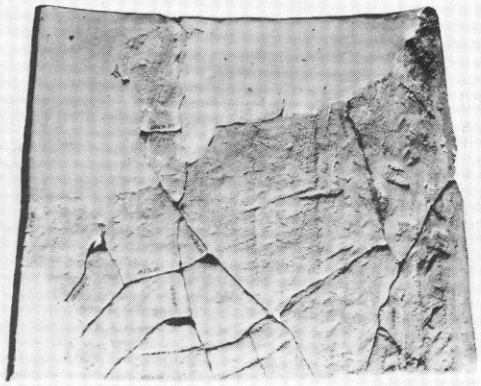


浦ノ原窯跡群出土瓦（1）



浦ノ原窯跡群出土瓦（2）



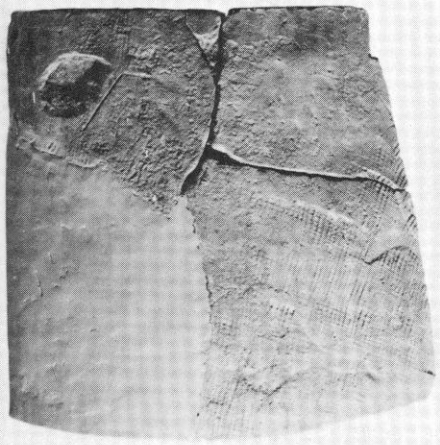


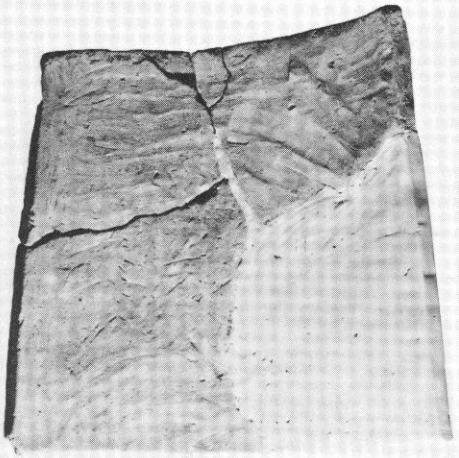
7





8

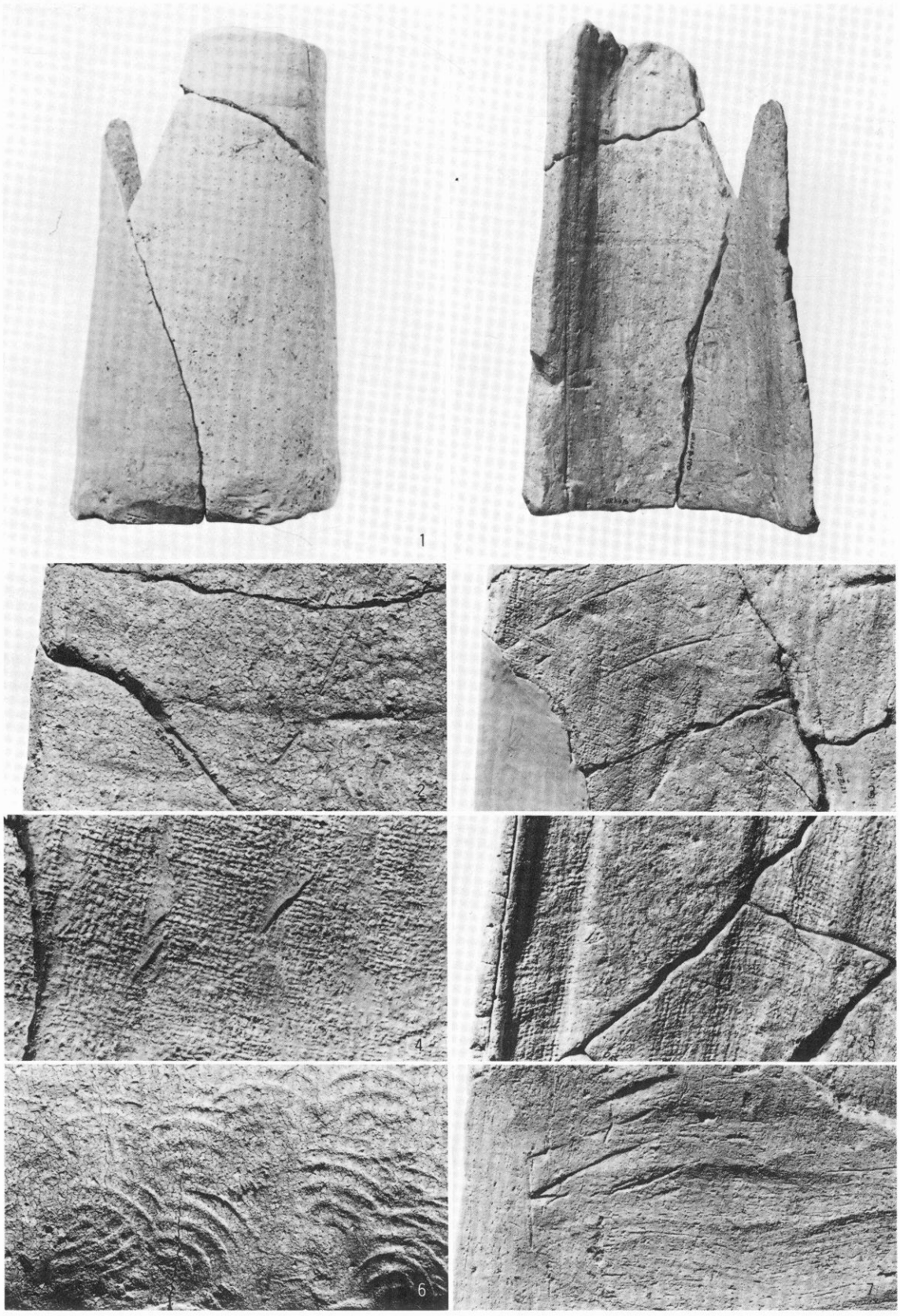




9

浦ノ原窯跡群出土瓦 (3)

図版30



浦ノ原窯跡群出土瓦(4)　1.4号窯出土丸瓦　2.粘土紐痕跡　3.粘土板痕跡
4.布目　5.分割截線　6.同心円紋　7.ナデ痕跡

浦ノ原窯跡群

春日市文化財調査報告書

第 11 集

昭和56年 3 月31日

発行　春日市教育委員会
福岡県春日市大字下白水634の1

印刷　正光印刷株式会社
福岡市中央区赤坂1－2－21